

The 31st Rotary Youth Leadership Awards Seminar



RYLA Seminar

第31回青少年指導者育成セミナー報告書



Make Dreams Real

2009年3月26日～29日

主催
国際ロータリー第2670・2680地区
RYLA運営委員会

目 次

RYLAセミナーの方針・ねらい	3
スケジュール	3

■ 1日目 ■

● 開講式

オリエンテーション	
ディーン	徳梅 明彦 4
ガバナーあいさつ	
第2670地区ガバナー	豊田 章二 5
第2680地区ガバナー	宮本 一 7
ごあいさつ	
顧 問	三宅 洋三 9
元国際ロータリー理事	今井 鎮雄 10
その他関係者紹介	
ディーン	徳梅 明彦 13

● オリエンテーション「RYLAにみなさんに期待するロータリアンの気持ち」

顧 問	深川 純一 14
注意事項の説明	19

● ロータリアンのタベ

顧 問	深川 純一 22
-----	----------

■ 2日目 ■

● 講義「人生」－いかによりよく生きるか－

神奈川県立保健福祉大学 名誉教授	阿部 志郎 先生 38
---------------------	-------------

● ロータリアンのタベ

顧 問	深川 純一 56
-----	----------



■ 3日目 ■

● 講義 「人はなぜ学ぶのか」－親と子、共に生きる－

チベット声楽家 バイマー ヤンジン 氏 76

● フォーラム 「人とのかかわり方」

フォーラムリーダー	深川 純一 80
バズセッション報告	 81
フォーラムディスカッション	 92

■ 4日目 ■

● 講義 「いのちを受け継ぐ」

元国際ロータリー理事 今井 鎮雄 先生 118

● 閉講式

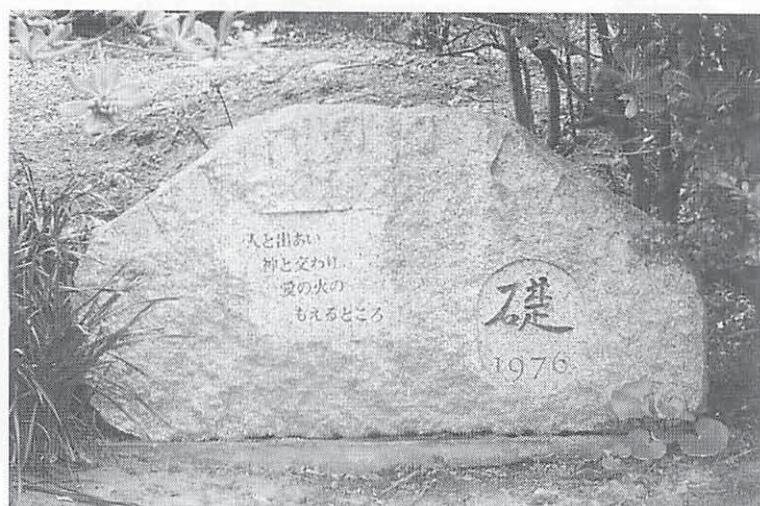
閉講のあいさつ

第2670地区パストガバナー	飯 忠悟 126
第2680地区パストガバナー	橋本 一豊 127
第2670地区ガバナー	豊田 章二 129
第2680地区ガバナー	宮本 一 131

参加者感想文 134

受講生名簿 162

第31回RYLAセミナー運営委員会 164



RYLAセミナーの方針・ねらい

RYLAセミナーのねらいは、受講生の皆様に次のような5つの特色を味わってもらうことがあります。

- ① 高いレベルの講義と討論
- ② キャビンタイム（親睦の熟成）
- ③ 自由と自律
- ④ 余島の自然
- ⑤ カウンセラーシステム

恵まれた自然に囲まれた余島で、今回のテーマである“いのち”を、講義、キャビンタイム、思索の時間、バズセッション、フォーラムなどを通して徹底的に学び、語り合い、考えていただきたいと思います。

スケジュール

3月 26日 (木)					集 合 (14:00)	開講式 オリエン テーション (15:00)	オーグ ニグ バー ティ	キャビンタイム ロータリアンのタベ
3月 27日 (金)	朝 食 (7:30)	講 義 講師 阿部 志郎氏 (9:30)	昼 食	レクリエーション ヨット、テニス、 ソフトボール、 アーチェリー、カヌー、 自然観察など	夕 食	キャンプファイヤー 親睦のタベ キャビンタイム ロータリアンのタベ		
3月 28日 (土)	朝 食 (7:30)	講 義 講師 バイマー・ヤンジン氏 (9:30)	昼 食	思 索 の 時 間	バズセッション	夕 食	フォーラム キャビンタイム	
3月 29日 (日)	朝 食 (7:30)	講 義 講師 今井 鎮雄氏 (9:00)	閉講式 (11:30) 昼 食 離 島					

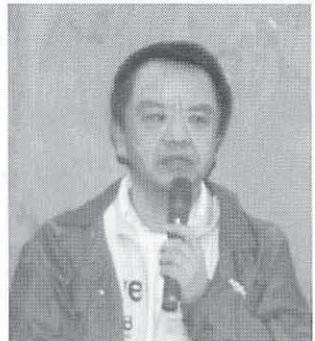
7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24

開講式（1日目）

オリエンテーション

徳梅 明彦

ディーン
(あわじ中央RC)



定刻になりました。ただいまから、第31回 R Y L A セミナーの開講式を催したいと思います。

皆さん、こんにちは。ようこそ、この余島へ。そして、R Y L A セミナーへお越しくださいました。きっと期待と不安が入り乱れた、複雑な心境で今おるんかなあと思うんですけども、きっと、あなた方にとってすばらしいセミナーになることを、我々、ロータリアンが保証させていただきます。安心して、このセミナーを楽しんでいただきたいと思います。

それでは、式次第にのっとりまして、開講式を始めていきたいと思います。まず初めに、本日、司会をさせていただいています、私、今回のR Y L A セミナーのディーンという役を仰せつかりました、2680地区兵庫県のR Y L A の委員長をさせていただいております、徳梅明彦と申します。四日間、皆さん方のお世話をさせていただきますので、どうか、よろしくお願ひいたします。

受付の際に皆様方のお手元に配付させていただきました、この資料にいろいろとロータリー用語等を書いてあります。私の方から、ちょっ

とロータリーの専門用語的なことを使って、前の方々を紹介したりとか、そういうことがございますが、それも参考にしながら、また、私の方でも言葉の説明をさせていただきながら、進めていきたいと思います。

それでは、まず最初に、御来賓の方からごあいさつをいただくわけなんですけれども、今回のR Y L A セミナーというのは、皆様御存じのとおり、四国4県と兵庫県の合同で開催されております。四国4県のことを2670地区とロータリーでは呼んでおり、2680地区というのは、先ほど私が言いました兵庫県ということになります。その各地区には、ガバナーと呼ばれる、要するに、そのロータリーの中でのトップの方、まあ知事みたいなもんですね、といった方がおられます。毎年1年ごとに交代していくわけなんですけれども。現在、ロータリー年度では、2008、2009年度と呼んでいます。ロータリー年度というのは7月1日から6月30日までという年度区切りなんですけれども、2009年6月30日まで、四国地区2670地区ガバナーの豊田章二様より、まず、ごあいさつをいただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

ガバナーあいさつ

豊田 章二

国際ロータリー第2670地区ガバナー
(高松南RC)



皆様こんにちは。今回のRYLAに出席されている方は、兵庫県と四国全域からですね。

ようこそ、小豆島・余島において下さいました。ありがとうございます。

ただいま御紹介いただきました、私はRI第2670地区（四国）ガバナーの豊田章二です。私達のテリトリーは四国全域で、道州制を先取りしています。もちろん政治活動はやっていません。このRYLAはRI第2680地区（兵庫）とRI第2670地区（四国）が共同で行っているプロジェクトで、今回で31回目を迎えます。たいへん歴史のある内容と行事で、世界に胸を張って誇れるプロジェクトです。ロータリークラブの任期は毎年7月から始まり、6月で終了します。世界中には私と同じようなガバナーが534名おられます。そして世界のロータリーの代表を国際ロータリー（RI）会長といいます。

今年のRI会長はD. K. Lee（韓国）で、今年の年間テーマは「夢をかたちに」「Make Dreams Real」です。このテーマの強調事項として、5歳以下の子供達の死亡率が非常に高い事を受けて、水、保健、飢餓追放、識字率向上に力を注ぎ、死亡率を低下させる奉仕プロジェクトを地元レベル又は国際レベルで実践しよう、地域社会の最も大切な財産である「子供たち」に、どうか皆さん光をあてていただきたいといわれています。

私はD. K. Lee RI会長の強調事項に加えて、「未来ある若者、子供たちの夢を実現する」プロジェクトを年間を通して実行していただき

たいと訴え続けて参りました。今回のRYLAはそのものであります。地区の青少年活動の中に、インタークト、ローターアクト、ロータリー財団奨学生、長期交換、短期交換等たくさんのプロジェクトがありますが、一つ一つに私達ロータリアンが協力する事が、今年の計画実行につながるものと思います。

ところで、私の地区（四国）の地区大会が、4月10日～12日、高松に於いて開催されますが、私はその準備に追われている毎日です。その大会で基調講演として、ここにおられる深川純一パストガバナーに「永遠の課題・職業倫理」について、お話をいただくようになっています。又最終日には、演出家の宮本亜門さんをお呼びして「違うから面白い、違わないから素晴らしい」の題で、一般公開をし話ををしていただくようになっています。

ここで宮本亜門さんの事を少し話しましょう。亜門さんといえば、皆さんは世界に認められた有名な演出家として認識されていると思います。それは本人が努力して現在があるわけですが、自然に演出家の道を選んだのではなく、少年時代は皆さんと同じように、悩んだり、苦しんだりの連続でした。亜門さんの家庭環境は、慶應大学を出るのが当たり前という厳格な家庭でした。亜門さんのお父さんはその厳格な家で育ち、いわゆる、おぼっちゃまで、あまり仕事をするのを好まない人でした。お母さんはSKD出身(西では宝塚)出身の踊り子（ダンサー）で、芸能活動が好きな方でした。この2人がある時、恋に落

ち、一緒になりました。厳しいおじいさんは2人を勘当して、家をだされました。そこで生まれたのが亜門さんでした。

亜門さんのお父さんは相変わらず、仕事もしないでぶらぶらしていました。お母さんは芸能活動にたずさわりたい一身で、少しでもその世界に近づきたい気持ちで、東京新橋演舞場の前で喫茶店を開き、下積みの芸人さんの世話をする事にいっしょけんめいになっていました。そんな環境下で育った亜門さんは小さい頃より芸事が好きになり、その世界にのめり込んでいました。しかし、学校へ行くと友達からかわかれ、いわゆるいじめにあい、心を閉ざし、自分の世界に閉じこもり、登校拒否状態になりました。亜門さんのお父さんからは、激しく叱られ、学校へ行く事を強要され続けました。その板ばさみになり、どんどんうつの状態になっていきました。父親から病気であると決めつけられ、精神科（クリニック）に行くようにいわ

れました。そこで会った先生が、亜門さんの話を真剣に聞いてくださって、「君は別に変わっているわけじゃないよ」「君の話はおもしろい」「もっと聞かせて欲しい」とのやり取りの中で学校へ復帰する事が出来ました。学校では熱心な演出家の先生に出会い、演出の道を目指すようになり、どんどん自信がついてきました。しかしまた限界を感じ、単身アメリカ、イギリスに飛び出して、一から勉強をし直して、やっとブロードウェイで認められるようになったと聞きました。

皆さんも亜門さんのように、それぞれ悩んだり、苦しんだりした経験をお持ちだと思います。今日から4日間、いろいろな人達との出会いを通じて、話をしたり、聞いたり、この余島でよき友、思い出を作ってください。

私はこの4日間、余島での生活が、あなたたちの夢を実現する力になることを信じています。



ガバナーあいさつ

宮本 一

国際ロータリー第2680地区ガバナー
(芦屋RC)



ただいま御紹介いただきました2680地区、兵庫県の宮本と申します。職業は産婦人科です。

おかげさまで、この1年、ロータリーを一生懸命やっております関係で、お産を全部やめ、外来の診察もほとんどやめさせていただきました。芦屋の皆さんにとって非常に不幸なことかもしませんが、案外、やぶ医者のところに行かんでよくなつたので、これも一つ救いかなと思っております。

今、豊田ガバナーが申されましたこと、非常にすばらしいお話をいただきました。今日、私はここに参りましたときに「天使と出会ったあの道」というすてきな看板が出ておりました。小豆島土庄のパンフレットもございました。今日、船で渡って来られました際の、あの景色の引き潮のときの写真が出ております。天使と出会ったというのが、お互いの新しい友達の顔をお考えいただければ、わずか4日間ですけれども、心暖かくして、広くして帰れるのではないかと思っております。

今、日本も世界も抱えている問題は子供の問題ではないかと思います。先ほど言わされましたように、韓国の李R I会長という人が、世界の子供をみんなの力で助けましょうとおっしゃられました。一番大切なのは何かと言いますと水の問題です。実は世界にはきれいな飲み水がなかなかないわけです。何千人という人が、きれいな水を飲めないために死んでいきます。汚れた水を親が喜んで飲ますことはないんですけども、残念ながら設備や教育、その他のことで、

子供がマラリアにかかったり、下痢をしたり、いろんな病気になります。一番怖いのはポリオという病気で、子供が歩けなくなる。それから、熱が出て死んでしまったりもします。また、今、ちょっとと言いましたマラリアですが、昔は皆さんのおうちに多くありました蚊帳、中で遊びすぎて、よく親に怒られました。アフリカでは、このマラリアから子供を救うのはこの蚊帳しかないのです。ですから、皆さんにとっての当たり前のことが、世界では当たり前でないとお考えいただければなと思っております。

私の名前は、宮本 一と申しましたが、横一で、123の一であります。初めは女の子が生まれ、その次も女の子。今度はどうかなと思ったら、やっと男、私でした。親としては、これはええ子やな、ようできる子やなと思って、一と書いたように私は思っておりますが。一というのは何でも一番やというのもありますし、一番できないのも一ということで、一は必ずしもいいことはないかもしれません、自分なりにいいと思うことを率先してやろうと、私は考えております。

余島は初めての方が大部分かと思いますが、皆さんがこの島に来られたとき、多分、期待に胸を膨らませて来られたと思います。三十数年の歴史のあるこの設備が、これだけすばらしい施設になり、ここで毎年、御説明がありましたRYLAセミナー、若い人を集めて、いろんなことをしゃべりましょうという素晴らしいセミナーを開催されています。実は、大人も大人で、

必ずしもずっと大人になった人はなかなかございません。失敗、失敗、失敗、できたら、自分の子供だけはこういうことをさせないでおこう、こんな本を読んでおいてくれたらな、親みたいなことにならなくてもいいのになということは、私たち今でもたくさんございます。そういう意味で、皆さんにぜひこのセミナーでの一言一句を、覚えて理解して帰っていただきたいと思っております。

いろんなことを、できるだけメモして家へ帰ってください。ここの事務所には、いろんな方からの思い出のレターが届いております。お暇な時間にぜひご覧ください。ある程度、ロータリーの話もありますけれども、今まで言えなかったこととか、不安や不満、どんなことでも、この前におられるおじ様なんかは、十分聞く耳を持っておられますので、ぜひ一つ相談していただければ、かえって、この講師の先生なんかはお喜びかなと思っております。準備される方は、大変だったと思いますが、今年の生徒さんはすばらしいなといういい思い出を持って、みんなが帰ってくれるものと私は期待しております。

よき友が、ここで一人でもできましたら、ここへ来た価値があろうかと思います。皆さんには若さというのがあります。若さというのは、私たちとは違って非常にやわらかいと考えております。相田みつをが、「やわらかい心」という詩を書いております。

木の芽が伸びるのはやわらかいから。

若葉が広がるのはやわらかいから。

かすかな風にも竹がそぐのは

竹がやわらかいから。

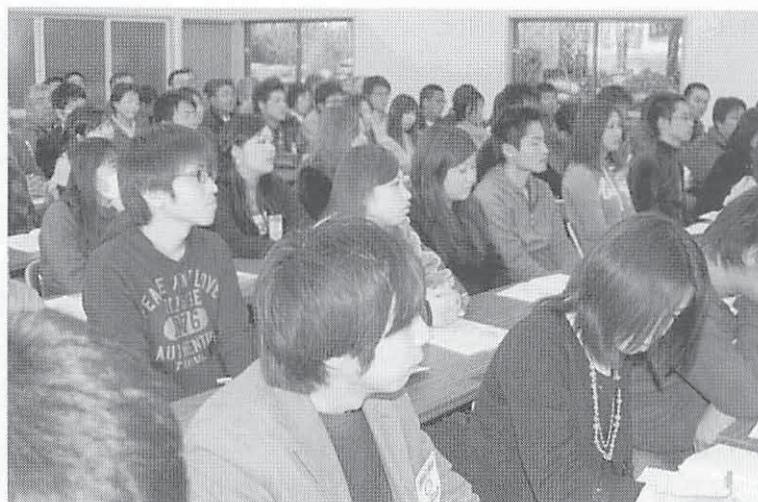
年を取って困るのは、足腰ばかりではなく頭が固くなることです。

心が固くなることです。

やわらかい心をいつまでも持ちたいな

と彼は詠んでおります。

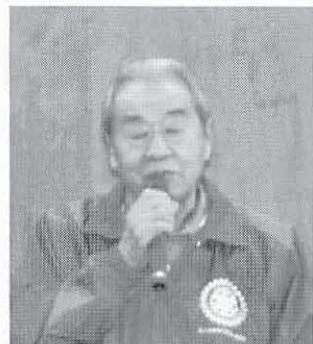
私たちは、知っているだけのことを皆様にお伝えしますし、また、皆様から若い考え方を私たちに教えていただければと思っております。わずか4日間とですが、あっという間の4日間だと思います。楽しみながらいきましょう。



ごあいさつ

三宅 洋三

RYLAセミナー顧問・パストガバナー
(高松RC)



皆さん、こんにちは。ただいま、御紹介をいただきました、高松ロータリークラブの三宅と申します。

私が、このRYLAに参加をさせていただきましたのは、1995年ですから、もうちょうど十二、三年ぐらいになると思います。ここへ来るまで、実際のところロータリーというものも余りよくわからなかつたし、急にガバナーになれと言われても、非常に自分でも困っておりました。

ここへ来まして、あちらにいらっしゃる今井先生が、いろいろ講義をしていただけるわけです。3日目だったですか、山の上で夕方暗くなつてから、みんながあそこの山の上に集まって、今井先生からいろいろお話を伺つて、そのときに、みんなで手を組みなさいと言われたんです。隣の人、円陣を取つて、こういうふうに手を組むんですね。そしたら、隣の人の手の暖かみを感じると。何となく、気持ちがいいですね、気楽です。今井先生は、今度、手の前で、手を交差して、隣の人と手を組みなさい。そうすると、胸がちょっと苦しくなる。そのときに、右手にもらった手の暖かみを左の人に渡してください。それで、自分の胸がちょっと苦しい、何か自分の時間が、経済力か、何か自分の持っているものを、その人からもらった暖かみの上に乗せて隣の人に渡してください。これが、いわゆるロータリーの奉仕ですというお話をいただ

きまして、ああ、それなら僕でもガバナーができるなというのを初めて感じました。

それから十何年になりますけれども、いわゆる私たちの生活というのは、何か人のためになること。何か世の人のためになること、ということを、朝から晩まで考えて生活をするようになりました。これが、いわゆるロータリーだと今のところは理解をしております。

今日もロータリアンの方、皆さんいっぱい来られます。このRYLAは、たったの4日間なんんですけど、非常に印象に残るといいますか、その気になって講義を聞き、その気になって友達と話をして、いい友達をつくるということで、たったの4日ですが、本当に一生に残るいい思い出になります。ですから、このRYLAは、皆さんそういう人が、ああよかったですから行こう行こうというのでどんどん来ると、新しい人が来られませんから、2回しか来られません。今日1回来れば、これからあと何年かの間にもう1回。だから2回しか来られないRYLAですから、皆さんもそういうつもりで、朝から晩まで、RYLAにつかりきりで身につけるというふうに努力をしていただきたいと思います。

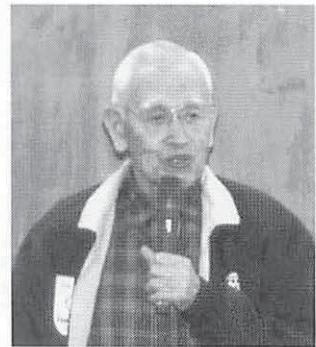
急なことで、余りまとまつた話はできませんが、そういうことで、皆さんのがRYLAに対する思いをお願いしたいと思います。

どうもありがとうございました。

ごあいさつ

今井 鎮雄

元国際ロータリー理事・RYLAセミナー顧問・パストガバナー
(神戸西RC)



ロータリー、大変ですね。こうして集まって、一人一人の先生方が一生懸命お話をしてくれたね、みんな。私が話しても似たようなことになるだろうと思う。

私は、皆さん方にちょっと考えてもらいたい。

今日、皆さん方は参加費を払ってきましたか。皆さん無料ですね。

実は、ここにおられる方々は、RYLAの委員に当たったロータリアンの人です。後ろの方々は、それぞれに今までにも委員をしたり、今後も委員をしていくという人たち。こちらにもおられますけれども、ガバナーという役割を1年間した人たち、そんな人が今日来ます。ロータリアンの皆さん方は、みんな自分のお金で参加しています。あなた方はただで来ます。

なぜ、そんなことになったか。それは今までのパストガバナーの皆さん方がお話をしているように、今の世の中で時代が大きく変化するときに、あなた方は自分たちがどちらに行っているかわからない、少なくとも世界がどうなるのかわからないということで、迷っている人もたくさんいるだろうと。実は、私たち古い先輩たちも、同じように時代の変化の中で、どう生きたらいいかということを考えながら苦しんでるはずです。先ほどからいろんなお話があるように、いつの間にか私たちは、自分の地域の中だけで生きることができなくなりました。皆さんに持っている携帯やパソコンは、世界じゅうといつでも結ばれていて、世界の情報を今すぐでも取ることができる。野球勝ったね、韓国に

今度負けたら5敗目になる。最後にイチローが打ってくれてほっとしたね。こうして私たちは、瞬時に世界のことがわかるにもかかわらず、世界のことがわからない。

今、私たちが困っていること、一体、これからの世の中どうなるんだろう。オバマが大統領になると、初めから自信を思って大統領になると思った人、手を上げてごらん。

一人？

私は大統領になるかなと思ったけど、最後にはだめだろうと思ってました。アメリカという国は、やっぱり身びいきの強い国で、最後は白人がオバマを否定する。しかし、そのオバマが勝ったのはどういうわけだろう。それは、新しい時代の変化を求めた。彼がチェンジと言いました。そういうチェンジの時代を、あなた方が責任をもって、次の時代をつくっていかないといけない。

申しわけないけれども、私は戦争に行きました。戦争が終わって1年間、兵隊達と一緒に捕虜になり、次の年にアメリカのLSDという上陸用舟艇に乗せられて、大きな257兵隊を連れて日本に帰ってきました。日本の都会の80%、私の住んでいた神戸も80%が焼けてしまった。

そんな中、私たちは新しい時代をどうつくったらいだろかと思って、がむしゃらに働きました。しかし、これから先はどうなるかということについて非常に不安です。オバマが大統領になって、みんなは安心したわけじゃないです。何か変化があるんではなかろうかという

期待のもとにオバマが出ました。なるほど、彼は頭のいい男だし、先を見ながらいろんなことを考えている。日本の政治が今混乱をしてますけども、一体だれが日本の指導者として立つのだろうかと。あなた方は、小沢さんに全部の責任を負って日本をいい国にしてくれといって、本当に思いますか。麻生さんに、あの人なら全部任せても大丈夫だと本当に思いますか。何か不安がいっぱいな、そういう時代で何かしていかなきゃならない人たちを育てなきゃいけない。若い人たちに、そのことを考えてもらわなきゃいけないと、ロータリーの皆さん方は考えた。

しかし、結局は、いろいろ心配している我々年寄りも、若い人たちでどうしていいかわからない人も一緒にじゃないか。そしたら一緒に考える、一緒に話し合う、そういうときを持ちながら、しっかりバトンを次の人たちに渡そう、次の人に渡すのだから、その人たちの費用は全部我々が面倒みようということです。そんな気持ちで集まってくれる諸君たちがおったならば、その諸君たちと腹を割って話そうじゃないか、こう言いながら、実は R Y L A が生まれました。私たちは、あなた方にこうしなさいよとか、これはなくちゃだめだぞということを言うつもりはありません。だけど、一緒になって生活をする中で、なるほど、一生懸命生きるということはこういうことだったんだなということをわかってもらいたい。

そういう人たちと若い人たちと一緒に、何とかして次の時代のバトンタッチをしたい。何をバトンタッチするかということは、そこに書いてます。我々が思っている夢、いろいろ夢がある、平和もあるだろうし、たくさん食べることが必要な人もある。水がない地域、あるいは水が出てきても、砒素が混じっていて健康を害するという地域もある。世界は決して豊かになつてないんです。世界それ自身は、地球というそれ自身は、だんだん滅びてきてるんです。年寄

りになってきよるんです。48億年ぐらい前からできてきた地球というものは、どんどん成長しているわけではない。むしろ、地球も月も、みんな年寄りになってくるだろう。その中でどうすればもうしばらくでも維持できるかを考えて、それにふさわしいような人間の営みをしていくことが必要なんじゃないかということを、ロータリアンのみんなは、考えました。何をしよう、R Y L A (Rotary Youth Leadership Awards) というこの名前は、そういう意味でつけられました。先輩のロータリアンたちがお金を出します。ぜひ集まれる若者は集まってきて一緒に考えてね、これが今度のセミナーの一番大きなポイントです。

後ろの先輩方のロータリアンはそれぞれに自分のお仕事に責任を持つて。例えば社長さんであるとか、お医者さん。歯医者さんに患者はどうしてると聞くと、痛いまま我慢してもらいます。あなたのために、だれかが痛い歯を我慢して待っているんですね。

ただ、どうしても来れない人がおられました。それは、弁護士をしているロータリアンの人たち。ちょうど会社の株主総会と重なりました。今日、夜中に来るという人もいます。なぜか？ 一目でも若い人に会いたいし、その人たちと一緒に過ごし、何が問題かを考えたいからです。だから、真剣に語り合ってほしい。ことに二日目には、講義を聞く時間以外をみんな自分たちでものを考えてもらう。あなた方が考えてもらいます。今の時代は何か、何を苦しんだか、何を楽しんだか、どういうことが問題があるのか、それを解決するにはどんなことができるのか、何かできるとしたら、それはどうしたらできるのか。そんなことまでも考えてもらおうと、そういうことを問いかける会です。

悪いけども、ここに来たさんは人質みたいなもんでね。卒業生のグループがあります、ライラ学友というグループです。恐らく、ずっと一生涯、あのときはああやったな、若げの至り

でこんなとこ入って損したなとか、いや、若げの至りで入ったけれども、あれだけ先輩たちと一緒にずっとおれてよかったですなとか、思い出せる機会になります。それをパストガバナーの皆さん方は、一生の思い出になるとか、一生の記念になるとか、言ってくださいました。

現役のガバナーは、これから地区大会のために大変な苦労されます。後ろの方々も決算時期ですね。3日間、ここに来るのはしんどいなと思っている人もいるんです。でも、それを犠牲にしてでも、皆さんとこうして一緒にいる。その気持ちだけわかってあげてください。そして、それじゃあ、こういう会はただ遊びに来たんじゃないな。ただ、ロータリアンの人も一生懸命、皆さんと近寄ろうと思いますが、皆さんと同じ言葉は使えません。言葉も難しいね、このごろ。僕はもう孫の言葉さっぱりわからない。どうぞ皆さんも努力して、いい会を持ってください。これが成功するかしないかは、あなた方がどれだけ考えて、この4日間を一緒に過ごすのか、先輩たちと一緒に過ごすのか。先輩の話が役に立たなかったら聞かなくてもいいけれども、自分たちが考える機会にしてほしいということを思います。

今日、この中に特別な人が来ておられるんです。私はロータリー・インターナショナルのディレクターという理事を2年間しました。ガバナーというのは1年間なんですけれども、理事というのは2年間するんです。そのロータリー・インターナショナルにはいろんな部門があって、ロータリーが小さくても、何か地球の

ために、世界のためにお役に立つような仕事をしたいとやっています。日本からたった一人出ておられる、RYLAの国際ロータリーの委員会の委員をしている海沼さんが東京からみえてます。

ちょっと海沼さん御夫妻、お立ちいただけませんか。委員は奥様の方ですけれども、いつも御主人と一緒に行っておられます。ここは二つの地区のロータリーだけですけれども、この日本でもロータリアンが出席する全国のロータリーの研究会で、どんなふうにしたらいいか、考えます。世界のロータリーは世界のロータリーの中で、世界大会がある前に、RYLAの人たちがみんなが集まります。もちろん言葉は、英語です。もしも、この中で英語の上手な人、コミュニケーションができる人がおれば、ここを出たら、そのロータリーの世界大会にも出席することができます。

こうして、私たちは一人一人の皆さんたちが、どんなふうにして世界にかかわるか、どんなふうにして新しい世界をつくるのか、どんなふうにして地域社会の中で次の日本を背負えるようなものにするのか、私たちが世界から、ああ、日本もしっかりやってるなといわれる国になる努力をできるのか？それを考えてもらう、これがRYLAだということあります。

長くなりましたが、ありがとうございました。

私は最後に、皆さんとまとめやったかということを聞く役ですから、どうぞそのときにはちゃんと答えてくださいね。ありがとう。

その他関係者ご紹介

徳梅 明彦

ディーン
(あわじ中央RC)

ごあいさつをいただいた方々以外で皆様方にぜひご紹介させていただきたいロータリー関係の方々を、ただいまから紹介させていただきます。

まず、2670地区のパストガバナーで、現在新世代部門のアドバイザーをされておられます、飯忠悟さんです、今治からお越しになりました。

続きまして、2680地区でパストガバナーで、ただ今、ごあいさついただきました今井先生と一緒に第1回のこのRYLAから携わってきておられます、後ほど、御講話いただきます、深川純一パストガバナーです。よろしくお願ひします。

ロータリーには、このRYLAというものを開催するのに、一つ上の委員会がありまして、新世代委員会というものを設けております。この新世代委員会の中には、ローターアクトクラブ、インターハクトクラブ、それから国際青少年交換、そしてこのRYLAと、この4つの部

門に分かれています。それを総括しております、新世代部門の委員長であられます、2670地区吉田茂さんです。よろしくお願ひします。

同じく2680地区、新世代委員長の安行英文さんです。

それから、前の方には並んでおられませんけれども、御紹介をさせていただきます。2670地区的ガバーナー選出であります、岡内紀雄さんです。エレクトというのは次年度、7月1日からのガバナーになられます。

それから2680地区直前ガバナー、つまりパストガバナーですけれども、昨年ガバナーをされました、三木明直前ガバナーです。

その他、多数のロータリアンの方に、本日から4日間、皆様のお世話をさせていただきます。この緑のジャンパーを着ている方が関係者だと思ってください。何かわからないこと、御不満なことがありましたら、遠慮なく、我々に声をかけていただきたいと思います。



RYLAの皆さんに期待する ロータリアンの気持ち

深川 純一

RYLAセミナー顧問・パストガバナー
(伊丹RC)



○司会 それでは、皆様方に、この今回の RYLAセミナーに参加に当たって、資料をガバナー事務所から送らせていただいたと思うんですけども。その中に、RYLA受講生の皆さんへという深川純一先生が書かれた冊子を送らせていただいたはずです、見ていただいたものを確信しております。このとおり、おしゃべりいただくわけじゃないんですけども、深川純一先生の方から、ただいまからしばらく時間をいただきまして、RYLAの皆さんに期待するロータリアンの気持ちをお伝えしていただきたいと思います。

もし、受講生の方でこれを今忘れてきた、持っていない人がおられましたら、ちょっと順番に回しますので。

それでは、深川先生、よろしくお願ひしたいと思います。

○深川純一 どうですか、皆さん、疲れましたか。もうちょっと辛抱してください。

実は、先ほど銀波園からランチに乗って余島の桟橋に着いたんです。そこへ、先ほど御紹介のあった三木直前ガバナーが待ち構えておりまして、『突然ですけれども、この開講式で何かお話をいただきたい』と。通常は、講演の場合には、何日間か前に、何々講演をやりますよといつて頼んでおくのです。ところが、この RYLAに限らず、ロータリーでは、予告なしに大体いきなり頼まれます。先ほどの今井先生の場合も、恐らく、予告はなかったと思います。

それで、今井先生はもう慣れておられるから、うまくさばかれますけれども、私は、あまり話はうまくありませんので、予告は5分前ぐらいでいいだろうというので、予告をいただいたわけです。慣れるまでは、まさに青天の霹靂。真っ青な青空に突然雷が鳴り響いたような感じで、びっくりするのですが、私も大分慣れました。

ロータリーでは『頼まれて、ノーと言うなよロータリー』という言い伝えがありますからものを頼めたら、絶対に断ってはならない。頼む方も、この人なら大丈夫だろうということを信頼して頼むわけです。『あいつ、出来ないだろ』と思って頼むのであれば、これは、いじめであります。裏を返すと、ロータリーは絶対的な信頼の世界だということを意味するわけであります。

それで、この RYLA というのは、実はこの信頼の世界を作っていくこうというのでやり出したことなんです。いただいた、この『受講生の皆さんへ』という文章は、私が書いたものであります。間違ったことは書いてないのですが、読んでいるうちに眠くなるだろうと思いますから、適当にお読みください。

そこで、RYLAでもロータリーでも、大切なことがたくさんあります。しかし、それを全て、今からしゃべり出したら日が暮れますから、RYLAで一番大事なことは何か、そのことだけをちょっとお話をされておきたいと思います。

この RYLA で大事なことは、今日から皆さん方、御経験になりますが、みんなが本当に

仲よくなるということあります。ところが、仲よくなるということの意味はいろいろございまして、お酒を飲んで仲よくなる場合もあるでしょうし、ダンスをするのもいいでしょう、旅行するのもいいでしょう、いろんな楽しみをしながら仲よくなる、それもいいだろうと思いません。しかし、ロータリーの世界では、そんな楽しみ方は誰でもしている。地域社会の人達は、誰でもお酒を飲み、ダンスをし、旅行にも行っています、ゴルフもします。こういうのを感性的な親睦というのです。このようにして仲良くなることも大事であることを一つ覚えておいてください。ロータリーでももちろん、これは大切なことであります。

しかし、お酒を飲んだり、ゴルフをしたり、ダンスをしたりする、そういう感性的な親睦であれば、これは何も地域社会の人だけではなくて、暴力団だってやっています。彼らだってお酒を飲み、ゴルフをし、そして旅行を楽しんでいます。では、暴力団の親睦とロータリーの親睦とどこが違うのか。これに答えられなければ、このRYLAでいろんな勉強をする意味がないわけあります。ロータリーが目指しているのは、お互いに接触し合いながら、何かを学び取る、そのことが大事なことなのであります。これを私どもは精神的な親睦と言っています。先程の感性的な親睦。そしてロータリーでもRYLAでも大事なのは、この精神的な親睦。この両方とも大事なんです。お酒を飲むことも大事であります。もっとも、お酒を飲むのも大事だと言ったら、このRYLAではお酒を飲むのが当然だと思っている人もいるらしいけど、それは違います。

あれは、もともと今井先生が30年前に、みんな疲れたら眠れなくなることがあるから、そのときはお酒を飲んでもいいですよと一言おっしゃったのです。するとお酒を飲まなきゃならないとみんなが思って飲み出したので、これは絶対に、そういう意味ではございませんので、

まじめな意味で受け取っていただきたいのであります。

このような意味で、本当に仲よくなるというのは、お互いに顔と顔を合わせて、いろんなお話をし、コミュニケーションを交わしながら、そして相手から何かを学び取る。したがって、お酒を飲んでも、何をしてもよい。しかし何か相手から学び取るものがあるはずです。我々は、ロータリーに入って、そのことを嫌というほど経験しました。口では言えない、すばらしいものを授かることができます。したがって、これは科学の問題ではありません。理屈の問題ではなくて、お互いに接触することによって感じ取るもの。ロータリーというのは、実はそういうものなのです。RYLAというのも、もちろん勉強も大事です。知識も大事ですけれども、そういうものを見聞きしながら、この3泊4日、一緒に一つのキャビンでいろんな悩みを打ち明け合い、あるいはお酒を飲んでもいいでしょう。いろんな話をしながら、肌と肌との触れ合いの中から、自分にはない何かすばらしいものを誰かが持っている。そういうものを学び取っていく。そういう場がロータリーであり、RYLAなのであります。仲よくするということの意味の中に、このような意味があるということをちょっと覚えておいていただきたいります。

そのためには、何が大事かといいますと、やはり信頼し合うということは、お互いが完全に平等対等な立場でものが言えなければなりません。会社のように上下の関係、命令服従の関係のところでは、本当に自分の心で思っていることは言えないだろうと思うのです。そうではなくて、完全な横型社会、縦型社会ではなくて横型社会でおつき合いをしていく。これがロータリーであり、RYLAであります。

いろんな肩書を振り回す人がありますが、そういうことは、ロータリーでは通用しないのです。あくまでも、友達としてのおつき合い。例

えば、今井先生のことを私共は、今井先生、仕事を沢山くわえ込んできて、ダボハゼみたいだと言いますと、今井先生も『お前たちこそ、酒ばかり飲んで悪の根源だ』と言い返します。そのようにいろんなことを言い合っていますが、しかし、私共は今井先生を心から尊敬しています。尊敬しているながら、本当に和気あいあいとお友達として、おつき合いをしていただいている。これがロータリーの世界なのであります。

一つの例え話をしておきましょう。みんなが平等対等の横型社会でおつき合いをする。その象徴的な制度がお茶席であります。お茶席には、昔から、士農工商、武士も入ってくれば、大名も入ってくる。町の人も入ってくれば、農家の人も入ってきます。いろんな社会的身分の人が入ってまいりますけれども、武士も大名もお茶席に入るときには、腰の刀を外して丸腰で入ります。そして、一旦お茶席に入ったら、お互に完全平等、対等な立場で、静かに茶を喫して去る、これを『喫茶去（きっさこ）』といいます。これが、お茶席の論理であります。

そして、一般社会では、大名は最高の位で権力を持っています。町の人達には何の権力もありません。そういう人たちも、一旦お茶席に入ったら、完全平等対等な立場で言いたいことを言うのであります。ロータリーもこのような世界でありますし、このRYLAもそうであります。だから、私が今井先生のことをダボハゼみたいだと言い、今井先生がお前こそ悪の根源だとと言う。和気あいあいとつき合ってるけれども、お互に心の中では相手を尊敬し、相手を心から信頼しておるからこそ、そういうことが言えるのです。そういう信頼がなくて、あれは諸悪の根元だと言ったら、これは喧嘩になります。だから、仲よくなるということは、一番根底に流れる考え方は何かということ、お互が信頼できる、信頼し合うということであります。

実はこのRYLAでも、皆さん方が四国4県の方たちと兵庫県の方たちが一堂に会して、肌

と肌をつき合わせ、そしておつき合いをしていく。そしてまた、地域社会へ去っていく。その3泊4日の間で一番大事なことは、その信頼関係をつくる。本当に仲よくなる、親友、心の友をつくるということが、このRYLAの一つの大きな目的であります。したがって、肩書はあります。先ほどから、御紹介なさっておりますように、パストガバナーとかガバナーは知事さんにあたるんだとかいろんなことをおっしゃいますけれども。それは職務のことでありまして、一たん、このRYLAに入ったり、一旦、ロータリークラブの中に入ったら完全平等対等。地域社会では、社長さんもおれば、大会社の社長さんもおれば中小企業のつぶれた会社の社長さんもいます。お医者さんもおれば、大弁護士もおれば、いろんな職種的人がいます。社会的な階級もまちまちですけれども、一たん、ロータリーの世界に入ったら、みんな完全平等対等であります。そして、裸のおつき合いをする。これがロータリーであります、実は、RYLAもそういうおつき合いの場だということを心にとめておいていただきたい。したがって、余りかたくならず、気楽につき合ってください。そして、何でもいろんなことを話し合ってください。ここにおられるロータリアンは、みんなそのことを心得ておられますから御安心いただきたい。

要するに、裸のつき合い、そこから、何か人から学ぶことがあるだろうというのは、昔、ロータリーの先輩たちが考えた知恵であります、おけの中に子芋をたくさん入れて、そして棒でぐるぐるかき回すと、芋と芋とが擦れ合って皮がむけていく。そのようにして、ロータリーの世界でも、ロータリアンたちが毎週例会に集まって、そしてお互に切磋琢磨して何かを学び取る、いろんな議論もします。そういうことをしながら、やはり自分が磨かれていく、そういう場がロータリーだということを言っております。お互に磨き合うこと、心を磨き合うこ

と、ロータリーもそういう場だということを覚えておいていただきたい。

それから、顔と顔を合わせておつき合いをすることについては、ロータリーでは、ロータリアンは毎週1回の例会へ必ず出て、顔と顔を合わせていろんな話をし、いろんな話を聞きます。そのようにして自分の心を磨き、自分を少しでも高めようというあります。したがって、顔と顔を合わせるということが大事なあります。あくまでも顔と顔とを合わせて、そしてそこからお互いに何かを学び取るのであります。したがってシカゴロータリークラブが1905年2月23日に創立されました。その1ヶ月後に、シカゴロータリークラブが創立総会を開きました。そのときに決めた原則が、毎週1回、必ずロータリアンは例会に出てきなさいよという原則であります。それはなぜかと言いますと、お互いに仲よくなるということもあるんですが、単に仲よくなることだけではなくて、最初申し上げましたように、お互いに顔と顔とをつき合させて、いろんな話をしながら仲よくなっていく。そうでなければ、本当の親睦、精神的な親睦はできないだろうという考え方に基づいておるわけであります。この原則は、今もずっと続いている。RYLAもできるだけ顔と顔を合わせて、いろんな話をしてください、皆さん。そのことによって、お互いに何かを高め合うことができるだろうと思います。

それから、先程、裸のつき合いと申し上げました。肩書などは全然関係ありません。RYLAに来たら、RYLAの受講生とロータリアンとも完全平等対等であります。パストガバナーとロータリアンも平等対等であります。上下の関係はありません。会社なら上下がありますが、ロータリーではそういうことはありません。みんな平等対等の立場であります。したがって発言権も平等でありますし、いろんなことが言えるということになるわけであります。そういう形で、裸のつき合いをしていくのであります。

ロータリーにもいろんな肩書があります。あるけれども、それは一応、職務上、そういう役についておるというだけで、ロータリーの世界では、そしてRYLAの世界では、お互いが本当に平等対等な人間としておつき合いをしていく、これがロータリーの考え方であり、このRYLAの基本的な考え方なのであります。

冒頭に言いましたように、仲よくなることの意味には、いろんな意味があって、解説し出すときりがないのですが、今日はこの程度でやめておきます。

それから、ロータリーにはもう一つ、仲よくなること、親睦ということのほかに、世のために人のために何かをしようよという大切な役割もあります。先ほど、親睦、仲よくなることが一番大事なことだと思いました。それと、同じほど大事なことは、やっぱり、自分一人で生きているのではない、世のため人のためにも生きているのだ。だから、そのために何かをしなければならないということから奉仕ということが出て來たのであります。そして、その根底には自分たちが仲よくなるということのほかに、世のため人のためにも役立っていこう、これをロータリーではサービス、奉仕という言葉で集約しておりますが、そういうことも合わせて考えなければならないということをロータリーは考え出したのであります。

したがって、ロータリーの中心概念は何かというと、それは二つ。一つは親睦、仲よくなること。そして、その親睦は、単にお酒を飲んだり、ダンスをしたり、ゴルフをしたりする感性的な親睦、これは大事なのです。しかし、それとともに精神的な親睦、毎週1回必ずみんなで会つて、そこで顔と顔を合わせて、本当の心の友をつくって、少しでも自分を高めていこうという精神的親睦が大事であります。そして、これと同じぐらい大事なことが、世のため人のことも考えよう。奉仕ということが、同じぐらい重要な目標に考えられているのであります。この二

つことを心にとめておいて、今日から3泊4日、どうかこの余島のすばらしい自然を楽しんでいただければと思います。そして、それが終わったときに、何か皆さん方の心に暖かい火がともれば結構あります、ともらなくてもいいです。しかし、地域社会に帰ってからともるかもしれない、あるいは一生ともらないかもしれません、それでも結構です。ただ、ロータリーは、とにかくその種をまいておこうというのがロータリーの考え方であります。したがって、いつもロータリーは、せっかちに効果だけを求めようとはしません。やるべきことは、世のため人のためにやっておこう、それが芽を吹くかどうか、それは、受講生の皆さん方にお任せしよう、ただ、種だけは一生懸命まこう、それが徒労に

終わってもいいじゃないかというのがロータリーの考え方であります。短い一生であります。何にもしないで、お酒だけ飲んで終わる。それもいいでしょう。しかし、それだけやはり物足らない。この地域社会にお世話になって生きているんだから、そのお世話になった地域社会に何らかの恩返しをしていく。そのことも大事だろうと思います。

もう1時間以上になりました。これで終わっておきます。どうか、皆さん、楽しんでください。あとでパーティーがあり、ごちそうがいっぱいありますから、思いっきりパーティーを楽しんでください。

ありがとうございました。



注意事項の説明

○司会　ただいまから、事務的な面での説明に入らせていただきたいと思います。

まず、全体的な大まかなプログラムの流れ、またこのRYLAセミナーがどのような形で運営されていくかということを、皆様方に知りたいと思いますので、その辺の説明から始めさせていただきます。

皆様方のお手元にあります、今日お配りした冊子、それから募集要項の方にも若干書いてありましたけれども、RYLAのスケジュールというところ、冊子の方では1ページ目にあると思います。ここに大まかな流れが書いてあります。詳しくは申しませんが、時間はアバウトな形で、大体、線を区切っているわけなんですけれども、これは決していいかげんに始めるという意味ではなく、時間はきっちりと守らせていただきたいと思います。

受講生の皆様方、実は本日59名の受講生の方をお迎えしております。60名だったんですけれども、ちょっと不慮のけが人が出まして、どうしても1名来れなくなりました。残念ながら59名の受講生によって、このセミナーを開催させていただくことになりました。したがいまして、この59名が一つにまとまる、本当は一つにまとまってほしいんですけども、なかなか難しいので、例年どおりなんですが、皆様方を四つのグループに分けさせていただきます。その班分けは後ほど発表させていただきますけれども、その各グループ、AからDまでの班と、私たちは呼ばせていただきます。このAからD班につ

きまして、カウンセラーとして2名、男性カウンセラー、女性カウンセラー、それぞれ1名ずつつかせていただきます。そして、そのカウンセラーは、3泊4日、皆さん方と一緒に寝食をともにさせていただきます。邪魔がらずに、一緒に寝させてあげてほしいと思います。

特に今回は、各班を人数で割りますと、1班当たり15名、男性が9名、女性が6名という割り振りになってしまいます。そういう形で、今回、非常に人数が多いので、各キャビンとも手狭な状態になろうかと思うんですけれども、そこは、これも何かの縁ということで、皆様方、寝食ともに仲よく4日間を過ごしていただきたいと思います。カウンセラー、班分けにつきましては、この最後の方で、皆様方に発表させていただきたいと思います。

それから、明日以降ですけれども、朝食は7時半以降、随時取っていただけます。朝の講義が9時半スタートです。ですから、もう言われなくて皆さん大人ですから、わかっているとは思いますが、9時半ということは、少なくとも5分10分前には、このポジションに座っていたい、準備をしていただきたい。我々が「時間やで、はよ行きや」ということがないよう、皆様で自主的に率先して時間を守って、一つ先の時間を見据えて行動していただきたいなと思います。この講義は、あさって土曜日も一緒です。午前中の講義につきましては、明日は、講師は阿部志郎先生、詳しい紹介は冊子の方に書いてあります。土曜日は、バイマー ヤンジン

さんということで、二日間講義を聞いていただきます。そして、最終日だけは、閉講式の関係がありますので、ちょっと朝の時間帯がタイトになりますけれども、先ほどお話をいただきました今井先生の御講話を朝の9時スタートで始めたいと思っておりますので、その辺、皆さん、時間の勘違いなさらないように、よろしくお願ひしたいと思います。

それから、昼食につきましては12時からです。食事はすべてオープニングパーティーも含めて、先ほど皆さん方に待機をしていただきました食堂の方で行いますので、そちらの方へ移動をお願いしたいと思います。それから、明日の午後につきましては、またレクリエーションということで、自由な時間を設けておりますが、各班単位等でカウンセラーを中心にして、皆さん方で行動をともにさせていただきたいと思います。レクリエーション等の詳しい説明につきましては、後ほど余島のスタッフの方から、皆様方に詳しい説明がありますので、それを参考にして、皆様方で話し合って決めていただきたいと思います。

それから、夕食は基本6時からです、今夜のオープニングパーティーも6時からです。明日以降の夕食も6時からとなっております。それも、皆様方、時間厳守でお願いしたいと思います。それから、明日、夕食後は、キャンプファイヤーと書いてあると思うんですけども、このキャンプファイヤーと申しますのは、またこれも後ほどカウンセラーの方からも詳しい説明がありますけれども、皆様方で、一つ深く物事を静かに考えていただく時間、貴重な時間を持っておりますので、大切にしていただきたいなど、そのように思っています。

それから、ロータリアンのタベというのは、我々スタッフ関係の勉強会のことです。それからキャビンタイムというのが毎晩書いてあります。これは、四つの班に分かれています。

たけれども、皆様方が少しでも仲よくなつていただく、友情を深めていただく、親睦を深めていただく、そういう貴重な時間でございます。24時でスケジュール終わってますけれども、別に24時に終わる必要もございません。かといって、徹夜を強要するわけでもございませんが、皆様方の判断で、そういった時間、一切制限を設けませんので、自由に使っていただきたいと思います。

以上、そのような形で、4日間のスケジュールを行っていきたいと思います。

そして、冊子の方、7ページをちょっとあけていただきたいと思います。もう、目を通していただいた方もあろうかと思うんですけども、受講生の皆様方へということで、四つの項目を書かせていただいております。

まず一つ、出会いを大切に。これはもう、私も先ほどから何回も言わせていただいております。四国の端から、兵庫県の北の端から、この大体真ん中というたら語弊があるかもわかりませんけれども、この小豆島まで集まつていただきました。この機会を大切にしていただきたいなと思います。

それから自由を大切に。今回のセミナーの参加者募集要項を見られたと思いますけれども、二十歳以上、我々、ロータリーは当然皆様方大人として扱わせていただきます。細々したことは、小・中学生のように言いませんが、大人としての自覚を持って、自律を持って行動をしていただきたいと、そのように思います。

それから3番目、時間を大切に。時間は全員の共有物ですと書いてあります。一人の時間のルーズさが、皆さんに御迷惑をかけることもあるかもわかりません。先程来、くどくど言っているようですが、時間をどうか大切にしていただきたいと思います。限られた四日間です。どうか、1分1秒をおろそかにせず、大切に過ごしていただきたい。

それから最後に自然を大切に。これは、この

余島のすばらしい自然を大切に守っていきたいということでございます。間違っても、ごみを捨てたりとか、そういったことはないとは思いますけれども、大切にしていってください。後ほど、余島のスタッフの方からもいろいろと御注意があろうかと思いますけれども、よろしくお願ひをしたいと思います。

私も昨年までカウンセラーさせていただいておりましたが、いつも気になることがあります。最近は非常に携帯電話とかが進化しまして、もう四六時中、メールとか情報とか何でも入ってきます。みんなが一生懸命、話し合っている最中でも、メールというのは所構わぬ入ってくるわけで、それをやっぱり確認してしまう。それで、その後、返信をします。ごく当たり前の流れなんですが、その時間はみんなで共有している時間です。強制はいたしませんけれども、この四日間に關しては、できるだけそういったことはお控えを願いたい。それは、私の希望です。御協力のほど、どうかよろしくお願ひをしたいと思います。

それから、先ほど言いましたように、お酒が出ます。飲めと強要するわけじゃございませんので、その辺も皆さん自覚を持ってください。羽目を外すのが悪いこととか、そういったことは申しませんが、自分だけの体じゃないんだということを肝に銘じていただいて、許される範囲内で最大限楽しんでいただきたいと、そのように思っております。

それでは、引き続きまして、余島の施設説明並びに注意事項です。Y M C A 野外活動センターの所長の山根さんより、お話ししていただきたいと思います。

○山根所長　皆さん、こんにちは。ようこそ、Y M C A 余島センターにお越しくださいました。所長をしております山根と申します。よろしくお願ひします。

後ほど、スタッフの方から、細かな説明をさせていただきたいと思いますが、ロータリアンの方々から、余島についてのお話が色々あったかと思います。大変広い島ですが、R Y L A の期間中、あさってからは小さな子供たちが神戸から参ります。余島では古くからしている子供たちのキャンプがこの期間ございますので、ぜひ、仲よく触れ合っていただけたらなと思っております。

一つニュースは、例年よりもR Y L A のセミナーの開催が今回は遅いので皆さんがいらっしゃる間に、余島のサクラが満開に近くなるんじゃないかなと思っています。今、ちらほらサクラの花が開いています。一日ごとに花の数がふえて、自然の移ろいを感じ取れるんじゃないかなと思いますので、ぜひ余島の自然をじっくりと味わってください。遠くから見ている自然もすてきなんですけれども、こう近くに寄っていって、どうなっているかなと見るというのもすごく味わい深いと思います。いろんな木があつたり、いろんな花が咲いている島ですので、ゆっくりとお過ごしください。春はそういう意味で、いろんなものが芽を吹きながら、息吹を感じる、変化をしていく、とてもすてきな時期だと思います。この余島でよい研修を御体験してもらって、元気にまたそれぞれの地に戻っていただけたらなと思っております。スタッフ一同、応援をしたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

ロータリアンの夕べ (1日目)

深川 純一

RYLAセミナー顧問・パストガバナー
(伊丹RC)



○司会 それでは、大変長らくお待たせをいたしました。ただいまから、ロータリアンの夕べを始めさせていただきたいと思います。

講師は、もう言うまでもありません、深川パストガバナーです。よろしくお願ひをいたします。

○深川純一 どんな話をしたらいいのか迷ったのですが、このRYLAが済んで、十日ばかりしたら四国の地区大会で、私がその記念講演することになっておりまして。そのときのテーマが、昨秋、亡くなった東京東クラブの佐藤千壽パストガバナーが私にくださったテーマ、「永遠の課題・職業奉仕」でありまして、たまたま、それと同じテーマを、今度の四国の地区大会で豊田ガバナーの方からいただいております。職業の倫理というのは、今、一番アップツウデイトな話題でございまして、最近とみに、この職業の倫理が退廃しておることは、皆さん御存じのとおりであります。

では何故、こんなことになってきたのか、昔のロータリーは、一体どうであったのか。そして今はどうなのか。更に、これから一体どうなるのか。このような話を今度の四国の地区大会でようかなと思っておりまして、まだ構想の段階で、詳しいところはまだ何も考えておりません。そんなことを考えておりましてところ、今日、三木直前ガバナーから、いつものとおり突然に、何かしゃべれということになりました。そこで今日は、今度の地区大会のリハーサルのつもりで、

お話しようかなと思います。

先程、申し上げましたように、この永遠の課題、職業倫理というテーマは、佐藤千壽先生が私に、このテーマで君の所属する伊丹ロータリークラブの50周年の記念誌を作り、それを記念品として配布すればよいでしょう。その記念誌の題字は、あなたが筆で書きなさい。もちろん最後を締めくくる論文はあなたがみずから執筆しなさいということになりました。このようなことで、今年の、四国の地区大会のテーマが、佐藤千壽さんがくださったテーマと全く同じなのであります。私は、佐藤先生とはちょうど12歳違い。私が今79歳、佐藤先生は私よりちょうど一回り上で、91歳。去年が卒寿の年だったのです。実は、私は今から20年ぐらい前に、兵庫県のガバナーにノミネートされまして、最初のロータリー研究会が、豊橋で行われたときに、私がガバナーノミニーとして参加をいたしましたとき、初めて、昼の時間に佐藤先生とお会いしました。先生は、私の名前を知っておられたのか、すぐ見つけて、「深川さん、一緒に飯食おう」といって、並んで食事をしながらいろいろと話しをしました。それが最初の出会いでございました。その後、あちらは東京ですし、私は関西ですから、あまり会うことはないのですが、あちこちの地区大会やロータリー研究会へ私はよく勉強に行きました。すると佐藤先生もよく来ておられて、よくロビーで二人でいろんなロータリーの議論をしました。それから、ロータリー研究会は、年に1回ございますが、初めは二人とも、別々にま

じめに会議を聞いていたのですが、だんだん、このごろのロータリー研究会の話の内容がくだらなくなりまして、それで、もう10年ぐらい前から、研究会が始まっているときでも、「おい、ちょっとこっちでしゃべろう」と廊下へ出て、ロータリーの議論をいろいろやっていました。

そのようなことで、ちょうど、私が半年で、佐藤さんも一回り上の半年で、ウマが合ったのしよう。随分、かわいがってくださいました。最後は去年の5月ごろでしたが、私ども夫婦をわざわざ先生の経営している仙台の工場へ、案内してくださって、いろんな説明をしていただきました。もちろん、佐藤さんの奥様も一緒に来て、二夫婦が同伴で三日か四日あちこち旅行したりして、かわいがっていただきました。そのときに実は、佐藤先生の職業奉仕の実践の現場を目の当たりにして、いろいろと、そこで現場の教えを受けたのであります。

そのようなことが頭にありましたので、今まで東京で来月、特別研修会をやりますがその最後の5月18日は私と佐藤先生との職業奉仕についての対談をすることになりました。ところが、佐藤先生が、去年の秋に亡くなられましたので、パネルディスカッションでもかわりにやりましょうかと言ってきましたが、私は、やはり佐藤さんから、その職業奉仕の現場を見せていただいて、佐藤さんの職業奉仕というのは、本当にすごい。今の日本のロータリアンが考えているような生易しいものではない、本当に捨て身のことをやっておられます。そこで、これを原理的に分析いたしまして、これを記録にとどめなければならないと思い、5月18日の特別研修会は、これは、私の佐藤先生に対する鎮魂の物語として、佐藤先生の追悼記念講演にしてほしいと申し入れました。すると東京のパストガバナーも喜んで、そうしようということになって決まったのです。その原稿はまだできていませんが、構想だけは、首を折って入院して、暇なものだから頭がさえましてね、いろんな発想

がぽんぽん出てきて、まだまとまってないのでですが、そういうものを材料にして、その追悼の講演をやろうと思っております。今度の四国の地区大会も、そのことも一部入れて、佐藤先生の追悼のつもりで何か文章をつくろうと思っております。

今日はその前哨戦で、同じことをしゃべるわけにはいきませんけれども、大体、重要なところは今度の地区大会と同じかもしれません。そんなことで、ちょっと職業の倫理というテーマで、今日はしばらくお耳を拝借したいなと思うのです。

この職業倫理の問題はというのは、職業奉仕の中核にある問題なのです。重要なところであります。この職業倫理なくして、ロータリーの職業奉仕は語れないのです。したがってこれは、ロータリーの思想にかかる問題でございますので、職業倫理というものを論ずるときには、まず、ロータリーの歴史の視点からお話をしなければならないと思います。そこでまず、若干のイントロダクション的な話から入っていきたいと思います。

このロータリー運動に限らず、おおよそ運動体というものは、その運動に機動力を与える時期が最も大切なんです。ロータリーはどうかといいますと、ちょうどそのときに、哲学的な思考を持ったポール・ハリス、そしてロータリーという組織を管理する組織管理の大立者でございましたチェスター・ペリーという偉大なる人たちがいました。そして、こういうすばらしい人を初め、このロータリーの指導者たちが、もう高々と理想を掲げまして、そして、その理想に燃えて行動しましたがために、まさにこの熱く燃えた、このすばらしいロータリーが現れたわけであります。そこでまず、その初期ロータリーの発展の軌跡、足跡をちょっと簡単に振り返ってみたいのであります。簡単に申し上げます。

まず、皆さん、御存じの1905年ですね、ロー

タリーができたのが。このときに、ロータリーは、一つの職種から一人だけ会員を選ぶよという、一業一会員制の原則。それから毎週1回、とにかく例会には必ず出てきなさいよという規則的例会出席の原則。この二つの基本原則を確立いたしました。そしてその後、10年たちました1915年、サンフランシスコの国際大会におきまして、「全分野の職業人員を対象とするロータリー倫理訓」、別名、「ロータリー道徳律」を採択いたしまして、ロータリアンの個人倫理、職業倫理のもとになる個人倫理を確立したのです。これが、実は今日の職業倫理というテーマと重大な関係があるわけであります。それからさらに7年たちました。今度は1922年、ロサンゼルスの国際大会におきまして、国際ロータリーの定款、そして細則、それから皆さんお手持ちの標準ロータリークラブ定款、この三つのドキュメントを採択したのです。そして、ロータリーという組織の原理を確立しました。これが組織原理の確立の年、1922年であります。そして、その翌年、1923年、セントルイスの国際大会におきまして、皆さん御存じの、あの決議23の34号というロータリーの実践原理を確立したのです。そして、そのさらに4年後、1927年、ここでクラブ奉仕、職業奉仕、国際奉仕、社会奉仕、こういう四つの奉仕の部門、奉仕の4分類法を確立いたしました。そして、このときから今まで、原理探求のロータリーであったのですが、これからは原理探求のロータリーから実践のロータリーへ邁進しようよといって、舵を切っていくわけであります。

今まで申し上げましたことを要約してみます。まず、第一に、ロータリーの基本原理を確立いたしました。それから始まりまして、個人倫理の確立、組織原理の確立、実践原理の確立、そして4大奉仕部門の確立。すばらしい原理を次々と確立していきまして、これらはすべてロータリーが1905年に始まって、わずか25年間、すなわち4分の1世紀の間に実現されたすばらしい魅力に満ちたロータリーであったんです。

ところが、今はどうでしょうか。わずか100年のロータリーの歴史の顧みましても、ロータリーは衰退の一途をたどっております、どんどん衰退しております。20世紀初頭には高々と理想を掲げて、それに燃えて行動した、すばらしいロータリーがありました。そして、さまざまな原理を確立したロータリー、その確立した原理を実践していった、あの熱く燃えたロータリーは一体どこへ行ってしまったんでしょうか。今、影も形もありません。

そこで、先程、冒頭に申し上げました職業倫理と密接な関係のある二、三の問題についてだけ、若干おしゃべりをしてみたいと思うのであります。

まず、最初に大原則、一つの職種から一人だけ会員を選ぶという一業一会員制の原則であります、これは、職業分類の原則とも言われております。これは、何のためにこの原則をつくったのかといいますと、クラブの親睦を守るために、ロータリーの創立者でありますポール・ハリスが、1905年2月23日にみずから考えて打ち立てた大原則なのです。しかし、この原則は、皆さん御存じのように、2001年、規定審議会の決議によって廃止されました。ポール・ハリスは、もう亡くなった後であります。この一業一会員制が廃止されましたときに、ロータリーというものをこよなく愛しておったすばらしいロータリアンたちが、ロータリーに幻滅の悲哀を感じました。そして、ロータリーに愛想を尽かして、ロータリーを去っていきました。これは、まだ私たちの記憶に新しいところであります。本当に寂しいことだと思います。

また、もう一つの原則。ロータリアンが規則的に毎週1回例会に出席するという原則。これは、その最初の2月23日の原則からちょうど1カ月たった3月23日に、シカゴのロータリークラブが創立総会を開きました。その創立総会の場で決められた原則でございまして、その原則の具体的な内容は一体何かといいますと、4回

連続して例会に欠席したる者は、自動的に会員資格を失うという原則であります。この原則も、言わざとされた毎週1回必ず出てきなさいよということは、クラブの親睦を守るために、そういう原則をつくったんです。しかも、これは先ほど申し上げました、一業一会員制の原則とともに、ロータリーの職業奉仕の基本前提になっておる原則であります。しかし、この規則的例会出席の原則、これも1968年以降、規定審議会の幾たびかの決議によって、結局、規制緩和されてしまいまして、現在ではこの規則的な例会出席の原則は、有名無実になってしまっております。これは、皆さん御存じのとおりであります。昔のこの例会出席の原則というのは、物すごく厳しいものだったんです。だから、ロータリーが質がよくなって、栄えていたんです。それから、またもう一つ。先ほど、ロータリアンの個人倫理の確立を申し上げました。1915年のサンフランシスコの国際大会における「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」あの「道徳律」は、個人倫理の核にある大変大事な問題であります。これは1980年、今井先生がガバナーになられた年の規定審議会で廃止されてしまいました。それから、さらに、1923年の決議23の34号、これはロータリー実践原理の核なんですが、今後は手続要覧に歴史的な文書として保存されるにとどまるという形になってきております。

そして今、1922年の組織原理の核にあるクラブ自治権、これはR IによるCLPの提唱によって揺らいでけております。CLPというのは、ビチャイ・ラタケルさんがこんなことをやつたらだめだと、前から説いておられるところでありまして。それは当然の提唱だと思います。

これが今のロータリーの状況です。このようにロータリーは、20世紀初頭に形成されましたすばらしい原理原則のほとんどを失ってしまったといえるわけであります。まさに、「ロータリーよ、どこへ行く、おれは知ってるよ、あいつら

昼飯食いに行くんだ」これは、皆さん御存じのように、有名な文豪、バーナード・ショーがロータリーを皮肉った言葉なんです。しかし、昼飯でも食えればいいんです。この状況がもう少し続いたら、昼飯どころかロータリー自体の魂がなくなってしまいます。

何年か前にあるパストガバナーが言いました。Rotary rest in peace、直訳しますと、平和の中に横たわるロータリー、ということは、その意味は、死せるロータリーだと。やがて、こうなるだろうと思います。このようにいたしまして、ロータリーは今衰退の道をひたすらたどっておると思います。

それじゃあ、このロータリーに起死回生の策があるのか。我々ロータリアンは、これを傍観しておるわけにはいかない、何とかしなければならない。その起死回生の策はあるのか。実はこのごろ、そんなことさえ考えないで遊ぶことにうつつを抜かしたり、会員増強だと、寄附の勧誘とかやってる、そういうロータリアンが多過ぎます。私は、もちろん寄附を否定するのではない。寄附はどんどんしなければならない。これは、ロータリーの情の世界、原理の世界は原理の世界で大事にしながら、情の世界、困った人を助けるというのは、一番大事なことなんです。それもやらなければならない。しかし、そればかりやってるとだめだから、ロータリーを拡大しよう、会員を増強しようということになる。ロータリークラブをふやす、これはもちろん1910年に、今のR Iの前身であります全米ロータリークラブ連合会ができましたときに、当時16のロータリークラブが集まって、クラブとは別枠の団体をつくって、これが全米ロータリークラブ連合会。これからは、奉仕の話はクラブの中ではやめておこう。奉仕の仕事は、この全米ロータリークラブ連合会という団体をつくって、そこにゆだねようじゃないかということになり、クラブは、専ら親睦、仲よくすることに専念しようということになりました。

奉仕ということは、世のため人のために何かをすることありますから、世のため人のためのクラブであれば、何もシカゴにだけにある筋合いのものじゃないだろうから、全アメリカの、そして全世界の地域社会にロータリクラブがあつてしかるべきだという考え方になって、そしてロータリーの拡大の理念が出てきたのです。したがって、親睦だけの世界から、奉仕を考え出して、ロータリーの拡大が出てきた。したがって、一番大事なのは親睦、それと同じぐらい大事なのが奉仕である。そして、奉仕から拡大が出てきたということです。

そのために、この起死回生の策とは一体何か。まず親睦を回復しなきゃならない。あの20世紀初頭に熱く燃えた原理の探求ですね。一番最初の25年間につくった、あの原理の探求のロータリーに帰らなきゃならない。ことに昨今、ロータリーは職業人の集まりであるにもかかわらず、職業の倫理が本当に退廃しております。これは、皆さん新聞でもよく御存じのところであります。もう嫌というほど、職業倫理の違反事件が出てまいります。

したがって、まず緊急の課題は、起死回生の緊急の課題は何か。職業奉仕というものの中核にある、職業倫理を高めなきゃならないんです。じゃあ、そのためには一体何が必要なのか。それは、先ほど申し上げました、ロータリーの組織原理の根幹となっておりました、一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則、なぜそれが大事なのか。その存在意義を再確認することであります。このことは既に、1959年から60年にかけての国際ロータリーの会長でありましたハロルド・トマスが、ロータリーモザイクというすばらしい本を書きましたが、その中で言っているんです。それは、1970年代の一番最後の章でそれを述べております。このハロルド・トマスは二、三年前に100歳の長寿を全うしましたが、この人が、ポール・ハリスの時代から歴代の指導者にじかに話を聞いてつくり上げたドキュメントで

あります。その一番最後の章が1970年代の章、そこで、ロータリーで一番大事なのは、一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則だということを言っています。そして、このハロルド・トマスの心配したとおりロータリーはこの二つの原則とも廃止してしまった。そのためにどうなったか。ロータリーは衰退の一途を走り出したのであります。

要するに、この二つの大原則の存在意義を再確認すること、一体なぜそれが必要なのか、これも先ほど申し上げました。2001年の規制審議会において、この原則が廃止されまして、一業多会員制、一つの業種から最低5人まで採ってもいいよという形に移っていきますと、その結果、一体どういうことになるのかといいますと、ポール・ハリスが最も大切に考えておったクラブの親睦、みんなが仲よくするという、このクラブ親睦が失われてしまうのです。

この親睦というのは、何億円出してもかえがたいほど大切なものです。金銭などではあがないきれないほど大切なものです。それは一体なぜか。一業多会員制では、たくさんの同業者がクラブの中に入っています。そうしますと、ポール・ハリスが当初掲げておられたロータリーの原点、同業者を排除して、一つの職種から一人だけ会員を選ぶことによって、クラブの親睦を守ろうという理想が失われてしまうのです。同業者がいるとなぜクラブの親睦が崩れるのか。私たちが生きておる資本制経済社会は、自由競争社会でありますから、会員は、同業者との関係では、まさに食うか食われるかの関係に立たれます。したがって、同業者というのは、競争相手がおりますから、ある種の危機感を持ちます。したがって、こちらがつぶれる前に、あいつがつぶれてほしいというようなわけのわからない感情のとりこにもなるわけであります。それから、また同業者というのは同じ業界にいますから、お互いにいいところは知っております。しかし、悪いところも汚いところも醜いと

ころも、お互に欠点を知り尽くしております。だから、あいつはおれの欠点を知つておるなどという意識がありますから、どうしてもお互に心を開いてつき合うことができないのです。このようにいたしまして、クラブの中に同業者がいるとお互に仲よくなれない。クラブの親睦が保てない。だからこそ、ポール・ハリスは1905年2月23日に4人で集まった一番最初のロータリーの会合におきまして、同業者だけは排除しようよといつて、一つの職種から一人だけ会員を探るという原則を探ったのです。これが実は、ロータリークラブという組織の原点でございました。このようにいたしまして、一業一会員制の原則は、クラブの親睦を保つための大切な原則であります。

ところが、この一業一会員制の原則の廃止は、事もあろうにR I の理事会の提案で廃止になつたのです。これは、ロータリーの原理の世界から見ていかがなものかと、私は思います。

一つ、極端な例を申し上げておきます。私は、今から大体10年ぐらい前に、800人以上の会員を持っております巨大クラブ、ヒューストンのロータリークラブの職業分類表を手に入れました。そしてびっくりしたんです。一つの職種に一人だけどころじゃない。例えば、弁護士という職業分類に、50人の弁護士が登録されていたんです。そして公認会計士の職業分類には、20名を超えて公認会計士が登録されておりました。ポール・ハリスが打ち立てた一業一会員制の大原則は、全く無視されているのです。したがって、この2001年の規定審議会によるこの原則の廃止の決定も、このR I の理事会が、このようなアメリカにおける現象、こういうものに押し流されたのではないかなとも思われるわけであります。このような状態では、あの20世紀初頭に原理探求のロータリーを打ち立てた、あのすばらしいロータリーは取り戻すことができないだろうと思います。

また、この一業一会員制と同じく、規則的例会出席の原則も、これもやはり親睦を守るため

の原則です。これは、ロータリークラブの会員資格に関する非常に重要な原則でありまして、4回連続して欠席したる者は、自動的に会員資格を失うというものであります。この原則は、シカゴロータリークラブの創立総会の場で、既に原則化されていたのです。ただ、この原則は、私たち法律家の目から見ますと、余りできがよくないのです。なぜかと言いますと、だれでも病気をしますと、4回連続して欠席することもあります。また、どうしても抜けられない用事のために、4回連続して欠席することもあります。それにもかかわらず、理由のいかんを問わない、とにかく4回連続欠席という、欠席回数だけによって会員資格を奪うというのは、社交クラブのようなファジーな団体の組織管理としては、窮屈に過ぎるのです。したがって、私たち法律家であればどうするか。そういう場合には、但し書きをつけます。4回連続して例会を欠席したる者は、自動的に会員資格を失う。但し、正当な理由のあるときは、この限りにはあらずと。こういう但し書きをつけて、その窮屈さを救済する、これが法律家の考え方であります。

そうしますと、このシカゴロータリークラブには、その当時、法律家がいなかつたのかといいますと、さにあらず。ポール・ハリスという、大弁護士がいました。彼は、そのときはまだ青年弁護士でしたが、後にアメリカン・デレゲイトとして国際会議にも出席した偉大な法律家であります。それにもかかわらず、どうしてこんな窮屈な規定をつくったのか。一切の例外を認めない、4回欠席したら、もう自動的に首だよというわけであります。

それは、どういうことかといいますと、当時は2週間に1回の例会でございました。したがつて、お互に仲よくなろうよなといって誓い合つておきながら、4回も連続して欠席することは、2ヵ月の間、例会に出てこない。そして、お互に安否を気遣ったり、いろんな助け合いをして、クラブを守り立てていこうと誓い合つ

ておきながら、2ヵ月も出てこない。こんな冷たいやつは、おれたちの仲間じゃないよ、やめてもらおうというのが、4回連続して例会を欠席したる者は、自動的に会員資格を失うという、厳格な原則を立てた彼らの心だったんです。これは何を意味するか。それほど、彼らはこの親睦ということ、そしてロータリーの例会というものを大切に考えていたんです。

そして、このようにいたしまして、ロータリーは、親睦のエネルギーを持って、世のため人のために動いていこうよというものなのです。親睦なくして奉仕なし。これは、ロータリーの根底に流れる思想です。したがって、21世紀のロータリーの未来の展望を切り開いていく鍵は一体何か。それは、まず一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則を回復することだと思うのです。

そこで、1905年から1927年に至る4分の1世紀、この22年間の初期ロータリーの原理形成の軌跡を顧みまして、そこから学び得るものは一体何かということあります。その一つは、職業奉仕という概念が、ロータリーの原理形成の一番最後、原理形成の最後の1927年にあらわれておる事実です。これは、我々が学び得る一つのキーポイントなのです。しかし、職業奉仕という言葉があらわれたのは、確かに1927年、ロータリーが始まってから22年もたった後でありますが、しかし、職業奉仕という原理そのものは、もう既に芽生えていたのです。言葉がなかっただけで。その職業奉仕の原理が芽生える原因は、既にロータリーが始まった1905年の一業一会員制と規則的例会出席の原則の中に見出すことができるのです。実は、この二つの基本原則は、職業奉仕の実践、さらにより根源的には、職業奉仕の中核にある、今日のテーマであります職業倫理の実践の基本前提です。したがって、職業倫理を語るには、まずこの二つの原則から検証しなければならないのであります。

今、この一業一会員制の原則と規則的例会出

席の原則が、職業倫理実践の基本前提だと申しました。それは一体どういう意味なのかということあります。

当初、ロータリーには、世のため人のためなどという考え方には、影も形もなかったのです。そこには、ただクラブの会員がみんなで仲よくして助け合おうという、まさに親睦だけの世界がありました。

さあ、そこでこの助け合うということの具体的な意味は一体何かと申しますと、ロータリアンは皆職業人です。したがって、自分の企業経営上の悩みを、クラブに持ち寄って知恵を出し合ったのです。「うちの会社では今こんなことで悩んでいるんだけれども、どうしたらいいだろうか」と相談をします。そうすると、当時は一業一会員制でありますから、会員は皆、所属する業界が違います。業界が違うということは、その業界の発想がみんな違うのです。したがって、他の業界の連中は、「ああ、その問題だったら、おれの業界ではもう解決済みだよ。こうしてごらん」と言って、その知恵を授けてくれます、ノウハウを授けてくれるのであります。そこで、ありがとうございますと言って、それを早速自分の企業に持ち帰って、それを適用して実践していく。

また、ある問題につきましては、だれもそれを知らない。そういうときには、三人寄れば文殊の知恵という言葉がありますように、みんなで衆知を集めて解決していったのです。このようにいたしまして、みんなが知恵を出し合い、アイデアを交換し合って助け合ったのです。したがって当時は、あたかもクラブというものが、経営相談所的な機能を果たすようになっていたのです。そして、この会員たちは、この助け合い運動によって、次第に豊かに栄えていったんです。

そしてさらに、自分たちが豊かになるためには、やはり自分のことだけを考えていたのではだめだ、やはり人のことも考えなければ、自分も見えることはできないではないか。そういうことに気づきまして、さらに、地域社会の人た

ちも豊かになるにはどうすればいいのか、このようなことを考え出したのです。そして、そこから、世のため人のためにする奉仕という考え方、すなわち言葉をかえますと、倫理の問題を考えるようになったのです。このようにいたしまして、企業経営上の発想の交換、Exchange of Ideaと申しますが、それから世のため人のための奉仕のための発想の交換、こういう発想の交換機能によりまして、やがて、ロータリークラブは1927年に至って職業奉仕というたぐいまれなる奉仕の概念を生み出すに至ったのです。ここから、職業奉仕という言葉が出てきたのです。このクラブ例会におけるアイデアの交換機能、発想の交換機能こそ、創立当初から持つておったロータリークラブの本質的な機能なのであります。このことは、当時のクラブの定款にも発想の交換、Exchange of Ideaという言葉が記されていたのです。ところが、いつ知らず、この発想の交換という言葉が、定款から消えてしましました。それは一体なぜか。このクラブ例会における発想の交換をするということは、ロータリークラブにあっては至極当然のこと、当たり前のことではないか。当たり前のことだったら、わざわざ書いておく必要はないだろうというので、発想の交換という言葉を消してしまったのです。したがって、ここでは言葉はなくなりましたが、しかし、現在もこの発想の交換という機能は、ロータリークラブの本質的な要素として、厳然として存在しておるということを忘れてはならないと思うのです。

我が国でも、昔、私がロータリークラブに入会したころのクラブには、まだこの発想の交換機能が残っておりました。私は、弁護士であります。その当時から、ある学校法人の理事長職を預かっておりました。当時は、労働運動華やかなりしころでありましたから、団交のノウハウやいろんな発想、そういうものをクラブへ行つては、実業家の先輩たちに教わったことがよくあります。このようにいたしまして、会員

の中で、いろんな自分たちの業界の発想の交換が行われていたのです。

しかし、皆さん御存じのように、今の皆さん方のクラブに、このような情景が見られるでしょうか。全く見当たらないと思います。したがつて、この発想の交換による例会出席の重要性ということを、今日の日本のロータリアンはどれほど認識しておるのでしょうか。答えは著しくネガティブであります。たくさんのロータリアンが例会には出でています。例会では食事をします、いろんな報告を聞きます。そして、卓話を聞いて帰っていきます。ただ、それだけです。中には、卓話も聞かないで、食事だけしてさよならと帰っていく人たちもいます。例会における企業経営上の知恵の交換、奉仕のための発想の交換など全く見当たらないのです。それどころか、ロータリアンに、自分の心を磨く自己研鑽、そして、みんなが集まってお互いに切磋琢磨してみずからを少しでも高めていこうという意識すらないようであります。このような状態では、職業奉仕はなかなか理解できなかろうと思います。

翻って、20世紀初頭のロータリアンたちはどうだったか、これは先ほど申し上げましたように、例会の重要性というものを強く認識をしておりました。自己研鑽、切磋琢磨による企業経営上の知恵の交換や、奉仕の発想の交換をしていたのです。その発想の交換という例会活動の中から、ロータリー的な企業管理論とでもいうべき原理を開発いたしました。そして、その原理を実践していくまして、1927年に至って、ついにその実践原理を職業奉仕と名づけたのです。そして、その職業奉仕の中核にあるのが、職業倫理なのです。

このようにいたしまして、その2年後の1929年、アメリカ経済社会を襲いました空前絶句の大パニックのとき、ロータリアンは一人も倒産しなかったといいます。これは、今の日本の社会と大違いであります。同じようなパニックが襲っております日本では、パニックの前から、

もう倒産しておるロータリアンがたくさん出ております。

シカゴの初期ロータリアンは一人も倒産しなかった。これはなぜかというと、クラブ例会における発想の交換によりまして、職業奉仕という原理を開発して、それを企業に実践をしていった、そして、その職業奉仕の中核にある職業倫理というものを実践しておった功德だと言われているのです。だからこそ、この一業一会员制の原則と、規則的定例会出席の原則は、職業奉仕、したがって、また職業倫理実践の基本前提なのでありますし、職業奉仕の実践というのは、まず毎週1回の例会に出席することから始まるのです。

今、1929年の経済パニックにおいて、ロータリアンは一人も倒産しなかったと申し上げました。一般的に申しまして、ロータリアンは発想の交換によりまして、企業経営上のノウハウを開発する。それを、みずから企業に適応するという職業奉仕を実践することによって、必ず自由競争の勝者になることができます。ただ、ロータリアンだけがパニックのときでも、自由競争に勝ち残ればいい、生き残ればいいというのではありません。それはロータリアンのエゴイズムというものです。したがって、ロータリアンは、みずから職業奉仕を実践して勝者になりますが、ただ、それだけではダメなので、勝者になった後で、あるいは勝者になる過程において、自由競争で敗れていった敗者の代弁者になって、企業経営上のノウハウを提供したり、職業倫理を提唱したりして、世のため人のために力を尽くさなければならぬのです。これが、職業奉仕の実践であります。

殊に、ロータリーは倫理運動と言われております。この倫理運動の視点におきまして、特に同業者の中から一人だけ選ばれたのがロータリアンですから、同業者の関係とか、それから下請の関係におきまして、常にこの職業倫理を提唱して、共存共栄の道を模索すべきことを説く

のです。これは、職業奉仕の大変大きな柱でありまして、ロータリーが倫理運動であることの面目躍如たる場面なのです。このために、ある人が言いました。ロータリーというものは、「人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った職業人の最もすぐれた倫理運動だ」と断言をしているわけであります。この考え方方が、まさにロータリーの核にある考え方なのです。

ちょっと横道に入っておきましょう。ノウハウを提供すると言いました。自分が会得したノウハウを自分で実践して、自分で栄えるのではなくに、それを自由競争に負けていった人たちに、それを惜しげもなく教える。そして、世のため人のための倫理、こうあるべきだよという倫理も提唱していく、これがロータリーの道だと言いました。

この話を聞いて、ある人は、ノウハウを人に教えちゃったら、おれの会社がつぶれてしまうと考える人もいるわけであります。しかし、ここで言っているノウハウというのは、そういう産業秘密的なことを言ってるのではないのです、これは誤解のないように言っておきます。そのノウハウというのは、例会で知恵を集めて、こうしたら成功するよというノウハウを打ち立てます。そしてそれが本当に成功するということを、ロータリアンみずからが証明しなければいけません。証明して、絶対にこれは成功するんだということを立証した上で、それを自由競争に破れた人たちに教えてやるのです。もし、それが立証されていないノウハウを教えて、それを適用した人が、倒産しちゃったら、これは世のため人のためになりません。だから、このノウハウというのは、成功することが完全に立証されたノウハウを人に分かち与えるのです。

そんな例があるのか。一ついい例がありますから、紹介しておきます。皆さん、御存じの1954年から55年にかけて、国際ロータリーの会長でありましたハーバート・ティラーという有名な人がいます。彼が、「四つのテスト」というもの

を開発したのです。

ハーバート・テイラーは、1932年、まさにこのアメリカの経済パニックの直後に倒産してしまったアルミ食器会社の再建を依頼されました。それで、ハーバート・テイラーはそれを引き受け、いろいろ考えまして、そこで「四つのテスト」というものを考案したのです。そして、これをみんなで力を合わせてやったら、必ず成功する。それで10年後には、その倒産した会社を一流の企業に育て上げたのです。見事に彼が考案したノウハウというものが、成功して、それは立証されています。

そこで、商工会議所の人たちは、ハーバート・テイラーのその業績を見まして、「テイラーよ、あなたはすごいことをやったね。何か秘密があるだろう、手のうちを明かせよ」と言ったのです。そこで、ハーバート・テイラーが、「実は四つのテストというものを考案して、これでみんなで力を合わせてやったんだ」と言いました。そうすると、商工会議所の人たちが、「ああ、そのノウハウは完全に君が成功したことによって立証された。そのノウハウはすばらしいから早速みんなに披露しよう」ということになって、その商工会議所傘下の全企業家に、そのノウハウを公開したのです。それを見ておりましたシカゴのロータリアンが、「テイラーのやつ、ロータリークラブで何もしないで、商工会議所であんなにすばらしいことをやってるじゃないかと。そのノウハウをロータリーに譲れよ」ということになって、ハーバート・テイラーが1954年にR I の会長になったことを契機にいたしまして、「四つのテスト」の版権が国際ロータリーの方へ譲られることになったわけであります。

これは、ロータリークラブでまずノウハウを開発して、それを同業者に適応し、それから商工会議所に紹介するという、この順序が逆になります。まず、ハーバート・テイラーが勝手に開発したものは、商工会議所で有名になっちゃって、それをロータリーの方へ逆輸入されたので

すが、しかし、原理は同じであります。ある人がつくったノウハウというものを、世のために人のために役立てていこうということなのです。これがロータリーの奉仕の実践のやり方です。この辺のところは、誤解のないようにお考えいただきたい。そのもとになるのは、やはり一業一会员制と規則的な例会出席、それが前提になつて初めてそういうことができたし、1929年のパニックで敗者を救うことができたのです。これを、今日のロータリアンは全然忘れてしまって、同じことをやって、今職業倫理が問題になって、一向に改まらないのであります。

このようなロータリーの核にある考え方、これを明確に文章として表現しているのが、実は、皆さんお手持ちの標準ロータリークラブ定款の第4条、「ロータリーの綱領」です。したがって、ロータリーの綱領を知らずして、ロータリーを語ることなかれと言われておりますように、綱領というものを、ロータリアンが身につける、知識として覚えるのではなくしに、身につけることが大切であります。

綱領というものは、頭で理屈で議論をするのではなくて、ロータリアンが、自分の血となり肉となるように、身につけるということが、ロータリアンであることの絶対条件なのです。したがって、ロータリークラブの綱領を知らなければ、ロータリークラブの会員ではあっても、ロータリアンとは言えないのです。これは、1923年の国際ロータリーの会長でありましたガイ・ガンディカーがそういうことを言っております。ロータリークラブの単なる会員と、ロータリアンとは別なのだということを言っております。これは覚えておいていただきたい。

このようにいたしまして、ロータリーの綱領は、ロータリーのまさに般若心経ともいいくべきものでございますから、ロータリアンとしては、大悟徹底的に理解していかなければならない問題なのです。

ところが、最近は綱領を知らないロータリアン

がふえてまいりました。これはまことに由々しきことです。ロータリーが衰退していきます。したがって、職業奉仕が衰退していくのは、至極当然のことなのです。昔のロータリー、戦前のロータリーは、こんなことは絶対にあり得なかつたのです。したがって、各クラブとしましては、新しい会員さんを迎えるときに、徹底的に、この点を教育するべきだと思うのです。

さて、冒頭に申し上げました、ロータリーがロータリアンの個人倫理を確立したのは、1915年のサンフランシスコの国際大会の決議であります。ということは、そのときに初めて国際大会の決議として、これが確立されたということは、クラブレベルでは、もうそのはるか以前から、個人の倫理の提唱が始まっていたのです。では、なぜ、ロータリーは職業の倫理というものを提唱し始めたのでしょうか。この点につきましては、非常に重要なところなのですが。しかし、今までほとんどこの点についての情報は提供されていないと思います。したがって、今日は少し詳しくお話し申し上げておきたいと思います。

実は、職業倫理の提唱につきましては、これは、既にロータリークラブが創立されました1905年の翌年の1906年、その春にドナルド・カーターという人物がありました。この人は、職業分類はアメリカ流にいいますと、特許専門の弁護士ですが、日本流にいいますと、弁理士です。

1906年4月、シカゴロータリークラブの2代目会長のアルバート・ホワイトの時代にフレデリック・ツィードという人が、ドナルド・カーターに、ロータリークラブはいいところだから入らないかといって勧誘をしたのです。このフレデリック・ツィードが、「ロータリークラブはお互いに助け合い運動をやって、みんな豊かになって楽しいよ。君も入らないか」と勧誘をしました。すると、ドナルド・カーターは、一業一会員制の話とか、助け合い運動の話を聞きまして、「確かに君たちは、お互いに助け合って、お互いに豊かになって楽しいだろうよ。しかし、一業

一会員制の原則、一つの職種から一人しか会員をとらないのであれば、クラブに入れない同業者は一体どうなるのか。また、職業人の集まりであれば、職業を持っていない一般地域社会の人たちはどうなるのか。私たちは、この地域社会に生まれて、地域社会に育てられて、地域社会でお世話になって暮らしている。このお世話になった地域社会に対して、何らの恩返しもない。何らの足跡も残さないで自分たちだけがお互いに助け合って、そして隆々と栄えて、やがてこの世を去っていく。そのようなエゴイズムの団体は、恐らく永続性がないだろう。私は二度とないこの人生を、そのようなエゴイズムの世界に置くことはできないよ」と言って、きっぱりと入会を断ったんです。これを聞いて、いたく反省したのがポール・ハリスであります。カーターの言うとおりだ。クラブの行き方を変えようよと言って、それから職業人の親睦のエネルギーを、世のため人のために使おうと考えるに至ったのです。

実は、このドナルド・カーターの刺激から出てきた、ポール・ハリスの反省というものから、ロータリーにおける奉仕という考え方方が生まれたのであります。これが、ロータリーにおけるいわゆる倫理性の芽生えであります。それと同時に、ロータリー拡大の系譜の始まりでもあったのであります。

なぜかといいますと、自分たちのことしか考えない、親睦だけのロータリー、みんなが仲よくする助け合いだけのロータリーでは、ロータリーの拡大の理念は出てまいりません。ロータリーというものが、親睦だけではなくて、世のため人のためのクラブでもあるということになって初めて、世のため人のためにいいことをするクラブだったら、何もシカゴだけにある筋合いのものではないだろう、これは全米の地域社会に広げよう、さらには、全世界の地域社会に作っていこうということになって、そこから、ロータリーの拡大ということが出てきたわけであり

ます。

要するに、1906年のドナルド・カーターの物語以前には、ロータリーに世のため人のための考え方、奉仕ということとか、職業の倫理という考え方は全くなかったのです。したがって、もちろんロータリーの拡大もありませんでした。ただ、そこには職業人の寂しさ、心の渴きをいやすために、ロータリークラブをつくったに過ぎなかったのです。それはまさに、親睦と相互扶助、助け合いだけの世界がありました。

このことにつきましては、後年、昭和10年にフィリピンのマニラで第3回太平洋地域会議、Regional Conferenceというものが開かれました。そこに、ポール・ハリスが出席しましたが、その出席する途中、ポール・ハリスが日本に立ち寄りまして、横浜で日本のロータリアンと会ったのです。そのときに、日本のロータリアンは、「あなたは1905年になぜロータリークラブをつくったのですか。それは、どういう気持ちだったのですか」と聞いたのです。そうすると、ポール・ハリスは、「自分がこの1905年にロータリークラブというものをつくったのは、格別の意味があったわけではないんだ、ただ寂しかったからだ」という有名な言葉を残しております。そのことによって、当初ロータリーには、奉仕などという考え方はなかったということが裏づけられると思うのです。

例え話をします。雷という字があります。草冠に雷と書きます。すなわち、大自然の雷のエネルギーが、花を咲かせるのです。したがって、雷というのは、地上に花を咲かせる空からの使者なのです。これと同じように、ドナルド・カーターの警告による刺激が、まさに雷のように、それまで親睦だけの世界に閉じこもつておったロータリーに、世のため人のための奉仕の花を咲かせたのです。要するに、1906年以前には、ロータリーに奉仕という考え方は全くありませんでした。世のため人のためにという考え方は、全く存在しなかったのです。ただ、職

業人の寂しさ、心の渴きをいやすために、ロータリーをつくったに過ぎなかったのです。それはまさに、親睦と助け合いだけの世界でありました。ところが、1906年に至りまして、ドナルド・カーターの外部的な刺激によりまして、ロータリーの世界に我らの親睦のエネルギーを世のため人のためにという奉仕の考え方が出てきたわけがありました。これは、それまでのロータリーからすると、全く異質の出来事でございました。

しかし、このことが実は、ロータリー発展の起爆剤的な機能を果たすことになります。すなわち、クラブの例会で企業経営上のアイデアを交換することによって、企業経営上のノウハウを開発してそれを交換するようになったのですが、それと同時に、1908年には世のため人のための奉仕のアイデアも交換するようになったのです。つまり、親睦だけの単なる仲よしクラブではなくて、世のため人のために役立つ人を育てようという、いわゆる倫理的な色彩が出てきたわけであります。そこで、企業経営について、職業人として為すべきこと、為すべからざることをお互いに誓い合っていこうという、いわゆる職業倫理の提唱をするようになりました。この精神的な機能が、先ほどの経営相談所的機能と相まって、会員たちの企業をますます栄えさせていったのです。

要するに、当初、親睦だけの集まりでございましたロータリークラブに、世のため人のための奉仕の考え方方が入ってまいりまして、企業経営が世のため人のためという倫理性を帯びるようになったのです。このようにいたしまして、ロータリーは1910年以降、世のため人のための企業経営、すなわち倫理的な企業経営を提唱し、そして、それを実践するようになったのです。まさに、ロータリー運動が倫理運動になったわけであります。これが実践されていたら、今のような、あんなぶざまな企業社会はできなかつたと思うのです。そして、これは、1915年以前でありますから、全部クラブレベルの問題であります。

そして、このクラブレベルにおけるロータリアンの個人倫理を集大成したものが、あの1915年のサンフランシスコの国際大会において「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」、いわゆる「ロータリー道徳律」11カ条を採択することになったわけであります。これが、ロータリーにおける職業倫理の確立の問題でございまして、それ以後、ロータリーは、その運動の核として、まことに高潔な職業倫理を提唱してきたのであります。

その後、我が国において、この職業倫理の提唱受け継いだのはいつか。それは、1928年、あの経済パニックの1年前の昭和3年であります。その昭和3年に創立されました満州の大連ロータリークラブに古沢丈作さんという人がいました。

彼は、ロータリーに入会するや否や、いち早く、ロータリー思想の源流を探求いたしまして、1915年のこの道徳律を発見いたしました。そして、この道徳律を日夜お経のごとく熟読玩味をいたします。そして、完全に自家薬籠中のものといたしまして、この11カ条の道徳律を、今度は5カ条の日本文に書き改めたのです。これが、有名な1928年、昭和3年の「大連ロータリークラブのロータリー宣言」という職業倫理宣言でございます。そして、この大連ロータリークラブのロータリー宣言が、戦前の日本のロータリアンの職業倫理のバックボーンとなっておったことは、紛れもない事実なのであります。

では、戦後の日本ではどうなのかといいますと、東京浅草ロータリークラブの「玩具職業人倫理宣言」がございます。最近では1983年、私が所属しております兵庫の2680地区が、地区大会特別決議として採択した、「ロータリー職業訓」という倫理宣言がございます。これは実は、私が原案を書いております。最も近くは何かといいますと、1995年6月28日、仙台青葉ロータリークラブの「職業倫理宣言」があります。これらはいずれも職業奉仕の原理に基づいた提唱であ

りますが、これをクラブが宣言した例というのは非常に少ないのであります。

以上が、職業倫理というものの提唱されてきた歴史というか、あらかたのところであります。普通は、これから、では職業奉仕の根本原理は何かという話に入っていくわけでありますが、それをしゃべってると、とても時間が足りませんので、これはやめておきます。

要するに、職業奉仕というのは、一言で言いますと、職業を倫理的に営むこと、倫理的な商売を営むことであります。それを実践しますと、おのずから職業は栄えていくよということを言うわけであります。

では、具体的には、一体どのようにすれば、職業を倫理的に営むことになるのか。職業を倫理的に営むというのは、一体どういうことなのかということがあります。これもちょっと長くなりますが、これもちょっと長くなりますが、これもちょっと長くなりますのでやめておきます。

ただ、ちょっと重要なところを言いますと、このRYLAに2回ほど来てもらった渡辺和子先生、ノートルダム清心学園の理事長、あの方がいい話をなさっている。それで、しかもこれはロータリーの職業倫理、それから職業奉仕の根幹に触れる話なので、ちょっと御紹介はしておきましょう。

これは、渡辺和子先生は、今からちょうど1カ月足らず前、昭和11年2月26日に2・26事件が起こりましたが、お父様が時の教育総監でありまして、陸軍の青年将校に暗殺されたのですが、そのお父様と一緒に書斎におられて、お父様を1メートルと離れない目の前で銃殺されてしまった。渡辺和子先生は、そのときはまだ小学生だったそうですが、そういうことから、カトリックの信仰に入られたのかなと思っていたのですが。このRYLAに来てお話を聞きますと、そうではないとおっしゃってました。

要するに、修道女になってアメリカのボストンに行かれたときの話です。夏の暑いある日に、食堂で約130人ぐらいの夕食のためにお皿とナイ

フとフォークをテーブルにセットする仕事をしておられたのです。そのとき、先輩のシスターが、渡辺先生に、「シスター、あなた、今何を考えていますか」とお尋ねになりました。先生は、まあ、面倒くさいと思われたのか、「何も考えてません」とお答えになりました。そうすると、その先輩のシスターは急に厳しい顔になりまして、「あなたは時間を無駄にしていますよ」と諭されたそうであります。先生は、自分の耳を疑ったとおっしゃっていました。その先輩に、「なぜ」と先生が聞いたところ、「同じお皿を並べるんであれば、やがてその席にお座りになる人のために、なぜ心の中でお幸せにと祈りながら並べないですか。何も考えないで、ただ漫然とお皿とナイフとフォークを並べていくというのは、時間を無駄にしていますよ」と諭されたそうであります。

渡辺先生は、「私は今まで、いかに効率的に仕事をするかということを教えられてきましたが、時間に愛を込める、仕事に愛を込めるということは初めて教わりました。時間に愛を込めるここと、お皿は同じ早さで、同じ姿で並びます。しかし、目に見えない大切なものが込められるか、込められないかによって、この世の中は大きく変わること。それは一つには、私がお幸せにと祈っておいたお皿で召し上がった方は、必ずお幸せになるという信仰であります。ただ、それよりも私にとって大切なことは、私が救われたということ。つまり、私にとってつまらない仕事はなくなったということ。お皿並べというつまらない仕事、雑用だと思っていた仕事が、実はそうではない。雑用というのは、自分が仕事を雑にしたときに、雑用になるということを教えられました。だから救われたのは私です。つまらないと思ってお皿をおく。お幸せにと祈ってお皿を置く。外から見た限りは全く同じに見えます、かかった時間も変わらない。しかし、仕事の量は同じでも、仕事の質は変わっている。ということは、その人自身が変わったということです」と述懐なさっておられました。

お皿を並べるというつまらない仕事に愛を込めるように、自分の仕事に愛を込める。私たちのすべての行動に愛を込めるということは、言いかえれば、ロータリーのいう倫理的な生活をしなさいよということなのです。これは、人を育てる基本前提であります。佐藤千壽さんが人を育てることについて、やかましく言っておられますね。大事なところであります。このように、ロータリアンは、企業経営においても、この心の問題というものを大変重視しなければならないのです。したがって、この渡辺先生の言葉は、ロータリアンの企業経営の基本的なあり方というものを示していると思うのです。仕事に愛を込める、時間に愛を込める、そのことなくして倫理的な人間を育てることはできないだろうと思うのです。渡辺先生は、お皿を並べるという単純な行為に、幸せを祈るという目に見えない大切なものが込められるか、込められないかによって、世の中は大きく変わると言われました。このことは、私たちロータリアンが肝に銘すべき言葉だと、私は思うのです。

このことについて、私の考え方を少し補足をしておきます。これは、私たち一人一人の心の問題なのです。一人一人の心の中にあるものによって、この世の中は大きく変わっていくのです。一つの例を申し上げます。

皆さん、御存じのように1989年にソビエト連邦が崩壊いたしました。あの原因は一体何かといいますと、それはソビエトの国民一人一人の心の中にあった、本当に小さな小さな不満であります。まさに、この心の中にあった小さな小さな不満が積もりに積もって、あのモスクワにおける民衆の暴動に際して、一気に爆発をいたしまして、ついにソビエト連邦という、あの巨大な主権国家を崩壊させてしまったのです。このように、国民一人一人の心の中にあるもの、それが世の中を大きく変えていくのです。これは、渡辺先生が、お皿を並べるというつまらない行為に幸せを祈るという目に見えない大切なもの

が込められるか込められないかによって、世の中は大きく変わるとおっしゃったことと全く同じことなのです。

要するに、私たち、一人一人の心の中に宿るもの、それが大事なのです。実は、イギリスでは、「ロータリーは人間の魂のあり方の問題である」とも言われておりますように、ロータリーの職業奉仕というのは、心の問題を重視する。優れて、精神的な奉仕なのです。まさにロータリー運動が、倫理運動と言われる所以なのです。

このことについてのロータリー的な意味をもう少し補足しておきます。皆さん御存じのように、毎年、R I の会長が、自分の個人的な所信の表明として、ターゲットというものを出してきました。これは、たしか1949年ホワキンシビルスという会長が初めてだったと思いますが。このターゲット、今ではターゲットと言いませんね。皆さん、御存じのようにテーマと言っております。何故かと言いますと、もともとは、R I 会長の個人的な所信表明でした。しかも、それ以前はこんなものはなかったのです。余計なことを言うな、ロータリーには綱領があれば十分だから、それ以外のことは一切言いませんでした。だけど、この会長は、自分が会長になった一つの記念みたいなもので、何の拘束力もないんだけども、一応言っておこうといって、ぼそつとつぶやくようにしゃべったのが、このターゲットの始まりだったのです。

ところが今では、いつの間にかロータリーが権力化しまして、この個人的な所信表明であるに過ぎないターゲットに、R I 理事会が、理事会決議の裏打ちをつけまして、それをテーマと称して、あたかもそれが全世界のロータリアンが実践しなければならないようなイメージを持つようになっていったのです。これは、ロータリーの堕落の第一歩です、私に言わせたら。本当はこんなもの要らないんです。このごろはまた地区のテーマなんて言い出したから、ますますおかしくなってきた。最近は、クラブのテー

マをやっておる会長もあります。どこまで堕落するのかなと思うのですが。もう果てしがりません、これも仕方がありません。倫理の衰退が原因なのです。

話を戻します。この自分の個人的な所信表明としてのR I の会長ターゲットの中にもいいターゲットあるのです、くだらないのもありますけども、本当にすばらしいターゲットもある。ロータリーの核心をついたターゲットがあります。私が一番大好きなターゲットは、1960年から61年のR I の会長のエド・マクローリンという人のターゲットであります。どんなターゲットかといいますと、「You are Rotary」あなたがロータリーですよというターゲットであります。具体的にはどういうことかと言いますと、「ロータリーというのは、R I のことではないですよ、ロータリークラブのことでもないですよ、ロータリーというのは、あなた方一人一人のロータリアンの心の中に宿っておるもの、それがロータリーなんですよ」これが、「You are Rotary」なのです。このように、マクローリン会長は全世界のロータリアンに呼びかけたんです。

実を言うと、全世界のロータリアンに呼びかける権限などR I の会長にはないのです。なぜかと言いますと、R I 、即ち国際ロータリーの会員は、各ロータリークラブなのです。クラブに所属しているロータリアンは何の関係もないのです。何の関係もないものに対して、呼びかけるというのは、うぬぼれるなど私は言いたい。全然関係ありません。だけれども、ロータリアンの方のレベルが低くなってきてるから、言われたらなるほど、かしこまりましたとなって、それに従っているのが今のロータリーなのです。これもロータリーの倫理の衰退の一つであります。

まあ、余計な話はどうでもいいといったしまして。とにかく、これはいいターゲットです。私は大好きです。この発想は、実は英米法的な発想。アメリカの法律、イギリスの法律をひっくりめて、

英米法といいますが、英米法的な発想なのです。この英米法的なものの考え方によりますと、国家というものは、政府のことではありませんよ。また、国会のことでもありませんよ。国家というのは、国民一人一人の心の中に宿っているものですよ、と考えるのです。すなわち、英米法の考え方では、国家というのは、国民の総体だというのです。

しかし、皆さん、おかしいと思うでしょう。国家というのは国民の総体、国民の全体だと言つても、例えば国民が1億人集まつたって、それで国家と言えるでしょうか。それは烏合の衆に過ぎません。こういう人間の集団を国家という一つの統一体にするためには、単に人間が集まつただけではだめであって、それに主権とか統治権とかいうプラスアルファがなければ、国家とは言えないのです。したがって、英米法に対立するヨーロッパ大陸法の考え方によりますと、国家の成立要素は、三つあります。

まず第1に領土。これは、英米法でも領土は必要です。その上に人民、国民がいます。しかし、それだけでは烏合の衆だから、それに主権とか統治権とかいう統治組織がなければ国家にならないのです。しかし、英米法は、国家というのは、領土があって、その上に国民が1億人集まつたらそれが国家だというのです。

これは一体、どういう考え方かといいますと、英米法というのは、国家というものは、もともと1億人の国民の一人一人の心の中に国家というものが宿るという発想なのです。すなわち、一人一人の国民に国家は分属すると考えるわけです。この英米法の考え方方が、アメリカで生まれたロータリーの根底に流れる思想なのです。したがって、この思想を引き継いだ日本国憲法も国民主権といっておられます。それから、主権在民という思想。これもこの根底にはこの英米法的な考え方があるわけあります。

我が国では、実は明治の先覚者の福沢諭吉先

生が早くから、この英米的な考え方をとっておられたのです。

このように、英米法は、国家というのは、一人一人の国民のことだという立場をとるわけであります。したがって、一人一人の国民が理性の命ずるところに従つて、自分の徳性を磨いていきますと、その徳性の総和は、やがて国の政治に反映いたしますと、國家の徳性も上がっていいくと考えるわけであります。國家の徳性が上がりますと、あの忌まわしい戦争も予防できるだろうというのが英米法的な考え方なのです。

実は、ロータリーもこれと全く同じであります、一人一人のロータリアンが徳性を磨く、心の磨くことによって、業界とか地域社会、そして国際社会の徳性が磨かれる。そして、やがて世界中が明るくなるだろうと、マクローリン会長は呼びかけています。マクローリン会長の、「You are Rotary」。ロータリーというのは、あなた方一人一人のロータリアンの心の中に宿るものだという考え方方は、この英米法的な考え方と全く同じだということがおわかりになったと思うのです。このように、徳性を磨く、心を磨くということは、先ほど渡辺先生の話にもありましたように、私たち一人一人がお互いに幸せを祈り合うことなのです。そして、私たちロータリアンが、そして世界中の人たちが、お互いに徳性を磨き合う、幸せを祈り合う世界、そのような世界を実現することが、実は、私たちロータリーの理想、いわゆる奉仕の理想なのです。だからこそロータリーは、倫理を提唱するのであります。まさに、ロータリーが倫理運動であると言われておる所以なのであります。

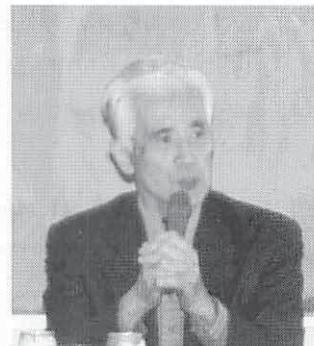
今日はこの程度で、話というのは長ければいいという問題じゃないので。5分間でもいい話があるし、しゃべればしゃべるほど悪くなる話もありますから、もうこれで切り上げたいと思います。

御清聴、ありがとうございました。

人生 — いかによりよく生きるか —

阿部 志郎 先生

神奈川県立保健福祉大学名誉学長



プロフィール

● 1926年 東京都に生まれる

● 最終学歴

東京商科大学（現 一橋大学）卒業
米国ユニオン神学大学院へ留学（2年間）

● 主な経歴

明治学院大学助教授を経て、
横須賀基督教社会館館長 (1957～2007)
神奈川県立保健福祉大学学長 (2003～2007)

● 主な著書

「地域福祉の思想と実践」（編著） 海声社 1986年
「ボランタリズム」（講演集） 海声社 1988年
「福祉の哲学」 誠信書房 1997年
「社会福祉の国際比較」（編著） 有斐閣 2000年
「キリスト教と社会福祉」の戦後 海声社 2001年
「地域福祉のこころ」（講演集） コイノニア社 2004年
「もうひとつの故郷」 燦葉出版社 2008年

○司会 定刻よりは若干早いんですけれども、ただいまから始めたいと思います。皆さんおはようございます！昨夜は楽しまれましたでしょうか？今日は今からですね、少し頭を切り替えていただいて、皆様方に一生懸命勉強していただきたいと、そのように思います。お昼までお付き合いよろしくお願ひしたいと思います。それでですね、本日皆様方に最初の講義、聞いていただく先生をご紹介したいと思います。皆様方のパンフレットでは10ページに略歴を載せてありますけれども、阿部志郎先生です。現在は神奈川県立保健福祉大学の名誉学長、昨年までは学長をされておられたそうです。プロフィールといたしましてはそちらに書いてあるような経歴をお持ちの方でございまして、特に横須賀のキリスト教の社会館の館長を非常に長くお勤めになられまして、人生経験、社会経験等も非常に豊富な立派な先生でございます。どんな話を聞かせていただけるか、我々も非常に楽しみにしております。著書等もたくさんあります。

またこのセミナーが終わって帰られたらですね、こういった本を一度見つけていただいて、またお読みいただいたら幸いかと思います。それでは阿部先生、よろしくお願ひいたします。

○阿部先生 おはようございます。ちょっと声が出ないもんですから、マイクを使わせてもらいます。子供たちにこういうお話をしました。友達がうちに遊びに来た。二人で遊んでいると15時になって、お母さんがおやつの心配をする。戸棚を開けて探すがお菓子がない。やっと缶カンの底に1枚だけおせんべいを見つけた。それをくれた。困るだろう？友達と2人いるのにおせんべい、たった1枚しかないんだよ。どうする？簡単だよ、おせんべい割ってあげればいいだろ？1枚のおせんべいを半分に割って分ける。半分こ。半分こっていうんだよ。半分こすればいいんだよ。でもね、手でおせんべい割るとどうしても大きい方と小さい方になってしまうだろう？先生はね、子供のとき、大きいのを先にとって、小

さいのを妹にやったんだよ。妹はいやな顔しました。君たちはそれをしたらだめ。君たちは小さい方を先にとりなさい。大きいのを友達にあげてごらん。友達喜ぶよ。友達が喜んでくれたら、君たち嬉しいだろう？半分こしようね。

アジアにバングラデシュという貧しい貧しい国があります。毎年洪水があるんです。あるとき大きな洪水になって、国の半分が水に浸かってしまったんですよ。そこで世界からボランティアが現地に行きました。家を流され、着る服もなく、食べるものもありません。救援物資をトラックに積んで、現地に行きます。お米やタオルや石けんや歯磨きや日用品を袋に入れて1袋ずつ渡すんです。子供たちが取りに来ました。1列に並んで順番を待ちます。1人1袋ずつもらいます。先生ならぬ、その袋をもらってどうするかというと、くるっと後ろを向いて人にわからないように、そっと袋を開けておいしいお菓子は先にとってポケットへ隠しますよ。バングラデシュの子供たち、誰一人その場で袋を開ける子がいません。大事そうに抱えてうちへ帰りました。家族と分かち合うためです。それで子供の袋に角砂糖が1個だけ入った。それをたたいて、家族みんなで甘さを味わったんです。君たちも、お菓子でもおもちゃでも、いや自分の力でも、半分こしあうね。家族や友達と。そういう話したんです。そしたらそれを聞いていた1人のお母さんが、半分こっていう言葉初めて聞きました。今、諸君も知らないでしょう。死語ですね。半分こした経験がない。一人っ子、兄弟喧嘩を知りません。第一、今は子供のおやつをあげるお菓子がうちにないということはないんですといわれまして、はあ、時代に遅れたなと思いました。

私たち、いや皆さん、半分こできますか？こないだテレビで見たんですが、今アフリカで国連が150万食、学校給食をしている。映ったのはナイジェリアでした。ナイジェリアの子供が学校でお昼に給食をもらう。それを一箸二箸食べて、ふたをしてうちへ持って帰る。それが家族5人の

1日の食糧です。いやあ、健気な子供だなと思いました。我慢して一箸しか食べない。持って帰る。

これは新聞に載った記事ですけれども、日本の。ある家でドタバタ騒動が起こった。近所の人が110番した。パトカーがとんできた。そしたら28才と26才の兄弟が1杯のラーメンをめぐって取組みあいをした。皆さんはナイジェリアの子なのか、ラーメンの子なのか、ですよね。私は子供に小さい方を先にとりなさいよと言ひながら、私できない。毎朝妻とバナナ半分ずつ食べる。私大きい方をとるんですよ。小さい方を妻に渡してる。できないですね。

なぜ大きい方をとりたいか。小さいのを自分で先にとれないか。理由は2つ。1つは、日本で1番有名な泥棒というのは、石川五右衛門ということになっています。五右衛門捕らえられて、京都三条河原で釜煎りの刑に処せられた。釜の中に投げ入れられた。これを五右衛門風呂というんですね。五右衛門子供を連れていた。男の子。昔ですから、罪が子供にも及んで子供も一緒に投げ込まれた。五右衛門37才。男の子7才。五右衛門は人の子の親ですから、なんとか子供は救いたいと願ったに違いない。釜の中で両手で子供を高く差し上げていた。釜の焚かれた火がだんだんだん熱くなって、もう我慢できない。ぎりぎり決着の場面を迎えたとき、五右衛門は助けようと高く差し上げていたその子を底に敷いて、その上に立ち上がった。井原西鶴が書き残している。これが偽りのない人間の姿ですね。私たちは最愛の子って言いますよ。でも人間にとつて誰が最愛の存在であるというならば、自分自身です。自己愛です。自分がかわいい。人よりも自分。だから、人にあげたくないですよ。全部自分で独り占めしたい。そういう欲求が起こつてまいります。自分がかわいいから。もう1つは、欲張りだからです。私は食いしん坊です。人にあげる前にまず自分で食べたい。大きい方とりたいんです。

ドイツのミュンヘンの動物園に行くと入り口

に大きな字が架かってる。犬は傷ついたとき薬をくれた人を噛まないと書いてある。犬は、傷ついたとき、薬をくれた人を噛まない。それが犬と人間の違いである。痛烈でしょ。犬は餌をくれる主人に対して従順です。でも人間は世話をなろうが恩を受けようが教えを受けようが、自分の利益に反するときには相手に吠え、噛み、殺すんですね。これが人間なんですね。

世界戦争が終わって、皆さんのおじいさんやおばあさん、食べるものなかった。戦後最初の総選挙にある政治家が掲げた公約は、鰯1匹に米3合という言葉です。せめて1日鰯1匹分の栄養を摂りたかった、皆さんのおじいさんやおばあさんは。このキャンプに来てから昨日、今朝、何十四分の鰯の栄養を私どもは摂れるようになったんでしょうかね。エンゲル係数という言葉を聞いたことがある方はいますけれども、私たちの収入の中で食べることにどれくらい使うかと。割合をいう。1ヶ月の家計費の中で食料にどれくらい支出するか。これが50パーセントを超えると貧乏と経済で言いました。皆さんのおじいさんおばあさんたちはどれくらい食べるために使ったかというと、75パーセント使った。貧乏なんていふものではない。窮屈状態でした。それでいて摂れたカロリーは1,300カロリー。皆さんが食べる半分以下ですよ。そういう貧しさに耐えた。隣近所でお互い様、御裾分けと言いながら支えあった。貧乏に耐える哲学をみんな身に付けました。

そういう時期が戦争が終わってほぼ10年続く。10年経って昭和30年代に入って1955年以降、日本の経済が復興を始めました。経済成長です。その節目は、私は1958年、昭和33年だと思ってます。昭和33年という年に東京タワーが建った。333メートル。東洋で1番高い建物だった。長嶋茂雄が背番号3を付けて巨人軍に登場したのはこの年。全日空が墜落して出た犠牲者が33名。なぜか3という数字に因縁のある年でした。この昭和33年に日本は初めてアメリカに車を輸出した。30台。小

型車を持っていきました。この日本車がハイウェイに乗れない。ヨタヨタヨタヨタ入って危険でした。ハイウェイ乗ってもすぐに故障した。無理ありません。昭和33年には日本に高速道はまだ1本もない。走った経験ない。アメリカ人何と言ったか。持った車がトヨペット。アメリカ人がトイペットだと言いました。トイ、おもちゃじゃないかと言って笑った。それから年とともに車に改良を加え、輸出台数を伸ばして、アメリカに1年240万台車を輸出する年が来ました。飛ぶように売れるのです。あまり売れてアメリカの自動車産業を脅かし、貿易摩擦という事件に発展をして日本は自主規制をしました。評判の悪い30台の車から飛ぶように売れる240万台へと発展をするのに要した時間は20年でした。20年という時間の短さ、スピードの速さを、経済成長の上にわざわざ高度と付け、高度経済成長と表現した。しかし今考えるとスピードが速すぎました。時間が短すぎました。無理が起る。矛盾が生じる。それが今の私たちの社会に影を落としています。

それから10年後、昭和43年に霞ヶ関ビルという最初の高層ビルが建ちました。そこで開かれる会議に行くために地方から出てきた友人と待ち合わせて霞ヶ関ビルに入った。エレベーターが階数によって3段階に分かれました。それまで1番高い建物が東京駅の近くにある丸ビルという建物ですが、どれに乗ってもエレベーターが同じだった。霞が関ビルができたら分かれた、エレベーターが。一番奥のエレベーターに乗って33階に行くですから33というボタンを押したらスープとあがっていく。途中で友人がエレベーターで腰を降ろした。気持ち悪い。降りてしばらくソファで休みました。スピードが速すぎて体が伴わないんですね。私は1961年という昭和36年に始めてジェット機に乗った。国内便にはまだ飛んでませんでしたが海外便にジェット機が飛んでた。ジェット機に乗って中耳炎になった。翌年1962年にまたジェット機に乗りました。また鼓膜を破った。以来、私聴力落ちてるんで

すよ。私の体がついていけない、ジェット機の高さ速さに。そういう、このギャップといいますか、矛盾を感じさせられました。

こうして経済がだんだん成長していったのは日本が工業化に成功したからです。瀬戸内と本州側見てごらんなさい。ズラーッと煙突ばかりじゃないですか。工業化です。工業化をするためには労働者が必要です。働き手がいる。あまり急速なので労働者が足りない。そこでどうしたかというと、中学を出たばかりの少年少女たちを集団就職といって工業圏に連れてきて働いてもらつた。その中学を出たばかりの少年少女を、金の卵、月の石、ダイヤモンドと呼んで、もう貴重品のように扱つた。若い労働力ですから。日本の産業が教育に要求を出しました。2つある。1つは、正常の勤務だけでなく残業、夜間勤務に耐えられる体力を持った子供を育てよ。もう1つは、技術革新をしてきますから知能の高い子を世に送れ。そこで教育どうしたかというと全国でアチーブメントテストを実施した。そして偏差値を設けました。受験は輪切りにした。平均以上の子を育てよというのが教育目標。この平均以下の子供たちを当時落ちこぼれという嫌な言葉で呼びました。ここから子供たちの間に新しい問題が起こってきた。いじめ、校内暴力の嵐が日本中の学校を荒らしました。いじめ、今でも約10万件ある。校内暴力もほぼ5万件あります。不登校。昔は登校拒否といいました。今不登校の子供が12万7千名います。アジアのタイにいった日本の調査団の報告によるとタイには不登校の子がない。いない理由は進学競争がない。第2にのびのび遊べる自然がそこらじゅうにある。第3、親が子供をしっかり育てる。第4、地域が子供を守ってる。第5、タイでは仏教が生きてる。仏教国です。大変考えさせられる報告がありました。虐待、相談件数4万件を超えてました。障害、自殺と、子供たちも苦しんでいる。こういう子供たちをどうしたらいいのか。これは若い皆さんたちにぜひ真剣に取り組んでほしい

い問題です。

こうした様々の急激な変化が社会に起こつてまいりました。私は神奈川県の横須賀という町に住み働いているんですが、その横須賀の町で高度経済成長期に大変困った教育問題が起きました。中学生が学校に弁当を持ってくる。その弁当に箸を付けてこない生徒が出てきた。箸なくして弁当をどうやって食べるかというと弁当箱にかぶりついて食べる。この数がどんどんどんどん増えて私の町の中学校25校、みんな広がつていきました。日本人の1番好きなお芝居というのは忠臣蔵ということになってまして、12月に入るとテレビみんな忠臣蔵に変わってきます。忠臣蔵に花見の茶屋という場面がある。大石内蔵助が茶屋遊びをし、酒に酔いしれ、人が足蹴りにした食べ物を四つん這いになって食べるという場面です。内蔵助が敵討ちをする意志を持つていないことを表そうとしました。皆さんのおじいさんおばあさんたちはどんなにひもじくても人が足蹴りにした食べ物を食べた経験ないです。誰もしませんでした。人間としてのそれはプライドでもあります。子供たちが弁当箱にかぶりついて食べる。まるで動物が食べるようになりますので教師たちはこれを犬食いと名づけました。犬が食べるようになつて食べる。人間は動物と違います。動物は食べて命を永らえることが生きる目標です。人間はどんなに貧しくても食べることは、パンという問題は目的になり得ない。それを手段にしてより高い人生に向かって歩もうとするのが人間です。ただし動物はそのときに腹がいっぱいになればいい。それ以上の餌は決して求めない。人間は、欲望は無限です。いくらあってももっと欲しい。この経済成長期にアジアで日本はいろんな商売をしました。なんと言われたか。エコノミックアニマルと軽蔑された。動物と同じじゃないかと、言われた時期がありました。こういうこの経験を私どもは戦後、してまいりました。パンがだんだん充足をされて豊かになりました。世界2位と言われるまでに。

今は、私どもは豊かです。豊かになって私たちは幸せなんでしょうか？パンなくして生きることはできませんから、パンが満ち渡るということは幸せの大きな条件のはずです。今私どもは皆さんのおじいさんおばあさんと違って食べることに困らないでしょう？で、幸せですか？

あなたは今幸せですかと、聞いて回った国際調査がある。幸せだと答えた人の1番多かった国がメキシコでした。86パーセントの人が幸せだと言った。80パーセントを超えてるのは全部開発途上国です。開発途上国食べることに苦労してる。子供たちは何が欲しいか。生きていたい。これですよ。食べて生きていきたい。なのに幸せだと答てる。日本はどうかっていうと、今幸せですかと聞かれて幸せだと答えた人は26パーセント。富が有り余ってるのに幸せを感じてない。内閣の調査によると不安、いろんな不安がありますよね。育児も不安、老後も不安、社会保障不安、経済不安。その不安を抱えてる人は69パーセントというのが内閣の調査です。不安です。幸せでない。青少年調査がある。青少年の皆さんに調査した。将来は明るいですか、暗いですか？将来皆さん希望がありますか？将来は暗い、どちらかといえば暗い、両方あわせて49パーセントです。半分の人が将来に対する希望を持てずにいるっていうことでしょ。不安ですね。この不安を私どもはどうやって乗り越えてゆくのか。日本人は宗教を信じてない人がほとんど。日本人の中で宗教を信じている人は26パーセント。

ブルネイに行きましたときに入国管理カードに宗教欄ってある。あなたはどういう宗教を信仰しますか。神道とか仏教とかイスラムとか書く。この宗教欄になしと書くのは日本人だけです。日本に宗教ないのかと言われましたよ。日本人以外はみんな宗教欄に書くそうです。日本人はなし。なしというのも1つの立場です。なしと答えている人々が本当に宗教心ないのか。正月三箇日に初詣に行った人がこの正月9千937万

人。皆さんも行ったかもしれない。宗教を信じてない、でもちゃんと初詣に神社やお寺に行く。東京に湯島天神ってあります、これは学問の神様ですから受験生が行く。受験生が行って提げる絵馬の数が4万って言いました。4万の絵馬架かってる。大学の入学試験見てますとたいてい2つか3つかお守り持ってる。本人が得たわけではないかもしれない、それこそおじいさんからおばあさんからもらったかもしれない。自分を超えた世界に祈りをささげずにはいられない。ただし、いろいろの願い事を持って初詣に行く。お賽銭出します。その願い事は家内安全、商売繁盛、無病息災、大学入学、就職という風に自分の願いですよね。このときに人の幸せを願い、世界の平和を祈れる人はどれだけいるのか。それが私は実情だと思います。でも自分を超えた世界に対して謙虚に祈りをささげるという生活を日本人はほとんどみんな持ってる。それによって不安を乗り越えようという努力をはらってるということだと思います。

さて、半分こするのは難しいと言いました。皆さんの周りに半分こできる人いるんです。半分こして小さい方を先にとる人がいる、皆さんの周りに。インドにこういう民話がある。小さい国の王様に対して隣の大國の王様から質問が寄せられた。これに答えられないと何が起こるかわからないという危険を感じました。その質問は象の目方をどうやって量るか。ちょっと考え付かないでしょ？象の目方どうやって量るか。家来を集めてきました。誰一人答えられない。そしたら1人の家臣がもしこれから老人を殺さないと王様が言ってくださるならば答えを聞いてきます。王様は以後老人を殺さないと約束をしました。その家来はひそかにかくまってきた老母のところへ聞きに行きました。老母は簡単じゃないかと。まず象を船に乗せなさい。沈んだところに線を付けときなさい。象をおろして石を積みなさい。その象の線まで石を積んで石をおろして石を量ればそれが象の目方だよ。なるほど

そうですよね。それで王様は大国の王様にそう回答することができました。引き続いてもう1つ質問、難問が寄せられた。2頭の馬がいる。1頭は母親、1頭は子供。体格はまったく同じ。見分けがつかない、外から見たら。この2頭の母と子の馬をどうやって見分けるか。また老母に聞きに行きました。老母がこう教えた。2頭の馬の間に餌を置きなさい。先に食べるのが子馬。母親は決して先に食べない。これでやっと王様は難を逃れることができたというインドの民話がある。お母さんというのは半分こする。私の母親、実は香川県です。金比羅様です、今の琴平町というところで生まれました。香川県に育てていただいた。妻は神戸。私は遠い青森の系統で、ずいぶん距離がある。私の母親も子供が食べ残したものを見てました。それが母親ですね。決して自分から先に大きいものをとることはお母さんはしない。

テレビにプロフェッショナルという番組があるでしょ。私の流儀って言いましたかね。帝国ホテルの総料理長が登場しました。帝国ホテルにはコックさんだけで400人いる。そのトップ。フランス料理の専門家でした。その総料理長が1番おいしい味は何ですかと聞かれました。難しいフランスの料理を挙げるのかなと思いましたら、一言、おふくろの味ですと言った。おふくろの味は腕や技で作るのではありません。家族に対する心で作るからおいしいのです。

特別養護老人ホームで90になる男性ですけれども、毎朝窓を開けて外に向かってお母さんと叫ぶ。大きな声で。近所でも有名です。お母さん。うちへ帰れば戸口でお母さんが両手を広げて迎えてくれるんでしょう。お母さんは私どもにとってそういう存在でしょ？かけがえのない存在ですよ。赤ちゃんが産まれてお母さんが胸に抱いて、乳をふくませます。昔全部母乳だった。それしかありませんから。今は母乳と人工栄養と半々。アメリカは70パーセント母乳です。スウェーデン、90パーセント母乳です。母親、

赤ちゃんを抱いて乳をふくませる。美しい姿ですね。この授乳。これが看護師、保育士、栄養士という専門職の語源です。皆さん駅や空港で授乳室あるでしょ。ナーサリーって書いてありますよ。看護師、ナースです。おなじ言葉です。母親の慈愛に満ちたサービス、それが専門職に求められる。こういうことなんですね。母親に愛される。赤ちゃん産まれて、お母さんが、お父さんが、兄弟が、おじいさんおばあさんが、赤ちゃんに声をかけるでしょ。皆さんなんてかけますか？韓国ではカケング。言葉が決まってる。私の知ってる限り韓国だけですね。私どもはそういう言葉はない。だから、いないないばあって赤ちゃんに言葉をかける、これが人と人の対話の始まりです。この対話が膨らんでいく中で子供はすくすくと大きく育っていくのです。親に愛され、近所の人に愛され、親戚に愛され、先生に愛されて、子供は成長する。子供は愛されるべき存在です。愛されなければいけない。しかし中には愛されない子がいます。さっき言ったような虐待、親が離婚をして行き場がない子。乳児院といって赤ちゃんを預かる施設があります。乳児院で先日聞きましたらカフェネットで産まれた赤ちゃんが来てましたね。母親が16才、おばあさんが35才、まあびっくりしました。35才でおばあさん。私の施設に来てる子供もいます。母親が刑務所に入ってる。父親の方は若くて少年院に入ってる。その子預かってます。愛されてない。愛されるべき子供の中で愛されない子供がいる。その子どうするか。54年前にマリアンヌちゃん事件が日本で起こりました。父親がスウェーデン人、母親がアメリカ人、マリアンヌという女の子と3人で在住してた。不幸にして両親亡くなった。マリアンヌが1人取り残された。で、この子は日本の制度では児童養護施設に預かることになる。スウェーデンからマリアンヌを引き取りたいという申し出がありました。まだ条約ができてませんで話がこじれて裁判になった。そこに参考人として出廷したをスウェーデンの領事が言った。スウェー

デンには1人の孤児に養育を希望するボランティアが100名います。これで決まりました。そうなりました。1人の愛されない子にその子を育てたいというボランティアが100名いるという国はどういう国かと思いました。私どもで極端に言えば100人の子供に対して1人ボランティアがいるかいないかという時代だったからです。今どうかといいますと親から離れて施設で生活をせざるを得ない子供が4万人いる。里親制度ってありますよね。テレビでも有名になりました。あの里親が引き取ってる里子がようやく3,600名になりました。まだまだです。四国の徳島の出身に賀川豊彦という人がいました。皆さんもう聞いたことない名前かもしれません。大宅壮一という有名な評論家が20世紀を代表する日本人10名挙げろといわれれば賀川が入る。3名、絞られても賀川が入る。もし20世紀を代表する日本人に1人といわれれば私は賀川を推すと言った。それほど特に世界で有名な人でした。この賀川が皆さんの歳に結核でして、どうせ長くない命ならば自暴自棄に陥らず自殺の誘惑に駆られず、その命を隣人に捧げようと決心をする。そして神戸のスラムに入っていました。そのときから今年がちょうど100周年で、神戸でも出身地の鳴門でもいろいろな行事が行われております。賀川は4才で母親、5才で父親が死にました。養父に引き取られた。その養父が15才で倒産した。姿のこと、いじめられました。東京に進学希望を出して反対されて縁を絶たれた。賀川は家族に愛されなかつたんです。愛されない子でした。その愛されない子供が誰よりも人を愛する人になってる。賀川は誰に愛されたか。家族に代わってマヤスとローガンという宣教師が賀川豊彦を愛してる。病気の賀川と一緒に寝た。結核になって漁村の物置の筵で静養してるとマヤスは2晩一緒に血の始末をしながら賀川と寝てる。賀川は他人に愛された。家族に代わって愛するボランティアがいた。それが市民社会です。愛されない子がいれば地域で守ろう。ボランティアがそれをしよ

う。それを市民社会と申します。そういう市民社会を私たちも作っていきたいですね。

私たちは人を愛することができない。自分だけを愛する。けれど人と一緒に生きていかなければ生きられません。社会的動物ですから。人と支えあわなければ生きていけない。その支えあう相手を自分しか愛せない自分がどうやって選ぶか。愛の対象を限定するんです。長崎の出島、初めて行きましたとき、出島に入っていったら左側に案内板がありました。少し離れた右側に英文の案内板がある。往復して読み比べました。おんなじことが書いてある。1ヵ所だけ日本文になくて英文にない言葉を発見しました。出島が作られた由来は混血児の発生を防ぐためであると書いてありました。今両方とも取り扱われてます。でもあれは真相かなと思ったんです。血が汚されることを極度に私どもは嫌ってきた。今どうですか？世界に1200万人の難民がいる。その難民を毎年開発国が受け入れてます。去年アメリカ14,000人。フランス13,000人。カナダ11,000人。小さなニュージーランド、小さい国ですよ。ニュージーランドが1,200名の難民を去年受け入れてます。開発国の中で受け入れが1,000人以下という国が2つだけある。1つがロシア14名、もう1つが日本31名。日本に受け入れてもらいたいという申請は今でも約1,000件たまってる。でも受け入れない。私たちは極めて消極的ですね。戦争前、日本は植民地を持ってました。その植民地で親から授かった名前を捨てさせて日本名に変えさせました。話している言葉をやめさせて日本語を話させた。朝鮮で1,000、台湾で400の神社を作って神社参拝を強要しました。日本人と同じになれ、日本人との違いは認めない、これを同化政策と申しました。ディファレンスという英語は違うという意味です。ディファレンス。私どもの違うという意味は異質であるだけでなくて「違う！」といえば拒否でしょ？拒否を含んだ言葉ですよ。違うという言葉は嫌い、同じという言葉が好きです。皆さんの今の交際範囲考えてもそうじゃな

いですか？中学のときの仲間、高校の同じクラス会、あるいは部活で一緒にした人、会社の飲みに行く仲間という風に、同じ人と付き合ってるのが私どもの生活です。もう1つ何が嫌いかというと、弱いことが嫌いです。強いことが大好き。私の町の小学校の調査では子供たちが将来何になりたいか。女の子はお花屋さんにケーキ屋さんです。かわいいですね。男の子の第1位はプロサッカー選手、第2位はプロ野球選手です。あの鍛えぬいた強さに子供たちがあこがれる。昔もそうでした。私の世代は男は二十歳になると兵役検査を受けなければなりませんでした。兵隊の数が足りなくなつて私は19才で兵役検査を受けました。兵役つかなきゃなりませんので私は自分で志願して行った。その兵役検査を受けると戦争にかり出されます。内心行きたくないでしょ、兵役検査に合格したくない。不合格になると社会はその人に仕事を与えなかった。合格すると赤飯を炊いてお祝いをしてくれた。そして戦争に行って負傷する。負傷した兵隊を私どもの時代は傷痍軍人と呼んだ。私よりも1世代前の方々の中に知っている言葉、私は知りませんでした。知ってる言葉がある。廃兵さんという言葉です。親から子供のときお前は廃兵さんだと叱られた。役立たず、ろくでなしがいう意味です。負傷した兵隊のことを廃兵と呼んだ。廃兵とは捨て

る意味です。軍人でさえ戦闘能力の強さを失うと、国は捨てた。障害を持った子供たち、今みんな学校に行っています。学校に行けるようになったのは昭和52年です。戦争が終わって32年間、体の悪い子に教育なんかいらない、無駄だと言つて学校にあげなかつた。弱さを持つ人を拒否をしました。弱さは嫌いです。強いことが大事にされますから。その強さに憧れますね。

しかし時代は変わつきました。皆さんの時代、

まさにグローバルでしょ。アメリカで金融が破綻すると世界中じゃないですか、今。経済はまさにグローバルになりました。グローバルの時代にこれからどう生きていくか。大事なことはまず共生です。共に生きる。共生とは強さを持つ人も弱さを持つ人も、嫌いな人も好きな人も、感じの悪い人も、みんな一緒に生きなきゃならない。それに何が必要かというと違いを恵みの印として理解することです。違いを喜ぶ心をこれから子供たちに育てて欲しいと思います。違いを喜ばなければグローバル化できません。共に生きていくのに何が必要か。私は大学で新しく入ってきた新入学生たちにまるで中学生に言うようなことを言った。諸君にとって大事なことは何か。第1、挨拶をしなさい。第2、約束を守りなさい。第3、身だしなみを整えなさい。第4、微笑みを絶やすな。大学生にその話をします。



この瀬戸内の対岸の、広島県江田島という島があります。昔、海軍の士官を養成する学校がありました。若者の憧れの的でした。その海軍兵学校では、教科の必ず5分前、作業であれ授業であれ、始まる5分前にはちゃんと座って姿勢を正す。これが教育でした。もう1つは玄関に大きな鏡がそこらじゅうにあり、外に行くときには必ず服装を自己点検させられた。身だしなみは外の問題でなく、それは心の問題でもあります。挨拶はアイヌの言葉でイランカラブテっていう。あなたの心に触れさせてくださいっていう意味です。挨拶は通り一遍の意思表示ではなくてあなたの心に触れさせてください。挨拶という漢字の意味は心を開いて相手に近づく。相手に近づくんですよ、おはようございます。食事をするとき、いただきます。言いますね。食べたらごちそうさま。こんな挨拶する国私知りません。我々はみんないただきますって言って食べます。いただきますというのは親に対する感謝、労働に対する感謝もあります。しかし何より動植物の命をいただくことに対する感謝です。命をもらう。動植物の命をもらって自分の命を支えられるから深い感謝です。近頃学校給食で保護者たちの中から給食費を出してるのにいただきますという挨拶はやめさせろという声が非常に高まってる。違うんですよね、意味が。命をいただくんですよ。これが子供たちにとって命の最初のふれあいです。

命は生命です。この生命を1日でも永らえさせる。医学の使命です。医学にとっては死は敗北です。そして家族とか地域という生活もある。両方ともライフです。ライフは命であり、生活である。でもライフは何にも増して人生です。生まれてから死ぬまで喜怒哀楽に満ちたその人生をライフという。そのライフ、何に支えられどう生きていかなければならないのか。禅語にちょっと難しいですけれども、生也全機現、死也全機現って言葉があり、私どもが生きてゆく、それはあらゆる努力をはらって生きてゆくん

ですね。あらゆる人間の器官が動員されて死に導かれるという意味なんです。命は与えられる。与えられたものに対して私どもは最高の努力をはらってその命を守り、支えていく責任がある。この命が今の社会では軽んぜられてまいりました。でも命は守らなければなりません。最後まで。人間は歳をとると老衰をします。もう私今そうです。人生に上り坂があって下り坂もある。森鷗外がこれから下り坂を降りていくって言いました。若いときから働き盛りの成人になりますけれどもいつの間にか頂に達する。社会的には定年っていうときです。昔定年は55才だった。人生50年時代の取り決めです。今定年ようやく60になりました。でも人生は今80才を越えてくんです。特に女性、86才です。この頂に達してからあと10年、20年、30年生きなければならないのに生き方がわからない。日本の社会が経験したことがないからです。

私が一緒に働いたアメリカの、私にとって親のような先生がいました。その方が亡くなってアメリカで葬式がありました。アメリカの葬式で、行きましたらみんな平服ですよ。女性は赤いドレスなんかを着てる。黒い服を着てたのは牧師と私と2人だけでした。で、その葬式の席上で1人息子が父親の葬儀に来てくださった方に挨拶をしました。その息子が、今日は父親のセレブレーションですと言った。おかしいなあと思いました、私は。私の知ってるセレブレーションではお祝いという意味です。なんか特別の意味があるかもしれないと思って、後で字引きを引きましたらやはりお祝いという言葉しかない。父親の葬儀の席で1人息子が今日はお祝いですと言った。私どもの常識に反する。それは天国に凱旋するお祝いというキリスト教の信仰を表したんだと思います。その人生観には下り坂を想定しない。

ホスピスがあるでしょ。ホスピスがなぜ生まれたか。私ども日本の年寄りの欲求はぼっくり死にたいが1番強いんです。理由は痛み苦しんで死

にたくない、寝たつきになりたくない、家族に迷惑をかけたくない。極めて日本人らしい心情から、ぼっくり死にたい。ヨーロッパ人はぼっくり死にたくない。それは老いたら自分が歩んできた人生をゆっくり振り返りたい、友達に別れを告げたい、家族に感謝したい、何より天国に行く準備をしたい。だからぼっくり死にたくない。ここからホスピスが生まれた。ホスピスは死ぬところ、死を待つところではない。最後まで人間らしく命を保ち、生き抜くところがホスピスです。下り坂はない。上り坂に向かって命の限り最後まで一足一足と歩き続けなければならぬのが人間の人生です。

社会で生活をするためにはルールがあります。ヨーロッパでこのいろんなルールがあります。羊が道を横切るときには人も車も必ず待たなければいけない、夜22時以降車のドアをパターンと閉めてはいけない。そういう目に見えないルールがあります。私どもは社会の秩序を守る。このルールを身に付けるところが実はキャンプです。キャンプはルールを守る。私53年前、54年前にこの余島のキャンプに来てる。まだ電気はありませんでした。下の浜辺で泳ぐと夜、夜光虫、綺麗でしたね。その夜光虫の間を縫うようにして泳いだ。実に美しかった。そういう思い出があります。この余島のキャンプで障害を持った子供のキャンプが始まった。障害児が跛とか片端とか、要するに半人前の人間として軽蔑をされていたその時代に、障害児を大事にしようとここで日本最初のキャンプが始まった。これが京都に行き東京に移り全国に広がっていきました。このキャンプの生みの親が明後日講義する今井先生。開拓者ですよ。このキャンプで子供たちがいろんなことを学びます。起床時間も決まるでしょう。食事も一定の時間に食べなければならない。重い荷物を持っていたらそれを持ってあげる。こういう様々な社会の生活をしていくルールを子供たちはキャンプで経験をいたします。このキャンプから私もその一人ですけれどもたくさんの今

井門下が育ち、非常に大きな活躍をしています。国内だけではありません。世界中で今活躍をしている。キャンプは半分こを学ぶところです。半分こしなければ友達と付き合えない。こういう分かち合いがキャンプの生活の一つだと思います。

このRYLA、よく31年続いてると私思います。ロータリークラブが主催をしておられます。ロータリークラブを日本で最初に作った人が米山梅吉という人でした。今でもこの米山の記念基金で継承されます。米山梅吉は体は大きくありませんでした。私よりは背が低い。でもちょっと小太りの大変貴重のあるおじいさまでした。この米山梅吉が三井銀行で働いた。三井銀行で米山が出納してるときにお金を支払った。お札で。そしたらお客様がそれを検算をして、君一枚多いよって返した。そしたら米山がうちの銀行に間違いはありません。また突っ返して持って帰ってもらったり。米山はその分弁償して。銀行の信用を昔の商業人は大事にした。これは米山の大変有名なエピソードです。42才で常務になり、アメリカから信託業務を導入し三井信託銀行を作りました。社長になりました。社長を辞めて三井各社を糾合して今でいう企業支援財団を作った。三井報恩会といいます。この三井報恩会は結核の対策をし、疲弊した農村の救済をしました。同時に全国に地の果てのようなところに13あったハンセン病の療養所を米山は全部回りました。そしてハンセン病の療養所に三井は3,000ベット寄付をした。そういう人でした。この米山が小学校を作りました。奥さん、はるっていいまして、米山さんよりか何年か長生きを、奥さんなさいましたけれども、奥さんが幼稚園を作った。その費用、全部自分で投じた。当時のうわさですけれども三井銀行の退職金100万円と、覚えてます。100万というと今の10億とか20億っていうお金です。そのお金を使って小学校を建て、幼稚園を作った。教職員のサラリーは米山が書画、骨董を売って支払ってる。寄付を一切仰ぎません

でした。持てる半分でなくてすべてを捧げてる。米山は一小学校長として世を終えた。私はこの米山に憧れた。私がああいう米山のような経済人になりたいと思った。でも途中で心変わりし、今のような職業に変わってしまいました。その米山がロータリークラブを作った。だからRYLAの精神は私は半分だと思います。

この余島に来て皆さんお感じになるでしょう。高村光太郎という詩人が、東京に空がないって言った。東京に空がない。太平洋の南の島から東京に来た人が、東京の印象聞かれました。聞く人は答えを想定してる。新幹線、地下鉄、高速、雑踏、高層ビル、IT、いろいろあるでしょ。そしたらその南の島から来た人は、東京では星が見えない。素晴らしい言葉ではないですか。東京で空なんか見てたら危ないです。車にはねられますよ。でも余島に来たらどうですか。空と海と緑、自然があります。ここは自然と共生をするところです。私は皆さんに空を見て欲しい。子供たちに氷が解けたらどうなると聞くと水になると答えます。正解。私は今週の初め、岩手県の山の方に行った、まだ雪でした。北国の子供たちに同じ質問をすると違う答えが返ってくることがある。氷が解けたらどうなる。春が来る。答案はバツです。でもロマンがあるでしょ。夢がある。希望がある。それを持って欲しいんです。戦争中、日本に天気予報ってなかった。明日は雨か曇りか一切予報できない。軍事機密でした。戦争が終わって初めて天気予報が復活をした。ところが気象台、各地の測候所、ネットワークがまだできていない。機械もろくなものがないです。全部軍部で使ってましたから。予報官が明日の天気の予報に困った。台長のところに相談を行った。明日の天気わかりません、どうしましょうか。台長が藤原咲平という有名な天文学者でしたが、藤原咲平台長がわからなければ空を見よ、と言いました。皆さん辛いとき、苦しいとき、空を見てください。人生は喜怒哀楽、四苦八苦という言葉がありますように、苦しみですよね。辛

いです。多いです、辛いことが。私の町のお寺の住職が、日蓮宗ですがこの冬、百日荒行というのに参加されました。こもるんですね、100日。60数名のお坊さんばかり。話聞きましたら、今日朝5時、寝るのは23時、その間7回、水ごおり。真冬ですよ。水をかぶる。朝は座禅をし読経をする。食事は1日2回、朝と晩。一膳の粥と一汁の味噌汁、それだけ。その住職、まず眠いんですよって言いました。そして、お腹が空く。腹ペコですと。広場の食堂に行って配膳されてる、そこへ来てみんなが見渡す。どの茶碗に米粒が多く入ってるか、どの味噌汁に具が浮かんでるかを見分けて、その席が取り合いになる。毎日取り合いましたと。30日、40日、50日と、取り合いました。それが不思議なことに60日を過ぎるころから、風邪をひいた仲間が出ると、みんなでお粥を持ち寄る。最後はっこり笑って別れました。と話をしてくれました。辛い、でも耐える。聖書のことばに、艱難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む、と書いてある。苦しい、しかし耐える。耐えることによって自分自身を深め、人を高め、お互いに新しい希望を見出す。それがこれから皆さんの長い人生です。どうか辛いとき空を見てください。星を眺めてください。月を仰いでください。私は今でも月を見ると、あっ、ウサギが餅をついてる。今でもそう思う。餅をついてるウサギはメス。だからオスのウサギが地上で踊ってると私は習いました。今でもそう思うんです。ロマンです。3泊4日のこの余島、皆さんにとってロマンの経験でしょ。この自然を楽しんで、そして自然と共に生き、仲間と友情を交わしながら、天を仰いで、心を豊かにして、帰って欲しいと思います。それが私はRYLAの趣旨だと理解をします。

話はここまでにしますけれども、この後の時間どうしましょう。皆さんの中に何か私に物を申したいとか、文句を言いたいとか、あるいはこんなこと聞きたいっていうことがありますか？あればその時間取りますけども、なければもっ

と楽しい、キャンプですから。一緒に歌を歌おうという企画があるようです。

○司会 どうですか？せっかくの機会です。受講生の皆さん、何でも先生に聞いてみたいことがありましたら。はい、どうぞ。

○D班大住 本当に長時間ご丁寧な説明と感銘をすごく、ありがとうございました。D班の大住と申します。阿部先生がおっしゃってた中でいろいろと引き込まれる部分とか感銘させられる部分とかあったんですけれども、その中で1つ、人生について、生きるということについて、自分自身も深く考えておりまして、これから生きていくにあたってですね、阿部先生がこれからご自身どのようにして今を生きてらっしゃるのか、そういうものを1つお聞きしたいと思っております。

○阿部先生 いい質問ですねえ。この質問は、あとで今井先生にしてください。私よりも長く生きて、しかも私よりもはるかに積極的で、そして元気ですよ。私よりも適格者はあちら。どう生きていきたいかを一言だけ言いますとね、高見順っていう作家がいます。高見順がこう言った。生きて枯れる、枯れて生きる、立派に枯れるために盛んに生きる。人間はいつか枯れなければなりません。いつか死ななければなりません。でもそれを受動的でなしに、立派に枯れるために盛んに生きることができたら素晴らしいだろうなと、そう思っています。

毎朝毎晩私体操しています。町内の公園の清掃のボランティア、月2回。子供の見守り隊といって、登校下校するときに子供を見守る。私は年4回だけ。ボランティア活動を少ししています。刑務所。刑務所に51年ボランティアをずっと続けてきました。これはもう少し続けられるかなと思っています。そして毎週キリスト教の教会の礼拝に行ってます。それによって私の精神とい

うか魂の安らかさを獲得します。以上。

○司会 ほかに何かここは聞いておきたいということはございませんか？ロータリアンの方でも結構です。どうぞ。よろしいでしょうか？はい、大江先生どうぞ。

○大江 とても感慨深いお話をありがとうございます。今回カウンセラーをさせていただいております、A班のカウンセラー、大江と申します。お話の中で1つだけちょっと違うんじゃないのって思うことがあったのでそこだけ。私、実は医者をしております。医療の中では死んだらそれは敗北だと、おっしゃったんですけども私はお年寄りの方とかを亡くなっているのを何度も立ち会っています。若い方でもいろんな病気で亡くなるとき。そりや、医者として亡くなるのは敗北だという気持ちがあった時期もあったんですが、長いことやっているとこの方の最期をどのように、それこそおっしゃったように最後まで立派に生きていただく。それで結果として亡くなったら、それはこういう亡くなり方をして、この方が良かったなって思ってもらえるような死の演出をしたいなというか、そういう風に思えてきてるんです。だから若い医者は死んだら敗北だという風に思うのかもしれないけれども、多くの医師はそういう風には思っていないと思いますので、そこだけちょっと訂正というか、どこかに入れといいていただきたいと思いました。

○阿部先生 さすがにロータリーには素晴らしいお医者様がいらっしゃいますね。こう言っていただきたいんです。今までの医学は私は明らかに死を敗北として捉える。それを裏側から見れば最後まで治療を尽くす、そういうことであると思います。ただ、これからぜひ考えて欲しいのは、治療はキュアです。キュアはキュレイという言葉から参りました、その語源は実は牧

師っていう意味です。心のケアをするのが、元々の意味でして、私は医者がこれから必要とされるのは、患者に寄り添うことなのではないかと。癌の宣告をするならば宣告をしたそのときから患者と一緒に闘って欲しい。私も病院の仕事をしましたけれども、病院で多くのドクターは患者が死んで、家族に労いの言葉、慰めの言葉をかけられない。ご臨終ですで、終わり。靈安室に下りて挨拶なさる医者は非常に少ない。況や、患者が亡くなった葬儀に出席をしてる医者の数も多くない。形はいろいろあるにせよ、最後まで治療に全力を挙げ、その過程で患者にしっかりと寄り添って、そして患者のケアまで考えていただける医者がこれから育ってくださったらしいなあという気持ちを持っています。

○司会 よろしいでしょうか？はい、どうぞ。マイク、そちらの方でまわしていただけますか。

○亀井 先生は先ほど五右衛門のことを、子供が苦しまないで支えていて、もうこのあたりで最後、自分の下に敷いた。これは自分のためだとおっしゃったんですが、私はある人から聞いたのでは、子供に苦しい思いをさせないために最後に一思いに殺したと、だから五右衛門は子供を思っていたんだと。いかがですか？

○阿部先生 確かにそういう解釈、成り立つと思いますね。ただ、井原西鶴は私が申し上げたような解釈を下した。それを受け売りしたわけですけれども、親の愛はおっしゃるとおり一様ではありませんから、子供が不憫でやはり親と一緒に生かしたほうがいいという判断が働くかもしれませんね。これは謎として残ると思います。

○亀井 2670地区のガバナーノミニー、亀井義弘でございます。ありがとうございました。

○司会 ありがとうございました。続きまして森田さんですね。

○D班森田 この度D班のカウンセラーをしております森田康子と申します。先生の言葉一つ本当に重く聞かせていただきましてありがとうございました。それで私の質問ですけれども、授かったこのかけがえのない人生を最後まで人間は生き尽くさなければならないと思うんです。それで、それには人生の最大の先輩である先生は何が一番最後まで生き尽くすには必要だとお思いでどうか？

○阿部先生 私はキリスト教信者なもんですから、言葉としては信仰という言葉しかないんですね、今は。それは人によっていろいろ可能だと思います。何を自分の人生の宝としてきたか。そしてその人生を全うするについて次の世代にどうしても残していくきたいものは何なのかを考えますと、人生は、まず第1に誰に愛されたか。第2に誰を愛したか。第3に何をしたか。第4に何をしようとしたのか。そのしようとしたことはやはり死ぬ前に語り継がれていかかるといいのではないかという思いがあります。

○D班森田 どうもありがとうございました。

○司会 井本さんどうぞ。

○D班井本 D班のカウンセラーをしております井本でございます。僧侶でございます。今、記録の件がありますので、百日の行の件なんですけれども、朝の時間が違いますので。朝、2時半起きです。朝2時半起きで、3時から、3時、6時、9時、12時、15時、18時、最後23時の7回の水がございます。それがずっと百日間続くんですけども、11月の1日から、2月の10日までの百日間。そういう形で時間が少し違うということだけ、言わせていただくのと。私、今先生が教誨を、刑務所の

教誨ですね、されてるということでお聞きしたんですけれども、その点で今の若者というんですか、気質が変わったというのを感じてるんですね、最近、特に。刑務所へ入って入所してくるので、皆さんご存知のように、今、定員オーバーしてるところ結構あるんですね。教誨するときに少し個人情報とまではいかないんですけども資料を目を通しますとね、刑務所へ入って何をしたいかって書いてあるんですね。そうすると1人、独居房に入りたいって書いてあるんですよ。要はいかに今入ってくる若者っていうのは、更生とかそういうものじゃなくってホテル感覚で入ってきてるっていうのが多いんですね。要はシングルルームへ入れて欲しいと。昔は人数が多いがゆえに牢名主がいたように必ずシングルルームへ行きたくないんですよね。それが今はやはり普段からシングルルームを望んでるというのが、私気になって仕方ないんですけども。いかがなもんでしょうか？どういう捉え方をすればいいかっていう、いかになぜここまで変わってきたかなっていうのが、私自身の今疑問に思うところなんですけれども、いかがなもんでしょうか？

○阿部先生 私よく存じませんけれども、私のところにあります刑務所で申しますと、もう個室がほとんどなくなりました。人員オーバーですから、複数で入れざるを得ないのが実情です。ただ、私たち人間の生活を考えましてね、私どものふれあいは3つある。それは1人。自分1人、1人ぼっちという形態。第2は2人、ほかの人と2人でいる形態。もう1つはみんなっていうことです。私どもの場合にはこのみんなという集団の規制が大変強い、意識としても。だからみんなで渡れば怖くない赤信号となる。旗を見て人についていけばいい、あの人がいくら出せば私もいくらと、こう決めていく。そういう生き方があるわけでしょう。1人というのは私どもは苦手です。私そうです。子供のときから1人できちん

と生活をしたっていう経験がない。家族が一緒にいて、友達がいて、軍隊へ行けば戦友がいて、だれかがまわりにいる。そうすると1人できちんと自分自身を独立させて自立することが大変苦手。でも1人という個性をきちんと磨いていくことは、皆さんこれから必要だと思います。もう1つは2人。2人はドイツ語でイッヒウントウドゥっていう。我と汝という関係は基本です。夫婦も、友達も同じ。我と汝という、その心と心のふれあいをぜひ若いうちから興して欲しい。それによって1人という自分の自立を自覚させられまし、それによって2人という連帯が築かれる。1人、2人、みんなという、これを自分の生活の中で調整をする。自分で選択をすればいい。自分の中で選択をして1人でいたいときは1人、2人のときは2人、みんなでいるときはみんな。それぞれの生活の仕方を自分で覚えていくことは必要だろうと思います。でも1人で本を読んだり、散歩したり、さっき言った空を見たりっていう、それは人間の生活に欠かすことできません。で、その自立した人と自立した人が2人を作っていく。その2人がみんなへと広がっていくわけですから、ぜひその基本を大切にしていただければと思います。

○司会 ありがとうございました。ほかに何か。はい、どうぞ。班名とお名前をお願いします。

○D班宮里 D班の宮里です。今日は貴重な時間、ありがとうございました。僕、ボーイスカウトのリーダーをやっていまして、キャンプとはルールを守ることとおっしゃっていたのは共感できるんですけども、半分こを学ぶことっていうのは、他者を大事にしろっていうことによろしいのでしょうか？そこらへん具体的によろしくお願いします。

○阿部先生 同感です。ボーイスカウトの精神と一致していると思いますよ。いいですねえ、

ボーイスカウトのリーダーですか。こう見渡して嬉しいのは女性が多いことですね。ロータリーは、そもそも男性の団体だった。男性以外、入れなかつた。アメリカで裁判になり、敗れて女性に開放した。で、日本でもだんだん女性が増えてきて、今質問する方も女性の方が積極的でしょ。若い方もよろしくどうぞ。男性をリードしてあげてください。

○司会 どうですか、女性の方。なにか。はい、どうぞ。

○C班平田 C班の平田です。今日は大変素晴らしいお話、ありがとうございました。先ほど日本人は宗教欄になしと書かれると言わされていて、ご自分はクリスチャンだと言われていましたけど、キリスト教のどういうところに自分が共感されたんでしょうか。それとあと、なぜキリスト教を。日本でしたら神道や仏教があるじゃないですか、もとから。ああいうものにはどういう感情を持たれているのか、ちょっとお聞きしたいな、と。

○阿部先生 私ねえ、両親がクリスチャンだった。だからごく自然にキリスト教というのに入ってきた。だからそういう意味ではあんまり自覚的なクリスチャンではない。それをずっと続けてます。でも、歳をとってくるとね、私は神道に今惹かれないけれども、仏教には惹かれる。で、仏教の勉強も少ししてます。宗教は、一人一人の主体性の問題ですから、自分が信仰を選ぶ。キリスト教か神道かをね。それは魂の問題。キリスト教でいうと救いって言う、罪と救いって言います。救いは、サルベーションと言いますが、それは健康という意味です。体の健康な状態に導かれる、そこに救いがある、こういう一面があると思いますね、日本人ほど特定の宗教に属していないのは少ないですね。ま、日本の特色でしょう。ただ、その宗教が社会を

ある意味では作ってきた。スマトラ沖の地震がありました。あの地震のときのテレビの報道ですけれども、地震で村が壊滅をした。村人が何をしたかというと、まずモスクをみんなで作った。礼拝所ですね。そして村人がそこで礼拝を捧げた。その人たちが散って協力しながらそれぞれの家を作ったっていう、テレビで番組がありました。だからそこにおいては宗教が共同体を作ってきた。日本もそういう面がある。私のいる神奈川県で言いますと、昔鎮守の森が2,850あった。今30ぐらいしかない。潰したの。鎮守の森を壊して工場を建て、住宅にし、駐車場に変えた。儲かりますよね。でもようやく最近になって環境問題が言われだして、やはり鎮守の森のような、それを仏教では無為といった言葉で表しますが。なすなし、無為という世界が、社会に必要ではないかと少しずつ認識し始めてる。だからそれが初詣に、あるいは七五三とか、宮参りとか、お彼岸とか。お彼岸なんてもう何10キロと車そろえていくわけですよ。そういう思いはみんな持ってる。でも特定の宗教に結びついていない。それがいいか悪いかの問題ではなくて、それが日本的ではないでしょうかね。

○C班平田 ありがとうございました。

○司会 後、何かご意見、ご質問等、はい、どうぞ。マイク後ろの方です、まわしてあげてください。

○A班石川 A班の石川といいますけど、今日のテーマで人生いかにより良く生きるかで、最近の若い子はっていう言葉、よくご年配の方からとか聞かれると思うんですけど。僕たちが今の時代に生まれて、今の時代を生きて、でも年配の人はその自分たちの時代を生きて。その、最近の子はよく言われるのをすごい、じゃあ僕たちからしたら、あなたたちはどういう人生を生きてきたのかっていうのはわからない。で、

話の内容にあった、今幸せですかっていう質問に対して日本人、26パーセント。じゃあその人、年配の方は今幸せじゃないのかっていう。で、その26パーセントしか幸せと答えてない、実際僕自分で考えてみると、幸せなのかって思ったら、わからないが答えなんですね。わからないうことは幸せではない方に傾いているのかなって思ったんですけど。でもやっぱりこの先60年70年ってまだ人生ある中で、自分が幸せだなと思えるときがこないと、今から結婚をして子供ができる、じゃあその子供にもやっぱり幸せって思ってもらえるような、親でありたいなって、そうなりたいなって思うんですけど、その幸せだなって思える、こういう気持ちは持っていて欲しいみたいなことって何かありますか？

○阿部先生 あんまり気にすることないですよ。私たちも先輩や老人から今の若者はって言われてきた。いつの時代もそうなの。それはその時代の価値観があり、経験があり、伝統があり、慣習があって、その中に大人たちはどっぷり浸かってる。それを若い人は乗り越えていけばいいんでしょ。乗り越えてゆく場合に、何を目指して自分の志にしていくのかを、自分自身の課題にして探んなきゃなりません。年寄りが悪いのではない。年寄りには、年寄りから聞くべき多くのことがある。それは謙虚に受け取らなければならない。プレヒトという人が、社会は変えていくことによって命を保つって言っている。だから若い人は社会を変えて幸せな社会を作っていく責任がある。その責任を果たすために、年寄りのことを聞き、勉強もし、自分の経験も活かし、しかし自分の目標を明確に摸索をしていく、そういう努力をはらって仲間と一緒に歩き続けて欲しいですね。私も言われた、先輩から。今の若い者何してるんだって、いつの時代も。

○司会 よろしいですか、はい、どうぞ。

○D班清水 D班の清水と申します。C班でした、すみません。先生のお話の中で、特に昔の母親なんかは自分からまず絶対先に食べ物を食べないと。で、残った食べ物を食べてたと。確かに自分の親もそうだったのかなと思うんですけれども、ただ、今社会構造の変化であったり核家族化であったりですね、やはり親中心の考え方、親中心の思考になってなかなか子供を愛せない、というか愛することができないご家庭とかが、それによって少子化にもつながっておるとは思うんですけども。じゃあ子供を愛するようにどういったことをすれば。今のこの時代でもですね。たとえば時間があったら今若い子供を持ってもですね、保育所に預けて私は仕事行きますよとか。保育所っていうのは元々はやはり家庭の事情で育てれない子供を預けるのがですね、保育所の役割だったんじゃないかなとも思うんですけども、今は保育所で預けて時間ができたために、わざわざ保育所に子供を預けてその時間にパートにいったりお金を稼ぐといった、ちょっと趣旨が逆転してる、目的がちょっと違うのじゃないかなというところも大きくあってですね。ただ、どうしても今の社会構造上、仕方ない面もあると思うんですけども、そういうことがどんどん続くれば子供を愛する時間が余計なくなっていくのじゃないかなと。で、やっぱり愛情を受けてない子供はですね、大人になつてもなかなかその子供に愛情持って接せれるかと言ったらやっぱり人間ですから、親から伝わった、教えられたことを子供に伝えていくことができないといけないと思って。今じゃあ、愛されない子供が増えたらですね、またその次世代っていうのは愛されない子供がまたいっぱいになって、愛されてない大人がまた、その子供らが余計愛情を注げないという悪循環にも陥ってくるのかなと思ってですね。やはり抜本的な解決策としたら難しいとは思うんですけども、何か行政としてもですね、じゃあこういう取り組みはあるんじゃないとか、社会的にこういったこ

とをしないといけないと言うですね、何か先生なりのアドバイスとかですね、こういったのがあつたら世の中変わっていくよとかいう、ちょっとお考えがあればお聞かせ願えたらなと思います。

○阿部先生 もっともなご意見ですね。保育は時間ではなく質の問題です。そしてそれを活かすためには保育所と両親とが連携を密にすることが不可欠ですね。やはり子供を育てるのに保母さん、保育士も、母親も同じ姿勢で臨むことが子供にとっては必要だろうと思います。賀川豊彦が子供の権利を言いましてね、叱られる権利って書いてますよ。誰が叱るのか子供を。親が叱り、保母が叱る。でも叱るっていうことがしなくなりましたね。愛されない子供がいればその子を誰が愛するのかを問うべきではないでしょうか。特に地域社会の中で。子供は自分で自分自身を養い生活していくことができないから、誰かに依存をしなければならない。その依存をするのが、時には施設も必要ですし、病院も必要ですし、様々な社会機関が必要。それは整備しなければなりません。でも何よりもやはり親の愛情、その愛情は私は時間の限界はあっても質として深めることができ一番必要ではないかと思いますけど、どうでしょう。

○D班清水 はい、ありがとうございました。

○司会 後、何かございませんか。はい、どうぞ。

○D班由城 D班の由城真衣です。今日は貴重なお話をありがとうございました。ちょっと質問なんですが、このより良く生きるっていうので、私大学のほうで産業社会学部という学部に所属しているんですが、その中の子供社会専攻という、小学校教員のほうの勉強もさせていただいているんですが、初等教育で今文科省とか

がより良く生きるっていうのをポイントを置いていて、その中で命の教育っていう授業とかも導入とかされるみたいなんですが、命の大切さとか命の尊さとかを、その授業の範囲内、授業の限られた中で果たしてそんな簡単に子供たちに理解させたり伝えていくことができるのかっていうのが、疑問に感じことがあるんですが、その点について先生はどう考えられますでしょうか。

○阿部先生 最近、日野原重明先生が小学校に行って、命の大切さの話を子供たちにしてます。よくやってくださると思いますが。そりや1時間、2時間の授業で命の大切さが伝わるとは思いません。長い年月必要でしょう。必要なのは教師の態度。教師がやはり事々にそのときのモチベーションを捉えて子供たちに近づいていくことで、教師が自分の態度全体を持って子供たちにそれを伝えていくのが教諭の責任じゃないでしょうかねえ。言葉と合わせて、あるいは言葉以上に。言葉で命を伝えるって難しいですよね。どう思います、私も。でも大切な仕事をしてらっしゃるんですから期待します。お願いします、どうぞ。

○A班清水 A班の清水と申しますけれども、私は神戸市の私立の学校で教師をしてるんですけども、本当に先ほど前にちょうど3学期が終わる直前に、命の授業ということで体育館で講師の方を呼んで講演をしていただいたんですけども、今高校2年生の担任を持ってますと生徒の中には、そんなんいらんから早く帰って受験勉強したいとか試験問題があるから塾に行きたいとか、そういう意味で理想と、本当に教育者としてあげなきゃいけない理想と、でもやっぱり親御さんのニーズでいい大学に行くとかこの大学、ここの学校に行ってたら東大何名合格したよとか、そういうのが雑誌に出たりとかして、管理職はそういうところにきりきりして

るので、非常に今その理想と現実というのに揺れてるんですけれども、そのあたりは何か良いアドバイスがあれば。

○阿部先生 ありません。理想と現実の中で葛藤する以外ないでしょ？葛藤ですよ。それにあなた教師でしょ？そう簡単に教えられるわけがない。葛藤しないと。

○A班清水 ありがとうございました。

○司会 どうですか？あと。これを機会に。はい、どうぞ。マイクさっき後ろのほうに1本、ちょっとまわしてもらえますか？

○B班西塚 B班の西塚と申します。お話ありがとうございました。僕は神戸市のほうで高齢者のグループ訪問のリーダーさせていただいているんですけど、やっぱり高齢者の方の毎日様々な一人一人の命と向き合わさせていただいてます。僕のユニットとしてモットーとしてるのが、やっぱり高齢者の方をすごく尊重するっていうことと、もう本当に自由にしていただきたい、最大限に自由に過ごしていただきたいということと、のんびりとその人たちのニーズに応えられるように僕たちが手伝わしていただくっていうことを心がけているんですが、最近になってもう行きたいときには散歩にいっていただいて一緒に行かせていただいて、これがしたいって訴えがあれば一緒にさせていただいてっていう風にはさせていただいてるんですけども、やっぱり高齢になってきているので年をおうごとに体調が悪くなったりとか弱ってきたりっていうのがすごくあるんですが、本人様のニーズとしてはやっぱりここでのんびりして過ごしたいとうのとか、もう歳をとってきたから動きたくな

いというすごいニーズがあって、家族さんのはうからすれば弱ってくるし認知も進んでくるから動いてもらいたい、もっといろんなことをしてもらいたいっていうニーズがあります。で、僕たちのほうとしてはその弱ってくるのを見ながらその人たちがしたいっていうことも優先としてあげたいっていう、それもまあ葛藤っていうんですかねえ。を、考えてるとどっちを優先していってあげるのがその人にとっていいのかなあとも思うし、やっぱ認知症っていう、僕たちは個性として受け取ってはいるんですけども、それがあるから本人たちは弱ってきたらすごいそれが嫌なのにやっぱその場その場で、それがすることが嫌っていうことが後々に悪い方に影響はしていく。で、そうなると嫌、嫌っていうより苦しんでいく、その姿を見るのは僕らもやっぱり辛い。そうなったときに、参考までに、先生だったらどういう風にその人たちの命を見ていてあげてかなあと、聞かせていただきたいんですけども。

○阿部先生 京都に龍安寺というお寺があります。枯山水で15の石が並んでるので有名です。年寄りは長い人生経験持っています。喜びも悲しみもありました。その間に自分の個性が作られた。一言で言えば頑固で、やっぱりこだわりあるでしょ？それをどうするかっていうことでしょうね。龍安寺の石は15石、ところが実際には14しかない。最後の15番目の石はないんです。心眼で見るとです。これが大事だと思いますよ。だから15の石にはそれぞれ欲求がある。その欲求に対しては聞かなきゃいけないし、寄り添わなければならぬ。

○B班西塚 ありがとうございました。

ロータリアンの夕べ (2日目)

深川 純一

RYLAセミナー顧問・パストガバナー
(伊丹RC)



○司会 ロータリアンの夕べ第2夜を引き続
いて始めさせていただきたいと思います。

それでは、先生、よろしくお願ひします。

○深川純一 今日も、また三木先生流で行き
当たりばったりでしゃべり出しますから、どん
な話になるかわかりませんけれども、御辛抱く
ださい。

今日は、今井先生がおられるのでちょっと緊
張いたしまして、昨日みたいに余り好き放題言
えないかと思うんですが。そう言いながら、何
を言い出すかわからないわけであります。

何からしゃべろうかなと思ったんですが、や
はりこの第1回のRYLAで、私が一番強い印
象を受けた一番最初が、やはり今日の今井先生
のお話のアーネスト・ゴードンのお話なんです。
「クワイ河を渡って」という話。これは当時、
第1回の受講生も大変感動いたしまして、同席
しておる我々ロータリアンも大変感動したの
です。そういうことで、その次の年も、ロータリ
アンたちが今井先生にリクエストをして、あれ
をぜひキャンプファイヤーでやってくれとい
うことになって、それから何回もある話を先生が
なさいました。いつ聞いても感動する、いい話
だと思います。

それからもう一つは、第1回のRYLAは、
やはり従来どおり最初の3回は、教養を高める、
世界的な視野を持つための話を受講生たちに聞
かせるというので、今井先生が構想なさったや
り方ですね。個人の理解、そして社会の理解、

それから国際理解という構想。それから、過去
現在未来にわたって、3回に分けていろんなお
話を聞くとか、いろんな構想がありました。そ
の第1回RYLAの講義ですが、最終日に関西
学院の田中国夫先生がお話する予定だったんで
す。ところが、その直前に、田中先生の恩師の
先生がお亡くなりになったというので、田中国
夫先生が出られない。そこで急遽、今井先生が
当時、第1回のRYLAのディーンでありました
が、ピンチヒッターでお話になりました。その
テーマが、「社会の動きと青少年の実態」と
いうテーマだったんです。今でも私は鮮明に覺
えていますし、その内容もほとんど覚えており
ます。その内容を、またずっと私は考え続けな
がら、そして自分の考えも深めて、そのことを、
その後、全国のロータリアンにスピーチを頼ま
れると、それを引用して、利用させていただい
ております。

そういうことで、先ほどのカウンセラーも
おっしゃっていましたが、このRYLAで受講
生たちもすばらしいことを学ぶけれども、それ
以上に、このロータリアンの皆さん方が大変い
ろんなことを学ばしていただいている。私なん
かはその例でありますて、このRYLAに来て
から、私は弁護士でありますから、法律のプロ
であります。法律的なことは、一応全部心得て
いるつもりですが、その法律の世界では聞け
ない視野の広い話をこのRYLAで何回も教わり
ました。そのときに、いつも今井先生が、その
RYLAの途中とか帰りで、何冊かの書物を御

紹介なさいます。こういう本が出てるよ、読みたまえと。私は、早速それを買って読みました。中には難しい本もございました。「経済と倫理」など、東京大学の塩野谷祐一先生の分厚い本であります。すばらしい本なんですが、私は読みこなそうとしても、なかなか完全な理解ができないままに今日に至っておりますけれども、しかし、そこで読んだことも、わからないながらも、私の弁護士の人生では得られない、すばらしい思考能力というものの糧になったと思います。

このように、或る一つの分野、自分の専門分野以外の知識、本当に世界的な視野にたったいろいろな知識というものを、ここで勉強することができて、これも、「出会い」の尊さであると思います。私は学校の理事長もやっておりますけれども、よく卒業生の諸君に別れのあいさつをするときに、人生というのは、まさに「出会い」によって人生が変わることがある。これから、どんな出会いがあるかもしれないから、それを大切にしなさいという話をよくいたします。それも全部、このロータリーのRYLAで学んだことあります。

したがって、このRYLAではいろんなことを教わりまして、私の人生ですばらしい師と仰ぐ人に4人出会いました。お二人はもう亡くなりました。最初の師匠は、私の俳句の師匠であります、高浜虚子の一の弟子でありました高野素十先生であります。新潟医大の学長をなさったんですが、皆さん、俳句の世界を知っている人はよく御存じだと思いますが、昭和の初期に4S時代、四つのSの時代というのを築かれました。有名な水原秋桜子のS、それから高野素十のS、大阪の阿波野青畠のS、そして京都の山口誓子のS。全部、頭文字がSですね。それで、その人たちがすば抜けていて、ホトトギスの高浜虚子の門下で、成績がよかったので、山口青畠という東京工業大学の教授であった人が名付けて、4Sだと。東に秋桜子と素十のS、

即ち秋素の2Sあり。東に青畠、誓子の2Sあり、合わせて4Sだといって、一躍有名になって、俳句の黄金時代を築いた4Sだと言われた、その一人が高野素十、私の師匠であります。この人からは、俳句のことだけではなくて、俳句以前の人間の生き方、あり方、そして御自身のすばらしい生きざまを、私は教えられました。これが最初の師であります。

その次は、歴史的順序からいきますと、私のロータリーの師といつてもいいですが、ロータリーの原理の世界で、いろいろなことを教えていただきました。これは、中央大学の英米法の教授であります小堀憲助先生であります。この人が、ロータリーのすばらしい原理の世界をわかりやすく解き明かしてくださいました。この方が出たおかげで、日本のロータリーの原理構築ができたようなものであります。昨日お話ししましたが、決議23の34号。あれは、この小堀先生が講義を始めたときには、まだ小堀先生も御存じなかったのです。それは、第1回千種会という理論研究会の講義の中では一言も出てこない。何年かたってその言葉が出だして、それから全日本のロータリアンが、ロータリーの特に指導者の方たちが、決議23の34号が大事なんだということを言い出したのであります。このように、ロータリーの原理の体系というものを構築されたのが、小堀憲助先生であります。

私は、その先生に三十何年間かずっとついて、何回も何回も講義のテープを聞き直しました。1回聞いただけでは、なかなかわからない。それを何回も聞いて、それを今度は自分のノートにとるんです。その講義というのは、土曜日が午後1時から6時まで5時間、連続講義であります。そして、その翌日の日曜日が、朝9時から3時まで連続講義、合計8時間が1科目なんです。その1科目の、最初はロータリーの歴史の話です。第2は、日本のロータリーの歴史の話。そして第3は何か。ロータリーは一つの巨大な組織であります。この組織が、どういう原

理構造になっているかという、原理の世界をひもといていくんです。ロータリー定款細則論といつてもよろしゅうございますが、これが第3回目の科目。そして、第4回目からロータリーの奉仕の原理に入ります。そして最初が奉仕の実践の総論であります。総論の次に、実践の各論として、社会奉仕とクラブ奉仕。これを総論と社会奉仕とクラブ奉仕、8時間かけて話されます。そして、その次が国際奉仕、それから世界社会奉仕、そういうものを話されます。そのときにももちろん、ロータリー財団もあわせて話します。そして最後の講義が、いわゆる職業奉仕、そしてまとめになるわけであります。

これも全部、2日間で、1回が8時間の連続講義でやっていくんです。そういう研究会で、それを2年間にわたってやっていく、それを全国16の研究会を順番に講義をなさっている。初めは、研究会も八つぐらいだったんですが、それが倍の16ぐらいになると、先生一人ではとても全部回りきれない。結局、後の方は、私が先生の代理講師として分担して、二人で全国の研究会を、北は北海道から南は鹿児島まで順番に研究会を渡り歩いて、8時間ずっとしゃべっていました。そのおかげで、私はいろんなことを教えられましたし、そして自分なりにノートもとりました。それは弁護士の仕事が終わった後で、事務所でやる。だから、大抵、最初の10年間はほとんど事務所を出るのが夜中の1時2時ぐらいになりました。また、それで酔っぱらって帰って、また次の朝、裁判所へ出て、仕事をして、帰ってきたらまた夜中まで頑張りました。そのころは、車の運転やりましたし、私、自分のビルを持ってましたから、夜遅くなっても別に構わないから自由に振る舞っていました。そのおかげで、一応、初步的なことだけは身につきました。その恩師は小堀先生、第2の師であります。

第3番目が、去年の秋に亡くなられた東京東クラブの佐藤千壽先生。この先生には、実業の

世界の極意というのか、本当の生きざまというもの、ロータリー的な生きざまというものを教えてされました。今から20年前に私がガバナーにノミネートされたときのロータリー研究会に参加したときに、愛知県の豊橋でありましたが、たまたまその昼飯のときに、みんな名札つけてますから、佐藤先生と最初の出会いがありました。そのときは、私は佐藤先生のお顔も知らなかっただんですが、佐藤先生が私のことを御存じで、「ああ、深川さん、おいで、おいで」と。一緒に昼飯を食べて、そこでいろいろ話したのが最初の出会いであります。それから20年間、東と西に分かれておりますから、そう頻繁には会えないんですが、私もあちこちの地区大会に出かけていきます。先生もきておられる。そして会うと、必ずそこでロータリー談義が始まる。また、ロータリー研究会などのときも、時々会議を抜け出して二人でロビーでおしゃべりにふけるとか、そんなことも重ねておったのです。

そして、あの先生は美術の世界でもすばらしいし、それから社会福祉のことでもすばらしい、いろんな考え方をもっておられます。そして、教育のことでもあの先生は仙台二高から東京大学の法学部を卒業されましたが、すばらしい知識をもっておられます。そして、知識だけではなくて、本当の生き方が身についているということを教わりました。惜しくも、昨年の秋、亡くなられました。やはり、佐藤先生は、私の師匠であります。

最後は、ここにおられる今井先生であります。私の第4番目の師匠であります。二人亡くなられましたが、まだ小堀先生も今井先生も健在であります。

私は、人生にはいろいろな師匠があります。しかし、禅の言葉だと思いますが、正師、正しい師匠にめぐり会うことはなかなか難しい。よほどいい出会いがないと、そういう人には出会えない。「正師に見（まみ）ゆること難し」という言葉があります。これを若いとき、禅の勉

強をしていたときに聞きました、身にしみておったのです。

私は本当に幸せだと思うのは、4人の正師に出会いました。そして、そこからいろんなことを教わりました。

最初の高野素十先生からは、俳句以前の心が大事なんだということを教わりました。これは、ロータリーの知識とか原理とか、難しい理屈、そんなものは、への突っ張りにもならないんです。そんなものは、単なる手段に過ぎないのです。ロータリーそのものは何かということを、いつも考えながら、ロータリーが身につかなければならない。だから、どんなに理論家ですばらしい話をしても、ロータリーが身についてないのは、ダメだと思うんです。では、いかにしたら身につくか。それはロータリアンの一拳手一投足から学びとるほかありません。いろんなロータリアンがおられます。何か自分に教えるものを持っておられる。そういう口で言えないものを感じ取るのであります。だから、シェルドンはロータリーは科学だと言ったけれども、あれは間違いです。ロータリーは科学ではありません。科学だったら、方程式とかいろんな知識を教えたら、全部知識として覚えられますけど、それでロータリーが身につくかといったら、身につかないんです。やはり、それは、口では言えない。文字では書きあらわせないものがロータリー、それが身につかなければならぬ。

では、それはどうしたら身につくのか、そのために、昨日お話をしました。例会出席の強制の原則があります。必ず例会に出てきなさいよ。そして、顔と顔とを合わせて、その人の知識から、いろんなものを学ぶ、それだけではなくて、その人の人格と触れ合いながら、そして、そこからおのれの至らざるところを、何がしかのものを学び取る、それがロータリーの例会でありますし、そういう人を育てる、それを本当のロータリーの親睦というのであります。

昨日、仲よくなることは大事だと言ったけれども、その仲よくなることの具体的な意味は何か。それは、お酒を飲む、ゴルフをする、旅行をする、楽しいこともする、それも大事であります。これも、やはり親睦であります。しかし、そのような仲よくなることだったら、地域社会の人はだれでもやっています。ロータリアンでも変りません。だから、暴力団だって、ゴルフもするし、お酒も飲むし、楽しいことは全部やっている。ロータリーも、お酒も飲むしゴルフもするし、旅行もします、やってることはロータリアンと同じことなんです。同じことをやっていて、どうしてロータリーの親睦と暴力団の親睦と違うのか。その1点がわからないと、ロータリーが身についているとは言えないということを、昨日話しました。

その口では言えない、どこの奉仕クラブでも地域社会でも同じことやってる、それと1点違うことをロータリーはやっておる、それは何だというと、そういう仲よくなる、精神的なよさをつかむ、これを精神的な親睦だと言いました。だから、ロータリーの親睦、仲よくなることの意味は、感性的な、お酒を飲むという楽しみ、これも結構であります。ロータリーはお寺じゃございません、ロータリーは宗教じゃございませんから、楽しいことは何をやってもいいんです。お酒を飲んでもゴルフをしても旅行しても結構です。それも大事でありますが、それ以上に、お酒を飲んでも、ゴルフをしても、何をするにつけても、いつもロータリアンがおのれの至らざるところを、他のロータリアンから何がしかのものを学び取る。これがなければ、ロータリーの親睦とはいえない。仲よくなることの一つの意味は、そこにある。だから、それがロータリーの親睦ですよということであります。

このことを、国際ロータリーの会長ともなる人は、やっぱりいいことを言います。何年か前に、「enjoy Rotary」、「ロータリーを楽しもう」というテーマが出ました。あのテーマは、随

分、皆さん誤解をなさっているようあります。ああ、楽しけりやいいのね。楽しいことなら、何をやってもいいのねといって、ゴルフをしたり、お酒を飲んだりすることがロータリーの親睦だと勘違いした人が随分いました。しかし、あのテーマを出したヒューエム・アーチャーさんという人、私がガバナーになった1990年の1年前だと思いますけど、1989年のR I の会長であります。あの人が、「enjoy Rotary」、ロータリーを楽しもうと言ったことの意味は何か。そんなお酒を飲んだりする感性的な親睦を楽しもうというのではないのです。

アーチャーさんが言ったのは、毎週1回必ず例会に来て、ロータリアンが顔と顔を合わせる。そのうちに、だんだんロータリアンの顔つきが変わってくるし、ロータリアンが育っていくのだと。そのロータリーを見るのは楽しいね、このロータリーを楽しもう、と言ったんです。そういう精神的な親睦を楽しもうというのが、アーチャーさんの心だったんです。それを誤解してはダメであります。したがって、例会に出てきて、顔と顔を合わせて、いろんなコミュニケーションを図りながら、そして何がしかのことを学び取る、これが大事なのであります。

ちょっと話がまた抽象的になりました。何がしかのものを学ぼうと言ったって、一体、具体的にはどういうことなのか。私の体験を一つ申し上げます。

私は、ロータリーに入るときに、随分抵抗したんです。なぜかと言いますと、私の親父がライオンズクラブのメンバーであります。親父は忙しいのに、地域の人から口説かれまして入会しました。そのとき、ロータリーが何かも、ライオンズが何かも知りません。しかし、何か大変、地域社会で名譽な立場だから、ぜひ先生、入ってくれって言われて、結局入りました。入った理由がふるってるんです。

ロータリーは毎週1回例会を昼の時間にやつて。それも必ず出ろという。しかし、弁護士

にとってはゴールデンタイムです。法廷が1時から始まるし、12時までは法廷がある。したがって、12時半から1時間取られたら、弁護士は仕事にならない。親父はそれもあって、断り続けたのですが、ついに断りきれなくなって、結局、ライオンズに入りました。それはなぜかと、ライオンズは2週間に1回、1回でも少ない方がいいだろうというので、ライオンズに入ったらしいのです。それで、ライオンズ活動というのを見ておりまして、派手な帽子をかぶって、そして例会で何やってるのと言ったら、お金を集めて、どこかに寄附することをやっているのですね。それで何か大会があると着飾って、豪勢な遊びをやったりして、そして奉仕だ、世のため人のためだと言っている。それで、あんなのはやめろと随分おやじに諫言して、親父も結局忙しいし、私が、余りしつこくやめろやめろと言うもんだから、じゃあ、やめると辞表を出しました。しかし、今度はライオンズがやめさせなかつたですね。結局、私の親父が亡くなったときに、そのライオンズの会長さんが、あいさつに来られました。本当に立派な人でした。

そして、おやじが亡くなって、二、三年経つて、今度はロータリーが私に入れと言ってきました。私は、ライオンズのやり方を知っていますから、ロータリーも同じものだと思っていました。それで、絶対にうんと言わなかった。だけど、年取ったロータリアンというのはしつこいんですね、もう何回も何回も来る。それで、いろんな本を持って来て、読め読めという。読んだってわからないのではといたんです。結局、3年ぐらい続きました。それはなぜかというと、私の母親が地域社会のいろんな仕事をしていたものですから、そのロータリアンと親しかったもので、その人はどうしても、私をロータリーに入れたいのです。私は3年ほど断り続けて、ついに断り切れなくなりました。なぜかと言うと、すぐやめてもいいから、とにかく一遍入れと言います。そこで、すぐやめてもいいのなら入

ると言ってしまったのであります。

それで入会して、最初の例会に呼ばれました。そのときは私はまだ40歳そこそこの駆け出しの弁護士でありましたけれども、若造の私の横に座ったのは、そのクラブの長老で、もう80歳を超えていた伴さんという、小西酒造の大番頭さんでした。その人は座るなり、さっと私の所へお茶をくんで持ってきて、丁寧に挨拶をなさるんです。それで、このクラブはちょっと違うなと思いました。それが最初の出会いなんです。そこで伴さんがいろいろと私の世話をなさってくださって、その一挙手一投足に、私は、こういう人が本当の社会の指導者だということを悟ったんです。これは、社交クラブだけれども、大変な社交クラブだということをそのときに初めてわかりまして、今まで、ライオンズと同じように考えておったその印象がこっぱみじんに砕けちゃって、それで、本当に今度は、入会するつもりになったんです。

こういう出会いがなかったら、ついにはロータリアンもなることもなかつたでしょうし、今井先生という、人生の師に出会うこととなかつたし、それから、ここにおられるすばらしいロータリアンの皆さん方に出会うこともなかつたし、また、このRYLAも知りませんし、一介の弁護士で終わっただろうと思います。しかし、このRYLAに来て、いろんなことを教わり、すばらしいことを教えていただきました。

後で、ポール・ハリスが弁護士資格を取りながら、弁護士の登録をせずに、5年間、世界漫遊の旅に出ていきます。それは何かというと、弁護士になつてもすぐ仕事するんじゃなしに、5年間ぐらいは社会を回つて、いろんなところを見て、社会の実態を観察して、それから弁護士をやつたら大弁護士になるよ、ということを人から聞いてそれを実行しました。これもポール・ハリスにとって素晴らしい出会いの一つであります。

今、大事なことというのは、同じ仲よくなる

という親睦ひとつにしても、本当に仲よくなることの意味は何かということを考えてみなきゃならない。したがつて、このロータリーは、出会いが大事であります。ロータリーというところで、私はその伴さんに出会つて、出会いということを学びました。そして、すばらしい人の触れ合いを知りました。結局、ロータリーで仲よくなる、そして精神的に何かを学ぶというのは、ロータリーは科学ではありませんから、原理的ないろんな理論の話、それも大事ですけれども、それでは本当のロータリーの心はなかなかわからない。その口では言えないもの、伴さんとの出会いで、何がしかの私は教えられました。そういうものは口では語りつくせない、感じ取るものです。だから、それは例会に出て行って、お互いいいろいろな人とつき合つて、一業一会员制の原則ですから、いろんな業種の人方がいます。弁護士も居れば、デパートの社長も居る。全部発想も違うし、考え方も違う。だから、そういういろんな人たちから毎週1回出会いながら、いろんな話をしながら、コミュニケーションを図りながら、その人格の触れ合いで、人から学び取つていく。これがロータリーであります。

実は、このRYLAも同じなんです。若者たちとロータリアンと触れ合う、若者たち同士も触れ合う、そしてカウンセラーからも学び取る、いろんな人から学び取つていく、それは知識も大事であります。そのために、知識は大事だから、午前中3回、立派な先生方の話を聞きます。だけど、それだけではだめなのです。それとともに、3泊4日ここで一緒に過ごす、寝食をともにして、同じ釜の飯を食つて、そして一挙手一投足から他のライテリアンから、ライラリアンが学ぶ。そして、ロータリーのカウンセラーからライラリアンは学ぶ、ロータリーのカウンセラーも若者たちから何かを学ぶ。そういう場が、このRYLAであります。ロータリーは、科学ではありませんから、口とか教科書で

は教えられません。だから、毎週1回例会に出てきて、そして皆さんと触れ合いなさいよという、その出会いの保障をしておるのが、ロータリーなのです。

そんなこと、どこに書いてあるのか。皆さん、お手持ちの定款の第4条を開いてください。ロータリーの綱領があります。その本文がありまして、そこには私流に訳しますと、ロータリアンは皆職業人でありますから、ロータリアンは、企業の根底に奉仕の心をおきなさいよということを書いています。それだけでは余りに抽象的だから、誤解も生じるだろう。だから、それを解説するために、四つの補強原則を置いています。第1、第2、第3、第4。

第1には何が書いてあるか。綱領の第1。心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと。これは私流の訳であります。手続要覧では、もっと違う表現になりますが、あれわかりにくいけれども、わかりやすく言えばそういうことです。まず、奉仕の心をつくるのです、これは親睦によって作るのです。そして、それが世のため人のための奉仕の契機になるんだよと。だから、単なる親睦ではないよ。それは心の友を得る、今、申し上げました精神的な親睦、感性的な親睦と同時に、精神的な親睦を得るのが、心の友を得る。その出会いを保障しておるのがロータリーなんです。心の友を得てというのは、どこで得るのか。これは、ロータリーの例会で得るんです。だから、ロータリーでは一番大事なのが例会出席なのです。

その精神的な親睦から出たエネルギーが、地域社会に対する奉仕のエネルギーになっていく。だから、綱領の第1は、まず出会いによって心の友を得るのです。心の友を得るということは、心の友というのは精神的な親睦のこと、そして、その親睦のエネルギーをもって世のため人のための奉仕をしなさいということ。これが、綱領の第1であります。

そして、第2は何か。そのつくった奉仕の心

の内容は何かということを書いてます。これには1、2、3とあるのですが、いつも、私は3の方から説明する方がわかりやすいと思います。3は何を書いているかといいますと、ロータリアンは職業人でありますから、自分の職業を天職と心得るべきこと。天職というのは、かなり宗教的な言葉であります。この自分の職業というのは、自分だけの職業じゃなくて、神様から与えられた職業、天職だと考えなさいよということ。その次の第2番目が何かといいますと、ロータリアンは、皆、天職を持っております。それが集まっているのがロータリークラブの例会であります。だから、例会というのは、沢山の天職が集まっている。天職と天職との間には、上下の差別がありません。みんな平等対等なのです。天職の間には、尊いとか卑しい職業だとかいう貴賤なし。どんな職業でも、みんな地域社会のために役立ってる。だから、デパートの社長さんもおれば、あるいは、汚穢屋(おわいや)さんもおる。それも天職なんです。だから、自分の職業を天職と心得なさい。そして、その天職は上下の差別がない。みんな平等対等な、みんな世の中のために役立っておるんですよ、そういうことを心得なさいということ。そして第3番目。そのような社会だから、世のため人のための倫理基準を高めなさい。人間の倫理というものを高めていきなさいよということ。倫理というのは、大事なことなんです。これが、綱領の第2であります。

そして、そこで第1、第2で奉仕の心という、世のため人のための心をつくりました。そして今度、第3、第4は、その心を外界、地域社会に適用していく、世のため人のために実践をしなさい。だから、第1、第2が奉仕の心をつくる規定、第3、第4はその心を実践していく規定なんですね。

第3に何を書いているか、奉仕の心を地域社会に適用していきなさい。それを職業社会に適用すると、それが職業奉仕の実践ですよ。地域

社会に適用すると、これが社会奉仕の実践ですよ。そして、国際社会に適用すると国際奉仕の実践ですよということ。そして、第4番目は何か。やはり、国際社会のことを書いておる。だから、ロータリーの綱領は、1、2、3、最初に奉仕の心を作ること。第2番目に奉仕の心の内容を書いている。そして、その奉仕の心を第3番目で社会へ適用していきなさい。職業社会、クラブ社会、地域社会、国際社会、そして世界社会、これで終わっているんです。綱領は原理的には第3番まで三つで終わります。

ところが、ロータリーは1921年に、エジンバラの国際大会で、国際奉仕の概念を樹立したんです。そして、それがいかにもすばらしい規定だということで、その翌年にロータリーの綱領を完成するときに、1921年のエジンバラの国際大会の国際奉仕の概念そのままの文章を綱領の4にひっつけた。だから、社会に適用する実践の規定が、実は最後の4番目は要らないんです、第3で全部言ってるんだから。

ところが、余りにそれがすばらしいのでくつつけたのであります。そして、今ではむしろ国際奉仕というのは、世界社会奉仕的な理念が強いのであります。要するに、こういう世界社会に対する心の適用というのが4番目に出ている。これが、ロータリーの原理の世界、綱領の原理の世界であります。

これは、原理的に表現しますと、例えばサンドウィッチを見てください。サンドウィッチのパンは、上のパンと下のパン、その間に具がありますね。上のパンが綱領の第1、奉仕の心を作る規定。第2番目の具に当たるのが綱領の第2、奉仕の心の内容ですね。そして第3番目が、奉仕の心を実践していく規定、これが下のパンなんです。ここででき上がるのですが、ロータリーの綱領だけは、下のパンが2枚になって、国際奉仕の関係が2重になっているのが原理的には少しいびつではあります。しかしこれは、その第4番目のパンも大事な規定だというの

で、今まで綱領は1回の改正もなく、ほとんどコンプリートな完成体だというので、綱領は改正されることなく今日に至っているんです。

しかし、多数決でいつ改正されるかわかりません。あの一業一会員制も、2001年の規定審議会でなくなっちゃった。あれは、ポール・ハリスの魂のこもった、絶対的な規定、それがどれほど大事かということは昨日お話し申し上げました。同時に例会出席の原則も大事であります。

要するに、綱領というのはそれほど大事な規定であります。ですから、般若心経とも言われてゐるのです。綱領を、理解していることが大事だから、それはロータリアンであることの絶対的な条件なんです。綱領を知らないければ、ロータリアンとは言えないんです。しかしこのころは、綱領を知らないロータリアンが出てきました。嘆かわしいことであります。世も末であります。一業一会員制もなくなっちゃった。寂しいけれども、いいこともなくなっていくけれども、しかし、いいものはいつかまた復活するということも、私も言っております。

一つ、その大事なものがなくなっちゃったということの例を挙げておきます。

その前に、ちょっと別の話からいきましょうか。物事の本質ということと現象ということ。今、みんな目に見える現象ばかりを追っかけていて、目に見えない大切なものを見失っておる。渡辺和子先生がおっしゃった、みんな目に見えるものばかり追っかけて、目に見えない大切なものの、心の中にあるものが忘れてるじゃないかと。私はそれについて、ソビエト連邦の崩壊のことも言いましたし、ロータリー的な解釈のところの話もしました。それは今日、繰り返しません。しかし、とにかく物事の本質的なものを見失ってはダメであります。目に見えないものが大事なんです。ところが、みんな今、目に見えることばかりを追っかけています。

こういう歌があります。「骨隠す皮にはだれにも迷いけん。美人と言うも皮のわざなり」と

ういうことかと言いますと、あの人、美人だな、美しいな。これ現象です。色即は空の色の世界であります。目に見えるものは美しいんです。その美人だというけれども、その骨の下は骸骨なんです。だから、骨を隠しておる皮にだれも迷わされているんだよと。美人といったって、それは皮があるせいだよ。皮をむいてごらん下さい、例えば、美人が亡くなつて、焼き場で焼かれちゃつたら骸骨になる。その実態はありませんよね、それに迷わされてはいけないということあります。

これは足利6代将軍の文武両道の武士であります蜷川新右衛門の作なんです。この歌に答えてね、一休禅師が歌を詠みました。「皮にこそ、男女の隔てあれ、骨にはかわる跡形もなし」皮があるから、男と女、美人と不美人の違いがある。これが焼かれ骨に変わってみなさい、跡形もないよということを一休禅師は言っているのであります。

どちらも大した作品ではございません。しかし、現代の滔々たるエロチズム文化に対する警告としては、私たちのぼせ上がつてゐる頭を冷やすのには、よい話だと思うのであります。そして、それ以上にロータリーとしては、この警告に学ぶべきところがあろうかと思うのであります。

ロータリーはお寺ではございません。クラブでありますから、楽しいことは何でもいいのであります。お酒もいい、ゴルフもいい、旅行もいいです。何をやってもいいのであります。これも親睦の一つであります。しかし、忘れてはならないのは、何をやってもいいけれど、他人から何かを学ぶことを覚えなさい。これが一般的の親睦と異なるところ、他人から何かを学ぶということであります。そのとき、やはり物事の本質を見抜くという目を持たなければいけないだろうと、私は思います。だからこの二つの歌から何を学ぶべきかというとロータリーというのは、現象にとらわれずに物事の本質を見る、

そういう見抜く目を持たなきゃならない。

現象というのは、今申し上げました、色即は空の色の世界、目に見える世界であります。美人とか人間の皮とかいうのは、全部現象でありますね、目に見える。ロータリでは、ロータリークラブの建物だとか、R I だとか、いろんな目に見えるものがあります。しかし、目に見えないロータリとは何か。ロータリーそのものは目に見えません。R I は目に見えます。ロータリークラブも目に見えます。だけど、ロータリーとは何かと言われたときに、ロータリーは目に見えません。これは心の中にあるものであります。

1960年のR I の会長でありますエド・マクローリンが、「You are Rotary」というすばらしいターゲットを打ち上げました。あれは一体何か。あなたがロータリーですよ。ロータリーというのは、R I のことではないですよ。ロータリークラブのことでもないですよ。ロータリアン一人一人、あなた方の心の中に宿るもの、これがロータリーですよと言つてゐるんです。これはマクローリンの呼びかけであります。私が大好きなテーマだと言つたのは、そこなんです。それから何を学ぶか。目に見えないもの、ロータリー、これが大事なんです。

だからクラブ、これも大事であります。R I も大事であります。しかし、R I がつぶれても、ロータリークラブはみんなが団結しておればつぶれません。しかし、ロータリークラブがつぶれたら、R I は、その連合体でありますから自動的につぶれてしまします。したがつて私は、ロータリーがどんどん衰退していっても、うちのクラブの連中には言つています。ロータリーがどんなに変わって、どんなになつていっても、たとえ、みんなから見放されても、我々のクラブだけは守ろうじゃないか。この親睦の世界、そしてお互いみんな学び合う世界、これは我々50人のクラブ。50人だけが守つておる限り、そのクラブは続くんだ。仮にR I がつぶれたって、我々だけは守ろうよと、そういうふうに呼びか

けています。みんな、それに納得してから、一生懸命ロータリーの勉強もするし、そして助け合っています。それが本当のロータリー、これは目に見えないものです。ロータリークラブではない、目に見えない、ロータリーそのものであります。

したがって、ロータリーは思想であります。マクローリンに言うように、心の中に宿るものでです。では、それはどこに書いてあるのか。決議23の34号の第1項冒頭を見てください。ロータリーとはという定義があります。ロータリークラブとは、ではありません、R Iとは、ではありません。ロータリーとは何かということを第1項を書いて、その次に、ロータリークラブとは何をするところか、そしてその次に第3番目にR Iとは何をするところか。そして、第4番目に、ロータリーの奉仕とは、一体何かということを書いております。そして、5番目に、そのロータリークラブの連合体でありますR Iと、ロータリークラブとの関係を書いてます。これは決議23の34号の第5項まで、五つの項目、これで、この総論部分が終わります。

そして、第6項に、特に社会奉仕、国際奉仕、世界社会奉仕など、外へ向けての奉仕の実践の準則を書いております。この六つの項目全体で決議23の34号は構成されておるのであります。これを見てわかりますように、一番最初にロータリーとは何かという哲学を書いてあって、そして、次がロータリークラブは何をするところか、その次が国際ロータリーは何をするところか、そして、4番目はロータリーの奉仕とは何か、そして5番目に国際ロータリーとロータリークラブとの関係を書いている。これで総論部分が終わって、そして、その奉仕の心の実践の対象である他者に対する奉仕を書いておる。即ち社会奉仕の準則であります。

これでわかりますように、これを見ても、今ロータリーの綱領を般若心経のようだと言いますけれども、決議23の34号もやはり般若心経の

ようなものであります。だから、外国のロータリアンは余り重視しないようありますけれども、日本のロータリーの指導者、そして心あるロータリアンたちは、この決議23の34号というのは大事なものだと言っているのです。

そして、その第1項、ロータリーとはという定義が書いてあります。これは、利己、自分を利すること。利他、他人を利すること。利己と利他とを調和しなければならない。これは、相反することです。他人を利すること、自分を利すること、相反すること、それを調和する、それが大事なんです。その調和する人生の哲学だと書いております。だから、ロータリーとは、哲学、哲学思想なんです。だから哲学思想でありますから、目に見えないもの。その次のロータリークラブ、R Iもロータリーの奉仕の実践も目に見えます。一番最初に目に見えないものの、これが一番大事ですよといつて哲学思想を説き、そして、その次に具体的な目に見えるものを説いておる。これが、決議23の34号の一つの構造なんです。こういう形で、やはり目に見えないものを大事にしなければならない。

これは、私はだれでしょうという問い合わせをよくやるんであります。私、ここにいますね。私、何ですか。私というのは目に見えないんです。いや、あんたここにあるでしょう、これ、私の顔です。これ、私の腕です。じゃあ、私ってどこにおるの、心の中は目に見えないですよ。だけど、私というのは絶対にいるんです。

そこで、昔のギリシャ人は、この辺のところをちゃんと分析して考えておりまして、目に見える私のこの肉体というのはこれは仮面、お面だと言ったんです。Persona（ペルソナ）といいます、ギリシャ語で。人間というのは、この仮面をかぶったものに過ぎない。人間の本体、私というのは、目に見えないその中にあります。肉体は、あくまでも仮面だよという考え方であります。私とは違うんだ。これを、ギリシャ語ではPersona（ペルソナ）といいます。

このペルソナの最後のaが取れて、Person（パーソン）、人という英語になったんです。

そんなことで、私が何を言いたいかというと、目に見えないものを大事にしなさい、ペルソナではなく、その本体の私を大事にしなさいということ。今日も阿部先生がおっしゃった、一番かわいいのは自分なのです。これは、お釈迦様も言ってます。王様があるときに、最愛の奥様とお話をなさって、「わしはよう考えてみると、最愛のおまえより、やっぱり自分が一番いとしいと思うよ」奥様はそれを聞いておりまして、「私もやはりあなたよりは私自身がかわいいと思う」と王様が、「世の中の人がみんな自分がかわいいということになれば、この世の中は成り立っていないかね。お釈迦様のところへ聞きに行こう」といって聞きに行った。そしたら、お釈迦様は、お二人の話を聞きになって、「それでいいんですよ。人間というのはだれでも自分が一番かわいいんです。自分を大事にしなさい。しかし、自分が一番かわいいと思ってるように、相手の人も自分が一番かわいいと思ってるんだよ。そのことを考えなきゃダメだよ」と。そこから他人に対する愛というものが生まれていくのであります。

これは、ロータリーでも同じこと。結局、ロータリーは倫理とかいろんなことを言いますけど、その究極のものは何かというと愛なんです。愛も目に見えません。熱烈な恋愛をしておる人が亡くなって、あるいは亡くなる前にレントゲンにかかったって、愛は映りません。しかし、愛は厳然としてあるのです。

金子みすゞがいい詩をつくっていますね、御存じでしょう。「星とたんぽぼ」という。空に輝いている星は目に見えない、昼の星は目に見えない。海の底に沈んでおる小石のように目に見えない。見えないけれどもあるんだよ。見えないものもあるんだよ。といいい詩をつくりました。目に見えないものを思いやる、あの金子みすゞの感性が私は好きなんです。あそこ

から、やはりロータリーと同じものを感じ取ったのであります。だから、ここのところは一つ大事にしなければならないだろうと、私は思います。

そういう本質的なことを大事にしなさい、今、倫理のことをちょっと触れました。倫理というのは非常に大事です。職業の倫理が大変大事なことは皆さん御存じでしょう。その職業の倫理が今非常に衰えております。これからその具体的な例を申し上げますけど、これは皆さん全部御存じですから、詳しいことは言いません。簡単なことだけ言います。

牛肉の産地偽装をしました雪印食品がありますね。あれは、偽装表示が発覚してからわずか1カ月で会社を解散いたしました。あの家畜伝染病を予防法違反のアサダ農産は、鳥インフルエンザの発生を隠蔽したことが発覚して、わずか3カ月で廃業を決定しております。その他、皆さん、よく御存じの、姉歯建築設計事務所の構造計算偽造の問題、そしてミートホープの事件、そして、船場吉兆、三笠フーズ、そして浅井の食品衛生法違反、中国産のウナギのかば焼きの偽装事件、枚挙にいとまがありません。まだ続くでしょう。昔は、こんなことはなかったんです。ミートホープの経営者、事もあろうにロータリアンであります。しかも、元クラブ会長でありますし、この事件の当時は情報委員長であります。ロータリーは一体どうなってるのかと思うのであります。

こんなことは、古きよき時代のロータリーには絶対になかったのです。倫理が確立しておりましたから。こういう職業倫理の退廃の現象というのは、特に1990年代のバブルの崩壊後に起こってきた。それは高度経済成長の矛盾から生じた現象、今日は阿部先生がおっしゃってましたね。早くよくなりすぎたんです。したがって、それが原因で今の職業倫理の衰退が始まったんだということを一般の識者はよく論じます。ロータリーでも、そういうことを言う人が

あります。

しかし、私はそうは思わない。そういう表面的な、現象的な問題ではないと思います。先ほどから、物事の本質を見抜けと言ってるのはそこなんです。私は、そんな表面的な問題ではないと思います。問題は、一番根源的には何があるか。これは戦後、日本の教育が技術教育一辺倒になったことに原因があると思います。ここから、先ほどの今井先生の一番最初の話を、私が紹介いたしました話に戻ります。

この第1回のRYLAのときの話を、いろいろ申し上げました。そのときに、今井先生が、社会の動きと青少年の実態という話をピントヒッターでなさった。そのときにお話になったことが、鮮明に私の心に刻みつけられました。その中で、一番強く心を打ったのは何か。ポール・ティリーという神学者が、教育には三つの分野があると言いました。第1は何か、Technical Education、技術教育であります。第2は何か、Humanistic Education、人間がお互いに心豊かになろうよという教育であります。そして第3番目は何かInductive Education、これは、人間とは何かという、真実に招き入れるインダククトする、そういう教育だというのであります。

今井先生は、これを例に出されまして、昔、ソ連がスポートニックを打ち上げましたが、あのとき、アメリカは慌てたんです。そして、大学に行くと100万ドル儲かるよと言って、技術教育を奨励したんです。それで、日本もそれに従いまして、技術教育一辺倒になっていったんです。その結果、世界第2の経済大国を築き上げました。そこまではよかったです。しかし、その結果どうなったか。人間がお互いに心豊かになろうという教育、すなわちヒューマニスティックな教育、そして人間とは何かという真実に招き入れる教育、すなわちインダクティブな教育、こういう教育の分野が欠落してしまったんです。このように、戦後の日本は、技術教

育ばかりに専念したために、人間として大切なものは何かということではなくて、人間にはどれだけの能力があるかという、そういうことをはかる試験第一主義の教育が横行するようになりました。効率一辺倒の教育が横行してしまったんです。

昨日の話で渡辺和子さんが、自分は、今まで効率的に仕事をすることを教えられた。しかし、仕事に愛を込める、時間に愛を込めるということは、初めて教わったとおっしゃった。その当時の日本がまさに効率一辺倒だった。技術教育一辺倒で突き進んで、そして世界第2の経済大国をわずか30年にして築き上げたんです。

しかし、今、世界的な視野に立ってみると、世界の状況は人間個人を中心を置きまして、一人一人の人間の問題を考えなければならない状況になっておると思われます。技術教育というもの、テクニカル・エデュケーションというものから、もっと人間を大事にする教育、いわゆるヒューマニスティックなエデュケーション、そういうインダクティブな教育というものが求められておると思います。しかし、日本の現実は、まだ技術教育一辺倒、今日も阿部先生おっしゃってました、偏差値の教育に移っていってしまったんです。これが、現在のこの職業倫理が衰退した最大の原因だと私は思うんです。これは、私は第1回のRYLAで今井先生の話から教わったんです。そして、この真実に招き入れる教育というのは一体何かということを、ずっと私は考え続けていました。

しかし、なかなかわからない、抽象的なことですからね。いろんな人にも出会いました。先ほど紹介した、私の人生の師の一人、小堀憲助先生にも聞きました。先生には、ある程度具体的なことを教えていただきました。それは、先生がまだ小学生のころ、理科の先生がカエルの解剖の話のときに、人間がこの生きとし生けるものの一つ、動物の命をどんどん奪っておる。医学はどんどん発達した、それは結構だ、しか

し、その人間の幸せのために何千万、何億というモルモットや実験動物の命が奪われていっているんだよ。そのことを一体どう考えるのか。まだ小学生の小堀先生に、理科の先生が涙をぽろぼろ流しながら話されたんです。小堀先生は、まだ小学生でありますから、どう答えていいかわからない。だけど、そのときのショックがずっと先生の心にあって、考え続けていった。そして、大人になって、禅の世界に入って、そして長い時間をかけてやっとその解決をすることができた、自分なりの考え方を解決することができたとおっしゃってました。先生は英米法の大家でありますから、原理の世界に生きた人でありますけど、やはり、その心の世界もかなりわかる人がありました。

そこで私は、インダクティブな教育というものの中身の一つを、小堀先生は悟らせてくださったと思います。私はよくわからなかった。インダクティブな教育、今井先生から聞いたんだけど、これ一体何ですかねと尋ねたら、小堀先生はしばらく考えて、小学生の頃の思い出を話していただいた。結局、インダクティブな教育というのは、子供に人間とは一体何か、命とは何か、生きとし生けるものの命というのは何か、そういうものを考えなさいよと一つのテーマ、課題を与えて、それをその子の一生の課題として、その子自身に考えさせていく教育。そのことによって、人間とは何かという真実に招き入れていくんだと、それがインダクティブの一つの教育のあり方じゃないかなということを教えられたのです。

私は、RYLAで最初にその話を聞いてから、自分なりに、ああそんなものかなとわかり出すのに20年以上かかりました。小堀先生の話も聞き、それからまたいろんな人の話を聞きながら、ずっと頭にあった。それは、やはり最初に今井先生に31年前に聞いた、その第1回の先生の講義が、よほどインパクトが強かったんだろうと思います、頭にひっかかって忘れられな

かったです。小堀先生も同じように、大人になるまで、小学生のときに、その理科の先生に教えられたことが忘れられなかつたわけあります。それと同じことだろうと思います。やはり、私の人生の師とするにふさわしい人だなとも、私はそのとき思いました。

そんなこともありますから、やはり、これが人間の本質、物事を見抜いていくという事が大事、目先の現象とか対症療法的なことに走つたらダメなのです。今の日本の政治がだめなのはそこなのです。政治家に哲学がないから困るのであります。

今日も夕方、今井先生と長い間おしゃべりしていましたが、私は、中曾根さんぐらいまでですかねと言ったら、まあ、そうだねとおっしゃってましたけれども。やはり、あの時代の、中曾根さんも海軍の軍人でありますから、いろんな体験をなさっているし。それから、あの人もやはり東大を出ておられますし、やっぱり頭のいい人だし、それなりの考え方、哲学を持っておられました。人によっていろいろございますが、政治家に哲学がないのが最大の原因ではないかなとも私は思います。

戦後、日本は随分変わってまいりました。それを食い止めるのも、昨日申し上げましたように、昔の原理探求のロータリー、人間の心を大事にする教育を、ロータリーは取り戻さないといけないと思います。したがって、この倫理の衰退、職業倫理の衰退は、大変大事なことがあります、これも結局、日本の私たちが、この高度経済成長で豊かになった結果であります。実際、今日の阿部先生の話じゃありませんが、私なども中学生のときは、食べるものもなかつた。そして軍事工場へ行って働きましたが、結局、米は全然なくなり、大豆をかじっていました。そのうちに大豆もなくなつた。芋の茎を食べたり、大豆の搾りかすの豆かすを食べていました。我々、軍事工場でまだ十五、六歳の子供でしたが、軍事工場へ行って、ハンマーを持っ

てトンカチやった。あれでは戦争に勝てません。しかし、そういう思いをみんな体験してきた。

そして、戦後になって自由になって、いろんな物資が入ってきた。そして、国民みんな一人一人が、焼け野原で食うものもなかった。そのときに、みんなが必死になって働いて、そして、戦後30年にして世界中がびっくりするような成長を遂げた。そして、豊かになっていきました。そのために、物質的には大変豊かになりました。その物質的な繁栄に酔いしれまして、いたずらに金を求めて、倫理を忘れてしまったのです。それが現実であります。

なお、この倫理の衰退というのは、日本だけの現象ではございません。ロータリーの世界を見ましても、倫理の衰退というのは、疑うべくもございません。今、ロータリー100年の歴史を顧みましても、第二次世界大戦が終わる1945年までのロータリーには、昨日申し上げました、1915年、「全世界の職業人を対象とするロータリー倫理訓」、「ロータリー道徳律」が採択されて、職業の倫理というものが確立しておったのです。それが、終戦まで続きました。したがって、昔のロータリーは、職業奉仕の実践に非常に熱心がありました。したがって、1929年の経済恐慌、大パニックのときにもロータリアンは一人も倒産しなかった。しかし、今どうですか。恐慌になる前から、もう倒産がどんどん出てます。こんなことは昔はなかった、アメリカにもなかったんです。ところが、アメリカもおかしくなってきた。最近は、アメリカでも、優良企業だと言われておりました通信大手のワールドコム、それからエネルギー大手のエンロンまでも粉飾会計をやっております。これは、倫理の衰退というのは、日本だけの現象ではないようであります。

何年か前にR I の会長が言っておりました。戦後は、職業奉仕委員会を開いた記録がないと言うのです。ロータリーの世界でも、職業倫理の衰退を如実に物語っておると思います。

今、戦後の日本のことを言いましたが、アメリカを例にとります。アメリカも世界大戦に勝利をおさめたあと、ドルの支配と言われるすばらしい繁栄をしていったんです。そして、そのころアメリカによる世界平和だ、そういうことを意味する、パックス・アメリカーナという言葉も出てまいりました。

しかし、その豊かになった反面、物質的には繁栄したけれども、その結果として精神的衰退が始まっておったんです。アメリカも同じであります。したがって、今はどうでしょうか。一般に、アメリカから発しました金融危機に始まりまして、世界恐慌の恐れが出てまいりました。これも、やっぱり人がいたずらに金を求める結果であります。倫理の退廃というのは、疑うべきもありません。これからどのようになっていくのか、全く先が見えません。人の欲望の暴走というものを、どのようにして食いとめていくのか、大変難しい問題になってまいりました。

しかしこれは、もう倫理運動であるロータリーの干渉できる分野ではないであります。要するに、資本主義というものが爛熟いたしまと、それによって、職業倫理の衰退が始まりました。このことは、世界の分野を見ても否定することはできないのが現状なのです。このように、昔から、人がいたずらに金を求めて身を滅ぼした例は枚挙にいとまがありません。しかし、人が心を求めて、即ち倫理を求めて身を滅ぼしたことは、いまだその例を聞かないのです。そのためにも、目に見えない倫理というものを大事にしなければならないであります。

倫理というものは、一言で言えば愛であります。今、紹介しました1915年の全職分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓、あれを貫して流れるものは一体何か。Guy Gundaker(ガイ・ガンディカー)という1923年の国際ロータリーの会長は、その解説で言っています。あ

の道徳律を一貫して流れるものは、一言で言えば愛だというんです。そして、愛は先ほど申し上げましたように目に見えないもの。これほど大切なものはないんです。しかし、その道徳律は1980年の規定審議会、今井先生がガバナーになられた当時の規定審議会で廃止されてしまいました。そして、2001年、一業一会员制の原則という本当に大事なもの、これも廃止されてしまいました。大事なことをもう一つ申し上げておかなければなりません。一番大事なものをみんな失ってしまった、それがロータリー。しかし、これは何もロータリーだけじゃないのです。

沢庵禅師というすばらしい坊さんが、物の本質を見抜けということと同じようにおっしゃっています。ある人が、この沢庵禅師を困らせてやろうと思って、花魁を書いた絵を持ってきて、禅師にこの絵に賛を書いてくれと禅師に頼んだのです。禅師は、その絵を見て、立ちどころに賛を書きました。何と書いたか。「私は法を売り、祖師は、仏を売る。そして、末世の僧は祖師を売る」と書いたのです。

沢庵は一体何を言いたかったのかといいますと、その花魁の絵を見て、みんな商売で一番大切なものを売ってしまっておる。しかし、まだこの花魁は、自分の体の真ん中を売って、一番大事なものを売って、一切の煩惱を安んじておる。色即是空、空即是色、柳は緑、花は紅と書いたんです。そして、その後でその花魁のことを、池の水に月は夜な夜な通つておるけれども、後に心を求める。影も残さず落としてないよと、そういう歌を詠んだのです。花魁は、一夜明けるとたくさんの煩惱の月を送り出して、けろっとしておる。これこそ、煩惱即菩提だと言つたんです。皮肉もすごいものであります。

私の心を打ったのは、「私は法を売り、祖師は仏を売り、末世の僧は祖師を売る」ロータリーのことと同じかなと思ったんです。あれほど大事なロータリーの祖師、ポール・ハリスがつく

り出した一業一会员制の原則。そして、その当時のロータリアンが創立総会で決めた、規則的例会出席の原則。これは大事な大事な大原則であったはずでしたが、一業一会员制の原則は2001年の規定審議会で売ってしまいました。規則的例会出席の原則は、1968年以降の規定審議会のたび重なる改正によって、骨抜きになって、有名無実になってしまいました。どちらも一番大切な、なくてはならないもの、これを売ってしまったということになるんです。沢庵禅師は、そういう形で一番大事なものを売ってしまうようでは、世も末だよ、末世だよということを言いたかったんでしょう。我々もこの歌から、やはり学ぶべきものがあるだろうと、私は思います。

しかし、一たんは売ってしまった一業一会员制。規則的例会出席もなくなってしまった。しかし、これは、どちらも良質な思考であります。これは必ず時代を超越します。いつかまた、この現象の世界に復活してまいります。それはいつなのか、10年後か、100年後かわからない、1000年後かわからない。しかし、必ず復活することを私は信じております。それは、過去の歴史に学んで、それがわかるのであります。

ビスマルクが言いました。「凡人は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」と。

一つの例を言っておきます。紀元前3世紀から紀元後3世紀にわたって隆々と栄えた、あの古代ローマ帝国。あれは紀元後3世紀にある原因で突如として崩壊をしていきます。昨日、ソビエトの崩壊を言いましたね。あれは、一人一人の心に、国民の心の中にあるものが大事だと言つた。それと同じことです。古代ローマも、ローマの貴族が男性同士の同性愛がセックスの極地だといって、それにふけったために子孫を産むことができなくなつて、そして50年にしてローマの貴族が没落した。その後で中世の暗黒時代がやって来たという解説をする学者の先生もいます。その眞偽のことは別にしまして、ロー

マは武力で滅んだわけではないのです。倫理の退廃で結局滅んだのです。しかし、ローマ人は偉いです。あの滅亡する直前に、すばらしい法律をつくりました。ローマ法典であります。それは、確かに国も滅び、法典もなくなっちゃった。現象として目に見えるものは何一つなくなったけれども、良質な原理、目に見えない原理は、時代を超えて残っていくのです。

そして、それが1700年後の今日復活しております。それは、日本の民法の第206条、所有権の概念のところで、同じ原理、考え方が復活しております。所有権というのは、206条に規定がありますが、ものを自由に使用収益処分する機能をいうんだと。それと同じ原理が、古代ローマ法典にあるんです。1700年の時代を超えて、それが良質な原理であるがゆえに、今日にまた復活する。そういうものを受けとめる人があらわれたときに復活してくるのです。

そのことは、このロータリーの世界でも同じことがいえると思います。したがって、一業一会員制、これがなくなったからといってロータリーに悲哀を感じて、すばらしいロータリアンが何人かやめていきました。それも一つの方法かもしれませんけど、私はやめなかつたのはなぜか。これは、良質な原理は必ず復活する。だから、それを守っていく。それを語り伝えていかなければならぬ。どうするのか、それが例会を通じて、みんなが口移しに伝えていく。ですから、ロータリーには教科書がないんです。

禅の達磨大師から始まって、第二祖慧可（えか）、第三祖僧燁（そうさん）、第四祖道信（どうしん）、第五祖弘忍（ぐにん）、第六祖慧能（えのう）、へと順番に祖師の悟りの境地が続いていきます。そして、六祖慧能のときに、北宋と南宋とに分かれました。その南宋禅が日本に渡って、道元禅師始め、すばらしい人たちが受け継いで伝えていった。これを血脉に対して、法脈というのですが、法脈が厳然として続いて

いく。

この法脈というのは、禅の世界だけではありません。芸の世界にも法脈はあります。学者の世界にもあります。アメリカのハーバード大学の国際法のオーソリティでありましたディーン・ハイディングの法脈というのは有名であります。それから、芸の世界、歌舞伎の世界でも法脈はあります。そして、ロータリーにも法脈はあります。佐藤千壽の法脈、今井先生の法脈は、ここのRYLAで脈々と続いております。これも軽度の法脈、この法脈を大事にしなきゃならない。

禅の師匠は、自分の後継者を育てるときに、ほとんど一生かけて心血を注ぎます。寝食をともにしながら、口伝え、そして、人格に触れ合いによって悟りの境地を伝えていくのであります。これを一子相伝といって、これが現在までもずっと続いている。それと同じように、この法脈は大事にしないといけない。禅の指導者が、一番恥とするのは、その法脈が途絶えることなのです。後継者を育てられないことは最大の恥だというのは、結局、そこでみずから法脈が途絶えるからであります。そのために一生懸命やる。だから、ロータリアンも、法脈を伝えなければならない。

RYLAも同じことなんです。何のために3泊4日、寝食をともにして、みんながロータリアンと触れ合うか。やっぱりRYLAの法脈というものを伝えていかなきゃならない。それを伝えるには、教科書がありません。シェルドンの言うように、ロータリーは科学ではありません。あくまでも、体と体と、顔と顔を合わせながら、話し合いながら、そして人格の触れ合いで目に見えない、口で言えないものを伝えていくんです。その伝えていくのがロータリーなんです、RYLAの法脈なんです。それを伝えていかなきゃならないんです。そういうものを、やはり大事にしなければならないなと私は思います。

とにかく、私が言いたかったのは、物事の現象にとらわれずに、物事の本質をいつも見る目を養わなければならない。これがロータリアンであることの条件であります。そのために、やはり、目に見えるものに目移りするんじゃなしに、いつも、物事の本質は何か。そして、人の出会いを大事にして、人ととの触れ合いから、いつも何がしかのものを他人から学び取るという気持ち。これを忘れてはだめだろうと思うし、そういうことをまたRYLAの受講生の人たちにも伝えてほしい。また受講生の人たちは、またそれを地域社会の人に伝えてほしい。そのようにして、ロータリーがShareされていく。Share the Rotaryというのはそういうことなんです。そこから、ロータリーの拡大というのも始まっていくんです。

ただ、ガバナーが拡大しろというからクラブをつくる、そんな問題じゃないのであります。なぜ拡大が必要かという一番根本のところから説いていって、はじめて、皆さんクラブをつくりましょうと言ったら、みんな動くのです。その物事の本質を言わないで、現象面ばかりに目がいって、会員が減ったから会員増強をしようよというだけでは、だめだと思います。それから、ロータリー財団のお金が集まらないから、寄附を強制しようよと。こんなことでは、金は集まりません。だから、物事の表面の目に見えるものにまどわされないで、いつも本質を見る、見抜く。私もなかなか、実はそんなことを言いながらわからない。だから、いつも考へてから、私も講義の度にどんどん言ってることが変わるものであります。だけども、それは大事だと思いますし、それからロータリーというのは、大変すばらしいところ。いろんな人がいます。そして、それぞれいろんな考え方を持っておる。だから、ロータリーは魅力的なんです。それをみんな、学び合うというのが大事であります。

私は、色々な人の意見にこだわりません。あ

なたの考え方もいいでしょ。こちらの考へてのもいいでしょ。だから時々、私は、それもロータリー、これもロータリーと言います。そしたら三木先生が怒る。そんなこと言ってたら、ロータリーがめちゃくちゃになるとね。だけど、私はそうは思わない。みんな違ったものを持っておって、それぞれの個性を出していくからいいであります。表面的には、あんなむちゃなこと言うやつがおる。あんなのはロータリーじゃないという人がいるかもしれません。だけども、それもロータリアンなんです、私たちの仲間なんです。そういう人も大事にして、それを包摂していく、仲間にしていく。それがロータリー。今井先生を見ておられたら一番よくわかります。

あんなに意見が違うのに、いつの間にか今井先生と話していると丸め込まれてしまうんです。不思議な力を持っている。それは、やはりあの人の包容力、人間的な力なんです。私なんかも、それに丸め込まれた方なんです。

大体、私は、このRYLAには大反対の筆頭だったんです。今井先生が、RYLAをやろうと持てこられた。それで、私はそのときの青少年奉仕委員長だったんです。青少年の地区的委員さんを集めました。いろんな意見が出てきました。ロータリーはメニューが多過ぎるじゃないか。ロータークトもよう育てんのに、また今度RYLAか。しかし、賛成だという人もおるのだから、一度できるものかどうか委員会を開こうじゃないかと、私は投げ出したのです。委員はどうするんだというから、それは、ときのガバナーが選んだらしいじゃないか。そこで、ガバナーが選んだのは、私と今井先生と山村徳太郎さん、西宮クラブです。それから、高木さん、神戸須磨ロータリークラブ。これは兵庫県のボーイスカウトの理事長をやっている人。それからもう一人は、神戸クラブの小林さんの5人が選ばれた。それが、RYLAをやるべきかどうかという会議をしましょと。それで、今井

先生と5人でやって、私は反対の頭目であります。反対もいました。だけども、いろいろしゃべってるうちに、いつも間にか今井先生に丸め込まれちゃって、結局、それもいいなということになってきて、私も賛成しちゃったんです。しかし、私はそのときに条件を出した。これは、もともとRYLAというのは、決議23の34号からいったらちょっとおかしいから、1回だけですよと。1回だけなら私は賛成だと、そこまで折れました。そしたら先生は、「ああ、いいよ。1回、試しにやろう」と。1回やった。ところが、大成功でね、やめられなくなっちゃった。それが31年間続いちやった。

あの人は、そういう不思議な包容力を持っている。これは一言で言えば、今井先生の人間力。つまるところは、愛の力であります。そこにはやはりキリスト教の信仰がある。その辺のところは教えられました。何もキリスト教だけが絶対じゃありませんと、今井先生もおっしゃっておられる。ほかにも、今の新党だって私は引かれるところがあるんですよと、今井先生はおっしゃっておられました。禅宗がいい例です。禅宗は、決まった教典を持たないのであります。だから、安行さんは、禅宗の僧侶だけど、YMCAのメンバーです。非常におもしろい。禅宗は、そういう特定の教典を持たない。だから、どんな宗教でもいいんです、キリスト教でもいいんです。要するに、自分の魂を磨く、ひたすら座禅によって磨いていく。そして、自分自身が仏になる。いわゆる悟りの境地を開く。これが大事なのです。

だから、これはロータリーと同じです。ロータリーにも教科書がありません。立派な人が色々と書いています。しかし、あれは、単なる手段。目的は、ロータリーという目に見えないもの、それをお互いに例会で、いろんな人にお会いして授かっていくんです。そういう場がロータリー。だから、ロータリーの例会は、人生の道場だと米山先生がおっしゃった。あの意味は、そこなん

です。人生の道場だ、ああ、そうですかとみんなしこまっている。本当に、どういう意味かということまで考えない。表面的な現象だけ受け取って、言葉だけ受け取って、それでロータリーを理解しようとするから、ロータリーの本当の心がわからないから、先ほどのペルソナと同じ。私はだれでしょうと同じ。ロータリーとは何かと言われたときに、目に見えないものだから答えられない。科学じゃないから、いかに理論的に説明したって、究極のものはわからない。

今日は、今井先生とお話ししました。命というもの、どうなっておるかということはわかるけれども、命をつくることはできない。だれがつくったのか。それは、この宇宙をすべてある大いなるもの、私はそれを神と呼びます。今井先生も神と呼んでおられます。同じなんです。人間にはつくれないんです。だけど、厳然としてあるんです。そして、私はそのときもちょっと言った。どうも、法律が教育が悪いのか、私権の享有は出生に始まるという規定が民法の第1条にあるんです。人間の権利というのは、お母さんの体内から赤ちゃんが生まれたときに権利の享有が始まる。だから、そこから命が始まっている人はたくさんいる。だけど、それはおかしい。実は、その胎児のときから命はある。その胎児の命がどこからきたのかといったら、お母さんから引き継いでいるんです。じゃあ、お母さんの命は、もう一つ、その親から引き継いでいる、その親もずっとたどっていきますと、先祖は猿だとか、その先は海草だとかいうように、ずっとつながっていくんです。最後どこへいくの、目に見えない、宇宙のどこかでつくられたんです。それはわからない。だから、それはずっと続いている。そして今、私の命になり、私が死んでも、この命はもう私の子孫につながっていっております。未来永劫につながっていく。初めがわからない、だれかがつくれた。どうしてつくったかもわからない。こ

れが命なんです。

だから、人間は生きたり死んだりします。だけど、命は死なないんです。命は未来永劫続いていって、どこから始まったかはわからない。まだ、いまだかつて断ち切れたことのないのが命なんです。そういう命とは何か、その真実に招き入れる教育、Inductiveな教育、今井先生の講義にはそういう深い意味も含まれているということは、私は最初に教わって、それから大体20年ぐらいかかるってます。私は。なかなか覚えが悪いですから、理解ができないんですが。だけど、R Y L Aで、今井先生に出会ったおかげで、そんなことをわかる契機にもなりました。明日、命とは何かというテーマがあるようですが、若い人たちがどんなことを言うのか知りませんけれども、命というのは、未来永劫に続いてきて、一回もちゃんと切れたことのないものが命。そして人間は死んだり生きたり死んだり生きたり、それは肉体が死ぬだけでありまして、命は絶対に絶ちきれない。だから、命は大事にしなければならない。そして、その命は、人間だけではなくて、生きとし生けるものすべてが命を持ってるんです。だから、何年か前にR I の会長が、人類の幸せとか、人類皆幸せになるとか、人類の思いやりとか、……説きました。しかし、私は、これは違うだろうと思いました。人類の幸せしか考えないのがロータリーか、ロータリーはそうじゃないだろうと。先ほどの実験動物の命の問題もあります。Inductiveな

教育も受けたのであれば、人間というものは、人類の幸せを願うのではなくて、この世に生きとし生けるものすべての命を思いやることを考えなきゃならない。だから、キリスト教の一神教もいいだろうと思いますけど、日本人の多神教の万物の生命が山川草木の隅々にまで命が行き渡ってるんだよと。それを慈しむ心を忘れたらだめだよと。そういうことを説きました。そのInductiveな教育、命とは何かという真実に招き入れる教育がなくなったために、今、子供が親を殺し、親が子供を殺す。こんなことは、昔はなかったんです。それから、実験動物の命もむざんに奪っていく。草をむしり取ったって、何とも思わなくなっちゃった。そういう麻痺が始まってきて、そして、これもやはり人間が倫理を忘れた、一つの現れですね。この暴走をどのようにして食いとめるのか。お医者さんなんかは、命にかかわる仕事をしておられるから、大変真剣に考えられるテーマだと思うんです。お坊さんもそうだと思います。お坊さんは、安行さんなんかは、悟りを開いているから、あんなこと言っておるわいと笑っているけれども。だけど、大事な話あります。

そういうことを最後に申し上げまして、私の本当につたない話、飽きもせずに居眠りもせずによく聞いていただきまして、心から感謝を申し上げます。

御清聴、ありがとうございました。





会場風景



ソング練習



AED講習

人はなぜ学ぶのか? — 親と子、共に生きる —

バイマー ヤンジン 氏

チベット声楽家



プロフィール

● チベット・アムド地方出身

名前はチベット語ではベマヤンジェン、「ハスの花にのった音楽の神様」の意味。

● 厳しいチベットの大自然に育まれた力強い歌唱力とそのみずみずしい感性で何千倍という競争に勝ち残り、中国国立四川音楽大学に入学する。

● 大学では西洋オペラを専攻。卒業後同大学専任講師として教壇に立つ傍ら、中国各地で数多くのコンサートに出演。

● 1994年来日後、日本でただひとりのチベット人歌手として、チベットの音楽、文化、習慣などを紹介するため全国的にコンサート活動を行なう。

● 1999年夏にはアメリカのアーカディ音楽祭に登場、ニューヨーク国連本部コンサート公演も果たす。同年NHKのドキュメンタリー番組でも取り上げられる。

● ユーモアたっぷりの語り口で、日本とチベットの文化の違い、家族のあり方などを論じる講演も多くの人々の感動と共感を呼び、教育関係、企業、学校等からも高い評価を得、テレビ、ラジオで度々紹介される。

● 故郷の子供たちに教育を!とはじめたチベットの学校建設活動も大きな成果をあげ、今では9つの小学校とひとつの中学校が開校、日本とチベットの子供同士の交流も積極的に行なっている。

● 2001年 1月

朝日新聞の「天声人語」に取り上げられる。

● 2001年10月

大阪市より社会で活躍している女性に与えられる「きらめき賞」を元シンクロ全日本チーム監督の井村雅代様と共に受賞。

● 2003年10月

教育にかける思いを単行本「こんにちはバイマーヤンジンです」にまとめ、致知出版社より刊行。

● 2003年11月

加藤登紀子さんのプロデュースで念願のファーストアルバム「チベットのこころ」を発売。

● 2003年12月

「徹子の部屋」に出演。

● 2004年 6月

NHK主催、作曲家宮川彬良総指揮による「アジアハートフルコンサート」にて五木ひろし、谷村新司と共演。

● 2005年

長男を出産。1児の母となる。

● 2006年11月

広島国際平和会議にて三名のノーベル平和賞受賞者に歌を捧げる。

● 2007年

拓殖大学客員教授になる。

● 2009年

新潟県長岡市より人材育成に大きな成果をあげた人に与えられる「米百俵賞」を受賞。

草原地域には学校がないところも多く、母も学校に通えなかったため、今も字が読めません。手紙を書けないのはもちろん体の調子が悪くて病院に行っても、渡された薬の処方箋が読めません。その苦い体験のなかで、母がもっとも衝撃を受けたことがあります。

ある日、母は病気の治療のため、都会に出ました。たまたま公衆トイレに行ったのですが、男・女と書いてある字が読めず、男性トイレに入ってしまい、中にいた人にひどく罵られたのです。体が震えるほど悔しくてしかたがありませんでした。字が読めないため、他にもたくさんつらい思いをしました。それだけに「自分達はどんな苦労をしても、子供達は絶対学校に行かせる」と決心したのです。

そんな強い思いで両親は町に定住し、雑貨店を開きました。でも何代にもわたった放牧生活をいきなりやめるわけにはいけません。8人の兄弟のうち1番上の兄がすべての家畜を引き継ぎました。ですから兄だけは小学校さえ行くことが出来ませんでした。大学まで出してもらった私は本当に幸せです。教育を受けたおかげで私の知識、視野は広がりました。日本に来てからは、それまであまり意識しなかった故郷チベットに対する思いも一層強くなっています。

あるときテレビを見てびっくりしたのは、北海道の牧場が牛の乳搾りをすべて機械で行っていることでした。「今も手で搾っている故郷の親戚や村の人たちに、これをプレゼントしたらどんなに助かるだろう」と思い、母にその話をしました。すると「無理だよ。村には電気がないし、そのうえ皆、字が読めないから、機械なんかよけいに難しくなるだけだよ」と言われてしまいました。とてもショックでした。母の字の読めない辛さはわかっているつもりでしたが、教育がここまで生活に、そして人の人生に深く関わっていることをあらためて知り、教育の大切さを痛感しました。

「いつかオペラで世界の舞台に立ちたい」というのが、私の夢でした。でも最近「音楽鑑賞」「国際理解」等いろいろなテーマで日本の小、中、高等学校で公演し、子供達と交流する機会が増え、いろいろと考えるようになりました。「日本の子供たちってなんて幸せなの」と思うようになったのです。素晴らしいいっぱいの学校にはきれいな教室があって、もちろんペンもノートもいくらでもあります。室内体育館、そしてプールまでそなえている学校がほとんどです。

その一方で同じ子供なのに、たまたまチベットに生まれたため、小学校にさえ行けない子がたくさんいるのです。そのようなことを考える

第31回 RYLAセミナー

2009.3.26~3.29 於:神戸YMCA余島野外活動センター
主催: R.I.第2670地区・R.I.第2680地区RYLA委員会



と、どうしても自分一人の夢よりも、故郷のために役立ちたいという使命感のほうがどんどん強くなってきました。たとえ小学校だけでも通えるようになったら、そこで学んだ多くの知識がその子供たちの将来、そしてチベットの将来にどんなに役に立つことでしょう。

遊牧民は草原を転々と移動しながら暮らしています。そのうえ一家で何百頭もの家畜の世話をしなければいけません。子供ももちろん大切な労働力です。ですから、その生活に合った学校を建てないと学校の建物はできても子供達は通えません。そこで、建物も授業の仕組みも遊牧民の生活に合うように作っていきたいと思います。

世界で一番小さい単位は家庭です。家庭から、地域が生まれて、社会が生まれて、そこから国がでて、地球があるのです。

結局、家庭、家族が基本の基本です。家を建てるのと同じで基礎が一番大切です。その基礎が崩れていくと、社会はいろいろな問題が出てきます。

日本はいま非常に豊かです。豊かなのは決して悪いことではありません。チベット人も豊かになりたくてどんなに必死に努力をしているか。しかし、なかなか豊かにはなれません。

日本では先人の方々が命をかけて、こんな素

晴らしい社会を創ってくれたのです。だから、その豊かさに対してまず感謝の気持ちを持たなければいけません。

私が皆さんに伝えたいことは一つだけです。それは、自分を生んで育てくれた親、民族、国に感謝し、誇りを持ち、そして恩返しをすることです。感謝の気持ちさえ持てば、きっと幸せに気づくはずです。どんなに恵まれていても、文句ばかり言っていては、心は穏やかにならず、幸せにもなれません。

日本は国土もそれほど広くなく、資源に恵まれているわけでもありません。けれども、早くから教育に力を注ぎ、国民全体の素質を高めてきました。豊富な知識と高い技術によって、日本は世界の経済大国になりました。また自らが豊かになるだけではなく、青年海外協力隊のような人的支援、ODAのような物的支援によって、たくさん困っている国や人々も助けています。

チベットの社会がここまでになれるのはいつのことでしょう。もちろん私一人の力ではどうすることもできないかもしれません。でもその明るい将来のため、皆様に応援していただきながら、私はひとりのチベット人として一生かけて頑張っていく所存です。



「なぜチベットに学校が必要なのか」

現在チベット自治区をはじめ青海省、四川省などのチベット人居住地区にはまだまだ学校に行けない子供たちがたくさんいます。その最も大きな理由が未だに学校のない地域があるということ。通いたくても通えないという現状があります。

また学校がある村でもその多くが「教学点」といわれる日本の昔の寺子屋みたいな学校で、正規の小学校ではなく、学年も3年生までしかありません。その子供たちのほとんどは3年間の学業を終えると、働くためにすぐに社会に出てしまします。

チベットには優秀な子供たちがたくさんたくさんいます。子供たちは皆「ダイヤの原石」です。将来のチベットを担っていくのは彼らなのです。ただダイヤも磨いてやらなければただの石、永遠に輝くことはありません。子供たちもいっしょです。学校に行くことによって、はじめてたくさんの知識を吸収し、視野を広げ、思考をめぐらし、自分がなにをするべきか考えることのできるりっぱな人間になれるのです。

チベットの子供たちが自立できる人間、主張できる人間、他人を思いやり、故郷のためにつ

くす人間に育ってくれることを願って、私たち97年にチベット学校建設推進協会を設立、小学校の建設運動をはじめました。

バイマーヤンジン氏のブログより

「初めての小豆島」

一昨日、昨日と小豆島の離島、余島に行つてきました。

ロータリークラブライラの青年研修セミナーでの講演だったのですが、講演前日のキャンプファイヤーが素晴らしいでした。

歌って踊るといった催しではなく、静かに炎を見つめ、RCの方々の話を聞き、どのような目的を持ち、どのように行動していけばいいのか自分自身を見つめなおす素晴らしいプログラムでした。

私も参加させていただき、とても有意義な一時を過ごさせていただきました。

第31回 R Y L A セミナー

2009.3.26~3.29 於:神戸Y M C A余島野外活動センター
主催: R. I. 第2670地区・R. I. 第2680地区 R Y L A運営委員会



人とのかかわり方

フォーラムリーダー

深川 純一 氏



○司会 それでは、フォーラムの方に入ります。フォーラムの司会をかわっていきたいと思います。

○深川純一 皆さん、大変お待たせをいたしました。ただいまから、フォーラムを始めたいと思います。

フォーラムのやり方は、昼、お話し申し上げたとおりです。自分の思ったことを、どんどん、怖めず憶せずおしゃべりになってください。それがみんなのためですから。みんながそれを聞いて、お互いに学び合って、みずからを高め合う、それがフォーラムであります。そして、結論は出しません。それから、御自分と違う意見が出てきても、採るべき意見は採ったらしいし、あれは、おれには合わんと思ったら採らなくていいです。しかし、何か教えるものがあるかもしれない。できるだけ、受講生の皆さん方を主体に進めたいと思います。

これはあくまでも皆さん方の R Y L A であり、皆さん方のフォーラムであります。後ろにおられるロータリアンのためのものではございませんので、ロータリアンに気遣いなく、ロータリアンも皆さん方も完全平等対等の立場ですから、言いたいことはどんどん言ってもらって結構であります。そのように、自由なフランクな気持ちで進めていきたいと思います。

(順番決め)

○深川純一 それじゃあ、最初 A 班の方からバズセッションでまとめたところを、発表していただきます。

最初に申し上げておきます。これは、あくまでも最初の言いたいとするポイントだけはずつと書いてもらいますが、それについてわからないところがあれば、この点は、これはどういう意味ですかとか、そういう質問は結構ですが、それについての議論は、後になります。まず論点の発表をすべて終え、これぐらいの論点が出てきた、みんなの考え方がああいうものだ、その間に、皆さん方も頭を整理して下さい。そして、私どもの方で、たくさんあるポイントの中の数ポイントだけ重点的にピックアップして、その一つ一つについて、今度は皆さんの意見を聞いていきます。それに対して、いろんな意見を出してください。そのときが意見の発表の場です。A 班から順番に、最初、論点をすべて発表してもらい、わからないところがあったら、そのことだけ聞いてください。それで、一応、発表を終えてから、その後でディスカッションの時間に移ります。

じゃあ、A 班からお願ひいたします。

バズセッション報告 A班

○A班 それでは今から、A班の人とのかかわり方について話し合ったことを発表したいと思います。よろしくお願ひします。

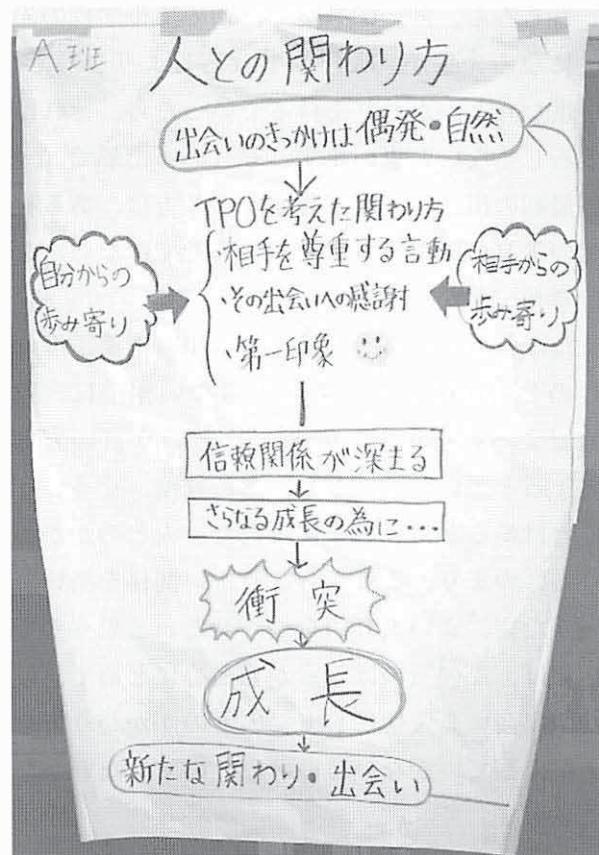
まず、人とのかかわり方といつても、ちょっとテーマが幅広いので、実際、このRYLAのセミナーで、A班の僕たちがまず出会ったところ、この三日間。人と僕たちがかかわったことを、具体的にちょっと劇にして具体例を出しながら、考えたことを発表したいと思います。 それでは、まず出会いの部分を再現してもらいたいと思います。1日目、出会いの部分です。よろしくお願ひします。

(再現劇)

こんな感じで二パターンやってもらいました。最初は、なかなか自分からも声をかけれない。声をかけれない子と、声をかけてほしいけど、なかなか愛想よくできないパターンと、自分から声をかけてみようとチャレンジする人と、声をかけてもらおうと待ってても、ちょっと笑顔で愛想よく待ってみようというパターンをやってもらいました。

最初、このRYLAの研修で、僕たちは、いろんなきっかけがあったと思うんですけど、31回目のRYLAに参加したというのは、このメンバーが集まったというのは偶発とか自然的なものですね。例えば、僕が来年のRYLAに参加してたら、このメンバーと一緒に発表することはなかったというところで、最初のきっかけというところは偶発、自然的なものかなと考えました。

あと、やっぱり人とのかかわり方ということで、すごく範囲が限定抽象的で難しいなということで、私たちのA班は、やはり人とのかかわり方というのは、出会いがあって、その後に、



その入り口があってさらにまた深まっていくんじゃないかと段階をおいて考えました。今、劇の方で、一番最初のこの自然に、例えばこのRYLAのセミナーに参加した我々ということで、この自然の出会いをちょっと劇で見てもらったんですけれども。

じゃあ、その一番最初に初めて出会った、その出会いの入り口において、我々は、果たして、本当に素の自分をさらけ出せるのか、本当に裸のコミュニケーションがとれるのかというと、やっぱり、我々は、それを一番最初に初めて初対面の相手にそうすることはできないと思います。といいますのも、我々は20歳も超えておりますので、よくも悪くも社会的な常識であったり、見栄であったり、いろんなものがかかわってきて、TPOというのにどうしてもとらわれ

て、一番最初は行動してしまうのではないか。人とかかわりをもってしまうのではないかというふうに考えました。

もちろん、例えば職業で、初めて小学校の先生になる先生が、大学生を教えるような形で、子供たちとかかわりを持っていったら、それはよろしくないと思います。そういう形で、一番最初の出会い、人とのかかわり方は、ある程度のT P Oに左右されてしまうのではないかなと考えました。

ただ、もちろんそれは相手の出方次第、海のものとも山のものともわからない相手に、自分でよろいをかぶってしまうという言い方はちょっと悪いですけども、ある程度、そういうことはあるとは思います。ただ、人とのかかわり方、つまり、これからよりよい関係を築いていきたい、よい入り口をつくりたいと思うのであれば、この三つはしっかりと心にとめて、最初の出会いを大切にして、人とのかかわり方を大切にしていかないといけないのではないかなと思いまして。

まず一つ目は、相手を尊重する言動ですね。例えばそれが、年下の人であろうとも職業がどんなん方であろうとも、性別がどうであろうとも、相手を尊重する言動をとるべきだ。

それから、二つ目、これはちょっと初めの出会いは自然、偶発的なものというところにもかか

わってくるんですけども。やっぱり、どんな相手であれ、そのときに出会えたという出会いに感謝する気持ち、その出会いを次につなげていこうという前向きな気持ちと感謝の気持ちが大切ではないかということが2点目。

最後、三つ目は、第一印象、横にちょっとニコちゃんマークを書いてますけれども、やっぱり第一印象ですよね。取っつきにくくしている人よりは、やっぱりにこにこ笑っていたり、先ほどの劇でもありましたけれども、一番最初の二人はどうしても、どうなんやろう、どうなんやろうとやってるまま、離れていましたが、その後の劇では、愛想のいい人いるわ、ちょっと話しかけてみようということで、そこで人とのかかわりが生まれてきているわけなので、そういう意味で、やっぱり第一印象、特に笑顔が大事なんじゃないかなと。この三つを心にとめながら、ただ一番最初の、初めの出会いなのでT P Oを考えたかかわり方というのにどうしてもなってしまうのではないかなと思いました。

そのかかわり方なんですけれども、先ほどの劇にもありましたが、自分からそういったことができる人もいれば、もちろんできなくて相手からも歩み寄りを待っているという人もいるとは思います。この3点を心にとめて、まず最初の出会い、入り口を大切にしていくのが、人と



のかかわりの第一歩ではないかなと考えました。

今までのは出会いで、まだ深いところまでいってないんですけど。それが、また仲よくなつていって、友人とか恋人、家族となると、また、こことはちょっと違う面が出てくるというので、また一つ分けて考えたところがあります。

友人だったり恋人だったりというのは、上辺だけではつき合えないということで、もう相手が言ったことに対して、同意だけしていてもだめだし、でも否定だけしていてもだめだし。その相手のことを考えて、相手の気持ちになって考えていくということをしていかなければいけないことに、友人とか恋人になるとなってくると思うんです。

そして、昨日私たちA班が話し合って、命とか幸せについて講義を受けて、どう考えたかということについて、かなり長い間、心の中で思っていることを本気で、みんなで話し合いました。それで、この短い期間だったんですけど、その中で信頼関係というのができてきたんじゃないかなと思います。それは、やっぱり心をちゃんとさらけ出して、自分の中身をさらけ出して言えたから、それができてきたんじゃないかなと思います。でも、さらけ出してしまうと、衝突というか、意見がぶつかり合うということも避けて通れないことで、その衝突を避けていては、きちんとした友人とか恋人だったりの関係が、本当にいい意味で築けないと思います。

今から先ほど、私たちが経験したシチュエーションを再現してみます。

はい、お願ひします。

(再現劇)

再現してもらったんですけど、さっき、本当に1時間前の出来事です。この発表、劇交えてしようか、それとももっと何か劇じゃなくて、ちゃんと説明を入れながらやった方がいいん

じゃないかというところを、衝突といいますか、意見の交わし合いというか、そこをやりました。

やっぱり出会いから自分の心の内面を見せるまでって、なかなか時間がかかると思うんですけど、このRYLAのプログラムを通して、そこまで自分の内側を話せるようになつたりとか、意見を直接伝えられるようになったりとかというところができるようになったと思うんです。それで、私たちは最終的な成長につながるんじゃないかなと。実際に、私たちこのA班のかかわりを通じて、ちょっとずつ成長しているんじゃないかなというところを感じています。

最後に、新たなかかわり、出会いというところなんですが。このRYLAに来るきっかけを与えてもらったのは、皆さん、それぞれお知り合いの方とか上司の方とかいらっしゃると思うんです。その方の、実は出会いが前提としてあって、その人と出会っているから、またこの場で31回のRYLAのセミナーの仲間に出会えたと思うんです。なので、前提として、まずお知り合いの方と出会いがあって、さらに出会いは出会いをつくって、この31回のRYLAのセミナーで出会った出会いがまたつながりになつて、新しい出会いのきっかけにつながるんじゃないかなと私たちA班は考えました。

補足説明などありますか、大丈夫ですかね。

以上で、A班の発表を終わりたいと思います。ありがとうございました。

○深川純一　　ありがとうございました。

今、御説明いただきました中で、この点がわかりにくいとか、この点はどういうことか確認したいという事項があったらおっしゃってください。議論は後でしますからね。質問の時間です。わからないところがなければ、もう次へ進みます。言わんとしているところは大体わかりましたか。

次はD班お願ひします。

バズセッション報告 D班

○D班 今から、私たちD班の発表を始めたと思います。よろしくお願ひします。

まず、私たちは自己と他者との関係性から見た人とのかかわり方ということについて、みんなで議論をしてみました。

この図の説明なんですが、まず、これは自分とその周りの他者であったり、物であったり、機関であったりとの関係性をこの図にしてみました。多分、すごくわかりやすいと思うんですけど。この矢印、ここ相互してますね、これ全部、相互作用。この矢印というのは、その自分とか、その周りの存在というのも、全部相互作用してるんじゃないかなというのと、それとあと、この矢印の一つ一つの意味は、コミュニケーションとか、出会ってコミュニケーションをとるという意味のこの矢印です。

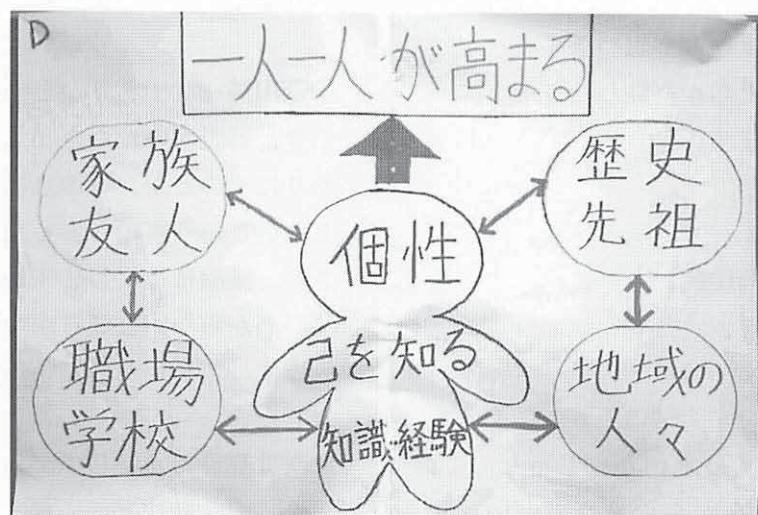
まず、私たちの結論から言うと、ここの部分、一人一人が高まることというのが、人と人とのかかわり方についてすごく重要なんじゃないかなというのが、まず初めに結論として出ました。まず、この内面はとりあえず置いておいて、周りから、ちょっと説明していきます。

この家族とか友人ですね、こことの内面との

かかわり。こういうのは、やっぱり家族とか友人、お父さんとかお母さん、兄弟であったりとかいろいろあると思うんです。今日とか昨日の講義の中でもあったんですが、今、そのお母さんと子供の関係というのが、ちょっとおかしくなってきてるんじゃないかなと思います。母と子というのは、愛、無償の愛というのが大前提だと思うんです。その愛というのは恋愛の恋というんじゃないなくて、見返りを求めない愛です。その今、関係性というのが、なかなかこの社会的に難しくなってきてるのかなという議論が出ました。

次、この職場とか学校なんですけれども。この先輩とか後輩とか、先生とか上司、部下とかの関係ですね。これは、皆さん、多分、今帰った中でも、そういうところでの他者との関係というのはあるんじゃないかなと思います。

次、歴史とか先祖ですね。これはどういうことかというと、本を読んだりとか家族から先祖の話を聞いたりとか、日本の歴史の話を聞いたりとかというのも、そういうのも自分との、内面との関係性という中ではあるんじゃないかなと思います。ここにはやっぱり、感謝とか尊敬





とか、そういう念を込めて自分で抱いていくんじゃないかなと思います。

また、自分が住んでいる地域の人々、お隣の人とかコンビニの人、お店の人とかとかかわる機会があると思います。そういう人たちとも、いろんなところでの関係性があるんじゃないかなと思って、これは大きな意味での周りの部分として考えてみました。

次、内の部分なんですけど、私たちの班は、本当に、1日目も2日目もキャビンタイムがすごく充実していて、本当に毎晩いろんな意見が出たんですけど、今日もまたすごくいろんな幅広い意見が出て、それをさっきまで取捨選択をしながらやってたんですけど。ちょっとまとまらなかったので、ちょっと私が感じたことを言わせていただきたいと思います。

この2日間で、この図も通してなんんですけど、感じたことがあって、それは何事もつながっていて、この世にあるものは何事もつながりがあって、意味があるものかなと思いました。それはなぜかというと、大学で生命倫理学の授業を取ったときに、脳死のことについてちょっと勉強したんです。すごく興味を持って、その興味を持ったことで文献を読むことを始めました。その文献を読んでいて、すごくすばらしい教授にも出会うことができました。命って何かなどか、死ぬこととは何かということを私自身

考えていたときに、祖母がちょっと春休みに亡くなってしまって、すごく悲しかったんですが、その春休みに亡くなったというのも、また何か意味があるのかなと思いました。それはなぜかというと、学校があるときは、本当に学校と家とを行き来していて、全然、そういうことについて考える機会はないんですが、その2ヶ月間の春休みに、祖母が亡くなって、本当に死ぬことってどんなことだろうとか、どんな意味があるんだろうかというのを考えさせられて。そうすると、今度ロータリーのRYLAが行われるということで、そのテーマがまた命ということで、それにすごく私自身びっくりしたんですが。それに参加して、D班のメンバーに出会いました。

一日目の夜に、テーマが命ということで話し合っていたんですが、私の班は本当にいろんな職種の方がいらっしゃいました。医療関係に勤めている方がいて、その方は、尼崎の脱線事故のときに病院で働いておられて、もう亡くなる人と助ける人の、命に順序というのではないと思うのですが、その順序をつけなければいけないという何とも言えない思いですとか、あと生物学を勉強している学生も私の班にいて、その方は、実験をするときにマウスを無理やり病気にさせて殺さないといけないと。同じ命のあるものを自分の手で殺すというのは、すごい罪悪感

を感じていて、でも、それが教授とかは麻痺していて、もう、そういう同じ命を持つ者として見ていなくて、ただの物としてネズミを扱っているということに、すごくショックだったということを話していました。あと、保育の仕事をされている方もいて、その方は、親が虐待、子供に虐待をしていて、そういう虐待を受けて愛されないで育った子供たちに、どうやって命の大切さを伝えていくことができるのかということについて意見を出されました。

そういう話を聞いていて、すべてがつながっているように私は感じました。そのことをこのR Y L Aで考えることができたのも、社会にとってすごく意味のあることだったんじゃないかなと感じました。

何事も人と物事はつながっている。言葉というのは、人だけが持っているツールである。直接会って話すことが一番大切、メールとか手紙とかよりも、直接会って顔を合わしながら言葉を交わすというのは、すごい重要なことと。ゲームのR P Gとかありますよね。最初は勇者が一人で冒険していくんですけども、その勇者だけではどうしても敵を倒せないので、戦士であったりとか、魔法使いであったりとか、黒魔法、白魔法、いろいろありますよね。そういう自分にないものを補ってくれる存在というのと、またこういうところで社会の中で出会えるんじゃないかなということと。

やっぱり、このおのれを知ること。すごい重要なことを思います。自分の

100%を知ることって、さて、みんなできているんだろうかというのがあって。今の時代というのは結構満ち足りている時代だと思うんです。それを、足るを知るという言葉が僕は結構好きなんですけれども、みんな、今足りているものを知ったときに、何か見えてくるものがあるじゃないかなと思います。そのためには、いろんなところで幅広い、せっかくみんな、それぞれいろんな職業で集まつた人が出会っているので、幅広い知識、引き出しというのを持つことが重要というのと、それとあと、みんなそれぞれ、専門性を持った仕事であったり、学生であったりとかが集まっていると思うんですけども。その自分の中の専門性というのを高めることが重要じゃないんか、こちら辺ともかみ合ってくると考えています。

何が言いたいのかというと、もう1回、ここに結論に戻るんですけども。一人一人が高まっていくことが、その相互関係の中で重要なこと。そして、その一人一人を高めていくことが、その一人一人の集合体である社会全体というのを高めていくことになるんじゃないかと、D班は結論を出しました。

以上です。ありがとうございました。

○深川純一　ありがとうございました。

今のD班の御説明で、何かわからないところとか、はっきりしないところ、質問があったらおっしゃってください。

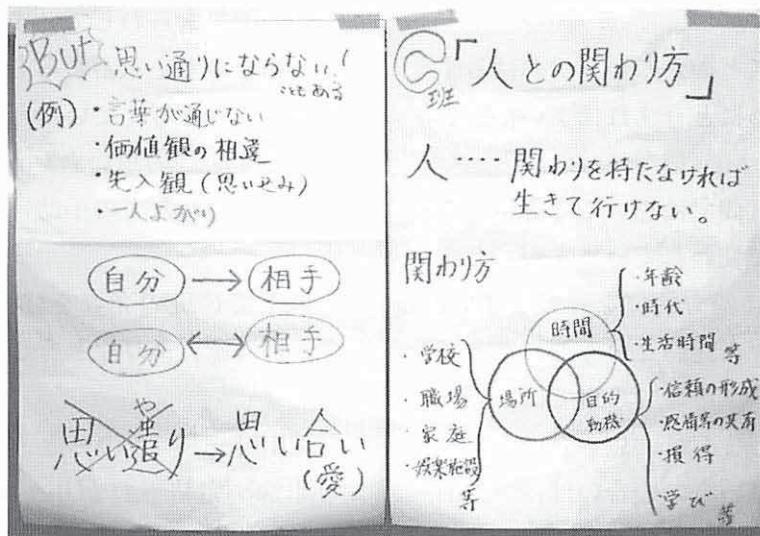
次はC班。

バズセッション報告 C班

○C班　C班は、人とのかかわり方について話し合いました。

まず、人とのかかわり方を考えるために、「人」と「かかわり」を二つに分けて考えてみました。

まず、「人」についてですが、人は親という人同士のかかわりから生まれ、人の手をかけなければ成長できません。また、新しい命をつくるにも、人のつながりが必要であるということ



から、人は人とのかかわりを持たなければ生きていけないというとらえ方をしました。そして、人とのかかわり方を三つの要素に分けてみました。この丸い図です。

これが時間と場所と目的・動機の三つです。まず、時間なんんですけど、これが例えば年齢、時代、生活時間など。例えば、戦時中や災害中の状況を含んでいます。次に場所なんですが、場所が学校、職場、家庭、娯楽施設などを含んでいます。次に目的・動機です。信頼の形成、感情などの共有、損得、学びなどで、例えば、感情の共有として、価値観の共有であったり、喜び、悲しみの共有ができるなどを含んで

います。そして、これらの三つの要素に応じて、人とのかかわり方が変わっていっています。

人とのかかわり方は、先ほど述べたように、時間、場所、目的を満たしたときに生まれますが、思いどおりにいかない場合もあります。例えば言葉が通じなければ、会話でのコミュニケーションをとるのが難しくなります。また、相手との価値観が大きく違いすぎると、これもまたコミュニケーションをとるのが難しいです。相手に対して、極端に違いすぎる先入観を持つてしまうと、これもまた障害になることがあります。これらをまとめると、ひとりよがりになってしまい、相手からすれば、ありがた迷惑



惑に感じてしまいます。

このような、人と人とのかかわりにおけるすれ違いを解消するためにどうすればよいか。C班では考えました。

結論としまして、世間では思いやりということが通常はよい意味で使われていますが、ときには、この図のように一方的になってしまい、ひとりよがり、ありがた迷惑という形になってしまいますことがあります。そこでC班では、思いやりにかかる言葉としまして、思い合いという言葉を提案します。思い合いの合いは、一方的ではなく、相手がどう受け取るか考えた上で、互いに思い合うことをあらわしています。

この図であらわしていますように、自分の考え方と相手の考え方、どちらも一方的ではなく、両者同じことを考へているということをあらわしています。この思い合いが、よりよい人間と、人と人とのかかわり方の手助けになると考へています。

以上でC班の発表を終わらせていただきま
す。御清聴、ありがとうございました。

○深川純一　　ありがとうございました。

非常に完結でわかりやすかったと思いま
すが、何か御質問ございませんか。

なければ、次。B班です。

バズセッション報告 B班

○B班　　今回のフォーラムのテーマなんですけど、今回は人と人とのかかわり合い方というのをテーマにされていました。ただ、この人と人とのかかわり合い方と一概に言いましても、いろいろありますて、人と人、マンツーマンのタイプや、人や会社、ほかの班の方は、ごく一般的な人と人とのかかわり方に関して論じてましたけど、私たちの方は、それはちょっと難しいんじゃないかなということで、B班の方では、自分たちの知人、実際に実在する人物との関係に対して、どのようなかかわり方をしているかということを考えて、意見を出し合ってみました。

その中で、B班はどういうことを議論しようかということを考えましたところ、実在する人物で苦手だと感じる人との関係において、そのままの関係を続けるか、関係を断ち切るかという、このままだと2択のように感じますけど、この中でどのようなつき合い方をするかということを考えました。何で苦手な人だけしか考えてないといいますと、常識的に考えまして、ウ

マの合う人、気持ちが既に通じ合ってる人とは、時々衝突することはあると思いますが、それでもいつかは分かり合えて、いい関係が結べると思うんです。やっぱり、人間生きていく以上は、例えば価値観とかさまざまな意見の相違によって、どうしても苦手をしてしまう人が出てきてしまします。

話を戻しますと、そういった人たちとは、どのようにしてつき合っていくかということを、意見を出し合いました。その結果、B班ではこのような3タイプの意見が出てきました。3タイプといったように分かれてしまっています。

まず、一つ目のパターンで、苦手だと感じている人との関係を続けると言った人たちは、どういった意見が述べられたかといいますと。お互いが歩み寄れば、人はいつか理解し合えると思うから、そういう人との関係を続ける。また、最初から好き嫌いで判断をしてしまうと、相手のよさがわからないし、自分の変わる機会、成長する機会を失ってしまうという、そういった機会をなくしてしまうから、続けていった方が、

よりよい人間関係といいますか、自分が磨けるんじゃないかなという、こういった意見をいただきました。

特に、下の方の最初から好き嫌いで判断してしまうというところは、先ほどのC班でしたかね、最後の方で、第一印象的なことが、その人と人との関係で大事だということを言ってたと思うんです。最初に見たときに嫌いになってしまったから、それ以降、相手の悪いところだけを見てしまった場合は、必然的に、人ととの関係は悪くなってしまいます。だから、例えば、相手との関係を続けたいときは、相手のよいところを認めて褒め合うことで、よりよい関係を結べるんじゃないかという意見を、この関係を続けるという意見を言った人から教わりました。

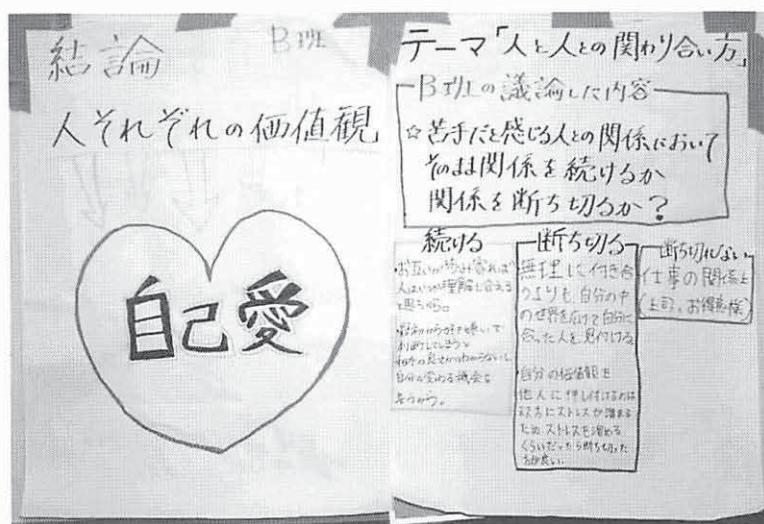
ただ、その中のこの続けると言った中で、どうしてこのような意見が出てきたかということを分析しましたところ、人はいつか理解し合えると思えるからという意見の中に、その人自身は、お互い理解することによって、お互いの知識を共有できるという、汚い言葉で言ってしまうと魂胆があるから、こういう意見を言ったそうです。魂胆と言ったら、ちょっと聞こえ悪いですかね。やっぱり関係を結ぶには、お互い何かギブ・アンド・テイクをしたいから、理解し

合いたいという意見をいただきました。下の方でも同じく、新しい環境を開くために、相手と仲よくしたいという、そういう人同士の要求が意見の中に出できました。

それでは次に、断ち切る方に関しての、人と人の関係を断ち切る方に意見した方の内容を述べていきます。こちらの方は、無理につき合うよりも、自分の世界を広げて、自分に合った人を見つけた方が有意義じゃないのかという意見が出ました。また、自分の価値観を他人に押し付けるのは、双方にとってストレスがたまるため、ストレスをためるぐらいだったら断ち切った方がよい。そういう意見をいただきました。これも、皆さん、多分経験があるんじゃないかと思うんですけど。やはり、無理につき合っていたら、心身ともに病んでしまったりするときが最近は多いと聞きます。

こういった意見の中で、どういった考え方で、そういうことを言ったかということを聞いていくと、やはり、自分で時間を無駄に使いたくないということや、ストレスで体を壊したくないという人たちが、こういった意見を言いました。

最後のタイプとしまして、断ち切れないというタイプの人がいました。これは、関係を続ける方に入ると思うんですけど、何で断ち切れな



いのかなということを聞いたところ、仕事の関係上、もし、このとある人物の関係を悪くしてしまうと会社が傾くという、そういった報告をもらいました。どういった人がいるかといいますと、上司やお得意様といった方です。こういったものは、社会的礼儀上つき合っていくしか仕方がないんじゃないかなという意見となります。

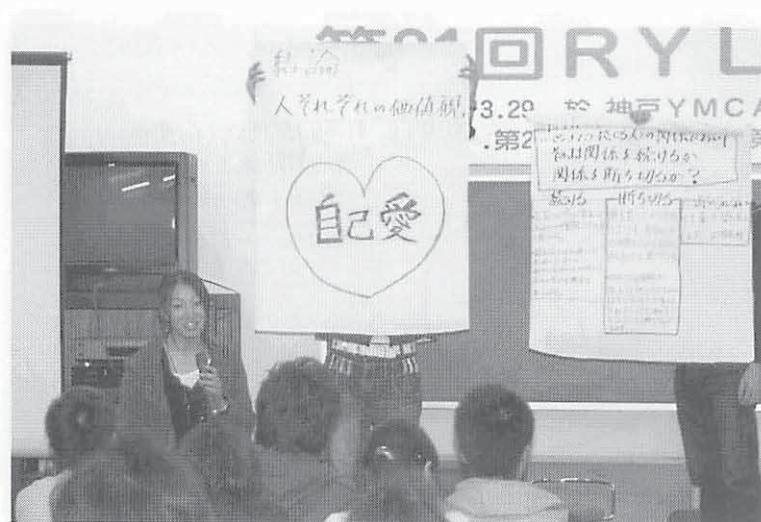
この意見に対しましても、背景には、自分の経済能力を失いたくないという要求があったようです。

それでは次に、こちらのような3タイプのパターンから、私たちの班の結論を説明したいと思います。

結論を任せられたんですけども、すごくかつちりとした説明をなされて。本当は、こここの続ける、断ち切る、断ち切れないという部分は、それぞれ、すごくいいエピソードが本当はありますて、それを全部話したいんですけど、ちょっとA班みたいに劇というのは思いつかなかったので、あれも見てていいなと思ったんですけど、それはちょっと間に合いませんでしたので。さすがに突発的にはできないので。ここは後で聞きたい人がいれば、ぜひ、B班の方に遊びに来ていただければ感動エピソードをお話しします。

結論にいきたいんですけど、この3タイプと

いうのがあって、私自身は続けるという方なんですけども。でも、ほかの人の断ち切るとか断ち切れへん、どうしても断ち切れないという、どの意見も、私は聞いてて、それは正しいなとすごく思うし。どこにもメリット・デメリットってあるんです。そういうのもほかの、B班ではやっぱりどれもそうやんなとなって、結論的に。だから人それぞれの価値観があるよねという、まとめきれないなという方になってしまったんですね。どれか一つにまとめようというよりも、やっぱりそれぞれの価値観を認めることができが大事なんじゃないかなとなりました。じゃあ、その価値観というか、こういうふうな考え方のもとにあるのは何かなと考えたときに、さっきもちょっと言ってくれてたんですけども。結構、最終的にやっぱり自分がみんな大事なんですね。最初の講義の方でも話されてたんですけど、例えばこの続けるという方で、お互いが歩み寄れば、人は理解し合えるとすごくきれいに書いてますけど、言えば、それって苦手な人じゃないですか。その人とつき合うのってすごく大変だと思うんですけど。そこで何とか頑張って努力していけば、お互い違う考え方だというのがわかるし、それを吸収することで、自分が成長できるというのがあるんです。それもやっぱり自己愛になりますし。この断ち



切るという方も、時間を削減するじゃないですか。そういう言い方になったら、ちょっと事務的でおかしいんですけど。やっぱり限りある人生なので、できるだけ充実したい。そういう、もっと充実したネットワークを広げたいという、それも自己愛につながりますよね。断ち切れない、仕事の関係上というのも、すぐに男の人だったら、家族を支えたりとか、女人でもどんどん働いて、自分の成長のためにというのがあって、これを断ち切れない。無理してつき合うとなってしまいますけど、それも自分の生活を支えるためとか、お金を得るため。充実したライフスタイルを送るためという、最終的に自己愛にくるんですよね。自分のためというと、やっぱりそうなると、すごく聞こえは悪いと思うんですけども、でも、そういうところがないと、行動には移せないと思うんですね。だから、自己愛というのはすごく私は大切、B班は大切だと思いますし。この自己愛という理由があっても、結局人の役に立ったりですか、あとは地域の活性剤になれたりすれば、それは別にここに根底があっても、そういうふうに最終的にみんながハッピーになれたら、それこそが人とかかわる上ですごい大事なんじゃないかなと思うので。

ちょっと、何かそれでいったような気がするんですけども、結論としては、それぞれの価値観があるから、それを認めていく。自己愛という、そういう本心があることを認めていく。すべてをお互い認め合うことが人とのかかわり方で大事なんじゃないかなとB班は結論を出しました。

以上です。

○深川純一 ありがとうございました。
今の説明で、何か御質問ございますか。わからない点があれば。大体わかりました。
一つありますね。どの点ですか。班と名前。

○A班（岡田英敏） A班の岡田といいます。関係を断ち切るのところでちょっとお聞きしたいんですけども、例えば、すごく嫌いな人でも、その道で倒れてたりとかしたら、社会的責任で救急車を呼ばないといけないとかって、極端な例を言いますとありますよね。関係を断ち切るというのは、どこら辺まで関係を断ち切るというんですか。

○B班 言い方がすごい、断ち切ると言ったら、もう本当に関係を断絶するというか、その人とは縁のないようにすると聞こえるんですけども。そういうことではなくて、普通、道端で倒れていたら、それは助けるというのが人道的には道徳的にもそうなりますので、そういう面では断ち切るという、そこまでじゃなくて。自分からしゃべりに行くというのを避けるじゃないですけど、そういう断ち切るというニュアンスだと思っていただければいいです。

○深川純一 かかわりたくないという意味ですか。

○B班 かかわりたくない、そうですね。かかわりたくない。倒れてたら、それは助けますけれども。

○深川純一 助けるの？ ではかかわるんだね。

○B班 それはかかわりますね。
衝突を起こしたくないから、どうしても避けたくなるということ。

○深川純一 どっちか言っていただいた方が、皆さんわかると思う。助けたいけど、かかわりたくないということ、その意味がわからないうから質問が出たと思う。

○B班　かかわりたくないというのは、友人というか、僕らが知り合って、合う合わない人がいるじゃないですか、やっぱり。

○深川純一　ウマが合うとか、そういう意味。

○B班　そういう意味です。そういう意味でかかわりたくないという。この人、めっちゃ嫌やわ、かかわりたくないという生理的に受け付けないような。

○深川純一　だけど、倒れたら助けてやる。

○B班　倒れたら、それはもう。

○深川純一　そういう意味だそうです。皆さん、わかりましたか。

○B班（阿部泰生）　B班の阿部泰生といいます。

苦手だと感じる人と、あんまりかかわらずに、もっと自分の同じタイプのような人とできればかかわりたいということで。

○深川純一　だけど、苦手な人がひっくり返ったら、助けるんですね。

○B班（阿部泰生）　それは助けます。そこは、ちょっと。

○深川純一　わかりました、それで。やっとわかった。

ほかにありますか、質問。はい、どうぞ。

○C班（平田美穂）　テーマで、人と人とのかかわり合い方ということで、最初は人とのかかわり方をテーマにと言わたんですけど、その言いかえをされたには、やっぱり何か深い意味があるんでしょうか。

○深川純一　わかりますか。質問の意味がわかりますか。はい、答えてあげてください。

○B班　勘違いしていただけで、特に意味はありません。

○深川純一　勘違いだそうです。

ほかにありますか。いや、今のうちに言っておいてくださいよ、わからないこと。後でディスカッションに移って、そこでまた質問したら、もう議論が長くなってしまいますからね。ディスカッションに移ったらディスカッションだけします。ありませんね。

一応、これで意見の発表を打ち切ります。

フォーラムディスカッション

○深川純一　今から、そのディスカッションの方へ移りますが、たくさんの論点が出てまいりました。皆さん、この論点を全部ごらんになって、ほかの人はこんなことも考えてたんかと。おれ、考えてなかったという人もあるだろうし。あの考え方、ちょっとおかしいなと思ってる人もあるだろうと思いますし。あれはいい考えだ

から、おれはとろうとか、そういう取捨選択は皆さんがやっていただく。

そして、仲間の意見がこういうものだということは、大体、皆さん納得していただいたと思います。このすべての論点について、一つ一つ議論をしていくと、何時間あっても足りませんから、私どもの方で適当な論点をピックアップ

して、それについて皆さんのお見をこれから聞いていきます。

アシスタントの安行さんと御紹介をいたします。安行さんの考えておられるここのピックアップした論点、まず出してあげてください。そして、それについて意見を聞いてあげてください。お願ひいたします。

○安行英文 それでは、議論を進めていく上で、私が感じたこととか、あるいは感じていても、実は逆の論点をあなたたちに出ていただくために、逆の立場からの意見を言って、あえて疑問を呈することもあるかもしれません。皆様の考えに、より深く理解をしていただくための方法だと思っておいてください。

 それでは、まず、私が昨日のキャンプファイヤーの第一声で言いましたけれども、なぜ出会うのかというのはA班の方が、人とのかかわり方で、出会いのきっかけということで書いていただけきましたけれども。では、このプロセスの中で、なぜ出会うんですか、人は。何のために出会う。これについて御意見を言ってみて。

○深川純一 いい質問ですよ。思ってること、どんどん言ってください。皆さん一人一人が主体性をもって、自分の意見を言ってください。それも、みんなのためにしゃべってください。みんな聞いてますから。それで、あの人、いいこと言うなという人もあるれば、つまらないこと言ってるなと思う人もあるだろうし、それもさまざま。別に、それで軽蔑したり、尊敬したりしなくともよろしい。みんな平等の立場なんですからね。

○安行英文 A班から出たテーマから私は言っています。でも、どなたでもいいですよ。何で出会うですか。

○深川純一 だれでも結構なんです。これは

もう、全体のフォーラムですから。

○B班（日下大輔） B班日下大輔といいます。質問は、なぜ人は出会うのかということでしたよね。

 私は、人がなぜ出会うかといいますと、人間は生まれてきてから、だれかを探すという本能があるから出会うのではないかということを考えています。たしか1日目だったと思うんですけど、安行さんの方からも、たしか人間の社会性について、ちょっと説明を受けたような気がするんですけど。やはり、人間、コミュニティ、社会に参加していないと生きられないから、だれかを探して、所属する組織を探しているので、出会うということだと、私は先ほどの質問を受けて考えました。

 以上です。

○深川純一 ありがとうございます。

 本能的な帰属本能というのか、そういう本能があるという。

○B班（日下大輔） 帰属ですかね、やっぱり本能で。母親とも出会うというのは、生まれてから出会いますし。済みません、帰属とはわからないんですけど、とりあえず本能ということです。

○深川純一 結構です。

 こういう意見が出てまいりました。そういう考え方もございます。ほかに考え方があったらおっしゃってください。自分は、そうは考えないという人もあるれば、その考え方は賛成だという人でも結構あります。いろんな考え方がある、人間ですから。みんな一つの意見に対して、みんな同じだったら、これはファッショです、全体主義です。そんなばかなことは絶対ない。みんな考え方違うはずなんだから。いろんな考え方があって当然なんです。

はい、どうぞ。

○D班（森寛） D班の森寛です。

僕は、出会いというのは、どこにでも転がって落ちているものだと思うんです。それに気づくかどうかというのが、これは本人の問題であって、多分、その視力とかそういう意味じゃなくて、目が悪い、気づかない人はいっぱい落ちている出会いを全く気づかずに、そのまま見過ごしてしまうんじゃないかと思うんです。すてきな出会い、多分、いっぱい落ちていて、友達もそうやし、好きな子というのもそうやろうし、いろんな出会いがあると思うんですけど、そこら辺に、道端にいっぱい落ちているものを、それに気づく本人の資質というか、幅広い引き出しを持ってたら、多分、幅広いことに気づけると思うんですけど。気づく能力によって、その人の出会いの多さであったりとか、そういうものが決まってくるんじゃないかなと思います。

○安行英文 ほかにはあります？

○B班（新井佑花） B班の新井佑花です。

安行さんが、昨日キャンプファイヤーで言つてたみたいに、出会いがあるから、その相手に出会って、考え方方が変わって。考え方方が変わっ

たら、その自分の行動が変わって、行動が変わると、だんだん性格が変わっていって。性格が変わると、人生が変わって運命が変わるという、そのプロセスは、まさにそのとおりだなと思うんです。

それで、人間というのは、御存じの方もいると思うんですけど、あるアメリカの心理学者が行った実験で、5人の生まれたての赤ちゃんと、同じ状態で生まれた5人の赤ちゃんを別々に分けて、それでミルクをあげて育てるんですけど。その片方の5人には、普通に育てて、話しかけて、大丈夫とか言って。もう一方の5人の赤ちゃんには、言葉は話しかけないで、ミルクをあげて育てるという実験を行つてます。何日かしていったら、そのすくすく育つていく赤ちゃんは、思いやりを持って育てた赤ちゃんで、言葉を一言もかけなかつた赤ちゃんの方は、だんだん弱っていくんです。そのうち死んでしまうんですよ。

だから、人間というのは、言葉をかけ合うということから始まって、あいさつから始まって、会話ををしてという、その関係。ずっとつながっていないと、親と子の関係でもそうですし。社会の中で、その人間は社会の中でしか生きられないという生き物だから、その結果、出会いが必要だと私は思います。

以上です。



○D班（田端茂樹） D班の田端です。よろしくお願ひします。

人はなぜ出会うのかという質問だったと思うんですけれども。やっぱり一人では、人ではないと思うんですね。生物学的には、それは一人でも人ですけれども、さっき、昼に入る前、深川先生もおっしゃってたかと思うんですけれども。やっぱり人間というのは、人の間と書くものなので、人ととのつながりがなければ、人は人間になれないと思うんです。人ととのかかわりの中で、周りに認められて、コミュニティの一部として、それで自己というものを確立していくために出会うものだと。自分のために出会うものだと思います。

○D班（室井礼佳） D班の室井と申します。

何のために出会うのかというのは、私の考える結論は、自分が変化、変身するためなのかなと思ってまして。こういう活動をするに当たって、その $1+1=2$ じゃないというのを、私の中に、ずっとテーマで持つて活動をしているんですけれども。その一人の人、自分が一人でどこにも出かけないでいたとしたら、それはずっと1のままであって、変化することも変身することもないんだけれども、だれか、ほかの人と一緒に何かをすることによって、それが自分が思ってもなかったようなものに変身したりとか、3であったりとか5であったり、10になる可能性を秘めているというのが、出会いじゃないかなと思ってまして。

それが例えば、その単純に一人と一人が合わせたら、単純計算2になるだろうというので、2を割ることもあると思うんです。意見の衝突とかで、2を割って1. 何ばとかっていう形で、結果、一人でやった方がいいものができたやんということもあるかもしれないんですけど、それも変化したということなんじゃないかなと思ってまして。自分が出会わずに一人でいたら、ずっと1のままなのを、それを何倍に

もしてくれる可能性とか、ほかの数になる可能性があるというのが、何のために出会うのかというの、その自分が成長、変化をするためじゃないのかなと思います。

○D班（大住貴之） D班の大住と申します。よろしくお願ひします。

その出会いのきっかけということなんですけれども、まず、その出会いというものに関しても、まず人とのかかわり方なんですけれども。ちょっと個人的に生物学の方を勉強しておりまして、まず、昆虫の出会いというのも、ちょっと皆さんに知っていただきたいなと思いました。

昆虫がなぜ出会うのかというのは、子孫を残すためだと思っているんです。実際にカゲロウという昆虫を御存じでしょうか。カゲロウの命は、羽化してから2時間だと言われています。その2時間の中でやる行動、一切食べません。一切排せつもしないし、何をするのかといったら、相手を見つけることだけなんです。雄であつたら雌を見つけて交尾する。雌だったら雄を見つけて交尾する。そういう人とは違った観点で見ても、子孫を残すために動く生物もいるということだけは、ちょっと知っていただきたいなと個人的に思いました。

人間なんですかねでも、人間はちょっとほかの動物と異なるところがあると思ってまして。動物学的に見たら、霊長類というヒト、ホモサピエンスとか何か聞いたことがあるかもしれませんいんですけども、そのヒトというのは、やっぱり普通の動物との出会いとは全然違うものだなと感じていて。先ほど、A班の方々の発表、偶発・自然、これもすごく僕にとっては共感できるもので、T P Oを考えたかかわり方、これもすごく共感できるところがあります。最後に、いろいろな衝突があって成長していく。確かに、その衝突というのは、人間でしかあり得ないものだと思います、そういう言葉の。

もちろん、動物がいろいろと、弱肉強食の世界とはまた違うんですけれども、その人間で言う、人とのかかわり方は、なぜ出会うかというと、やっぱり成長していく、よりより人生を送る。そういったものに尽きるのではないかなど、個人的には考えています。

長いこと失礼しました。ありがとうございました。

○A班（黒田安友美） A班の黒田です。

さっきの5人と赤ちゃんのお話をされたので、私も全くというか、同じようなことを思ったので手を上げたんですけど。

人間の出会い、なぜ出会うのかというのは、愛を知るために出会うと思うんです。だから、私も同じような話を本で読んだことがあって、ある国の王様が、実験的に子供たちを一切愛情を持たずに、というかしゃべらずに育ててみたら何を話すかという実験で、育てた国が昔あつたみたいなんですけど。そしたら子供たちが全員死んでしまったと。それは計算外で、王様は、ただ単に話しかけずに育てて、何を子供たちがしゃべるようになるのかというのを知りたかっただけなんですけど、結果的には愛情がなかったために死んでしまったというので、だからそれで、結局出会わなかったということになるので、出会いがなければ愛を教えないということだと思うので、愛を知るために人は出会うんだと思いました。

○A班（垂井聖一） A班の垂井と申します。

なぜ出会うのかということですけれども、出会うことの経験というのは、その気持ちの持ち方によって、よくも悪くもできると思うんです。それで、出会い系が強い人は、たくさんいい出会いをしてきてはるだろうし、出会い系がいいと思ってはる人は、いい出会いをして来れなかった。自分でそんないい出会いにできなかっただというのが多いんじゃないかなと思

います。だから、いい出会いをたくさんしている人は、出会い系をしたいと思うと思います。

○D班（花房洸季） D班の花房です。

先ほどのB班の発表であった自己愛だったり、先ほどの赤ちゃんの実験のことともつながるんですけども。

昨日、阿部先生のお話でもあったと思うんですけど。人間、結局、本質的な部分で、自己愛というのがあるのかなと思っていて。阿部先生の話だったら、例えば半分こができるという話があったりとか、それからあと、これは僕が以前聞いた話なんですけども。例えば、電車で赤ちゃんとか見たりすると、あやしたりする人がいると思うんですけど。その赤ちゃんをあやすのは、その赤ちゃんがかわいいからじゃなくて、赤ちゃんをあやして、赤ちゃんが笑ってくれて、そこでなんか自分が赤ちゃんに認められたという、自分がその赤ちゃんに認められたいからあやしてあげているんだという話を聞きました。例えば赤ちゃんをあやしたときに、赤ちゃんが何の反応もしなかったら、ちょっと何だこの赤ちゃんはと思つてしまったりとか、実際あると思うんです。

だから、本当に人間の行動を突き詰めれば、自分が愛してほしいから、自分が他者に認めてもらいたいからやってるのかなと思っていて。だから、人が何で出会い系が強いのかも、やっぱり認めてもらいたかったり、だれかに愛してもらいたいから出会い系を探していくんじゃないかなと思います。

○D班（雪村加世子） D班の雪村です。

私の最初の意見自体は、すごいシニカルで、人が2人以上いたら、顔を合わせたら出会い系になるだろうと最初考えたんです。だから、ある程度人数がいたら、人と人が顔を合わせるのは当たり前だと最初考えて、特に意味はないと思ってたんです。

ただ、それをなぜ出会いと呼ぶのかと考えたときに、生まれたときにお母さんが抱き上げてくれて、親戚の人が会いに来てくれて、ある程度大きくなったら幼稚園に入ってくれてお友達だよとみんなに引き合わせてくれて。今日、RYLAでは、ロータリアンの方々が、みんなで生活しましょうといって、ここにいる私以外の58人の人に引き合わせてくれたので、周りの人が生まれたときから、これが出会いだよと教えてくれたから、出会いというのが生まれたんじゃないかなと思いました。

○安行英文 なぜ生まれたときから出会いを、そういうふうに教えてもらうんですか。なぜ、親は、大人はそういうふうに教えるんですか。

○D班（由城真衣） D班の由城です。

それは、社会で生きていくためには、支え合っていかないと人は生きていけないからだと思います。

○安行英文 ほかには。

○深川純一 何でもいいですよ、お答えください。安行さんが、いいヒントを出して下さっています。そしたら、安行さんの自分がこう考えているというのを、ちょっと言ってあげてください。

○安行英文 これは理由づけの一つなんですが、なぜ出会うのかというのは、昨日、私は簡単なことを言いました。

実は、人間だけが赤ちゃんで、98%、ほぼ脳が完成した形で出生します。だから、赤ちゃんで生まれたときには、ほとんどのものが理解できるような発達の状態で人間は生まれてきます。あの手足や目や口やその他の機能は、ほぼ未完成で出生をします。なぜでしょう。人間

だけが未完成で、脳だけがほぼ完了した形で出生します。だから、「おぎゃー」と生まれたときからは、人間は不自由を感じる。他の動物は違うんです。すぐに生まれて立ち上がって、お母さんのお乳や、あるいは他の動物からの危険を感じて逃げることができる。それだけの身体能力を発達させて出てくる。しかし、人間だけは違う。少なくとも1年、あるいは2年、しゃべるまでにはそれだけかかるし、よちよち歩きになるまでには、ほぼ6カ月か9カ月かそのぐらいかかる。手足の指先や足の指が器用に動くのは、もっと後。なぜです。

人間はその不自由を感じることによって、それを乗り越えようとする力を蓄えていくんです。だから、コミュニケーションが発達する、言語が発達する、手足に指先が器用になる。そして、ものを考えたり、他者とのコミュニケーションを図るようにできている。なぜ、そうしないといけない必要があるから。なぜだ、人間は社会の中でしか生きられないようにできているからなんです。

だから、その能力を社会の中で、いや少なくとも最初は親の中で、それから家庭の中で、それから地域の中で、それから社会の中で生きなければならぬないようにできているんです。少なくとも、生存の能力よりも所属をする能力の方が人間は優勢している。第一番目は所属をするという能力が1位になる。生存能力は、その次になります。だから、所属を外れてしまうことが、ダメなんです。だから、社会というものを大事にするということが、人間の世界でおこってくるんです。だから、出会いは絶対に大事にしなければならないということです。どこかに所属するということです。

○深川純一 ありがとうございました。

私は大体単細胞ですから、ああいう理論的な話はできないんですけどもね。私の感じたこと

だけ、ちょっと言っておきます。

人間は、赤ちゃんとして生まれ落ちたときから、この世を去るそのときに至るまで、たくさんの人と出会っていくんです。だれかがどこかで言った、出会いはどこもある。おっしゃるとおりで、どこにでも出会いはあるんです。問題は、その出会いの中に、いい人と出会うこともあれば、悪い人と出会うこともある、たくさんの方の出会いがあるんですけども。

問題は、私たちが求めているのは、本当の自分の師匠になる人に出会えるかどうか、出会えた人は幸せであります。出会わなかった人、せっかく出会っておっても、それに気づかずに通り過ぎていく人もたくさんあると思うんです。そのたくさん出会った人の中から、これを一生涯のおれの師匠だと感じる人に何人か出会うこともある、それは大変幸運です。そのことを、ここにちょっと書いておきました。

正師、本当の自分の先生、それに見える（まみえる）こと難し、出会うことは非常に難しいですよ。だから、出会った人は大変幸運ですよ、その出会いを大切にしなさいよということなんです。

私は幸せでございますから、生涯に4人の正師に出会うことができました。そのお二人はもう亡くなっていますけど、まだ残りのお二人は現存して、私の師匠であります。そんなことがありますまして、そういう言葉がまず一つあることだけ紹介しておきます。

それから、このロータリーというところは、そういういろんな出会いでいい人と出会う、そういう出会いを保証するところなんです。そのために、たくさんの業界のいろんな職種の中から、その中で良質な人だけをピックアップしてロータリークラブの会員に入れます。そして、良質な人ばかりが、毎週1回の例会というものに集まりまして、食事もしますけれども、その人と顔と顔をつき合わせて話し合ったり、何だかんだしながら、その中で、この人はすばらし

い人だということを感じ取ることができます。これも一つのいい出会いですね。その中に、本当の師匠がいる場合もあるし、そうでない人もいる。だけども、自分にプラスになる人に出会っていく、そういういい人ばかりを集めておる。このRYLAに来るロータリアンは、みんなそういう人なんです。ですから、私共も安心して皆さん方に、いろんなプログラムをお預けすることができます。

そういういろんな出会い、人生の中でロータリークラブに入ったという、その時点での出会いを保証していく。これを出会いの保証といって、ロータリーでは一番大事なことなんあります。

それは、ロータリーの綱領という大事な文書の冒頭に出てまいります。それは、こういう文章で始まります。「心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと」心の友というのは、皆さん方と同じように、自分たちの本当の許し合える仲間、何でも話し合える、そういう仲間とつき合いをするような環境に入って、そして世のため、自分のことだけ考えるのもいいですよ。それはいいんだけども、それは同時に世のため人のためになるようなこと。これは、ロータリーでは奉仕と言っておりますが、サービス、その奉仕の契機になるようなそういうみんなで仲よくなる機会をつくりましょう。これを出会いの保証というんであります。

それから、その人のことを思いやるという、そういうことがなければ、本当に仲よくなることはできない。自分だけ隆々と栄えて、豊かになることを考えていたら、だれもついてきませんよね。だけども、その根底には自己愛、だれかが言ってましたね、その問題があります。昨日、阿部先生もおっしゃってたと思いますが、やっぱり自己愛というのはあります。

王様には、自分の最愛の奥様がおられます。その奥様に言いました。「自分はよく考えてみると、最愛のおまえよりも、私自身の方がいいと

しいように思うんだ」すると奥様が言ったんです。「私もよく考えてみたら、あなたよりも私自身の方がいとしいように思います」そこで王様が、「世の中の人が、みんな自分が一番かわいいと思っておったら、そしたら世の中が成り立っていかないよねと。お釈迦様に聞いてみよう」といって、二人はお釈迦様のところへ行きます。お釈迦様がおっしゃった。「それでいいんですよと。人間は、だれでも自分自身が一番いとしい、自分自身を一番愛しているんです。それはいいんだけれども、ただそれと同時に、相手も同じように自分自身が一番いとしく思ってるんですよと。そのことを忘れてはいけませんよ」そこから、相手に対する思いやりの心が出てくる。

こういう人間関係、人ととの間の関係があるからこそ、そこから愛というものが発生する。それから、相手に対する思いやりという心が芽生えてまいります。そこで初めて世の中がうまくいくんです。人間が社会的な動物だというのは、まさにそのことを言ってるわけです。それをロータリーでは出会いの保証といってあります。

したがって、根底にあるのは自己愛。本当に人間というのは、自分がかわいい。昨日、阿部先生もおっしゃってましたね。本当に自分が一番かわいいです。それはいいです。お釈迦様がおっしゃったように。だけども、相手もそう思ってるから、やはり相手に対する思いやりの心を忘れてはならない。そこから、世のため人のために奉仕をしましょうとか、そのことが結局、めぐり回って自分自身のためになっていく。

もっとわかりやすい例、日本の例を言っておきます。二宮尊徳という人、知ってるかな、知らないかな。二宮金次郎、あの人が、弟子と一緒にお風呂に入りました。そして、弟子に言ったんです。風呂の水をこっちへかいてごらん。一たん水はこっちへ来るけれども、やがて回って向こうへ行っちゃうでしょう。向こうへ

どんどん押し合ってごらん、向こうへ行った水は、また自分のところへ帰ってくるんですよ。世の中というのは、人間の集まりですね。世の中というのは、このようになってるんですよ。自分のことばかり考えていたら、そして何でもかんでも自分で取り込んでたら、やがてそれは全部逃げてよそへ行ってしまう。人のためにどんどん水を送ってあげたら、その人のために渡したものが全部自分に返ってくるよ。したがって、犬や猫の手をごらんなさい。彼らの手は、手前にかくようにはできていますが、水を押しやるようにはできない。だから、自分のことしか考えない人間は、顔は人間の顔をしておるけれども、心は犬畜生と一緒だよと。弟子に対して、おまえたち、人間だったら少しは人のためのことを考えなさい。やがて、それがめぐりめぐって、自分のためになるんだよ。

これが実は、ロータリークラブというところの、人のために奉仕をしたり寄附をしたり、いろんなことをやってる、それも結局は自分のためだと、そういう利己心でやってるわけではないんですよ。それをロータリークラブは、世の中そういうものだから、やっぱり人のことをまず考えてやろう。ただ、自分を犠牲にしてでも、それも程度がありましてね、自分を破産の状態にしてでも人のためにいろんなことをする人もいます。そこまでするのはやりすぎだよ、ロータリーはお寺じゃないんだから。やっぱり、実業倫理の世界でやろうよという人もおります。ロータリーの中にもいろんな考え方の人がおる、そしていろんな宗教の人もいます。普通だったらうまくいかないんだけれども、ロータリーというところは、そういう考え方は全部違う、宗教も違う、そういう人が世の中をよくするという、ある方向に向かって一生懸命努力をしておる、これがロータリークラブというものなんであります。

そのために、このRYLAもそのロータリーが計画したんです。そして、ロータリーの中で

熱心な、世のため人のために動いていこうよという人たちが、RYLA委員になって、皆さん方のお世話ををしておる。ですから、皆さん方が今度は地域社会へ帰ったら、ロータリーというのはこういうものだという、そういう気持ちを仲間とか地域の人とか職場の人に伝えていただいて、ロータリーの心を少しでも広げていく、それが、地域社会全体をよくする。それは、やがては世界社会をよくする。こういうことをロータリーはいつも考えている。その根底にあるのが、まず出会いだというので、安行さんがちょっと難しい説明もなさったけど、単細胞の僕が平たく言えば、そんなことになってまいります。その辺のところは御理解いただいて。

一応、この出会いという、安行さんが全体の論点の中から取り上げましたテーマについての、一応のディスカッションは終わっておきます。それではまだ、疑問のある人は、後程キャビンタイムで、今度はどんどんカウンセラーに話を聞いていただいて、そしてそこでもまた、御自分の意見をどんどん言ってください。それで、ほかの人が、またそれを聞いていい意見だなどという形でお互いに学び合う。だれかが言ってました、自分を高め合う、グループみんなで切磋琢磨をしながら、自分を高めていく、それもロータリーの目的であり、このRYLAの目的なんあります。

何のために、一つのキャビンで三泊四日、ロータリアンと皆さんが寝食をともにするか。それは、顔と顔をつき合わせ、お互いに人格の触れ合いをするんです。だから、言葉は大事です。さっきもだれか言ってました。言葉があるから、つきあっていいんだけれども、目は口ほどにものを言うという、言葉でなくても、目で心を伝えることもできます。それから、一拳手一投足、行動態度で伝えることもできます。それから、立派な人柄そういうものを見て、ああ、立派だなと思って感化を受けて、そして自分をまたそこから高めることもできます。みんなでグ

ループで励み合っていこうよというのが、ロータリークラブであり、このRYLAのこういうセミナーであり、キャビンタイムであります。そういうことを、御参考までに御披露しておきます。

それじゃあ次の論点にいきたいと思います。安行さんが、また次の論点を用意していただいている。発表してください。

○安行英文 それでは、A班から、BCDといきます。A班の発表の中に「信頼」とあります、それは「信じる」ではだめなんですか？

○A班（木和田杏） A班の木和田です。

済みません、言われるまで、本当に気がつかなかったんですけども。ぱっとそのままの言葉で思ったのは、信頼というのが自分も思ってもらえる。信じるというのは、私が相手を信じるということかなと今ぱっと思ったので、はい。そう思いました。

○深川純一 なるほど、結構ですよ。
ほかにありますか。

○D班（大谷悠起） D班の大谷です。

前に先生とかと話しててちょっと教えてもらったんですけど、信じるというのは、自分が相手に対して依存とか期待とか、そういうものであると言われて、それはちょっと違うんじゃないかなと言われて。それは期待とかは、自分の中でしか上がっていないし、必ずといっていいほど、その期待というのは外れたり裏切る、裏切るという言い方、おかしいかもしれませんけど、そういうちょっと違うぞと。今日、ともにつくっていくという考え方の方がいいんじゃないかと教えてもらったんですけど。

○深川純一 それが信ずるの方ですか。信頼ですか。



○D班（大谷悠起） 信頼というか、信じるというのではなくなぜいけないのかということで、僕がちょっと教えてもらったし、そうやなとすごい思って、ちょっと済みません、意見をさせてもらいました。

ありがとうございました。

○安行英文 ほかにないですか、後ろの方も言ってよ。

○B班（日下大輔） B班の日下大輔です。

先ほどの意見をしていらっしゃった二人方も似たところはあるんですけど。

信じるというのは、私のイメージの中で、一方的なものではないかということを考えました。信頼するというのは、私のイメージの中では、漢字の問題なんですけど、頼るという字が入ってますよね。その頼るという字が、相手に役割を、やってもらうんですけど、頼るということで役割を与えてあげているという意味にもとれると思うんです。また、さっきの話に戻ってしまうんですけど、やっぱり人間は自分が役というか、自分が所属しているというか、役割を持っていないと多分死んでしまうので、信頼といった方がお互いの関係上はいい意味だと、私は思いました。

だから、今の信頼で、僕はそのままで大丈夫だと思うんですけど。信じるに変えてよくないかなと思いました。

○深川純一 信じるでもいいわけですか、イコールかどうか。

○B班（日下大輔） 信じるよりは信頼といった書き方の方が、僕はいいと思いました。イコールには近いとは思うんですけど、やっぱり信頼の方が役目を与えるといった意味がつけ加えられるので、信頼でいいんじゃないかと思いました。

○深川純一 ありがとうございました。

○安行英文 ほかに。付け加えることはないですか。

○D班（森寛） D班の森です。

先ほど、何人か言われたと思うんですけども、信じるというのは、一方向からの、自分から相手へ信じるということだと思います。信頼となると信じて頼りにし合うという意味なんかなと、相互関係が出てくるんじゃないかなと思います。

○安行英文 人間とのつき合い、かかわり方で信じるか信頼か、なぜ違うかという問題を出しましたけど、ほかに。

○D班（藤井隆嗣） D班の藤井と申します。

余りうまくは言えないんですけども、やっぱり信じるというのは、一方的な行為で、信頼というのはお互いの存在を認め合う、頼るとか、自分を預ける、さらにもうちょっと大きいくらいに、相手を包み込むとか、お互いをも包み込み合う、包容し合うという意見。D班の中でも出たんですけど、お互いを預けて、本当にお互いを包み込み合うような、包容するというのが信頼関係であると思います。

だから、信じると信頼というのは、私は全く別物だと思ってます。

○安行英文 ほかに。

○D班（大住貴之） D班の大住です。

信じると信頼関係、信頼というのの違いというので、ぱっと思いついたんですけども。信じるというのは、1人でもできることだなと感じます。例えば、神を信じたり、何か願いを信じたりとかする。そういうときに、信じるという言葉を使って、信頼という言葉は、相手がい

ないと、人がいないと使えない言葉だと思うんです。だから、その頼るという字が入っていて、その信頼という文字が使われてるんだなと感じます。

○C班（松本祐佳里） C班の松本です。

同じことですけど、信じるというのは、一人でできることで、ものを信じたり、自分の意志を信じたり、自分に対してもできることなんです。でも、信頼関係というと、人がいないと信頼には結びつかないので、私は別物だと思います。

○安行英文 ほかにはないですか。

僕は言葉じりだけをとったんですけど、多分、人とのかかわり方にとって、信じるか信頼するかという言葉遣いは物すごく大事なことになってくるかもしれないと思って取り上げたんです。それは、もう答えがないので、ちょっと僕のコメントだけさせてもらおうかなと思います。

ある行動心理学の解説によると、信じるというのは、担保を取るんです。信用組合って知っています？ 信用組合に行ってお金を貸してくださいといふと、あなたは、どこのだれそれともわからないから、信用できないんです。信じられないから、お金を貸してあげるなら、担保を出

してちょうだいと言われます。だから、我々にとては、お金を借りるときに土地とかいろんな担保を出してお金を、これで信じていただいたら、お金を貸していただけますかというので担保をとる。

でも、信頼になると、担保を取らないと書いてあるんです、その行動心理学の本に。我々が兄弟や友人や親友に出会ったときとか、人間関係をつくるときに、担保をとる必要はない。心底、その人のためのことを思ってやる。だけど、ただ単に信じてるだけやったら担保をとってくる。だから、我々は裏切られたときに、裏切られた、何でやねん、あれだけ信じたのにという言葉が出る。それは、担保をとってるから。担保をとってるから、裏切られたという言葉が出る。そんなことはないはずです、人間関係で。信頼をしておれば、担保をとる必要がないのに、担保をとってる。それが信頼と信じるとの違いやというのが書いてありました。それだけです。

だから、あなたたちの正解。知らない間に使ってるけど、それは正解なんです。そういう意味で使っているということも一つは、一理にあるということです。

では、次なんですか。D班は簡単に完結にまとめていただいてます。個性って何なんですか。おのれを知って、知識と経験があると個性。個性って何やろう。性格、いや、いろいろ



ろ言って。個性。説明あったよね、この個性は。こういう家族、友人や職場、学校とか地域の人々とか歴史、先祖の相互関係ででき上がってますよという説明を受けてますよね。

○B班（松尾悠） B班の松尾と申します。

個性というのは、私は生きざま、その人の生き方そのものだと思います。ここにいる人たちと、全く生まれたときから一緒ですという人は絶対いないと思うので、それが私は個性なんじゃないかと思います。

以上です。

○安行英文 生きざま。

ほかには？関係という言い方、もっと何かないやろうか。相互関係って何か難しい言葉やね。もっと何かない。生きざま、その人の生きざま。自分で何なんって聞いかけた人、今までに。さて、自分で何なんですか。

○D班（大住貴之） D班の大住です。

まさか当てられると思って、手を上げたわけじゃなかったので、ちょっと何を言おうかわからなかったんですけど。

今、自分探しを結構してまして。大学生活に於いて、すごく自分というのがわからなかつたんですよね。自分は正直小さいころから今まで、研究者になりたいと思ってたんです。ただ途中で1回、自分自身が全くわからなくなりまして。本当に、自分で何なんやろう、自分は何のために生きてるんやろうというのを常に考えたときがあります。そのときは、本当に正直わからなかつたです。なんですけど、その中で、自分が今こうやってここに来れている理由なんですけれども、人といろいろとかかわり合って、自分のことを教えてもらった気がします、他人に。

私の恩師に、その正師といつてもいいでしょうかね。僕が好きなこと、自分で好きなことが

わからない、これから何をしていいのかわからないと思ったときに、その正師の方が言ってくださったんですが。「おまえの好きなものは何や？」「わかりません。じゃあ、おまえが今まで続けてきたものは何や。違和感なく、続けられてきたものは何か」と聞かれたんです。「好きだから続けているんじゃなくて、続けられているから、それはおまえの好きなもんなんやで」と言われました。

私はその中で感じていたのが、小さいころから、カメラとかビデオカメラで写真とか撮るのが好きだったというのに初めて気づきました、ようやく。その自分というのは一体何なんやろうというのになるんですけど。やっぱり今はカメラとか何かを撮るのが好きな自分に出会えたので。その一種のある目的ですね、その目的を持って充実した人生を送るための。その目的を完全に自分で自覚できた時点ですかね、自分で自分を信じれるといったときに、その自分というのを何か感じたような気がしました。

済みません、以上です。

○安行英文 いや、すばらしいですよ。すごいこと、言えてると思います。

大体、自分で何やと言われたら、私はA型で、A型の人間は思い込んだら一途で、それから石橋をたたきながら途中で落ちて。すぐに行動するけど、何でもとんでもないことを後で反省するとかいうのが、自分やと思うのは大間違いで、今のようなのが大きな自分ということですね。

もっと何か、自分で何を考えたことがある人、考えてみたことがある人。

○C班（松本祐佳里） C班の松本です。

もっとではないんですけど、ちょっと考えたことで。私は、自分で今まで会ってきた人すべてのことだと思ってるんです。というのも、今、自分ができ上がっているのは、一人一

人、今まで出会ってきた人から吸い込んだものがあって、その吸い込んだものでできていると思っているんです。その吸い込んだときに、もしかしたら、自己の中でフィルターができていて、それで違ったとらえ方をしたかもしれないけど、でも結果的に、出会った一人一人すべてによって、自分が成り立っていると思うので、自分は出会った人すべてででき上がっていると思います。

○D班（田端茂樹） D班の田端です。

皆さんのような、夢のある答えじゃないんですけども。私も少しだけ考えたことがあります。

やっぱり社会というのが一番にくると思うんです、人とかかわっていく上で。その中で、自分というものは、やはり社会の歯車かなと思いました。それで個性というのは、その歯車の形なんじゃなかろうかという結論になりました。僕の中では。いろんな形の歯車があるけれども、無駄な形の歯車はなくて、それはすべてきれいにそろっている。それで、それが回って社会が動いていってるんだという、そういう考え方です。

○安行英文 既にD班の方、2名言われているんですか、3名かな。ここD班やね。じゃあ、D班の人、全部に言ってもらいましょう。

○D班（白井達也） D班の白井です。

自分っていうのは、これまで考えたこともなかったので、関係ない話になるかもしれないんですけど、このRYLAに参加して、正直、楽観的すぎて、いつも何も考えてないんですけど。その一つ、命ということとか、人とのかかわり方とかを、1時間とか、キャビンタイムでは、やっぱり2時間、3時間とかあんなに考えたこともなかったから、正直キャビンでは、何言つてるんやろな、この人らみたいな。レベルが高

すぎて、もう正直、僕、自分で何ですかと言われたら、多分、明るいとかぐらいいしか言えないんですけど。それなのに、みんなキャビンではレベルが高すぎて、何を言つてるんやろうなという感じで、もうずっとぼつんとしてるんですけど。まあ、それも自分かなって、プラス思考で考えていこうかなと思っています。

済みません。

○深川純一 ありがとうございました。

ちょっと言っておきましょう。ロータリーでは、頼まれたら断つたらいけないです。だから、今、立派にちゃんとライラリアンとしての義務を果たされたんです。

なぜかというと、頼む方はこの人だったら、何か言ってくれるだろうと思って、相手を信頼して頼むんです。それを断るということは、その信頼を裏切ることになるからね。だから、ロータリーでは、頼まれたらどんなことでも一生懸命やるんです。それで、みんなが仲よくなるんです。それは大事なことですから、皆さんも覚えておいてください。これから、地域社会でいろんな仕事を頼まれたら引き受けるんです。

しかし、因縁が熟したことだけよ、因縁の熟さないことは無理にやることはできません。しかし、人は逃げ口上で、おれは因縁が熟さないと何にもしないやつがおるけど、これはいけないですからね。そうじゃなくて、もっと素直な気持ちで、人から善意で頼まれたら、善意でそれに答えてあげる、これが人間の信頼関係をつくる、人と人との間と書いて人間でしょう。その一番大事なことですので、一つ覚えておいてください。

続けましょう。

○D班（花房洸希） D班の花房です。

うちの上司にも、頼まれごとは試されごとというふうに、よく言われているんですけども。僕は今キャンブリーダーをしていて、来年度

から社会人なんですけども。仕事の面でも、そのキャンプ関係の仕事につきたいなと思っていました。何でそういう道に進みたいかとなったときに、人の成長が見たいなとか、人の成長の手助けをしたいなとか、そういったことを思つて、今やりたいなと思ってるんですけども。

ただ、どちらかというと、自分が本当にいろんな周りの人に生かされているという感じで。自分がほかの人にどれだけの影響を与えられているんだろうというのを、すごくちょっと不安な部分も結構大きくて。結構、自分が他人に何ができるかというのが今わからなくて、ちょっと、そのことについてよく今考えているというのが最近よくあるかなと思います。

以上です。

○D班（大谷悠起） D班の大谷です。

自分とは何ぞや。僕、今年から柔道整復師という仕事を始めて、それで何で始めたいかと言ったら、皆さん夢も希望もいっぱいある中で、僕、それをサポートしたいと思って。それで、この仕事をさせてもらって。その仕事先にも僕と同じ考え方をされている方々もいっぱいいて。それに出会えたのも感謝しているし、自分が何ぞやと今言われて、それを夢をサポートするのが自分やと思ってて、それでここに来てて。いろんな人のサポートもできるし、自分自身、いろんなレベルアップみたいなものもできるだろうと思ってきたんですけど。

なかなか、夢をサポートするというのも、具体的に何をしたらいいのかがよくわかつてない自分なんです。だから、自分が何と言われて、なかなか出ないところではあるんですけど。その夢をサポートするということを言い切れるという自分が、一番自分らしいんじゃないかと言えます。

ありがとうございました。

○安行英文 ありがとうございました。

じゃあ、次にお願いします。

○D班（森寛） 森です。

僕、徳島県で児童養護施設でカウンセラーをしているんですけども、結構、自分ということに対してというのは、クライアントさんとか子供とかに、僕もいろいろ聞いてみたりするんです。

僕が考える自分というのは、なりたい自分となれる自分には、開きがあると思うんです。ただ、自分を変えることができるのは自分だけ。周りの人の関係もあるんですけど、自分が変えようと思わなければ、自分は変わらない。また、その周りから見える自分というのも、また自分が考える自分とは違うんじゃないかなと思います。その変わることと、変えてはいけないことというのを、よく考えていいかいいいけないなと思います。

今、僕30歳なんですけども、20歳のころからずっと年度当初に目標を立てたりするんですけど、今、10年間ずっと変わってない目標があって、僕はその外見も内面も男前でありたいなと思っています。僕は自分をすごく好きなんんですけど、自分が好きでいる自分でいたいないつも思ってます。

以上です。

○D班（由城真衣） 由城です。

私も、自分って何かなというのを大学に入ってすごい考えるようになったんですが、まだこれというのが見つけられてないんです。自分の性格とかだったら、何かおっちょこちょいとか、いろいろあるんですが。すごいいろんな方から、由城さんは、こんな人とか言っていただくことがあって。何かそれも自分なんやと思って受けとめたりしてて。こうやって今話しているのも自分だし、これから考えとかもいろいろ変わってくる。年を重ねるごとにまた全然違う考え方を持つようになるかもしれないんですが、それ

もまた、自分かなと思っています。
ありがとうございました。

○安行英文 ありがとうございます。
では、次々にいきましょう。

○D班（安保育美） D班安保です。
私は4年間保育の仕事をしていて、もうちょっと勉強したいなと思って、今もう1回学生をしています。保育士とか幼稚園教諭をしていた4年間というのが、自分の担任してた子たちが虐待にあったり、お母さんが自殺されたり、結構いろんなことがあって。
今、学生になって、もう1回そのことたちを思い起こしていくと、それが、私の保育の仕方だったり、フォローの仕方でもっといい方向にいてたんじゃないかなとか思ってて。昨日、うちのD班は、自分が好きか嫌いかで話になったんですけど、今は正直、自信を持って自分が嫌いだったりしてしまったりしてるので、もう、これから、運がよくか悪くか、4月から就職も決まつたので、もうちょっと子供たちの目線から自分のことを見てみようかなと思うので、今、自分は余りわかりません。

○安行英文 それも答えですね。

○D班（河渕直子） 高知市から来ました、河渕です。

自分とは、ここからここまでこんな顔してて、もう言い尽くせないです。これが自分です。でも、実際に存在します。これが自分です。
以上です。

○D班（高橋尚子） D班の高橋です。
私は自分のことを表現するのがすごく苦手で、昨日のキャビンタイムとかでも、全然発言とかなかったんですけど。いろんな人に、今いけるよとか、自分が支えてもらって、今こうやつ

て話すように努力しようと変えようとしているのが自分だと思います。

○D班（室井礼佳） 室井です。

自分とは何なのかというのは、すごく私もよくわからなくて。私は歴史が大嫌いで、高校のときとか全然勉強してなかったんですけど、でも、今のこの年になって、ようやく自分の存在とは何なのかとか、自分は何なのかと本当に考えるようになって、それこそ日本の歴史とか親から受け継いできたものとか、ルーツとかという、その日本の血とかいうものを考えるようになったので、まだ、今は確固たる答えというものは全く持てなくて、ようやく興味が持ててきたというか、歴史とかルーツに興味が出てきたぐらいなので、これからまた探して行けたらいいなと思います。

以上です。

○D班（雪村加世子） 2回目になります、D班の雪村です。

自分とは何かという話しなんですけど、私は頭でっかちなので、自分って、私の自我とか、私の人格だと思ってるんですね。ただ、でっかすぎて、ちょっと全部は形がわからないというのが、私の感想です。

ただ、10代のときと、今度28歳になるんですけど、大きく変わったなと思うのが、私、自分を全然探さなくなったなど。昔は、本当に自分で何なんだろうと考えていたのに、最近は、何か自分の意見とか行動とかが瞬時に出るようになって、何か悩まなくなったんです。これは、多分、推測するに、いろんな経験を通じて、私の自我とか人格が知らない間に固まってきて、大きくなってきたんだろうなと思って。健康そうだからいいやということで、考えないようになりました。

以上です。

○安行英文 元気で過ごしてください。じゃあ、次。

○D班（藤井隆嗣） 皆さん、自己紹介も半分兼ねているようなので、私もちょっとだけしたいと思うんですけど。

私は公民館という社会教育施設で今働いています。それで、私はさっき、同じ班の田端君が、歯車と、歯車の形というふうなことで、個性ととらえているんですけど、それを借りまして。私はその歯車ではなくて、私はその潤滑油でありたい。潤滑油、油ですね。それは、油というのではなくても、それは動くもんですけど。でも、よりよく動くためには必要な存在。人と人とをつなぐ存在でありたいと思っています。

以上です。

○D班（丹生富浩） D班の丹生です。

今まで、自分というのを考えたことが全くありませんでした。そして、このRYLAに来させてもらって、初めて自分というものを考えました。それも昨日ぐらいから考え出して、このD班の話題で、果たして自分って何やろうと思って。まだ全然結果というか、答えは出てないんですけども、やっぱり自分というのは、家族があって、先祖があって、それで自分というのがあると。それぐらいしか、まだわからんのですけれども、やっぱりみんなに支えられて、自分というのがあると思いました。

以上です。

○D班（谷田陽平） D班の監督の谷田陽平です。

自分というテーマで話、皆さんチームの方がしたんですけども。僕は、率直にぼつと思いつかんだのは、自分というのは余りいいイメージがありませんでした。なぜかというと、自分勝手とか、そういうキーワードがどうしても頭に浮かんでしまったから、余りいいイメージが

わからなかったです。

ただ、C班の方にもあったように、自分というのは、必ず相手が必ずいる。相手というのは多分、自分を映す鏡だと思うので、相手の態度だったりとかいうのが、すべて先ほど先生おっしゃったように、すべて自分に返ってくるというのが、特に印象に残っています。人の命という、むちゃくちゃ大事な、そういう修羅場を私は経験をしたので、どうしてもけがをしている人であったりとか、助けを求めている人に対して、自分の命を投げ出してまで、その相手を思いやったりする行為というのは、本当に実際、自分が経験してみないと全く行動に起こせないと思います。

今日みたいに、AEDの講習を受けたんですけども、実際に本当に動こうと、doをしないと、相手も助かりませんし、周りも動いてくれないというのを、自分でさまざまと感じた出来事がありました。電車の事故の件なんですけれども。たくさんの方が、我先に助けてくれ、助けてくれという中で、医療に携わる立場として、どれだけ相手を思いやる、思いやるのは全員患者さんなんで、相手を思いやらないといけないんですけども、自分のことばかりを考えている人たちに対して、どれだけ自分が思いやれるというのは、すごいそのときに経験しないと行動に起こせないんだなとつくづく感じました。

以上です。

○安行英文 ありがとうございました。

このD班とC班は、僕、多分一緒だと思って、C班の方には意見を聞かなかったけれども。どうぞ、発言をお許し下さいね、もう時間的にないと思います。

本当に自分ってわからないですよね。後で、深川先生にも少しコメントもらおうと思うんですけど。一言だけ。

ミリンダというギリシャの王様が、インドに偉いお坊様の哲学者がいるから、1回訪ねてみ

ようということで、リュージュという偉いお坊様を訪ねにいったことがあります。

訪ねて行ったときに、リュージュにあなたはだれですかとミリンダ王が尋ねました。リュージュは、名前を聞いてどうするんだと言った。ミリンダはあなたの名前がわからなければ、あなたじゃないですと言った。そしたらリュージュは、そんなもの聞いても何の役にも立たないと言う。でも、ミリンダはまた食い下がる。名前がなかったら、あなたというのがおらないじゃないか。それじゃあ、あなたは存在しないことになるだろうと言った。そしたら、リュージュというお坊様は、そんなことを聞いてどうするんだ。それじゃあ聞くけども、あなたは何に乗ってここまで来たんだと聞いた。私は車に乗って来たんだと。その当時やから、今みたいにエンジンの車じゃなくて、牛車といって、牛に引かれていく、車で来たんだと。それでは、おまえはその車を説明してみなさいと言った。

車って説明できますか。車輪をとって車というのか、どうですか。違う。車輪の軸によって、車というんですか。違う。じゃあ、その車輪と車輪と軸が上にある台座というところが車というのかと聞く。違う。じゃあ、どういうことが車というのか、あなたは車が説明できないじゃないか。それと同じように、あなたは私の名前を聞いたけど、私というのは、あなたは説明できるのかと聞いた。実は、車輪による縁、縁だ。車輪によって、軸受けによって、台座によって、しかも、それに伴ういろいろな要素が加わったことによって、車という概念じゃないか。じゃあ、あなたが私の名前を尋ねて、私の名前だけで私を判断できるのか。私というのは、家族によって、先祖によって、地域の人々によって、職場によって、あるいは向こうに書いてある場所や目的や時間や形成作用や、あるいは識別作用や感受作用や、いろんなことの要素によって私があるんだ。私という名前は、あんたが思ってるだけじゃない。私という名前は、私個人の

存在をゆうべきものではないと言ったんです。そこで初めて、ギリシャの、そういうヨーロッパ的な考え方からバシと打ち碎いたもの。我々はそういうことだから、存在という、私に対しては言えなくて当たり前だ。私たちはいろんな作用によって、私になっているんだ。だから、好きな場合もある、嫌いな場合もある、すべてが私なんや。だから、それは否定はできませんというのを言ったんですね、リュージュという人は。そういう共通項がある。

だから、何が、何で、何の関係じゃない。言い方を変えれば縁なんですということです。

○深川純一　　ありがとうございました。

安行さんが、仏教的な視点から、大変おもしろいお話をなさいました。私は、ちょっとまた視点を変えましてね。別の視点から、考えるヒントだけ申し上げておきます。

安行さんが今、ヨーロッパ的な、ギリシャ的な、考えからいいたらこうなるんだとおっしゃったけど、私は、そのギリシャ的な視点から、一つのヒントを申し上げます。私は単細胞ですから、あんまり難しい理屈はわからない。端的に、自分という、私ですね。私はだれでしょう。私はどこにいる。あんた、ここにいるじゃないか。これ、私の胸です。ここにいるじゃないか。これ、私の顔です。ここ、これ、私でしょう。これ、私の腕です。目に見えるものは私とは言えないです。じゃあ、私は一体どこにおるんだ。こういう分析をギリシャ人は昔からしております。そして、私というのは、今現象的に目に映っておる、この美しい美人だと、先ほどありましたね。男前になりたいという人がおったですね。男前だと美人だと。そんな目に見える現象、それは、あくまでも仮の面なんだと。私というものを、この世に存在させておる仮の面なんだ。それをギリシャ人は、ペルソナといいました。このペルソナの最後のAが取れまして、英語でパーソン、人になったんで

す。

私は、何を言いたいかと言いますと、物事の本質を見なさいよと。美人だとか男前だとか、それはあくまでも上辺の目に映るものであります。私というものは目に見えない。どなたか言ってましたね、人格だとか自我だとか、それに近いものと考えてもよろしい。そういうことを、今ギリシャ人のことを言いましたけども、同じような考え方をしておりまして。

昔の足利6代将軍に仕えました、蜷川新右衛門という人がいます。この人が、一つの歌を詠みました。どんな歌かといいますと。「骨隠す皮にはだれにも迷いけん 美人と言うも皮のわざなり」この人間の骨を隠しておる皮こそだれも迷いけん。皮に、その美人だとか男前だとか、その皮にみんな迷ってしまうんだと。美人というも、それは全部皮があるから美人なんだと。焼けて骸骨になつたら、美人も男前もそうでないも全然区別がつかない。だから、その蜷川新右衛門の歌に答えて、一休禪師が答えました。

「皮にこそ、男女の隔てあれ。骨にはかわる跡形もなし」皮があるから美人だとか何とかみんなわかる。きれいな人だと汚い人とか、いろんな差別ができるんだけれども。本質は、そんなことは外的な現象の問題であって、人間の本質というのを見抜いたら、それはただの骨じゃないかと。物事は、そういうことをいつも考えながら、物事の本質を見抜きなさいよと。

ロータリーというところは、現象にとらわれない。いろんな社会の現象が出ています。だけれども、それはすべて現象であります、移り変わっていきます。その本質にある問題点は何かということを、いつも見抜いていかないと、人生を誤るぞという意味なんあります。

だから、自分の主体性というものを確立していく。これを倫理の確立とロータリーでは言っておりますが。そういうことも、いつも頭に置いて、自分ということを考えていったらいいいんじゃないかなと思います。

だから、一つのヒントであります。これについて、また疑問のある人があるかもしれません。だけど、そういうことは、何もここで答えが出なくともいい。ある意味では、一生涯かけて考えていかなければならぬ問題があるかもしれません。それは、やがては宗教のところまで考えていかないと解決ができない問題もあるかもしれません。あるいは、2週間で考えてできるかもしれない。だけどその解決できる、そのそもそもの出会いというのは、今日皆さん方ここで出会ったことによって、そういう考えるヒントもできるだろうし、これからいろいろなことを考えていくこともできる。だから、安行さんが最初に出した論点。出会いということを大切にしようと、そこに戻っていくわけであります。

以上であります。また、安行さん、あったら、次の論点に移ってください。

○安行英文 じゃあ、もう少し時間がありますので、最後に残りの人、B班なんです。あとは、C班もD班も共通のところで、少しごめんなさいね。D班だけにコメントもらいましたけど、同じようなことなので。

B班も、最初の阿部先生の言葉から考えていただいたと思うので、大変重要なことと論点をとっていることを書いていると思います、ポイントを。それを踏まえて、僕は逆説に言います。

人生はもめごとを避けて通った方がいい、どう思われますか。その方がうまくいく？
B班からいきましょう、一人ずつ。

○深川純一 何でもいいですよ。恥ずかしいと思うことないです。何か言ったら、それが勉強になるかもしれない。何でも言ってください。

頼まれて、ノーと言うなよ、ライラリアン。

○B班（宮里拓） B班の宮里です。

人生はもめごとを避けて通った方がよいと。まあ基本的にはそうだと思うんですけども、

それでは、自分自身が、さっきおっしゃられたファッショングということがあったんですけれども、そのとおりやと思うので、そのグループの中で団結してしまって、ほかとすごく争うということがあるので。だから、人生はある程度、グループ内でももめごとを起こして、他と協調できればいいと思います。

○B班（清水昭博） B班の清水昭博です。

人生はもめごとを避けて通った方がいいということですが、実際にもめごとを起こさずに、そのまま成長していけば、それは楽だとは思うんですけども、そういう生き方をしていくと、自分しか見えなくなっていて、他者を愛する気持ちであったりだとか、思う気持ち、そういった部分が結局、欠落してしまって、結局は、最終的には一人になってしまふ。一人社会の中からちょっとはみ出てしまうんじゃないかなと思って。そういった部分から、いろんな経験を踏まえて、いろんな苦労をして人を助けていくような生き方が必要なので、苦労というのは必要ではないかなと思います。

○B班（日下大輔） B班の日下です。

質問に質問で返すようで、ちょっと失礼なんですが。なぜ、そのような議題を、私たちのテーマといいますか、まとめたことから考えついたかということを、ちょっと聞きたいところがあります。

○安行英文 では、質問に答える質問をします。

B班は、このADCの本質、今、深川先生も言ってた、本質的なことを突いてると思います。これはなぜかというと、その人とのかかわり合いで、嫌な場面というのは、これは本当に現実的なもの。それに対して、やっぱり阿部先生が言ったことで、自己愛は、他人に対する愛もはぐくむということは言われたと思うんです

けど。でも、その場合でも、最初の続けるのか、断ち切るのか、断ち切れないか。これは厳然として、はびこってきますよね、目の前に。そうした場合に、じゃあ人生は、もめごとを避けないで通った方が一番ええやないかと。それはわかって僕はあなた方に質問してるのね。何でそれは、自己愛に、あなたたちは落ちついたのかというの、それはわかるんだけども。人は、避けて通った方がええやんと思う疑問、素朴な疑問に、どう答えるかな、みんなの反応。

三つの選択肢があるでしょう。でも、そんな避けて通ったらええやん。続ける、断ち切る、断ち切れない、考えんでもええやん。そのまま通ったらええやん。

○B班（日下大輔） 苦手と感じる人がいなければいいということです。

○安行英文 無視したらいいよね。

○B班（日下大輔） 無視する。いや、えっと。

○安行英文 と僕は逆説的に聞いてるねんけどね。その方がいいんじゃないですかと聞いても、別にいいかもしれません、感じたままに。

○B班（日下大輔） ジャア、単純に。

もめごとが起らない方が、僕はいいと思います。

以上です。

○安行英文 それでいいです。ありがとうございます。僕もそう思う。

○深川純一 いや何か、裏の裏があるかと勘ぐってるから答えにくくなるのよ。聞かれたら、そのとおり思ったまま、答えたらいいです。そこからまた、次の色に展開するかもしれないんですから。余り人を疑わない、もっと素直にい

こう。

○安行英文 次、そしたらお願ひします。後でまたいろいろ出てくると思うんだけど。

○B班（米田優里奈） 米田です。

もめごとは起こらない方がいい、そのとおりだと思います。

○安行英文 でも、起こっちゃうのよね。それは、だから避けた方がいいということですね。

○B班（吉田奈緒美） B班の吉田と申します。

私、今ちょっと質問の意味が余りわかつてないので、日下君が言ってくれたことでも、まだちょっとわかりきれてないんですけど。苦手なことがあれば、断ち切ればいいというのは、それは人の多分考え、人が考える普通の考えだと思うので、断ち切りたかったら断ち切ればいいと思います。

ただ、私の意見を言わせていただくと、断ち切れば楽やし、何もなく人生、波も立たずに生きられるかなと思うんですけど。そんな人生、楽しくないかなと思うので。私は、一応、ちょっと続けるの意見派なので。

○深川純一 結論は、どっちか言ってあげてください。

○B班（吉田奈緒美） だから質問の意味がわからないので、私もどう答えていいのかが全然わからない。

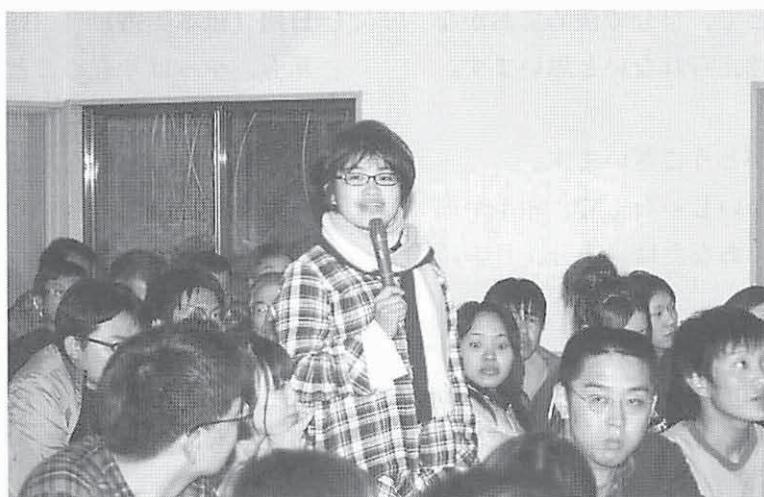
○深川純一 そんなに難しく考えなくても、素直に思ったことを言ったらいいですよ。

○安行英文 人生はもめごとなんか一切かかわらなくていい方がいい、そう思うんだったらそれでいいし。それでも乗り切れるねん、人生はと思うかどうか。

○深川純一 行き当たりばったりでもちゃんといきます。そういう人もある、行かん人もある。

○安行英文 それで、あなたは、どう。そういう人生を送るときに、何も避けた方がええねやという方。

○B班（吉田奈緒美） いや、避けたくないです。



○安行英文　避けたくない、よっしゃ。はい。
それは、それであなたの意見です。

○B班 (Chuon Rumreasey)　B班の
Chuon Rumreaseyと申します。外国人なので、
日本語、もしかしたら下手かもしれなんですが
れども、よろしくお願ひします。

先ほどのお話についてですけれども。私に
とっては、その質問されていることについては、
よくわからないんですけども。少しだけ意見
を話しさせていただきたいと思います。

私は、今の皆さんと多分違う立場だと思うん
ですけれども。日本に留学してきて、私はほか
の国で、自分の国ではなくて、ほかの国で暮ら
していることに対して、いろいろなことがあります。
例えば、この言葉の使い方とか、お互い
初めてのときに、他人に伝えようという気持ち、
伝えようと思ってたんですけども、相手
がわからてくれない。あるいは、聞いてくれな
いということに対して、物すごく自分はショック
を受けて、非常に暗いじゃないですか。それ
に対して、やっぱり聞いてくれない人って、す
ごい物すごい複雑な気持ちで、それに対しても
うちょっと相手が話を聞いてくれたりすると、
自分も楽になると思うので。

先ほど、先生お話しして、断ち切る、ある
いは断ち切れないという言葉についてですけれ
ども、やっぱりそれは自分が乗り越えるか、乗
り越えないということで、自分で決めておかないと、
その点を乗り越えられないと思います。

○安行英文　ありがとうございます。

あなたが理解できないじゃなくて、相手が理
解できないだけの話。あなたは、十分、日本語
上手です。

○B班 (Chuon Rumreasey)　いや、そ
んなことないです。

○安行英文　相手が理解できなかつたんや
ね、理解できる能力がなかつただけで。
ありがとうございます。

○B班 (新井佑花)　B班の新井です。

もめごとを避けた方がいいと思います。そ
ういうふうに、きっとだれもが思ってると思うん
ですけど。あまのじゃくなんで、もし逆で、も
めごとなくして生きない方がいいというか、も
めごとがあった方が人生の糧にもなるかもし
ないし、よりよく生きるためにには、もめごと
はあった方がいいというか、必然的にきっと起
るんだと思うんです。出会いがあるから、人と
人で。そんな人との意見のぶつかり合いもある
し、その国家間で大きくなつたのが戦争かな
と思って、バイマーヤンジンさんの話も思い出
したんですけど。

身近な話でいうと、相手のことを思ってるか
らこそ、私だったらお母さんから怒られて嫌な
思いもお互い、しかれたりして嫌な思いもする
のに、何かもめるというのは、相手のことを
思って、そこに裏返しというか、愛情の裏返
しがあるから、もめるんだと思うんです。それで、一皮も二皮もむけて、大人になっていくん
だなと思って。だから、もめごとはあった方が
いいんじゃないかと思います。

以上です。

○B班 (紙本美香)　B班の紙本です。

私も、やっぱりもめごとはない方がいいと思
うんですけど、もめごとなくしては、自分自身
も成長できないと思うんです。小さいもめごと
から大きいもめごとというのもあると思うん
ですけど。お互い、友達だったりしても、言い合
いとかなつたときに、やっぱりお互いの意見を
言い合って、相手のことがわかつて。それから
さつき話してたような信頼とかも生まれると思
うので、もめごとはある方がいいと思います。

○B班（松尾悠） B班の松尾です。

もめごとを避けて通った方がいいのかどうかという論点なんですけれども。私は、避けられるものなら避けた方がいいとは思うんですけども、多分もめごとって、避けられないからこそ出てくるものだと、私は思います。

私も、まだ20年とかそれぐらいしか生きてないんですけど、もめごとだらけの20年間だったので、避けたかったんですけど、でも避けなくて、正面から立ち向かわなければいけないときがすごくたくさんあって、でも、それがあつたからこそ今の自分があるし。今の自分は、私はとても好きなので、ここまで自分を高められたということは、それだけそのもめごとに対して正面からぶつかっていったから、いろんな考え方ができるようになったし、いろんな人と出会うことができたしと思うので、すごくもめごとに対して向かうのは、やっぱりつらいこともあるし、逃げたくなるとは思うんですけども、私は避けられないというときは、逃げずにぶつかった方がいいのではないかなと思います。

○深川純一 それが結論ですね。

ずっと私、皆さん方の考え方を聞いておって、最後までいかないと、賛成か反対か結論が出てこないんです。右行ったり、左行ったり、最後に賛成とか反対が出てくるんですね。そうじゃなしに、真っ先に結論を言ってください。そして、その理由は、大事なものから順番に1、2、3、4と頭で整理してしゃべっていくの。まず最初に結論が出来ます。裁判所の判決は、被告人を懲役5年に処す、結論がぽんと出て、その理由を後で書いてくる。だからわかりやすいんです。

これはなぜかといいますと、国際会議なんか行ってごらんなさい。日本人は最後にいくまで、その結論が言わないから、聞いてる方は、もう忙しいのに時間のないのに、そんなことやって、

ろくに聞いていません。もう次のことを考えています。そうじゃなしに、一番最初に、私は賛成ですとほんと結論を出して、一番大事な理由から順番に1、2、3と出す。国際会議だったら時間で切れますからね。最後の結論へいくまでに時間が切られちゃうんです。今日は賛成か何かわからないまま、そういうことにならないように。

まず結論。自分の考え方をばしっと出す。そして、理由。言う時間がなかったら結論だけでも、ああ、あの人はこの考え方だとわかるでしょう。特に、みんなとこういういろんな議論をする場が、これからディスカッションというの大事ですから。

時間の制約があるんですからもうちょっと論理的に。国際会議なんか行ったら、一人発言時間3分、それで始まつたら青いランプがつきます。2分50秒たら黄色のランプがきます。3分たら赤ランプでストップ。それ以上、しゃべれない。もうマイクは次へ移ってしまいますからね。そういうことがありますから、できるだけ完結に、そうでなければ、時間が無駄になりますね。みんなのためもあるんですから。そのことだけ、今ちょっと感じましたので、ちょっと申し上げておきたいと思います。余計なことかもしれません、失礼しました。

○安行英文 もう時間がないので、あとはそれぞれのコメントを先生方にお聞きをしたいと思います。

実は、あえてB班には、逆のことを問い合わせたということをお許しいただきたいと思います。それはなぜかというと、C班もA班も書いているように、その衝突とか思いどおりにならないこともあるんだけれども、結局、それは我々の人生については、いろんなことで解決をしていかなきやならない課題というのがある。それはいろんなやり方。思いやりがあったりとか、そのかかわりとか出会いがあって成長していく

ということを、B班の人たちは、そのポイントの本質をがっと突いてくれてるわけね。そこに、私はあえて逆を、じゃあ、どうだろう、こんな避けた方がいいじゃないかということを言ったんだけど、そういう本質的なことをあのB班の人たちは言ってくれてた。だから、非常に重要であって、その我々が思ってる深いところの理由づけがあるということです。それを問い合わせたいと思ったのが一つでした。

非常に、ややこしい質問の仕方をして、失礼をいたしました。でも、すべてが正解なんです。このA、B、C。

以上です。先生、じゃあ、コメントの方。

○深川純一 ちょっと待ってくださいね。その前に、先ほど、あなたでしたかね。命の修羅場をとおって、大変な経験をしたとおっしゃいました。そして、命を投げ出すという言葉も聞きました。そのときに、ちょっと一つ整理をしていただきたいんです。命というのは投げ出したりすることができるのか、それから死ぬことと生きていくことと、命とはどういう関係にあるのか。

命というのは、お母ちゃんの体内から「おぎゃー」と生まれたときに命が始まると思っておる人、おられますか。それで、死んだときに命が終わると考えておる人いますか。ここは、割合混同されてるの。といいますのは、法律の規定では、私権、権利を私たちみんなが共有するのは出生に始まる、お母さんの体内から生まれたときに始まるんだと。それは、権利が始まるんであって、命はそのお母さんの体内にあるときからあるんです、あるからこそ生まれるんですね。そのお母さんの体の中にある胎児も命を持っている。それは、お母さんの命の分かれですね。だから、お母さんが死んでもその命は次のところへつながっていくでしょう。

すると今度は逆に、じゃあ命はいつ始まったのかということがありますね。命がつながって

るんだから、私の命、これは私のお父さん、お母さんから授かった命。お父さんやお母さんが生きているうちに私が胎児になって、お母さんの命を引き継いだ。その命は、おばあさんの体内からお母さんは生まれたんだから、そこでまた命がつながっている。そこでもつながっている。

それはずっとさかのぼっていったら、人類の祖先、サルだと、そしてさらには、その命は魚だと、それから結局は海草だと。ずっと無限のかなたまで、私のこの命はつながっているんです。私が死んでも、私の命は私の子供にもう既につながっています。どちらも、いつまでもどこまでも続していく。果てしがない、こういうものなんです。そして、どこから始まつたかわからない。始まつたことを、それは命はこういうものだということを科学的に分析することはできますけれども、その続いていった最後のところ、どこから始まつたかということは、だれもがわからない。それを知っておるのは、この宇宙をすべてある大いなるもの。それは、神様と呼んでもいいし、どう呼んでもいいんですけど、何か大きなものがその命の元をつくったんです。それがずっと何億年も続いて、一度も断ち切れてないのが命なんです。

しかし、人間が死ぬというのは、肉体が死んだり生まれたりするけれども、命というのはずっと続いているものだと。こういう認識がないと、物事の本質はなかなかわからないだろうと。

私は昨日、今井先生とちょっと話してまして、命はもちろんそれがつくったかわからないけれども、いつ始まつたのか、命をつくることはできないということを今井先生はおっしゃってました。同じことだろうと思いますが。だれかがつくったけれども、だれがつくったかどうかはわからない。そういうものが命であって、いまだかつて、途中でちょん切れたこともないのが命なんです。そして、その長い流れの中で、私

たちは生まれたり死んだり、生まれたり死んだり、生まれ変わったりして続いている。だから、死ぬということ、生きる、生まれるということと命とはちゃんと分けて考えなければ。命というのは、まさに本質的なもの。死ぬとか生まれるとかは、私はさっき言った現象です、目に見えるもの。だから、現象に惑わされて、例えば美人だとか男前だとか、そんな現象に惑わされて、物事の本質を見誤ってはだめなんです。

これは何も、その問題だけではなくて、世の中の動き、何が本質かということを、いろんな現象的な世の中の出来事に惑わされておったら見えないよ。そのところ、ロータリーが、いつも現象に惑わされずに、本質を見抜いていく考え方、これがロータリーの基本的な考え方。それをわかっていただきたいために、このRYLAでもやってるし、RYLAの人たちは、やっぱりそういう本質を見抜く目をいつも心がけておいてほしい。これは、私なりのヒントであります。

それで、もう時間がありません。あと5分、最後に私の正師であります今井先生に考え方のヒントをいただきたいと思います。

先生、ひとつ、よろしくお願ひします。

○今井鎮雄 大変ありがとうございます。皆さん、いろんなことを、本当に一生懸命考えててくれたということを感謝したいと思います。

実は、私たちは、今日のような難しいことを、毎日考えながら生きてるわけではないんですね。私たちは、何かと漫然として生きていることが多いんだけれども、私たちの今の時代は、大変大きな曲がり角にあります。20世紀の中のいろんな組織とか考え方というものと、皆さんがこれから責任を負って社会に出てくる、その社会の中における変化というものは、実は全く違ったものになりかけているということ。

例えば、経済が進んでますけれども、経済が進んだだけではなくて、今、リーマン・ブラザーズ

の話から、経済が発がんされた。経済のシステムが、前の産業資本主義の経済の中から、金融資本主義の経済の中に変わってくるときに、紙一枚あれば、コンピューター一つあつたら、そのお金を操作することができるということになつたときに、その使い道の方法がわからず、あるいは逆に悪用することによって、今年の大問題が出てきたということは、皆さん方も感じておられるだろうと思います。

第3の波ということを書いた、アービン・トフラーという人は、たった30年、もう30年になるかな。1980年に第3の波という本を書きました。それは、人類がずっと続いている間に、一番最初に人間が生きていくのには、農耕、耕して自分でいろんなものをつくって、そのままそれを自分が食べて生きていく。それが、途中で変わつきました。産業社会、自分たちが何ができる能力を持った。そして、そのつくることを持つたために、いろんなことを利用して、そして、船であるとか飛行機であるとか、あるいは光であるとか、そういうものをつくることによって、ますます私たちの欲望を満足させるようになりました。

ところが、この20世紀から21世紀の間の変わりがけか、それよりももっと進んで、IT革命と言われる時代です。コンピューターができたために、私たちの毎日の習慣から、もう一つ飛び跳ねてしまった。そういう状況が出てきました。私たちの手紙が何日もかかるてアメリカに届いた時代には、それなりの私たちの生活が、態度がありました。瞬時にコンピューターを使ってお互いが交流できたら、例えばシカゴの会議で話している内容を、そのまま外国人達が聴いてくれて意見の交換ができる。そういう時代だから、結論を初めに言うてやらんと混乱しますよという注意は、そういうことからきているんです。そんな時代になってきたということです。

だから、一人一人が高まるということだけで

はなくて、私たちは一人一人だけではない。世界の中に生きていく一人一人になって、好むと好まざるにかかわらず、あなた方が一人一人の個性を高めるということだけでは済まないね。あらゆる人と一緒に出会っていかなきゃならない。人とのかかわりについてのセッションでは、変なお坊さんみたいなものが出てね、一生懸命やってくださいました。苦労しただろうと思う、みんな。何をしたらいいんだろうかといってね。そういう新しいかかわり方の問題が必要になってくる時代だと。

ロータリーは一つの夢を持ってますから、夢ということは平和であったり、世界の人たちがみんな生きるということになるよう。今日の講師がチベットの話したときに、あんた方は考えられないようなチベットの生活を目の当たりにした。そこで生きてた彼女が、日本に来たときには、とってもおいしかった、御飯だけでいいですと言ってました。同じ世界の中に一緒に生きるというときには、そういうふうな違いに対して、どういうかかわり方をしたらいいのか。今日の皆さん方のお話を聞きながら、幾つかのことで非常に大事なことを言ってくださったなと思いました。安行さんが言ってくださったように、大事な問題について、まだ十分には考えられなかったけど、問題を提起してくれたということについて、心からお礼を申し上げたいと

思います。

個人の問題ということについても、深川先生がペルソナという話をしてくださいました。あれはギリシャだけではなくて、人間というものは、いろんなところでそれぞれの仮面をかぶった生活をする。赤ちゃんのときには赤ちゃんの仮面をかぶってたんです。お母さんに甘えて、泣いてミルクをもらうという、赤ちゃんの仮面をかぶってた。赤ちゃんが泣いたり笑ったり、意地悪したときにお母さんに怒られたりするという、そういう役割の中で、これはいいとかこれは悪いとか判断をします。

学校に行ったら、学校の仲間という立場をとる。言いかえれば役割をする。仮面というのは役割。私たちは数限りなく人生の中で幾つかの仮面、役割をとることによって、その経験の累積がパーソナリティ、個性になっていく。だから、一人一人の個性が違うことは、それぞれの段階、段階におけるあなた方の経験が違ってくる。同じ生活の中でも、お姉ちゃんと妹とは違ってくる、そういういろんなことがあります。そのことを基本的に考えていくことが必要ですよということが、さっきのペルソナということでしたね。人間ということを考えるときには、そういう問題なんだと。

私は、もう一つありがとうございました。いのちということについて、いろいろお話をされ



たんですが、今年の一体RYLAは、まるで哲学者が集まるんだなと思うようになりました。このいのちのことについては、明日私、また話をしなきゃならないんです。そのときに少し話しますけど、本当はある命の部分については、ここへ来て教えてもらったんです。

平峯カウンセラー、おられるかな。ちょっと立ち上がってください。あのカウンセラーは、免疫学を一生懸命研究しておられる先生です。実は私が知らなかつた事を色々教えてもらつた。山中さんという京都大学の教授が、iPS、人工多能性幹細胞、舌かみそうになります。皮からいろんな細胞に分けることができる。あれは命じゃないということで、吉田さんという学者が、ロータリーの友という、私たちの機関誌の今年の1月号に命についてと書いているときに、あの細胞を作った先生方の話を書いています。とにかく人間が生み出すことができた知恵の極限みたいなところから、今の時代に生まれてきたんですけど。それを超えて、実は命というものは難しい問題だけれどもといって、ちょうど先ほどに言われたようなことを、いろいろ教えてもらいました。明日、その部分については、さわりのところだけ皆さんに報告をします。その本を読んでも素人ですから、わからなくて昨日ここに来て調べたら、あの先生が免疫学を研究しているというので教えてもらった。

そのような意味でのいのちの大切さというものは、自分のものだから自分だけでいいじゃないかというわけにはいかんものだということが、そこでわかってくる。そして、そのいのちというものは、いつでも他の人とのかかわり合いの中にあるんだということがわかってくる。このようなことが、実は皆さん方の今日のディスカッションの長い流れの中に出できました。

もう一つ、私はちょっと食い足りないなと思ったのは、それが、我々の地域社会の中では

なくて、今や先ほど言ったように、IT革命が進み、知識が瞬時に世界的な規模で回ってくるようになり、21世紀には、日本の國の國民としてそこだけ考えたらよかつたんだけど、今は世界のことを同じように自分の問題としてとらえなきゃならない時代に入ります。ロータリーの思想というのは、その先駆けみたいで、私たちの地球社会の中で、私たちはどんな役割をとったらしいのかということが問われ、その中で、国連などとも協力をしながら、新しい時代のために、簡単な言い方をすれば平和の問題とか、あるいは地球の水の問題とか、あるいは子供たちの飢えの問題とか病気の問題とかいうことを、何とか具体的に解決しようとするようになっています。そんな意味では、みんなが世界的な、地球的な規模で判断をしていかなければならぬ時代になった。

そういうことを考えたときに、今日ここまでやった人とのかかわり方の中の先に、もう一つ私たちは新しい世界があって、そこでの責任の負い方をあなた方は考えなきゃならない時代に生きるんですよということをつけ加えておきます。本当に、今日いろんなディスカッションをしてくれて、いい問題が出て。みんながそれぞれ困って、何か禅宗のお寺に行ったみたいに生とは何ぞやということを言われて。いい経験をしてくださって、ありがとうございました。

○深川純一 これで一応、フォーラムを終わりたいと思います。御協力ありがとうございました。

最後に、いい助言をいただきました安行さんに。(拍手)ありがとうございました。あとまた、キャビンタイムあるでしょうから、まあ存分にしゃべってください。そして、よく寝てくださいね。

いのちを受け継ぐ

今井 鎮雄 先生

元国際ロータリー理事・RYLAセミナー顧問・パストガバナー
(神戸西RC)



プロフィール

● ロータリー歴歴

1980-81 R I 第2680地区 ガバナー
1982年5月、1983年5月 国際協議会グループ リーダー
1984-89 国際ロータリー 青少年活動委員
1993-94 アジア地域ローターアクト実行
グループメンバー
1995-97 国際ロータリー 理事
1999-2000 国際ロータリー RYLA 委員
2003-08 ボリオ・プラス・パートナーグループ
委員長補佐 (ゾーン1・2・3)

ロータリー財団メジャードナー
マルチプル・ポールハリスフェロー
ベネファクター、米山功労者

● 主な役職

兵庫県青少年愛護審議会 会長
神戸市青少年育成協議会 会長
(社福) 神戸市社会福祉協議会 理事長
(学) 啓明学院 理事長
(財) P H D 協会 理事長
等を勤める。

生活の変化と価値観の変化

日本人のライフスタイルは昔と今では大きく変わりました。たとえば、風呂。私が子どもの頃は井戸から水を汲んで風呂に入れ、薪を焚いて湯を沸かしました。湯が沸くころには疲れてしまって、入る気がしない。今はガスの栓をひねるだけですね。そんな自分の生活、体験の積み重ね、大きくは時代が背景になって個人の価値体系が作られる。ですから時代が変わり、経験が増えるたびに個人の価値体系は変化します。私たちの住む世界は急激に変化しています。IT化やグローバル化が進んでいる。情報化社会、世界化社会へと時代が変わってきたということは、私たちの価値体系も変わりつつあるということです。その変化の現実を感じるだけではなく、しっかりと受け止めてください。

日本で通用している概念が世界のどこでも通用するかというと、そうではありません。バイマーヤンシンさんが言ってましたね、日本は便利だ、彼女が育ったチベットと日本ではこんなに考え方も違うと。21世紀は、私たちとは異なる価値体系、これまで触れあったことのない世界の人々と共に生きる時代です。皆さんは価値体系の違いを越えて、地球人として21世紀を生きていくのです。

誰かが言っていたように、人間一人では生きていけない。動物としてのヒトにはなれても、人間じゃない。私たちには仲間、人ととの関わりが必要だ。テレビやインターネットを通して外国ではどんな生活をしているとか、いつ、どこでどんな事件があったというニュースを知ることはできます。しかし21世紀に地球人として生きるためにには、それぞれの現象を一度自分

の中に取り込んで消化してから、世界の人々と交渉し、話し合う必要があります。日本人は、価値体系は一つ、これがすべて、これでなくてはいけないと考えがちです。しかし世界の人々と共に生きようとするなら、価値体系の異なる社会があることを念頭に置いて、その人たちとどう連携していくかを真剣に考えないといけない。人間としての視野、地球的な視野を持って、これから互いの生活を考えなければならぬ時代になったということです。

ロータリーはいま世界の200ほどの国や地域で、会員は120万人になりました。ロータリーがこれほどに拡がったのはなぜか。それはロータリーが世界の人々を支援しているからです。ロータリーはいい団体だ、うちにもロータリーを作れないかと考える人が増えたからです。いまではロータリーのある国のうち、支援をする側(giving society)と支援を受ける側(receiving society)が同じくらいの数になってきました。

ロータリーは国際連合とも深く結びついています。ユネスコは第二次大戦中の1942年、ロンドンで開かれた教育や文化についてのロータリーの会議をきっかけに生まれました。また1945年、サンフランシスコの国連憲章採択会議に出席した代表団の内、49人がロータリアンでした。国際連合にはいろいろなグループが入っ

ていますが、大きく分けて二つあります。一つは日本とかアメリカのように、国を代表するグループ。もう一つは、N G O(非政府組織)です。国連が国の代表だけの集まりなら、それぞれ自国の国益だけを考えることになるだろう。これからは国を越えて人間を考えるグループの代表が国連にいるほうがいい。N G Oのグループとして仏教連盟とかキリスト教協議会のような宗教と関わる団体、赤十字などがありますが、その内、一番大きなグループは国際ロータリーです。

海沼さん、あなたがこのあいだ出席されたのは国連の「ロータリーの日」でしたか。

○海沼さん 「RIUNDロータリー国連デー」で、毎年11月に開かれます。参加者は1,000人近くでした。

○今井先生 この「ロータリー国連デー」は、ロータリーに連なる人たちがニューヨークの国連本部に集まって、国連の活動やロータリーの役割について話し合います。皆さんは、今日の午後、R Y L Aの閉講式が終わるとライラリアンになります。ライラリアンとは、私たちロータリアンとともに新しい時代に責任を担う仲間ですから、「ロータリー国連デー」に参加する



資格があるということです。

いのちについて

さて、新しい時代の責任を担おうとするなら、具体的な役割を引き受けねばなりません。そのためには何をすべきか。それを皆で考えるために、今年のRYLA委員会は「いのち」をテーマに、講師として阿部志郎先生に来ていただきました。

「いのち」というテーマは難しく、どうしても宗教的な雰囲気を持ちますね。ロータリーには宗教家の方がたくさんおられます。宗教は何であってもいいんです。宗教とは文化です。バイマーヤンジンさんは、平原で雷にあって死んだ人の話をしました。人間にはどうしてもコントロールできない力というものが存在する。それが私たちの生きている世界の中に入ってくると、それに対する恐れとか信頼とかが生まれる。恐れの場合は悪魔が、信頼の場合は神とか仏が出てくる。このようにしてできる宗教とは、文化です。それぞれに経典や聖書があり、その体系を積み重ねるとその道に達することができるという、文化です。宗教を一つの価値体系として、哲学として持っているのは人間だけですね。「いのち」もそこから考えなきゃならないと思

います。なかでも、いま、生と死との連続性が問われる時代になりました。

「ロータリーの友」1月号に吉田修さんという方が「生命について」という原稿を書いてます。京都大学がiPSアカデミア・ジャパンという会社を作り、吉田先生はその社長です。これについては、平峯さん・・・

○平峯さん 人工多能性幹細胞です。多能性とはどんな臓器にもなる。

○今井先生 ここにレオ・バスカリアの童話「葉っぱのフレディ」が載っています。読んだ人、いるでしょ。普通、童話の最後は「おしまいThe End」なんですが、「葉っぱのフレディ」の最後は「はじまりThe Beginning」なんです。バスカリアはアメリカの教育学者です。これは童話だけれど、人の命について書いてある。私たちの命が終わったらそれでおしまい、ではない。人の命、それは肉体的な命、魂の命、それから私たちの願い、そういうものを、次の人に伝える。そういう意味で私たちのロータリーの願いを、ここにいる皆さんが新しい時代を生きるときに引き継いで欲しい。それがロータリーの命であり、The Beginningです。

もう一点は、地球ができたのは48億年くらい



前。太陽が爆発して飛び出た火の玉から地球ができた。内部から発生したガスが地球を取り囲む。この原始の大気はメタンガスとかアンモニアとかいろいろなものを含んでいて、人間はそんなところでは住めない。しかし40億年ほど前に有機化合物ができて、アミノ酸のようのが含まれるようになり、これが生命の元になったといわれます。そして300万から500万年ぐらい前に人間の祖先がアフリカの北部で誕生した。狩猟採集の生活をしていたけれど、数が増えると食べるものを求めて別の場所へ移動した。アフリカに残ったグループはニグロイド、移動して住み着いたところの環境と時間の関係でコーカソイド、モンゴロイドのグループに分かれた。

48億年前に地球ができるから今までを1年と考え、1月1日に地球ができるとすると、類人猿が生まれたのは12月31日の午後11時50分頃、類人猿が文化を持つ生活をするようになったのは午後11時59分58秒、と吉田先生は書いている。「人類の長い歴史」というけれど、地球が生まれてからの時間枠の中で考えれば、たった2秒か3秒前に生まれたばかり。人間こそ地球の王者、なんて威張った顔をしてますが、亀にしてみれば、それはちょっと違うんじゃないかと言いたいでしょうね。自然界との対話の中で、人間はもっと謙虚にならなきゃいけない。

人間とは何かを考えるときに二つあるんです。一つは人間の知、知恵です。人間の知を大事に考える。これは人間にとて一番の武器です。真実とは何か、善とは何かを追い求めるプロセスで哲学が生まれました。毎日の生活に直接にはプラスになっているように見えない哲学という学問を私たちが大事にするのは、みんなで考え、苦労する中で新しい課題を見つけることができる。では、もう一つは何か。

アルベルト・シュバイツァー（1875-1965）というドイツ出身の有名な神学者・医学博士がいます。バッハの宗教音楽のオルガン奏者として世界一ともいわれ、アフリカのランバレネで

医療活動に従事し、1952年、ノーベル平和賞を受賞しました。この人の言葉です。私は現実にあることを追求してきた。（これは知の世界ですね。）何が正しいのか、何が真実なのか。医学とか物理学が発達し、新しい発見をするとノーベル賞がもらえる。みんなが「真実」を求めてきた結果、人間は大事な情報を得られた。しかしどんなに真実を追究しても、人間がどうしてできたのかということには辿り着かない。

シュバイツァーは、真実を追い求ることは大事だが、生命が私たちに与えられたという事実を大切に受け止めなければならないと言っています。彼の哲学は真実の追究から「生命への畏敬」へと向かい、自分の命、他者の命を尊重することの大切さを説きました。吉田先生は、生命への畏敬がなければ本当の意味の奉仕はできない。奉仕とは何かをしてあげることではない、分かち合うことだ。分かち合いの中で奉仕の理想が生まれるんですよ、ロータリーももう一度「生命の畏敬」を考える必要がある。よく生きることは、よく生かされるということを重なるんですよ、と書いておられます。

青木新門という人の「納棺夫日記」という本が元になった「おくりびと」という映画がアカデミー賞を受賞して話題になりました。青木さんは詩人ですが、それだけでは生活していくないので納棺夫として働き始めた。亡くなった人の遺体を清め化粧を施して、生きているときと同じような姿にしてお棺に納める仕事です。生と死を明確に区別して死者を葬ってしまうではなく、あちらの世界へ送るという姿勢。それは青木さんの幼いときの原体験と結びついています。満州の餓死寸前の生活の中で敗戦を迎え、8歳の青木さんは妹と弟を病氣で亡くします。火葬場の日本人の死骸の山の中に二人の遺体を置いて、その前に立ってお別れをした。その体験があるから、別れが次への出発になるという納棺の仕事について深く思うことになったに違いないと、本の解説に書かれています。

「いのち」も「死」も、どう捉えるかは難しいことです。阿部先生の話にもありました、医師がケアを考えなくなつた、人間と人間の寄り添いから次第に離れていくことが心配だということでした。いつの間にか人間と人間の心を結ぶことが大事にされなくなった世界が来て、その極限が現代社会。「納棺夫日記」はその現代社会を風刺しているといえますね。

1995年、阪神淡路大震災で神戸を中心に6,800人の方が亡くなり、そのうち約600人が小さな子どもでした。子どもが死んだことに対して残された家族は大きな心の痛みを抱えていました。その痛みをどう癒すのかを考えるのは、ロータリーの地域に対する役割ではないかと考えました。ロータリアンを中心に、何人かの識者に集まつていただき、話し合ったのですが、答えは見つかりませんでした。とりあえず話し合った内容を「子どもの『死』の意味を考える」という小冊子にまとめました。当時は地震の後でしたから時間も手間もかけられず、十分なことはできませんでした。機会があれば、もう一度このテーマについて掘り下げてみたいと考えています。

私は学生時代、2月の試験を受ければ卒業という、その前年の11月の終わりに仮卒業証を渡されて、海軍に入隊しました。第二次大戦の末期でした。今の若い人にとって就職は大きな人生の課題ですが、その頃の若い男性の大半は軍隊へ入った。海軍の航空隊に入りました。明日の朝、特攻をかける、誰と誰は準備しろ。上官にそう言われたその友達は二度と帰ってこない。やがて飛行機もなくなり、私は見張りの指揮官をしました。夜になるとアメリカの爆撃機が来て、あたり一面に爆弾を落としていく。当たらない方が不思議なくらい。敵機が近づいてくると部下を避難させ、私と下士官の二人が屋上に残ります。飛行機の機銃掃射の弾は進行方向にまっすぐ飛ぶ。飛行機がこっちを向いてなきゃ平気ですが、パイロットが見張りの私たち

を見つけ、旋回してこちらへ向かってくると避難しなきゃならない。分割みの命、死と隣り合わせの生活でした。そんな状況の中では、人間は一日一日を大切に生きるんです。終戦を迎えると日本へ帰ってくることができました。25歳のときです。私の価値体系の一つは、このときの体験から生まれました。私と同じ世代の人たちはそういう厳しい体験をしてきました。

私たちは変われるか

ロータリーはWHOやユネスコを通して国連の人道的な活動の応援をしているので、ロータリーの国際大会には国連からスタッフが出席します。一昨年のコペンハーゲン大会では、国連ミレニアム・プロジェクトの責任者、ジェフリー・サックス氏が報告をしました。「アフリカの人々は何を学び、なにをしなければならないか、どうすれば生活が改善できるか、道筋はわかっている。水を確保し、飲めるようにする方法もわかっている。しかし、わかるだけでは、のどの渇きを止めることはできない。みんな階段の下まで来ているけれど、上に登ることができない状態です。なぜなら国連が世界の国々に呼びかけても協力しないから」「アメリカはイラクの派兵に莫大な金額を使った。国連の分担金よりそちらに使うほうが大事と考えているようだ。アメリカは選択を誤っている」。サックス氏にとってアメリカは自分の国ですが、自國中心にものごとを考えるようになったアメリカを批判していました。私たち日本人も、金さえ出せばいいという考え方から、「そうすることが必要だから」と考え方を変えなくちゃならない。

そのアメリカは、サブプライムローンの破綻をきっかけに、経済問題で大混乱しています。情報化社会で株やファンドを操作していた金融資本主義のもとで、気が付くと多くの人が莫大な損失を抱えることになった。

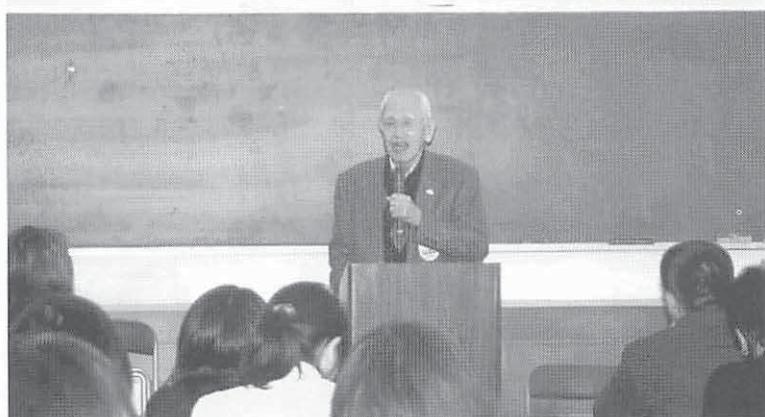
経済をコントロールするのをやめて、儲かるときは儲けて自由にさせればいいと言ったのは、ノーベル経済学賞を受章したミルトン・フリードマンなど、新古典派の経済学者です。（人間の問題を考えずに経済だけを考えるなら、そうかもしれませんね。）資本が大きい方が利益も大きくなる。大きな資本を集めるのは、個人では難しいから、株主をたくさん集めよう。その株主たちの目的は何かというと、利益の配当です。会社が社会的にどういう役割を果たしているかとか、人間とのかかわりは考慮しない。そういう新古典派の考え方が膨らんでくると、富が偏在する。ようやく世界の国々がそれに気付いて、もう少し人間を大事にしなきゃならないと考え直そうとしたが、構造改革はそんなに簡単にはできるものではない。そんなときに、アメリカでも今までの考え方を間違ってる、戦争はやめよう、無駄なお金の使い方はやめよう、人間がもう少し豊かになる方法を考えようという人々が声を上げました。そして大統領選にアフリカ系アメリカ人のオバマ氏が立候補を表明しました。彼は人間を大事にしよう、人間がみんな豊かになる国をつくろうじゃないかと訴え、それに賛同する多くの人が民主党に投票しました。

ブッシュ政権時代の2001年9月11日、ニュー

ヨークで起きた同時多発テロのあと、アメリカは國の方針を変えました。イラクは核を持っているようだから破壊しようと戦争を始め、5,000人のアメリカ兵が亡くなりました。このやり方は間違ってるんじゃないかという声が高まってきていた。オバマ政権誕生の背景には5,000人の死と、アメリカのやり方を変えなければならぬ時期が来たと皆が考えたことがあります。アメリカだけが繁栄するのではなくて皆が一緒に繁栄することを考えよう、そのように政策を変えよう。そのときに出てきたオバマ候補の言葉に多くの人が賛成した。

アメリカは異なる文化と言葉を持つ人々が、長い時間をかけて人民の、人民による、人民のための国としてUnited States of America、アメリカ合衆国を作った。奴隸解放の戦争もありました。United States of Americaと言ひながら、実は白人のアメリカだったんです。ヨーロッパから来た人々の中でもW A S P（ホワイト・アングロサクソン・プロテスタント）の人々が中心となって国をつくった。1905年、ロータリーが誕生した頃のシカゴでさえ、まだ人種の垣根で、イギリス人をはじめ、ギリシャ人、スペイン人、北欧の人、アイルランド、アイスランドの人もいて、それぞれが母国ごとのグループをつくり、母国の言葉を使っていた。

9.3.26～3.29 於 神戸Y M C A 余島野外活動センター
催：R. I. 第2670地区・R. I. 第2680地区 R Y L A 運営委員会



アメリカの著名な歴史学者、アーサー・シュレージンガーがいまから16.7年前に「アメリカの分裂」という本を書きました。もともと異なる国々から集まってきた人々が言葉や文化の違いを乗り越えて、ようやくアメリカという一つの国になった。そこへあらたにヒスパニックの人たちやアフリカの人々が入って、いまアジア系の人々がやってきた。人口比で比べると、白人のアメリカ人よりヒスパニック系の人たち、アフリカ系の人たちの割合が高くなってきた。そのグループがそれぞれに力を持つようになると、アメリカは内部から分裂するのではないか。それをもう一度くっつけてアメリカは一つになることができるだろうか、というものでした。オバマが民主党の大統領候補になったとき、私はシュレージンガーのこの本を思い出して、みんなオバマを支持すると言っているが、いよいよ投票するときにはヒラリー・クリントン候補にいれるんじゃないかなと考えていました。

戦後すぐ、私が初めてアメリカへ行った頃は人種差別意識が強かった。駅の待合室はカラードとホワイトにわかれ、学生のグループと一緒に駅まで来ると、「あなたは向こう、僕らはこっち」と言って別れていく。日本人はホワイト、白人用の待合室に入るようにと言われたんです。ニューヨークでコミュニティ・サービス

の研修を受けました。コミュニティというから、私は地域の人全部が対象だと思ってたんですが、担当者がいうコミュニティ・サービスとは、地域の中のアフリカ系アメリカ人のグループにどんなサービスをして、どのように自分たちの仲間に入れるか。たとえば「うちのプールは差別しないですよ」と、言ってました。州立大学の教授と話をしていて喫茶店に行こうとしても、学内はともかく一歩外に出ると一緒に店に入れない。これがアメリカの現実ですと聞かされたのはずいぶん前ですが、そんな経験をした私にとって、アメリカがどう変わるかということには、興味があります。

カナダのバンクーバーは、香港の人たちが香港から財産を持ってバンクーバーに移り住んで、ホンクーバーと言われたりしてますね。あそこの英語学校の留学生は大学に入る準備をしているんですが、アジア系の人、韓国人たちが非常に優秀。かつて反日運動をしていたころのアメリカでは、黄色人種の日本人は馬鹿にされていたけれど、今はそのグループを違った目で見ています。

先頃「アメリカはなぜ変わられるのか」という本が出ました。本の帯に「なぜ日本は変わらないのか」とあります。著者の杉田さんは新聞記者で、アメリカには1人の人間の発言が国を動

II. 第2680地区RYLA運営委員会



かせるシステムがある。オバマの選挙運動についても、あちこちで聞いて調べてるんです。「アメリカの分裂」についても杉田さんは、アメリカはそれを克服するだろうと書いています。

では、日本はどうか。自民党はだめ、民主党は誰々がどこから献金を受けとっているからだめ。そんな状態が続いている。日本はなぜ変わらないんだろう。古い人間が頑張っているからだめ、ではないんです。若い人に新しいシステムを支える準備がまだできていない。これは若い皆さんへの課題です。21世紀になって世界が大きく変わっているときに、はたして日本ではリーダーシップを担える新しい考え方が始まればか。気が付いたら日本だけ世界の動きから取り残されていたということになるんじゃないかなと心配です。

未来はあなたがたの手の中に

来年度の国際ロータリー会長は「ロータリーの未来は次の世代を担うあなたの方の手の中にある」というテーマを掲げました。英語では“*The Future of Rotary Is in Your Hands*”。ロタリアンが掲げる理想主義的な夢を実現させるために、この1年努力してください、ということです。「ロータリー」を、「あなた方」と置き換えると、地球の将来、世界の将来も日本の将来も、あなた方の考え方、あなた自身がどのような価値体系を持って歩むかに深く関わっている、となります。広い視野で見るなら人間が地球や自然とどのように共生できるかを考えること。たとえば、アマゾン川流域では熱帯雨林がなくなろうとしています。それは人間が切り拓いて伐採するから。そういう人間の在り方は是非を考えるときに、皆さんの考えは拡がり国際

性を帯びてくる。21世紀は、日本を中心に考えていては、生きていけない。皆さんはあるゆる国と一緒に「生きること一いのちー」をシェアしなければならない立場にあります。このセミナーで、皆さんにロータリーが追い求めている理想を知って欲しい。理想とは夢、Dreamです。そのDreamをRealityに変えることができるのが、皆さんです。

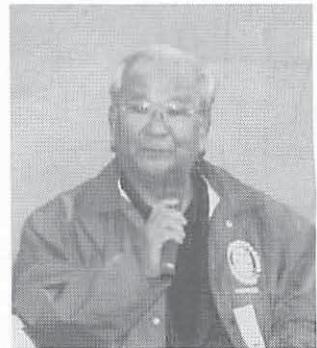
私たちは時代の変化のただ中で、科学の力で進化した「道具」に振り回されているのではないか。道具はどんどん進化し、性能が上がり緻密になるけれど、多くの人はそれを十分に使いこなせていない。だましだまし使っていれば何とかなると思っているけれど、人間の考えが科学の進歩に遅れをとっている。これが現代の日本の一面ですね。

あるいは、人間が働くのはお金を儲けるためなのか、なぜ生きるために儲けることが必要なのかが問われる時代です。人間と環境、人間と自然を考えるときに、「人間のための」ではなく、それらとどう調和して生きていくかという新しい課題が出てきている。さんは、20世紀とはまったく違う世界の中で、人間の生き方とか幸福についてあらためて考えなきゃならない。それには進化した「道具」をうまく使いこなす必要があります。携帯にしてもどんどん便利になっていますが、そういう道具を使って新しい時代のステップをどのように踏み出すのか。これは皆さんの課題です。「考えない」世界から「考える」世界へ、「カネ」より「人間」について考える世界を見つめ直さなきゃいけない。人間というのはあなたがた自身のことです。あなた方の「道具」はそろいました。それを使いこなして新しい課題をどう克服するかを考えてください。

閉講のあいさつ

飯 忠悟

国際ロータリー第2670地区パストガバナー・新世代アドバイザー
(今治RC)



皆さん、いい出会いをしましたか。我々が皆さん方に提供できる出会いで、その中で、いろんな出会いの中で、この年になってよくわかることは、友達ほど貴重なものはない。本当に尊敬できる友達が、あなたの周りを見回して何人いるかと考えて。それは、数多くの出会いの中から、本当に尊敬できる友達、残念ながら、僕はとても尊敬できる友達を数人持ちまして、もう、いずれも先だって逝ってしまわれました。自分の身切られるようにつらかったですね。ロータリーの世界の中に入りまして、おかげをもちまして、今のこの年になっても、尊敬できる、正師と呼べるような友達が何人かできました。本当に友達というのは貴重なものです。この提供された機会の中で、皆さん方がいろいろと自分の尊敬できる友人をつくって、長い付き合いの中で、尊敬できて友人ということを聞くときに、昨日聞いて少し気になったことは、対等の関係とかお互いの、相互のという。相互のというのはないんですね。信頼というのは無

条件で自分が提供するもの、愛情もそうです。無条件で相手を尊敬できること、その尊敬の中から相手の友情も得ることができると思います。

私も、阿部先生ではないんですが、一応、3代目のクリスチャン。クリスチャンも3代目になると、グレスチャンになるという、非常にぐれていますけれども。コリント全書、コリント人への手紙、前の章のところ、13章というのがあります。それは有名な愛の章と呼ばれる聖書の1章になります。その愛の章の中に、愛は寛容であって慈悲深いと書いてます。寛容の精神があって、相手を許して、相手に何かを自分に対して求めるんではなくて、相手に対して寛容であってこそ、初めて眞の友達も友人も得られるものだと僕は考えています。与えられた時間は、割ったら6分25秒ということになりますので、これでもっといいお話をしてくださいの方に話を譲っていきます。

以上です。よろしくどうぞ。

閉講のあいさつ

橋本 一豊

国際ロータリー第2680地区パストガバナー・新世代アドバイザー
(神戸須磨RC)



2680地区の新世代アドバイザーを仰せつかつております橋本でございます。

本当に、自然との触れ合い、そして人ととの触れ合い、すばらしい講師陣に恵まれた3泊4日のRYLAセミナーも、今終わろうとしております。皆さん、十分にコミュニケーションできましたでしょうか。コミュニケーションの本来の意味は、自分たちの意見を出して、相手と心を交わるということでございます。

今年の3月のロータリーの友という雑誌でございますが、そのときの雑誌に、日本の教育に欠けているものという題で、石坂公成先生の講演の記録が掲載されています。ちょっとショックでございました。というのは、社会に役立つ人間をつくるためには、自分とは違う考え方や習慣を受け入れることを考えなければならぬこと。日本の学校で専ら行われることは、知識を詰め込むことで、果たして、それだけで教育の本来の目的は達成されるのかと。

幼稚園や小学校の低学年の教育で、アメリカの学校がもっとも大事にしていることは、読み書きや計算ではなくて、彼らの教育の第一歩は、自分のいる社会には、自分とは違った習慣や考え方をもった人たちがいるということを、子供たちに自覚させ、同時にいろんな民族にも共通な人間としてのモラル、社会人としてのマナーがあるということを教えるということでございます。現代の世の中に生きていくためには、どうしてもコミュニケーションが必要ということをございます。

しかし、残念ながら、これがショックなお話をございますが、我々の使っている言語が非常に難しい。日本語は、あいまいな表現で否定でも肯定でも、どっちでもとれる文章もあるということなんです。さらに日本語は、主語のない文章だとか、述語のない文章が結構使われています。私も、家内には「ばっ」と言われて、いや、主語がないですから、「だれが?」ということをよく聞きます。「まだわからんのか」と、こういうようなことが返ってくるわけでございますけれども。そういうことで、少なくともこの先生がおっしゃるのは、子供たちには一つの意味しか解釈できない英語と同じロジックの日本語を教えろと、こういうことをおっしゃってるわけでございます。やはり日本の将来は人材の育成であるということですので、コミュニケーションのできる日本人を育てていかねばならぬということで、それが日本の、この難しい言葉が弊害になっていると、こういうお話をございます。

皆さん方このセミナーで、それぞれコミュニケーションスキルを学ばれたはずでございます。どうぞ、この日本語のロジックで十分にコミュニケーションスキルを保っていくように、今後とも頑張っていただきたいと、このようにお願ひいたします。

それから、この後、恐らくRYLA学友会の勧誘をやらせていただくということになっておりますけれども、皆さん方の年代というのは、このパンフレットにも紹介がありました、我々が

かかわっておる青少年プログラム、インタークト、それとローターアクトというのが紹介されておると思います。それで、皆さん方の年代はどちらかというと、ローターアクトの年代でございます。

2670地区には11のローターアクトのクラブがあるわけでございますけれども、それにも書いてあります。2680地区、私の地区でございますけれども、七つしかございません。そういうことで、せっかくこのロータリーとのかかわりを持って、そして興味を持って今後もロータリアンと一緒に何かをやってみようという、そういうお気持ちができましたら、ぜひひとつ皆さん

方をスポンサーなされたクラブと相談されて、ローターアクトのクラブがあれば入会していただきたいし、なければつくることを考えていただきたいというように思います。

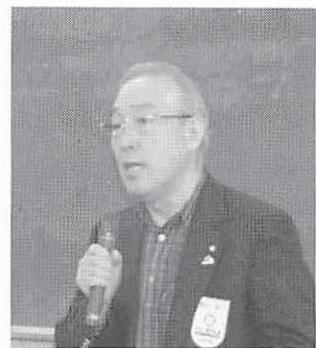
最後でございますが、このセミナー、本当に天候に恵まれて、十分に成果があったと考えております。いろいろ講義等、そしてリードをしていただいた今井、深川両先生、並びにカウンセラーの方々、そしてこのRYLAセミナーを支えていただきました、RYLA委員会の運営委員の皆さんにお礼を申し上げまして、ごあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。



閉講のあいさつ

豊田 章二

国際ロータリー第2670地区（四国）ガバナー
(高松南RC)



皆さん、RYLAの最後になると非常に目が生き生きとしていますね。もう少しの時間で終わりますから、御協力ください。

実は、私の個人的な話を少し聞いていただきたいと思います。ガバナーという仕事は、ロータリーで地区とR I のつなぎ役という形で1年間やっております。仕事の中で、ガバナーズレターというのを毎月出すんです。それから何周年記念とか、いろいろなところへ、すべて行かないといけないんですが、その関係の書類も書かないといけないということで、いつも二つか三つ何かを書くことに追われております。ですから、今回も、まだまだ書かないといけないことがあるということなんです。

この前に、実は私の所属している高松商工会議所から突然に原稿を書いてくれと頼まれました。簡単ですから書いてくださいと、もう勘弁してくれということをお話ししたわけです。頼まれたらNOと言えないのが、ロータリーかも知れません。本当に私の“すぐれもの”というか、“大事なもの”というところを書かせていただきました。その題は、「いつもの」ということで、ちょっと読ませてもらいます。

「私の逸品、何年も前に旅立った愛犬。だが、彼の現住所は天国。では今、この世では、私の逸品は心安らぐときであり、場所である。悠々自適とはいえない身、めったに来ない日曜日。朝一番近くのカフェ、「いつもの」コーヒー好きとはいえない私だが、コーヒーがおいしい。香ばしいトースト、そして新聞。この二、三年

来のぜいたく。

夜、もう何年になるだろう。小さな窓の明かりに魅せられて入った小さなお店。壁の色、カウンターの広さ、そして遊び相手の小物たち。店主のこだわりがうれしい。「いつもの」それはココア、店の名前も覚えられぬ、「いつもの」。

私が今日お話したいのは、最初の段の私の愛犬のことです。亡くなったのが3年前です。21年前に、私の次男、ちょうど13歳、非常に困った時期がありました。どうしようかなと。犬を飼ってほしいということで、今まで犬を飼ったことがあるんですが、本当に亡くなつたときの別れということを私は考えると、もう非常につらいということで、飼うことを拒んでたんですけど、彼がぜひ飼いたいと強く望むので飼うことにしました。ただ、飼うときに、やはりこの犬は、必ず最後の最後まで見届けてやろうということを、私は考えました。家族と一緒に、それを誓いました。

18年間、長生きですね。非常に長生きしてくれましたが、18年間、私たちと一緒に生活をともにしました。本当は非常に血統のいい犬でした。実はうちの息子は、彼の名前をヨタロウと名付けました。私はいつも家の近くでは、ヨタロウ君のお父さんということで呼ばれてました。それで、亡くなる3カ月前に、本当に私の家内は、もう犬と同じ時間に起きて、同じ時間に寝るという、そういう時間を通して、最後の10月の8日に彼は逝ってしまいました。本当にさみしかったですね。

ということで、やはり私たちの家族は、彼をとおして命の大切さと、命の尊さを、家族一同心に刻んできました。そして、それ以来、私は次の犬を飼いたいなという気持ちがありましたが、やはり、この次の犬をちゃんと最後までみとれる時間が、私たちにはないかもしれない。やはり無責任に犬を飼ってかわいがって、いいときはいいが、あとはもうほいっと捨ててしまうということは、私たちにはできないということで、今も犬を飼わないでおります。皆さん、このことが参考になったかどうか。

話しつきませんが、皆さん、本当に長時間、御苦労さまでございました。お世話をしていたロータリーアンの皆様、そして、カウンセラーの皆様、それから皆さんが毎日寝起きをしたり、掃除をしたり食事を用意してくださった人たちに感謝をしてほしいと思います。

今回3人の先生方の話しを聞くことができました。阿部志郎先生、それから最後の今井先生ですね。今井先生は、本当に記憶がすごい人だ

と思います。皆さん、恐らく、もう阿部先生とか今井先生の話を聞くことはできないかもわかりませんね。私は今日ここにおられる人たちは、非常に幸せじゃないかなと思いますよ。ぜひ、先生方の言った一つ一つを思い出していただきたいと思います。

今日、この島を離れるときから、皆さんと私たちは別れになるわけです。ただしかし、皆さんのかウンセラーとかRYLAの人たち、皆さんの友達はこれから長い長いつき合いをしていくと思います。この4日間の想い出をぜひ心に刻んで、そして皆さんのお家に帰って、皆さんのお職場に帰って、このことを忘れないで、ぜひ持ち続けてほしいと思います。これから的人生にプラスになるんじゃないかなと思っております。

本当に最後になりましたが、皆さん、この余島YMCAに、このRYLAのキャンプに来ていただいたことに対して、心からお礼を申したいと思います。ありがとうございました。



閉講のあいさつ

宮本 一

国際ロータリー第2680地区ガバナー
(芦屋RC)



皆さん、お疲れさまです。

一度ちょっと目を閉じてください。ほんほん船で渡って来たあの日を思い出してください。ちょっと寒かったですね。インフォメーションセンターでネームとかそれからいろんな資料を渡されたと思います。これが4日間、これからつき合う大切な道具でした。目を開けていただいて結構です。ついでに寝るような人がおると困りますから、ちょっと目を開けておいてください。

いろんな催しも、先ほど皆さんから御説明がありましたように、非常に時間をかけた準備をされました。一つのコーナーも、前もって必ず打ち合わせをされたおかげでスムーズに時間どおりに進んでまいりました。

今、先ほど豊田ガバナーのお話にありましたように、準備をしてくれる人はもちろん、掃除をしてくれる人、食堂の人、いろんなスタッフのおかげでスムーズにいきました。幸い、皆さんの精進がいいのか、素晴らしい天候に恵まれました。それでもはじめ、サクラは余り咲いておりませんでしたが、昨日の晩からぼつぼつ咲きかけております。また、この海沿いに行かれました方がおられるかもしれません、一昨年の、私たち2680地区のガバナーだった方が、この打ち寄せる波の音を、母の音と表現した歌を詠んでおられます。

このすばらしい自然を大切にするのは、私たちの義務かもしれません。毎年、毎年、32回、35、40回とこのセミナーが続いていくでしょう。

そのときにも、やはり同じ音で、皆さん、よく来たねと。困ることがあったら、またここへ来なさいよと波を打ってくれるように望みます。

さて今回、セミナーのテーマを「いのち」ということで決めております。これは先ほども言われましたように、人間はどうしても視野が狭いんですけど、人間としての視野はお友達の助けて広くなります。ただ、残念ながら私たちのように年齢が上がってまいりますと、目の、耳の、それから視野がだんだん狭くなっています。ですから、皆さんとおつき合いし、お話をすることは、非常に自分のためにもなりますので、皆さん、ぜひ、いろんなことをお話しitいただきたいなと思っております。

昨日のフォーラムのときにも出ておりました。命の大切さというのは、昔と今とは、全く重さも価値も一緒です。一人、産婦人科関係の方がおられて御発言されましたように、昔は助産婦さんや医者もありますし、病院もあります。今と余り変わりませんが、実は子供の命の価値というのが、だんだん金額的にも内容的にも変わってきております。簡単にいえば、7カ月、8カ月、9カ月で生まれると、途中で子供の体重が小さいから死んで当たり前という時代でありましたが、この時代になると、妊娠して生まれて、これが当たり前。元気に育って当たり前ということになります。ということは、何かの都合、何かの病気で、例えば800グラムとか1,000グラムとか1,500グラムの子供が生まれると、ある程度インクベーターという特殊な箱

の中に入れて、酸素も温度も管理して育てます。逆にいいますと、普通ならお母さんが2週間、3週間、ひと月と、おなかの中で育てるものを箱の中で育てるということになりますと、それだけ病院のベッドがいっぱいになってしまいます。したがって、今、全国では乳幼児のベッドが足らないということになっています。元へ戻りますと、到底昔では救えなかったり、誕生しなかった命が、いろんな操作や検査や処置で救えるようになりました。

もっとぜいたくになりますて、今度は男の子がほしい、女の子がほしい。特に先進国アメリカでは、御夫婦が医者のところへ行って、男の子が欲しいと頼んだのに、女の子ができたということで医事紛争になっております。日本は、まだそこまではいっておりませんが、だんだん人間の考えが変わってきております。

ですから、命に関しましても、その価値に関しましても、今から5年10年先の、このRYLAでは、同じテーマでも違う見方をとるような方があるかもしれません。ただ、昔と変わらないのは、お母さんが子供を見る目とその愛情です。金で買えないこの命の価値というのは変わりません。ここにはすばらしい女性がたくさんおられます。日本は少子化が進んでおりますの

で、できたらたくさんいい子を育てていただきたいと思います。男性も女性も「いのち」の尊さを知っております。お父さん、お母さん、また自分たちの息子らが、必ず、その大切さを教えてくれます。平和で幸せに、この尊い「いのち」を一人一人の優しい愛の手で支えていただけるように祈っています

この4日間の意味と素晴らしさに気が付き、よかったですと思えるのは、多分帰宅後、しばらくしてからのことだと思います。4日間の短い時間でしたが、皆さん的人生に有意義な時間だったと思いますので、自分で考えていいことは今からぜひ努力してください。

どうもありがとうございました。お疲れさまでした。

○司会 どうも、ありがとうございました。

これをもちまして、閉講式のセレモニーは終わらせていただきます。

最後になりますが、前におられますガバナー、アドバイザー、そして、この今井先生、深川先生に、皆さん方の感謝の気持ちを拍手であらわしていただきたいと思います。どうも、ありがとうございました。





ライラ学友会の説明



感想文



余島をあとに

参加者感想文

A班



◆ カウンセラー 濱田 吉隆

第31回のライラセミナーを企画、運営されたすべてのスタッフの皆様ありがとうございました。素晴らしい講師の先生のお話、いきとどいた準備、手配のおかげで何の心配もなく安心してカリキュラムに参加することができました。今年はどんな受講生が集まってくれるのかとても楽しみにしていました。

最初、緊張気味だった受講生達もキャビンタイムやレクリエーション等のカリキュラムを通してどんどんA班としてまとまり、タイムアップぎりぎりまで話し合い、まとめたバズセッション。発表に寸劇？コントを入れたい。時間がない。形にしよう！でも不安。

でも、フォーラムでのA班の発表は、みんなの思いの込められた素晴らしい立派なもので、とても誇らしいものでした。A班、最高でした。みんな本当にありがとうございました。

大江おかあさんの素敵なキャラに魅了されてクラクラしているうちに、アッという間に閉校式になってしまいました。

A班の受講生の皆様の笑顔、声、姿をおみやげにしようと思っています。

ありがとうございました。

◆ カウンセラー 大江 与喜子

初めてのカウンセラー、けれど懐かしの余島。YMCAの少年少女キャンプに初めて参加した時とは別な興奮と緊張を抱きつつ、余島に一歩踏み込みました。そんな私を穏やかにリードして下さったのが先輩カウンセラー、A班のお父さんでした。受講生とキャビンで初顔合わせ。受講生のみんなが自らうちとけてくれ、カウンセラーの仕事はありません。

「いのち」というテーマの元、阿部先生の講話に、普段から考えているようで気付かない生きていることの幸せを受講生と共に共有し、スポーツを通じてさらに自らをみせてくれた受講生達との2晩目は、今まで言えなかった事、言えなかった人たちの心をときほぐした様でした。そして翌日のバイマーヤンジン氏の話に涙し、さらにみんなの気持ちがひとつになりました。

た。バズセッションとフォーラムのみんなは真剣でした。話し合ったことを表現することも、アイデアが次々と変化し、なかなかできあがらなったけれど、夕飯ギリギリまで練習したコントは最高でしたよ。こんな発表の仕方もあり、とロータリアンの方々にアピールできました。フォーラムも、もっと言いたかったこともあった様ですが、その夜たっぷりおしゃべりできました。受講生みんなが「A班が一番」と心から思ったことこそ、このRYLAの成果だったのでないでしょうか。

将来のロータリーを、将来の地球を背負う若い人達とともに過ごせた4日間。受講達以上に、受講生達からいろんな事を勉強させてもらいました。ありがとうございました。そしてRYLAのプログラムを準備された地区ガバナーはじめスタッフの皆さん、ありがとうございました。初カウンセラー、一体何をしていたのか、終わってもあんまりわかつていませんが、リードして下さった濱田カウンセラー、本当にありがとうございました。

やっぱり、余島は永遠に素晴らしいですね。

● 逸見 信行

今回、RYLAセミナーに参加できて、色々な人の出会いがあり、素晴らしい4日間を過ごす事が出来ました。

この余島でのゆったりと流れる時間の中、仲間と語り合い、いのちの大切さや、自分の生き方など、普段考えられない多くの事を考えさせられました。

その中で、特に印象に残っていることは阿部先生の講義での自己愛についてです。

自分に自己愛があり、相手も自分と同じように自己愛があるのを忘れてはいけないので、相手に対して思いやりを持つよう努力していくたいと強く思いました。

人それぞれの価値観があり、個性があり、お互いを尊重しなければ、社会の中では生きられ

ないので、思いやりや気遣いの大切さを学びました。

4日間、共に過ごした仲間、お父さん、お母さんに感謝します。

● 阿部 奈津子

「出会いに愛を」

3月26日（木）期待を胸いっぱいに詰め込んで、自然に囲まれた余島に足を踏み入れました。桜がほころびはじめていて、春のおだやかな日差しが降り注いでいました。どんな出会いがあるのか、出会った人とどんな話ができるのか、出会いが素晴らしいものになるのか、RYLAセミナーが終わっても友人と呼べる関係が築けるのか、そんな友人が一人でもできたらいいな。そんなことを考えていました。

私がロータリークラブに出会ったのは6年前になります。まず最初に影響を受けたロータリーの精神が「頼まれごとは断わってはいけない」ということでした。頼みごとは頼んだ人が「この人ならやってくれる」と頼まれた人を信頼しているということ。とてもその言葉に温かさを感じたのです。ロータリークラブから感じる温かさは6年たった今も変わりません。

この4日間、喜び、楽しさに満ちた時間を過ごし、様々なことを考えました。その中の一つ、数ある出会いの中からどんなに心を打ち解けられる、理解しあえる友人を作ることだけが大事なのではなく、全ての出会いに感謝し、愛を胸に抱き一つ一つの出会いから学び成長し合えることも大事だと思いました。

● 山下 枝里子

「人との出逢い」

3泊4日のRYLAセミナー。今回のセミナーでたくさんの事を学ぶことが出来ました。その中でも、やはりA班メンバーとの出逢い。学生、他職種の方との4日間の交流は私にとっての宝物となりました。夜遅くまで「いきる」という



テーマで語りあったり、時にはくだらない話をして笑ったり、今抱えている悩みを仲間に打ち明け、一緒に涙したりと、とても有意義な4日間を過ごすことが出来たように思います。

毎日の日常の繰り返しの中で、立ち止まり、今の自分を見つめ直す最高の時間を与えていただきました。

また小豆島の自然の素晴らしさも再度認識することが出来ました。生まれ育った小豆島がより好きになれたように思います。

当たり前に思っていたことが、いかに幸せで恵まれているのかを実感しました。

このセミナーが終わるとまた現実の日常に戻ります。今の自分に出来ることを見つめ直し、一生懸命生きたいと思います。

RYLAセミナーに参加することが出来たのも人との出逢いがあったからだと思います。

このセミナーを支えてくださったロータリアンの皆様に心から感謝したいと思います。

● 垂井 聖一

「予想以上の充実・感謝の4日間」

私はRYLAの4日間を終えて、当初の想像以上の充実感を今、感じています。

一番良かったと思ったことは、様々なプログラムを通じて実際に「出会い」から「仲間づくり」を体験でき、その仲間と協力しながら生活できたことです。みんなでしたキックベースは今でももう一度やりたいと思うほど楽しかったし、特にバズセッションからフォーラムにかけては、班の中で葛藤を抱えながら、でも班みんなの気持ちを尊重して思いのこもった寸劇付きの発表を行うことができました。キャビンタイムで2回もみんなの素直な考えを聞かせてもらえたのも、心がスッと近づいた気がしました。

また同じキャビン、班のメンバーの意識が高かったり、とても思いやりを持った行動をされていることを感じることが多く、自分もそうできればと刺激されました。そして、A班が自然

とみんなにとって安心できる居場所となっている感じがしました。

今回のサブテーマのようになっていた「出会い」は、上手に出会うことが苦手な私にとって大変ありがたく、今後の人生においてしっかり考えていきたいことでした。

元々あまり関わりのなかった私たちへ、なぜここまでして下さるのかと不思議なほど、RYLA関係者の方、班のお父さん、お母さんには親切にしていただきました。せっかくいただいたこのきっかけを活かせるよう、また班のメンバーとのせっかくのつながりを続けていけるよう、日々の生活、仕事の中で活かしていくたいです。ありがとうございました。

● 田坂 明

「RYLAに参加して」

今回、正直自分から進んで参加した訳ではなかったけど、研修を終えた今の自分の心はとてもすがすがしい気持ちでいっぱいだ。それは、やっと帰れるということもあるだろうけど、やっぱり3泊4日の研修が充実していたことが大きいと思う。様々な経験を積まれた先生方の講義、色々と準備をして下さったイベントの数々は自分の今までの人生では経験したことのないことばかりだった。そんな研修の中で一番の思い出はA班の仲間達と知りあえたことだ。年齢も職業もバラバラな人達と同じ部屋で過ごす4日間は奇妙で不思議な連帯感を感じた。今まで別々の人生を過ごしてきた人同士で寝食を共にして課題をクリアしていくことで、人それぞれ色々な肩書があっても、同じ対等な人間なんだということを、理屈ではなく肌で感じることができたのが、今回の一番の収穫だと思う。

今回の研修が自分に与えた影響が、今後の人生にどう関わってくるかはまだ分からぬが、間違いなく自分にとって人との関わり方にについての考え方への良い影響を受けた。

● 石川 竜哉

「RYLAと自分とA班」

RYLAセミナーを通じて私は、自分の短所である人見知りを少しでも直そう、それと同時に自分から話しかけられる人になろうと4日間を過ごした。右も左も知らない人という空間は苦しかった。でも気が付けば明るく普通に話をしている自分がいた。それはA班という素晴らしいメンバーと出会えたからだ。

余島という島は時間の経過がとても遅く感じる島だった。携帯電話やテレビといった普段当たり前のように使っている物から離れた生活は、私生活を見直す良い機会となった。

RYLAセミナーはとても不思議で人見知りの自分の改善、テレビなどの現代器具から離れた生活を当たり前にしていった。

この4日間を共にしたA班はとても個性が強かった。最終日のカミングアウトにはとても驚いた(笑)。今回のセミナーで出会いの大切さを知った。A班のメンバーは、変な人が多かった。変態。うん。いや多くはなかったかも。班にとけこめたのも変態パワーかもしれない。A班のメンバーの心にはとても熱いものがあった。どのグループよりも熱いハートがあった。熱すぎて少し火傷しそうにもなった。こんな変態A班とは絶対にまた集まりたい。

この4日間でお世話になった方々には本当に感謝している。人生の宝物ができた。この文には書ききれないたくさんの経験、思い出は私を大きくしてくれた。今回のRYLAセミナーで学んだことをこれから的生活に活かしていきたいと思う。最高の4日間だった。

I LOVE A班。I LOVE 余島。I LOVE RYLA.

● 藤本 祐希

「RYLAセミナーを終えて」

初日、余島に着いたときは本当に不安だらけで3泊4日ちゃんとやっていける自信がありませんでした。でも、4日間を終えた今は逆にす

ごく短くて、本当に名残り惜しく感じます。出身も年齢も、職業もバラバラなメンバーなのに、すぐ打ち解けることができて、みんなから色々なことを教わりました。初対面だけど本音で話し合って、色々な考え方や価値観に出会えたことで、改めて自分自身を見つめ直す機会になりました。4日間ずっと一緒に過ごしてきて、すごく仲良しで、私はA班で本当に良かったと思います。何をする時もなぜか自然に集まって来て、真面目な話もできるし、めっちゃはしゃげるし、すごく居心地が良くて楽しかったです。全力でやったキックベースも、真剣に何時間も話したこと、全部が新鮮でRYLAに来なかつたら絶対出来ない貴重な経験ができました。今回色々感じたり、考えたりしたことを、家に帰って振り返ってみた時に、一番自分の成長を感じられるのかなと思っています。

言いたいことはいっぱいあるのにうまく言い切れないけど、RYLAに来たからこそ経験できたことがいっぱいありました。私がこの4日間を楽しく過ごせたのは、A班のみんなのおかげです。仲良しA班と、お父さん、お母さん、みんな大好きです。本当の家族みたいなみんなと、また集まりたいです。4日間本当にありがとうございました。

● 黒田 安友美

「RYLAセミナーを終えて」

RYLAに参加すると決めてから、初日余島に到着するまでの間は本当に不安でいっぱいでした。来てからもどんな4日間になるのか、友達を上手く作れるのか心配でしたが、声をかけてくれて、そこからどんどん打ちとけて、また班に入ると、本当に全員が個性があり、いいメンバーばかりで、たった4日間なのにこんなに班のみんなを大好きになれたことに驚くのと同時に嬉しかったです。いのちについて、そして幸せとは何かを講義して頂いたのと、それを班に持ち帰り、何時間も真剣に話し合い、お互いに

耳を傾けました。

レクリエーションで班でキックベースをして、本当に面白くて楽しいメンバーで良かったと心から思いました。一番楽しかった時間でした。もっと長く続けていたかったくらいです。キャビンタイムでも日に日に班の中での空間が変わっていくのが分かって、みんなお互いを尊重して優しい気持ちが見れる班でした。カウンセラーのお父さん、お母さんも私たちのことを本当に家族のように見守ってくれたので、私たちも班が大家族みたいな時間を過ごすことができました。発表の時は全員ぐったりするくらい話し合って、全てのメンバーが参加できました。この出逢いをこの瞬間を一生大切に、そしてまた続けて付き合いたいです。RYLAに参加して、とても良い出逢いにめぐり逢えて幸せです。ありがとうございました。

A班サイコー♡

● 辻元 輝幸

「A班の4日間」

今日最後の日になって初めて、こんなバカができる、ちょっと変わったA班は心から4日間最高の日になったと自信を持って言えます。特に思ったのはキャビンタイムの時、全員が心の底から素直に話してたと思います。泣きながら必死に話す人、その一言一言に共感できることには、みながうなずき、討論してたといえます。でも時間というのは、おしくも過ぎ去っていくもの、最後の記念写真でのA班を見ても、ずば抜けてバカなのか、仲が良すぎなのか、おっくんとたっちゃんを肩車して写真を撮りました。でも、他の班は普通に撮っていたのにビックリしました。やっぱり今回RYLAセミナーに参加して本当にこのA班の一員として、4日間をすごしたことを、心からうれしく思い、またいつの日か、一緒にお酒を飲める日が来ることを切に願って、日々少しずつ成長しながら、生活できたらいいなと思います。同窓会には、お父さ

んもお母さんも必ず参加して下さい。本当に4日間ありがとうございました。

● 清水 裕美子

「出会いに感謝」

年齢も職業も異なる全く見知らぬ男女を3泊4日もの間、寝食を共にするという経験は、正直大変なこともありましたが、私の考えに大きな変化をもたらしてくれるものでした。

私がこのセミナーで学んだ一番大切なことは、私が今までいかに、「出会い」をないがしろにしてきていたかということです。

社会人ともなれば公私共々、様々な出会いがあります。しかし、私はこれまで、自分と気が合うかや自分にとってプラスになるかどうかを勝手に判断し、白黒をつけてその後の関わり方を教えていました。これでは、第一印象が全てで、またその人の内面をしっかり感じることができません。そうするならば、もっと分かりあえ、共に尊敬しあい成長できる出会いを逃がしていたかもしれません。どんな出会いにもまず感謝を、そしてその出会いを大切にしていく心を持っていなかった自分に気付きました。

その出会いの一つが、二日目に講演をして頂いたバイマーヤンジンさんです。彼女の教育にかける情熱や祖国への誇り、それを力強く話して下さった彼女の芯の強さにただ感服するばかりでした。私も教育に携わる者として、大きな勇気を頂きました。

最後に、このセミナーを運営し、支援して下さった全ての方にお礼申し上げます。

特に、未熟者の私を推薦して下さった神戸西神ロータリークラブの皆様、素晴らしい機会をありがとうございます。

そして、A班のお父さん、お母さん、メンバーのみんな、ありがとうございます！私は本当にA班でよかったです。またお会いしましょう！

● 林 裕之

「かけがえのないRYLA」

RYLA？職場の上司から渡された第31回のパンフレットを見た最初の感想でした。内容を読み進めていくうちに、自分にとって苦手な分野のイベント事であることを認識しました。「参加してみないか？」と上司に訊かれ、本音はパスしたいところでした。しかし口からは「行ってみます」という言葉を発しそるを得ませんでした。セミナーの開催日が近づくにつれ、辛いなあという想いが募っていくのを感じつつ、この日を迎えるました。

離れ小島に着いて、唯一の支えである職場の同僚と2人でしきりに見知らぬ人達が集まつくる不安を口にしていました。いざ開講すると、同僚とは班も別となり、不安が増していきました。けれども、自分と同じ気持ちの人はたくさんいて、話しかけてくれたり、手を差し伸べてくれたりする人達のおかげで、色々な不安がいつしか消えていました。

RYLAでは、本当に接点のない人達が集まり、寝食をともにし、語り合う中で様々な物事を感じ、学べたと自信を持って言えます。この4日間をもし、いつも通り職場で過ごしていたら、一生出会うことはなかったであろう仲間達とめぐり逢わせてくれたこのRYLAに、本当に感謝しています。そして、そのRYLAに私という存在を引き合ってくれた上司やロータリーの方々に、本当に感謝しています。

この4日間で、自分が得たもの、考えさせられたことを日常に戻ってもう一度考え方直してみようと思います。人生という旅の中で、偶然に立ち寄ったRYLA、かけがえのない経験をさせてくれた仲間達、本当にありがとうございます。自分も仲間達に何か訴えかけたり、残せたり出来ていたらいいな…また必ず逢いましょう。その時は誰もが今日よりもさらに大きくなつて互いを刺激し合える人間になって…。

● 猪川 秀樹

「4日間のRYLA」

4日間の研修を終えて、本当に勉強になることばかりであつという間の4日間でした。思えば、今回のメインテーマである「いきる」ということについて深く考える機会が少なく、この恵まれた社会に自分は甘えていたのだと痛感しました。

また、今回もう一つの出会いということも学び、出会うことの大切さ素晴らしさに改めて気付き、この出会いが私の中で必ず何かの糧になるであろうと確信しました。班分けしたメンバーともすぐに打ち解けられ、お互いの思いを存分にぶつけあい、友情を深めることができました。

最後になりますが、私はこのRYLAで経験したことを活かし、これから永い人生を生きていく中で活用していきたいと思います。

本当に4日間楽しかったです。

● 岡田 英敏

「RYLAでの出会いに感謝」

あつという間の4日間。本当に楽しい日々でした。大きな不安と小さな期待を胸に、この余島へやってきて、さっそく班毎にふりわけられ、どうなることかと思っていた1日目が嘘のように懐かしく思われます。

大人だけで本気になってスポーツをしたり、夜のキャビンタイムで真剣に心の内を話したり、バカ話をしたりする仲間達になるとは予想もしなかったのですが、このRYLAのプログラムを通して、そして班のお父さん、お母さんのおかげで自分の居場所となる仲間達に出会えたと思います。

出会った仲間達、企画運営していただいたロータリーの方々、講師の方々、そしてこの余島に深く感謝いたします。

この出会いが次の出会いにつながるよう、これからも自分を高めていきたいと思っています。

● 沼田 光一

「RYLAセミナーを終えて」

私は元々人見知りで、RYLAには誰一人知り合いがいなかったので、初めは不安ばかりでたまらなかった。しかし、A班というグループに入り、色々みんなが話しかけてくれたことで、初めての不安はすぐに消すことができた。私はA班はみんなが仲良しのように見え、みんなが心を開いて接してくれ、自分も心を開くことができ、みんなを信頼しているから真剣な話が出来た。今回のセミナーで一番考えたことは、「出会い」ということだった。私は今まで自分が人見知りということを言い訳にして逃げてきたようと思う。でも人見知りでも自分で努力をして色々な物を使って打ち解けようとしている姿を見ることができ、また一つ一つの出会いに感謝して、大切にしていこうという言葉を聞き、なぜ私は今まで何もしてこなかったんだろうとの凄く反省した。本当に今回は自分にとって勉強になったセミナーだった。自分を変えることは難しいかもしれないが、色々と考えさせてくれたRYLAのスタッフの皆さん、A班のメンバーに感謝し、努力していこうと思う。

● 木和田 杏

「RYLAセミナーでの出会い」

今年のRYLAに参加し、A班、17名で4日間の時間を共有できた事、2009年のRYLAを開催して頂いたこと、また、参加を勧めて下さった紹介者の方へ感謝します。

A班のメンバーは、1日目に初めて出会いました。4日間を過ごし、今は皆が笑って挨拶をし、会話を始める。昼に講義を聴き、夜は1人ひとりが自分の考えを話す。一言ひとこと一生懸命

話してくれる事が大変嬉しく、相談や意見を求める事ができたと思います。

私は今回の講義を拝聴し、自身の知識不足を再認識しました。日本は便利な国、豊かな国です。祖父母からは戦争での苦しみ、戦後の努力を経て、今の日本があることも聞いており、何が正しく、間違っているのかは結論はでませんが、今、戦争をしない日本。経済を発展させた日本人は誇りに思います。でも、現在、日本が戦後通った現状を過ごしている国もあります。「あなたは幸せですか」この質問に答えられない自分がいる。すごくはずかしく感じます。また、学校で学ぶことを望み、今、その為に努力している國の方からのこの質問に「べつに…」と答えた小学生がいたと話を聞いた時はくやしくて涙が出そうでした。この小学生は悪くありません。どうして私達大人が伝えてあげられないのかと思ったからです。

最後に時代の変化に私達は対応できていないと話がありました。今はパソコンやテレビがあります。できるだけ多くの情報を聞き、自身で考える事をしていきたいと感じました。

本当にありがとうございました。



B班



◆ カウンセラー 森 廣一

初めてのカウンセラーを（やっと）終えることができました。振り返って、自分の務めが不十分であったことが反省させられます。つまり、受講生にどれだけの気遣いができたか、どれだけ受講生の考え、気持ちを聞いてあげられたのかの後悔です。

反面、カウンセラーである自分は15名の受講生から数多くの貴重なものをいただきました。

寄せ書きに「再会を期待しています」と書かせていただいた気持ちは、正直に、受講生全員とライラセミナーが最初の出会いで、それから年齢の差、性別の違いに関係なく一人の人間として、励まし合い、関わり合いたいと思ったからでした。今回の機会を与えていただいたセミナー主催のスタッフの方々に感謝申し上げたいと思います。有難うございました。

◆ カウンセラー 吉岡 喜久子

不安と緊張を隠せない受講生の名前を一人ずつ呼びつつ、私も「いのち」という重いテーマ

を与えられ、彼等とどのように向き合い磨き合えるのかとワクワクドキドキしながらライラセミナーがスタートしました。成人式を終えたばかりの人、厳しい就職活動に悩む大学生、キャンプリーダー、四月から社会人として歩み出す人、故国のリーダーを目指すカンボジアからの米山奨学生、既に社会で活躍中の人など人生経験、出身地、国籍までもが異なる15名でしたが、キャビンで話すうちに表情がどんどん柔らかくなり、B班ファミリーが出来上がるのにさほど時間を要しませんでした。阿部先生の講義では「半分こ」の精神から「共に生きる」ことの意義を学びました。少数民族として辺境の地に生まれながらも家族の愛に支えられ、人生を切り開いていかれたバイマーヤンジンさんの話には胸を熱くして聞き入りました。カウンシルファイヤー、思索の時間、バズセッションと今までに体験したことのないプログラムを消化する中、彼等が如何に深く考え、話し合ったかはフォーラムの発表を聞いて確信することが出来ました。金融至上主義の負の遺産で暗いニュー

スばかり耳にする昨今、人間の本質を見失わず未来に向かって確実に歩みを進める15名の若者の真摯な姿に触れることが出来たのは何よりも喜びでした。21世紀は彼等が築き、支えなければならぬ時代です。余島で受け取った「RYLA」の種を自分の心の中、地域、職場に植えて下さい。そして、私にも時々「RYLAの木」の成長を見て下さい。RYLAセミナーはこれで終わったわけではありません。「葉っぱのフレディー」のお話のように今日が「はじまり」なのです。楽しい時間とたくさんのこと学ばせて下さったRYLAセミナーとB班の皆様一人一人にただただ感謝です。本当にありがとうございました。

● 梶屋 直司

「RYLA」研修を終えて

この4日間はすべて快晴の日に恵まれ、集合写真を撮り終えた今も、天候と共に心も晴れ渡っています。

4日前と現在の自分を振り返ってみると、やはり気持ちの変化が大きく変わったように思います。それは、人と人との繋がりの大切さです。年齢や性別等、関係なく自分の意見をしっかりと相手に伝えることの大切さです。このグループでは平均的に二十代前半を中心のグループでしたが、それぞれのもつ個性や会話の内容にいつもいつも感心しきりでした。

グループでは最年長でしたがグループの討論等、自分自身の発言に言葉に重みが足りないことをよく実感しました。グループ間や全体フォーラム等を通じてさらなる自分自身のカラーについて考えさせられました。その大切さを数えてくれたのはRYLAの出会いを通じて、ここに集まっている皆さんのお陰だとつくづく感じています。この貴重な経験を通じ、自分自身の一の力が少しでも大きくなるように物事の本質を見抜く力を磨き、夢をかたちにできるよう日々努力していきたいと思います。つらい

時は余島に負けない淡路島の空を見上げて困難に負けない力をもったメンバーの事を思い出して新たにがんばっていこうと思います。

● 清水 昭博

今回RYLAに参考するにあたって以前参加した人からは「いい経験になるよ」「変われるよ」など、いろんなことを言ってもらっていたのですが、人見知りしてしまう性格なので4日間みんなとうまくできるのか不安でいっぱいでした。そんな中、初日を迎えたのですが、みんな気さくに話し掛けてくれて自然とその不安も消えてきました。

キャビンでの話し合いは普段話し合わないようなテーマをそれぞれが意見し、いろんな考え方があることを改めて感じました。その中で自分の考え方を伝えることはできても伝わるよう話す難しさも感じました。

4日間ではありましたが、みんなと出会い、話し合えたこの経験を今後、自分の生活に戻り、活かしていくたらと思っています。ありがとうございました。

● 宮里 拓

「いのち」について学んだ4日間

RYLAセミナーが始まるまで、これまでの人生を振り返ってみると生と死について考えたことがあまりありませんでした。そして、今回講師の方々の高いレベルの講義や、仲間とのバズセッション、キャビンタイム、カウンシルファイラー等、今回のテーマである「いのち」に真剣に向き合える大変有意義な時間が過ごせたと思います。残念なことに私は就職活動で到着が遅れてしまったので、オリエンテーションに出席できずに途中参加となってしまったのですが、すぐにB班の方々が話しかけて来て下さって打ち解けることができました。そして、1回目のセミナーで印象に残ったことは、半分この大きい方を相手にあげることに非常に感銘を受

けました。当たりまえのようなことでなかなか出来ていないので実生活にこのことを活かそうと思いました。2回目のセミナーで印象に残ったことは、自分を嫌いな時、親も嫌いになる。だから自分を好きになるには、親を好きになれば良いということをおっしゃっていて、正直今まで自分のことがあまり好きではないのですが、そういう簡単なことで自分が好きになれるなら実践してみようと思いました。また、チベットと日本の快適さの違いを聞いて、日本人は祖先の苦労のおかげでこの快適さがあるのだと痛感しました。3日目のバズセッションでは、グループのみんなと自分自身の意見をまとめて発表しました。こういう機会はあまり無いため、人と人との関わり方という深いテーマについてよく考えさせられました。3回目のセミナーでは、1分後死ぬかもしれないと考えると、物事を先延ばしにしないとおっしゃっていて、一瞬一瞬を大事に生きようと思いました。最後に様々な出会いや自分の今後の生き方の糧になるようなセミナーにして下さった、スタッフの皆様、自分を支えてくれたB班のみんな、推薦を下さった西宮ロータリークラブの方に感謝して、無事、家路に就きたいと思います。

● 新井 佑花

「第31回RYLAセミナーを終えて」

「余島キャンプを創った今井鎮雄さんの話がタダで聞けるよ。行ってみない？！」という友達の言葉に乗せられて参加しようと決めました。しかし、一人で島まで行くのは話し相手がないなくてさびしいものでした。わたしは神戸YMCAのユースボランティアリーダーとしてこの余島キャンプ場に来るのは今回で11度目でした。何度も行っているから平気じゃないか、と感じられるかもしれませんのが、通常は子供たちやキャンプリーダーの仲間と余島に来る時と、一人ぼっちとではギャップがありました。

余島に着くと知らない人ばかりで家に帰りました。

くになりました。友達ができるかななどと3泊4日の生活が不安で仕方がありませんでした。

開講式まで少し時間がありそうなので南の浜へ行き海辺に座ってふとキャンパーのことを思い浮かべました。初めてキャンプに参加する子供たちは私と同じような不安な気持ちなんだと気づきました。今度、子供と余島に来る時は私がカウンセラーになったとき、緊張や不安な気持ちを取り除いてあげる心がけが大切だと思い、初日の大きな気付きが出来て嬉しかったです。

2日目は朝食をゆっくり食べました。でも昨日のオープニングパーティでたくさん食べていたので体が重たく、だるく感じられました。体操の時間があっても良いのになと思いました。夜のキャンプファイヤーは海のホールという屋内だったので、木造の建物が燃えたら嫌だなどと考えながら、念願の今井鎮雄さんのイギリスの捕虜のスコップの話を聞いてぞっとしました。人間は究極の環境の下におかれると不思議な心理が働いて思いもよらない行動をとるんだと考えました。人間という生き物は複雑であって、社会の中でしか生きられないことも学びました。安行さんのお話では出会いから運命が変わることを教わりまさにそうだと思いました。

これから的人生、一つ一つの出会いを大切にしたいと強く思いました。RYLAセミナーで知り合った人との出会いもまた大事にし、関わった全ての人々に感謝しています。

● 木村 隆之

「RYLAセミナーをふりかえって」

会社の上司から、突然ロータリークラブの青少年指導者育成セミナーに行って来てほしいと連絡をうけ、ふたつ返事で参加をした今回のセミナーですが、どういったことをするのかまったくわからない状態で不安ばかりが募っていました。

島に到着して、誰も知り合いがない中、班



分けをされても、不安はなくなりませんでしたが、一晩たつと不安はどこかにいってしまってました。

今回のセミナーでの一番印象に残っていることは、バイマーヤンジンさんの講義でした。バイマーヤンジンさんの人生を聞いた時、目頭が熱くなる場面が何度かありました。その度に、自分はそんな場面に出くわした時、なにが出来るのだろうと、深く考えさせられました。

バズセッションでは、優秀なチームメイトに恵まれて無事まとめることができ、他人との協力が生きていくことにおいて、いかに必要かを考えさせられました。

このセミナーで得たものは多く、そして大きかったと思います。

● 日下 大輔

「出会いによる視野の拡大」

私が、第31回のRYLAセミナーで学習したことは、他者との「出会い」によって自身は成長出来ることです。

最初、余島に到着した時は、どのようなメンバーでどのような活動をするかを、私は全然理解をしていませんでした。よってメンバーは年齢も、立場も違うことを1日目に知った時、私は不安になりました。私は4月から入社予定でしたので立場もあいまいです。既に就職している人と話を合わせることが心配でした。しかし、キャビンタイム等でB班の方とは、すぐにうちとけることができました。皆さんは、礼儀正しくあいさつをしっかりと返してくれました。B班の皆様と話をしていると、その人の仕事に対する思いや、対人関係を理解することができました。

B班では、3日目のバズセッションとフォーラムの方で「人と人との関わり方」というテーマのディスカッションを行いました。B班は自身等の身近な問題である「苦手な人との付き合い方」で意見を出し合いました。苦手な人との

関わり方で「関係を続ける」、「関係を断ち切る」、「関係を断ち切れない」と3種類の関わり合い方の意見が出ました。その中で「関係を続ける」と答えた人が「苦手な人の悪いところを見るのではなく、良いところを認めれば、お互い良い関係になれた」との体験談を語ってくれました。私も苦手な人には悪い所ばかり見てしまうので、この体験談は、私の成長につながるものだと思いました。

他、今井先生や、バイマーヤンジン氏より生や自国に対する思いを聞き、人の関わりは自身の成長に不可欠だと再確認しました。

最後にこのようなすばらしい「出会い」を与えて下さったセミナー運営者の方々、本当にありがとうございました。

● 松尾 悠

「最高の4日間」

私にとって、余島での4日間は充実しすぎたセミナーとなりました。「いのち」という壮大なテーマのもと、自分自身を見つめ直す最高の機会であっただけでなく、何よりも普通に過ごしていれば、出会うことがなかった人達と会えたからです。

その中でも、B班のみんなと過ごせた時間は、今までにない感覚で過ごしていったように思います。普通なら、何週間、何カ月、何年と時間をかけて、かけがえのない友人になるけれど、B班のみんなとは一気に最高の友人になれました。それは、RYLAセミナーの洗練されたカリキュラムの中で過ごすからこそできたのだと思います。

偶然のような必然のような出会いと、素晴らしい講師の方々の講演、そしてお互いの本心をとことんさらけだすことができた時間、私自身、全てが初めての経験で、最高の経験になりました。どれほど成長したかは、私にもわかりません。しかし、充実しすぎた4日間をすごせたことは確かです。今後、この出来事によって吸収



したことが内側だけでなく、表面にあらわれるようになった時が来た時に、もう一度、出会えたみんなと再会し、再び熱く語り合いたいです。本当にありがとうございました。

● 米田 優里奈

「出会いに感謝」

「出会えて良かった、ありがとう」今この気持でいっぱいです。たった4日間だったのに何年來の友人のようになった同じ班の仲間。毎晩集まり、次第に打ちとけ、皆が自分の生き様、悩みを話し、皆が深く受け止め、皆で考える。本当に濃い素敵な時間でした。私はあの大切な時を忘れません。そして、人はやはりわかりあえるんだと再認識できました。

同じ班には日常生活だと出会わない、また親しくならない人もいて、けれども寝食を共にすることで心の壁がなくなりわりあえた。このことをセミナー中の特殊環境だけでなく日常生活に戻っても忘れず、人と出会ったら歩み寄つていこうと決めました。これがセミナーで学んだ大きなことです。

もう一つ学んだことは今井先生がおっしゃられた「若者の準備ができていない」「責任がある」ということです。時代が変わっていることを能動的に見ていると気付かされました。見ているだけではだめ、国際的に生きなくては、そしてまずその準備をしなくては。日本が世界に取り残されないように、また日本社会を良くするために、これからの方者が責任を自覚して行動していかなければなりません。今、自分は何ができるか、何をすべきかという想いで胸が熱いです。涙を流すことは簡単だけれど階段の下から見ているだけで終わりたくない。私は階段を登ります。

こうした大事なことを教えて下さったセミナーに感謝の気持ちでいっぱいです。機会を与えて下さったロータリアンの皆様、先生方、支えて下さった委員の皆様、カウンセラーのママ・

パパ、共に学んだ仲間、本当にありがとうございました。教えていただいたこと、必ず活かして生きていきます。ありがとうございました。

● 吉田 奈緒美

「第31回RYLAセミナーを終えて」

余島という自然豊かな島で過ごした4日間は色々と考えさせられる4日間でした。

出会いとは何か、人との関わり方、そして世界に目を向けることの重要性、なにより、日本という豊かな国に生まれたことで日常生活がどれほど幸であるかということです。特に3日目のバイマーヤンジンさんのお話を聴かせていただき、家族が全員揃って暮らしていく、何の心配もせず、大学まで通わせてくれる家族がいる。なんて幸せなのだろうか。私の不満は無いものねだりではないだろうかと友人の言葉とあわせて自問自答していました。答えは出ませんでしたが、新しい友人のアドバイスというのは自分の挟まってしまった視野を広げてくれてB班のみんなにはとても感謝しています。

私は氷が溶けたら春になるという言葉が昔から好きです。つまりこれからもロマン、希望を忘れず、交友関係を大切に生きていこうと思います。

● チュオン ルムリアッセイ

「第31回RYLAセミナー」

この度、ライラセミナーに参加させていただいて、本当によかったです。この機会において新たな友人が出来て、そして我々は人間として、この地球で生きていくことに対して、できるだけ沢山の人と出会うのは必要であることがあらためて理解するようになった。

「人生一いかによりよく生きるか」について、阿部志郎先生のお話やチベットについてお話をいただいたバイマーヤンジン先生や今井鎮雄先生のお話に対して、我々は人間として生きていくために自己愛、あるいは他人のために何か

役に立つことをあげることを活躍していきたいと考えるようになった。

● 馬場 祐輔

「RYLA」

「めっちゃおもろいよ」と友達に言われ「セミナーって言わてもなあ」と思っていたけど結局行くことになった。

このRYLAのセミナーでいろんな人の話を聞いてとても勉強になった。悩みや困っていること、これまでどんなことがあって何を考えてきたか、そんな話を腹割って話したり、聞いたりしていく機会が今までなかったから新鮮だった。

僕の好きな言葉で、「人は生まれた時、自分が泣いて周りの人は笑っている。だから死ぬ時は自分が笑って周りが泣いてくれる生き方をしましょう」という言葉がある。今まで、自分なりにこうなるようにがんばってきたつもりだったが、まだまだだったと思っている。

今回のセミナーで学んだことを日々の生活に活かして最高の人生にしたいと思う。

● 紙本 美香

「RYLAセミナー」

初めは一人ですごく不安だったけど、日を追うたびにみんなと仲良くなりすごく楽しい4日間を過ごすことができました。

今回のテーマが「いのち」だったのですが、ディスカッションのテーマが「人との関わり方」だったので、私自身は出会いについて今回すごく考えました。今まで何気なく出会ってきた人たちとの出会いのきっかけを一人の時間でゆっくり考えることができました。普通に生活をしていたら考えられないことを考えさせてもらう場だったので、私自身、今日帰ってからも今回のセミナーを活かしていろいろなことに挑戦をしていこうと思います。また、たくさんの方のお話を聞けたことにも感謝しています。ありが

とうございました。

人と人との出会いがこんなに自分の成長につながっているんだと改めて実感することができました。

● 青野 謙吾

「RYLAセミナー」

初めは、不安と期待が交錯して余島にたどりついてグループ分け、しかし不安はすぐに無くなりました。夕食時には、グループのみんなと仲良くなり、すぐに打ち解けることができました。

講義の内容も、生きることに対して多種、お話ししていただき、私自身がいかに小さな事で迷っているか、世の中もっと苦労している人々が生きていると思い、自分のこと以上に、今、何が出来るか、さらに小さなことでも行動に移して行こうと思いました。

3泊4日の短い期間でしたが、みんなの出会いに感謝し、またサポートしていただいた方々にも感謝し、さらなる発展を目指していきたいと思います。

● 阿部 泰生

「RYLAの旅」

今回RYLAセミナーに参加し、まず最初に思ったことは社会人の人が多いとのことでした。参加理由は社長に参加してこいと言われて断れず、参加するしかないなど、人それぞれだけれど、話してみるとみんな仕事の人付き合いや接し方など多くの悩みがあり、僕はまだ学生で社会の事はあまりわからないけれど、付き合いたくなくても付き合わなければいけない心の葛藤など自分に身近な悩みが聴けてよかったです。

このセミナーで一番ビックリしたことは、普段の生活で何年も付き合っている友人ですら、真剣に「いのち」や「自分の好きなところ」など語り合ったことはあまりないのに、今回のセ

ミナーで知り合った、たった4日間しか過ごしてない友人達とは本気で語り合えたことです。学んだことは、真剣に語り合おうとすれば付き合いの長さなど関係ないと思います。

● 西塚 裕真

今回RYLAセミナーに参加させて頂くにあたり、私には期待と不安がありました。以前知人が参加していたので「楽しいよ」ということは度々聞いていました。しかし、それは終えたり、話してからの感想にすぎないので、今回のセミナーの中でもあった「出会い」の瞬間はやはり不安でいっぱいでした。しかし、一人と話し、班分けがあり班としての行動が増え、己ずと話し相手は増え、それと共に楽しくなり話題も広がりました。今回のテーマの「いのち」に対しても、講師の方々からはもちろんのこと、一緒に班のメンバー、キャビン内などでも自然と話し合え、本当に参考になりました。2日目を境にして班全員での一つのテーマに対する話し合いから、一人ひとりの仕事やそれに対する苦労、

がんばっていることなどを伝え合い、時に意見を出し合いと、いつのまにかずっと前からの友達のように気軽に話し合える環境が出来ていました。4日間でこんなに濃く知り合えることは本当に驚きもあり、嬉しくもあります。初日より自分は成長できただろうか?と考えると、その大きさは別として、間違いなくプラスだらけのセミナーでした。これからは、今までの日常に戻りますが、この4日間が夢だったのではなく、たくさん言って頂いたように始まりだと思い、職場でも伝えていこうと思います。



オープニングパーティー

C班



◆ カウンセラー 黒田 建一

3回目のカウンセラーで、多少余裕を持って対応できるかと思いましたが、なかなかそうもいきませんでした。

今年は年齢層が20～30歳だけで構成され、その点ではまとまり易かったと思います。事故や病気も無く、全員が集まって行動出来たことも、班のまとまりや班のメンバー相互が親しくなったことに大きく寄与したと考えられます。バズセッションでは、「人との関わり方」という切り口の難しい課題に当初、皆、とまどっていましたが、3つに分けた小グループが集まって全体でセッションを始めると、内容が深まり、特に最後の30分位の間に急速な深化を見せていました。

セッション中の役割や、フォーラムでの役割分担では、メンバー皆がそれぞれの個性を尊重して決めるなど、随分と思いやりのある光景も見られました。

フォーラムではC班の報告だけ全く無視され、D班の付け足しのような扱いを受け、班の

メンバー全員その場では不快な思いをし、悲しんだと思います。内容がお粗末なものであったのなら、やむを得ないかもしれません、他の班と明らかに異なる特徴を持つ発表内容であり、D班と同じであるとか、A・D班と同じであるとかという評価に対しては、異論を唱えざるを得ません。

部屋に戻って、フォーラムでの評価のどこに問題があるかを説明し、C班の発表の何が優れていたかを伝え、班のメンバーは自分達の苦労の成果について、自信を回復したと思います。

こうしたこともあるって、最後の晩は全員和気藹々で話し、飲み、そしてセミナーに参加できることについて喜び、感謝の言葉を述べていました。それは間違いなく本心に基づくものであると思います。

◆ カウンセラー 平峯 千春

余島で行われるRYLAセミナーが、いかに素晴らしいものであるかは、三宅洋三先生から伺っておりましたが、カウンセラーとして初め

て参加させて頂き、講義も、受講生と寝食を共にした語らいも心に響き、聞きしに勝る貴重な体験でした。準備と運営にご尽力下さったスタッフの皆様、カウンセラー先輩のお父さん、黒田建一様に心から感謝申し上げます。

今井鎮雄先生が、米寿を越されて益々、お元気で31回目のセミナーでカウンシルファイサーを指導されるお姿に感銘を受けました。

受講生が初めて出会ったにも拘わらず、すぐに親しくなり、心を開いて語り合うことが出来たのは、受講生の皆さんの資質の良さによるものと思います。フォーラムのテーマ、「人とのかかわり方」について、真剣に取り組み、全員が知恵を出し合ってまとめていく姿は感動的でした。人前で話すのが苦手という一受講生が、勇気を出して自ら発表させてほしいといった時の、他の受講生達の温かな支援、そして、見事に大役を果たし全員から祝福された時の彼のさわやかな笑顔は大きな収穫でした。全員で浜辺に出て眺めた星々と夜光虫の美しさは忘れられない余島の思い出です。受講生の皆さんに、セミナーで学んだものを心の中で大きく育てて下さることを期待しております。

最後に、私が敬愛する詩人、塔和子さんの詩、「胸の泉に」をご紹介させて頂きます。塔さんは、13歳から66年間、余島と高松の間にある大島という小さな島のハンセン病療養所「国立療養所大島青松園」にあって、大島の自然と語らい、孤独や絶望を乗り越えて、根源的に生と死を見つめ、生命への畏敬を詠い続けてきた詩人です。1999年に第15詩集「記憶の川で」で高見順賞を受賞されました。

● 尾崎 祐輔

「出会いと成長」

今回、RYLAセミナーに於いて幾度となく取り上げられてきた「いのち」や「自己」といったテーマについて、私は普段から考えることがあります。

「いのちとは何か」「死とは何か」「私はどう生きるべきか」といった問いを自分に投げ掛け、自分の感性からその時点での自分なりの答えを捻り出します。

正しい答えの無いテーマではありますが、生きる上での自分の指針となる事であるため、なんとかして答えを形作ります。

これまで、自分なりの答えを腹にすえているからこそ自分なりの生き方を実現できると思ってきました。しかしながら、常に答えを得ているという考えが「私は既に完成されている」という慢心ともいえるような感覚をどこかで生み出していたように思います。

RYLAセミナー参加に際しても、「ディスカッションしたところで何を得られるものか」「私の考えは揺らぐことなど無い」というような、ひねくれたスタンスで臨んでいた気がします。

ところが、三日目のバズセッションのこと。各々が思索した内容をぶつけ合うと、新たな考えが次々と、チーム全員の議論によって生み出されていくのです。当初のスタンスであれば新たな考えなど認めなかつたであろう私自身が、素直にその考えを受け入れ、それと同時に自分に問い合わせ、全員の考えを掘り下げていっていたのでした。

その時はセッションに夢中で気付きませんでしたが、後で思えばこれは私にとって大変衝撃的な出来事でした。参加前まで自分一人で導き出し、凝り固まっていた私の思想は、いとも簡単に打ち破られ、更に新しいものへと成長したのです。

RYLAセミナーの思想の中に、出会いとそれによる成長があると記憶しています。今回のセミナーで私に起こった出来事は、まさしくそれそのものでした。

この四日間を振り返り、私はロータリーの思想に強く賛同します。「いのち」や「生き方」といったテーマに正しい答えなどあるのかどうかわかりません。しかし、それらのテーマにつ

いて考える者同士が議論することで、新たな考えを生み出すことが出来る、成長することが出来るのです。

そう、この4日間での仲間との「出会い」が私を「成長」させてくれたのです。

つい先日まで見知らぬ他人と出会い、知り合い、自分を成長させてもらった。私はこの4日間の非常に貴重な経験を一生忘れる事はないでしょう。

私に「出会い」と「成長」の機会を与えてくれたロータリー、RYLAの皆様と、講師の皆様、そしてチームの仲間達に心から感謝致します。本当にありがとうございました！

● 太田 善貴

「RYLAセミナーを受講して」

RYLAセミナーに参加することになったのは父の紹介で、自ら望んだわけではありませんでした。私は人見知りで、このような場に4日間行くことに抵抗を感じていました。しかし、せっかく参加するのだから何かを得ることができればと考えていました。

実際に始まり、内容の濃い講義ばかりで、現在の日本で生活しては感じられないことを考えさせられました。バズセッション・フォーラムを通して、年齢・職種が様々な方と一つのテーマに対して討論し、発表では大勢の前で分かりやすく発表することの難しさを知ることができ、班の方と同じ時間を共有していく中で、自分の考え方とは全く違う意見をたくさん聞くことができました。

カウンセラーの方や班の方には迷惑をかけ、反省する部分もありましたが、それを糧にして今後の人生のステップアップに役立てたいと思います。4日間の貴重な体験をありがとうございました。

● 平田 美穂

この4日間、余島の美しい自然に囲まれて

とても有意義な時間を過ごさせていただきました。

余島に来るまで、これから4日間自分はやっていけるのだろうかという不安ばかりがつのっていました。しかし実際に来てみると、他の受験生の方々は皆、気さくな方々ばかりで本当に楽しい時間を共有させていただきました。

三人の講師の方々の講義内容も素晴らしく、感銘を受けるばかりでした。今回、このRYLAセミナーで学んだことを、自分のロータリーアクトクラブの活動に反映させていきたいと思います。

この4日間、自分に問いかけ、自分自身の答えを模索する時間を多くいただきました。普段通りの日常生活を送っていたとしたら、考えなかつたであろうことばかりで、本当に貴重な時間をいただけたと思っています。

そして、今回のRYLAセミナーのテーマ「いのち」を通じて、様々な年代の方の意見も聞くことができ、自分の視野を広げることも出来ました。

このような体験はやろうと思って簡単に出来ることではありません。このRYLAセミナーに参加する機会を頂き、そして参加出来たことに心から感謝したいと思います。

ありがとうございました。

● 原武 孝

「RYLAセミナーに参加して」

今回のこのセミナーに参加するきっかけになったのは、職場の上司から薦められたのが始まりでした。参加する前は、不安と緊張の気持ちばかりで、仕事を4日間も休んでまで何故、参加しなければならないのかと少しも期待していませんでした。しかし、いざ当日になって余島に来てみると、普段では体験することができない自然や出会う機会が少ないであろう年代、職種の人達と出会い触れ合う

ことができました。そういう人達の意見や話を聞くことで、初めに自分が感じていた不安や緊張など一気に吹き飛び、楽しみに変わりました。また、素晴らしい講師の方々の講義では深く感銘を受けたとともに、深く考えさせられるものでした。受講生たちによるパズセッションやフォーラムでは、普段考えることのないテーマについて、考え、話し、聞くことができました。今回、このような貴重な体験をさせていただくきっかけを与えてくださった上司と、このようなセミナーを企画、運営してくださったロータリアン、そしてセミナー中、私達を支えて下さったカウンセラーの方々に深く感謝したいです。ここで学んだ色々な事が、これから私の人生をより良いものにしてくれると信じています。

● 津守 宏明

不安と期待を胸に抱き、今回第31回RYLAセミナーに参加させて頂きました。まずはその機会を与えて下さった方に感謝したいと思います。教員になって10年節目の年、ともすると仕事にも慣れ、平穀な毎日、単調な生活を振り返る良い機会であったと思います。16人の集団生活、レクリエーション、カウンシルファイヤー、高いレベルの講義と討論、そして何よりC班の13人の仲間とカウンセラーの父さん、母さんに出会えたこと、私にとって忘れかけていた事を思い出させてくれた4日間でした。人の出会い、人の温かさ、ふれ合い、そしてC班のシークレットである人を思い合う気持ちを忘れず、これから的人生を歩んで行きたいと思います。今回このようなチャンスを与えて下さったロータリアンの方々を始め、スタッフの方々、調理の方々、また温かく見守って下さったカウンセラーの方々そして13人の精鋭達に感謝すると共に今後の皆様方のご健康とご多幸を祈念しまして余島での全てのプログラムを終了したいと思います。

● 清水 大機

「RYLAセミナーに参加して」

このセミナーを受講するまでは不安でいっぱいでしたが、終了と同時に今までに体験したことなく、おそらく今後も体験できない貴重な思い出になりました。

3泊4日という長期の集団生活、カウンセラーモード、著名人の方の講義、自然との触れ合いなど、日常生活では味わえない貴重な時間でした。様々な立場の人が集まり、長時間に亘って議論したかと思えば、みんな一緒に童心に戻って島の夜景に見とれながら、海辺で大はしゃぎした時は、本当にメンバーの心がひとつになった気がしました。

このセミナーを通じて普段では気付かない「出会いの大切さ」「奉仕の大切さ」について考え方付かされました。

このセミナーの運営スタッフ、推薦者、お父さん、お母さん、関係者の皆様、本当にありがとうございました。

● 出井 美里

心が忙しく動かされた4日間でした。緊張と不安から始まり、感動、喜び、衝撃や安堵。

社会人になり、毎日慌ただしく働く生活を続けるなかで、年々人と関わることに煩わしさを感じていました。

今回のセミナーで、多くの価値観に触れ、今までの自分を反省しました。そして、仲間とふれあい「人との関わり」について考え、今、今までの自分を変えることができるのではないかと感じています。

セミナーの運営に尽力下さった方々や共に生活してくれた班のお父さん、お母さん、語り合った仲間、美しい余島の自然に心から感謝しています。ありがとうございました。



● 仁木 久智

「人は一人で生きられない」

「生きる」

「人との関わり方」

普段、何気なく生活していく中で、ごく自然に人と関わり、生きている。深く考えたことはもちろんなかった。

今回、いろんなことを考えた。考えきれてないことの方が多い気がするが、少しでも自分と、人と向き合えた気がする。いろんな人に出会い、話し合い、本音を出せた自分に驚いた。

自分が今回、どれだけ吸収できたか解らないが、持ち帰る荷物は増えた気がする。

最初は不安でいっぱいだったが、日を増すにつれ、期待に変わっていった。

本当に参加できてよかったです。C班最高、RYLA最高、お父さん、お母さん、ありがとうございました。

● 田中 覚

4日間のRYLAセミナーを終えて、ます第一に本当に充実した4日間やったなあと思います。

僕自身26年生きてきた中で、4日間という短い期間でこれだけ多くの人と「出会う」というのは初めての経験で、見るもの、生活等すべてが初めての様で新鮮でした。

でもロータリークラブ？名前くらいは知ってるけど……。RYLA？何やろ？ていう知識も無いまま余島に渡って来てめっちゃ不安でした。

1日目のキャビンタイムで年齢、性別、出身までバラバラのC班。僕の経験ではこれだけの人数がこの環境で仲良くなるのは時間もかかるし難しいんちゃうかなあ。どないなるんやろ～？と思っていましたが、仲良くなるのに時間はかかりませんでした。

今、考えてもこの短期間でこれだけ仲良く、腹割って話せるようになったのか不思議です。やっぱり全員が選ばれた人で、出会いを大切に

出来、協調性がある人やからやと思います。

このRYLAで出会った友、学んだ事を大切にし、これから先、自分の生活、仕事に活かしていきたいと思います。

本当に楽しく充実した4日間、ありがとうございました。

● 松本 祐佳里

今回、このセミナーに参加して、私は成長できたと思っています。それは普段の学習では学ぶ事の出来ない様々な面からの刺激によってでした。

その中でも一番刺激になったのは、班のみんなで考えたバズセッションでした。一人の時間の中で普段あまり考える事のないテーマについて考え、また、話す機会のない人たちと意見を交換する事で、普段あまり向き合うことのない自分自身を見つめられ、触れることの無い考え方にお会いう事ができました。

また、それぞれの講話はとてもためになるものであり、興味を持って楽しく聞くことが出来ました。

何より、出会う機会のあまりない素敵な人々と出会うことで自分を高められたことがとても幸せに思います。

このようなきっかけをくれた方々に感謝し、これから活動につなげていきたいと思います。

● 梅澤 美菜子

「セミナーを終えて」

自然に満ち溢れた余島。空気の澄んだこの島でのセミナーで、私はたくさんの人と出会い、色々なことを感じ、学ぶことが出来ました。

講義では、私の知らないお話を、目の前で熱く話して頂きました。3回の講義でたくさんの刺激を受けたので、まだまだ自分の中で整理ができていませんが、これから少しづつ自分の中に取り込んでいきたいと思います。

このセミナーで一番心配だった討論。思索の時間では海を見ながらゆっくりと自分の考えを思い巡らすことが出来ました。大阪に帰ってもたまにはこんなふうにゆっくりと自分を見つめる時間を作りたいです。そして、あまり経験したことのないバズセッション。私は自分の考えを言うことによって、相手はどんなふうに思うのだろうと思うとあまり意見を進んで言わないのですが、五人で話し合いをしてみて、同じテーマを与えられ、同じ時間の中で考えてきたことがどこか同じようで、でもそれぞれの表現が違って、またまとめるためにお互いの意見をよく聞き合ってというふうにすることがとても面白かったです。

自然の中でのスポーツでは体を思い切り動かし、大笑いをしたり、本当に楽しかったです。

これからそれぞれが自分の地へこの思い出を持ち帰り、また振り返り、自分が社会にとって出来ることを見つけ、貢献できればいいなと思います。

● 町田 あゆみ

「行動による気付き」

私は以前より、自己と他者の関係についてや、自分がよりよく生きていく為に何ができるかということに頭を悩ませることが度々ございました。とは言っても、それは独自で閉じた世界であり、今回の講習で激しく打ち開かれたように感じます。自分が何を思索しているか話し、他者から違った考え方を聞き、やり取りすることがこんなにも実り多いものだとは初めて知りました。そこには驚きや喜びが満ちていて、自分一人では到達できそうにない気付きをもたらしてくれました。一番の気付きは、行動を起こす大切さです。行動を起こし、他者と関わる事が自分にとって思いもよらない成果を生むという、単純ですが明快で腑に落ちる答えを得ました。自分の傲慢さを反省しました。今後は、相手にも関わって良かったと感じて頂けるよう、

研鑽をつんでいきたいと思います。

末筆となりましたが、今回のセミナーに推薦下さったロータリーの方々、余島でお世話になった全ての方々に感謝の気持ちを申し上げます。ありがとうございました。数年後、自分の成長を実感する機会として、是非もう一度、RYLAセミナーに参加したいと思っています。

● 池田 亮太郎

幼ない頃から私は、ありのままの自分を他人に見せることが苦手でした。ずっと集団の後ろの方で、目立たない存在でいることが楽で、ずっとそれで良いと思っていました。

社会人になり、家族を背負い、自分が家族を導いていく立場になった時、初めて後悔しました。自分の今までの勉強不足、努力不足、人としてよりよく生きる為の様々な経験の機会を自分から遠ざけていました。それに気付いた時に、RYLAのセミナーに出会い、本当にたくさんの人の優しさに包まれて、貴重な経験をさせていただきました。

このセミナーを終え、私は今後、家族の為、社会の為、次の世代の為に自分が出来る事を考え、行動します。

出会いを変える出会いの機会を頂いたことを心から感謝します。ありがとうございました。

● 北岡 卓也

「RYLAセミナーに参加して」

班のアドバイザーの方を「お父さん」「お母さん」と呼び、他の参加者とレクリエーション、バズセッション等のプログラム、またキャビンでの親睦、4日間、寝食を共にし、言いたいことを言い、共感し、悩み、C班は本当の家族になれたと思います。

講義では、いろいろな事を考えさせられました。「出会い」「半分この精神」「幸せですか?」「日本に生まれた誇り」等。

島を出れば、普段の家庭があり、仕事がある。

しかし、この4日間で得たり、考えたことを活かし、少しづつ、「普段」「普通」を変えていきたいと思います。

最後になりますが、このような機会を与えていただいた皆様に感謝いたします。ありがとうございました。



C班カウンセラー平峯さんよりC班の皆さんへ

胸の泉に

塔 和子

かわらなければ

この愛しさを知るすべはなかつた
この親しさは湧かなかつた。

この大らかな依存の安らいは得られなかつた
この甘い思いや

さびしい思いも知らなかつた
人はかわることからさまざま思いを知る

子は親とかかわり
親は子とかかわることによつて

恋も友情も
かかわることから始まつて

かかわったが故に起る
幸や不幸を

積み重ねて大きくなり
くり返すことで磨かれ

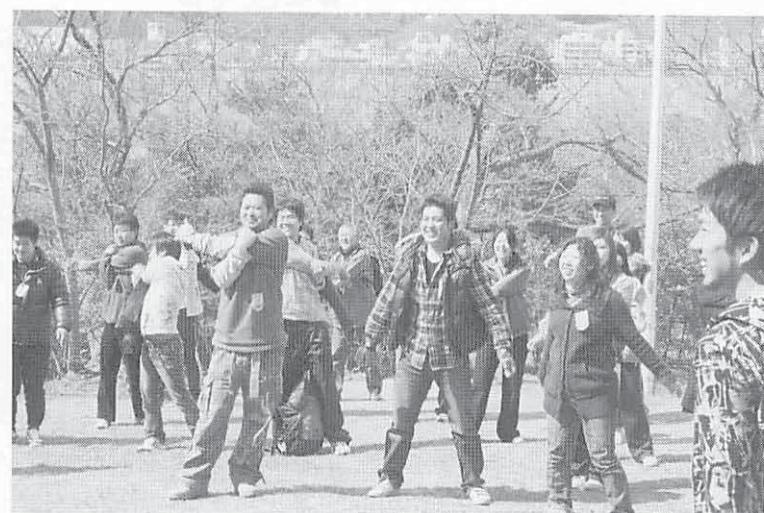
そして人は
人の間で思いを削り思いをふくらませ

生を綴る
ああ

何億の人がいようと
かかわらなければ路傍の人

私の胸の泉に
枯れ葉いちまいも

落としてはくれない



D班



◆ カウンセラー 井本 学明

桜花の余島を期待して銀波浦より船に乘る。23年前に植樹した桜に会うのが楽しみだ。受講生として植え、ロータリアンとして参加して確かめ、この度、カウンセラーとして再び会う。桜の成長と共に自分も立派に成長したかと問う。当の桜木は大きく成長し、太い幹も何かの理由で切断されたが、その脇から枝が伸び、桜の蕾もたくさん付いていた。

桜木は一安心であるが、私の心はセミナーが始まるまでは不安であった。次々と受講生の到着。昔の自分を見ているようであった。

班分けによりD班のメンバーとの対面。楽しい、思い出多いセミナーとなって欲しいとの願いで老体にムチ打った。

講義、レクリエーション、キャビンタイム、フォーラムと無事終了。ようやく閉講式を迎え、以前と同じように記念植樹。記念写真。

再び、桜と共に会いに来る樹が増えた。

閉講式前には、私が受講生の時のお母さん、林真樹カウンセラーが訪ねて来てくれる。なつ

かしく会話がはずむ。おとうさん、東(とん)さんは他界したが、今でも受講生とは行き来している。

私の使命は、私が見守っていただいたのと同じように今回の受講生を見守り、成長を願い、成長を喜び合うことと思った。

D班のメンバー。立派に成長し、地域社会に求められる人間となって、次の時代をなう人を育てる人間となることを望んでいる。

◆ カウンセラー 森田 康子

「いのち」をテーマとして第31回ライラセミナーが開講され、59名の受講生とのすばらしい出会いがありました。

この果てしない宇宙の中で、たまたま不思議にも人間としての生命を与えられていることを大切にし、同類同士の間の、ほんの束の間の出会いを大切にしないではいられない。それにしても生きるとはなんと重いことであろうか。このセミナーで生命への畏敬の念を抱いて、真正面から真摯に考える時間が持てましたことに感

謝しています。

人間は人生に対していろいろな不満を持ちやすい。人生が自分にどれだけのものを与えてくれたかということを、いつも数えてたてて、そしてあれも足りない、これも足りないと言って不満を言いたてるが、人生が自分に何を求めているのかということを考えることは出来ないでしょうか？自分は人生から何を求められているのか。そのものに自分が応じていくような、そういう生き方のほうが、もっと建設的ではないのか。その答えが解らなければ、生きていること、そして人間であることを見つめていないからではないでしょうか。これからもディスカッションして答えを見つけていただきたいと思います。

静かな心でもって、かけがえのない「いのち」を観照して下さい。

D班でニックネームで呼び合ったライラリアンへ。これからも「おかあさん」であり続けたいので、来高の折には必ず連絡して下さい。両手を広げて待っていますね。そして最後になりましたが、先輩ライラリアンとしての井本学明カウンセラーには、ご指導を心よりお礼申し上げます。

● 田端 繁樹

自分は、高知で住んでいる家の大家さんである森田康子さんに紹介をされて参加しました。最初はよい出会いと刺激があればいいな、と思い参加をさせていただきました。

自分はD班という班に配属されましたが、結果的には本当によい、ではなく最高の出会いをさせていただいたのではないかと思います。

ここへ来る前は、ロータリアン、ライラリアンというのも名前のセンス等から「なんじゃそりゃ？」と思っていました。ですが、全てを終了し感じたことは、やはり長く続くものはよいものなんだなあということで、今日から自分もライラリアンになるのか、と思うと何か誇り

すら感じるようになります。それもこれも全て、一緒に学んだD班という素晴らしい仲間達に巡り会えたためと、本当にD班のみんなには感謝をしています。

D班のみんなは、初日から今回のテーマである「いのち」について（失礼ですが）予想していたよりもよっぽどレベルが高く、真面目な議論を繰り広げてくれた素晴らしい人達です。

そんな人達に対して、自分は何が出来ただろうか……と思います。

みんなが家に帰って家族や友達に話すとき、自分の名前が出てくるような、そんな何かしらを他の人達の心に残すことが出来ていればいいなと思います。

今回のセミナーには三名の講師の方々がいて、その方々にとても有意義なお話をいただきました。それらのお話を拝聴させていただいて、自分には色々と足りてなさすぎるなあと思いました。今回いただいたお話について自分なりに少し考えました。

自分は全世界の人口の1%すら出会うことなく、自分の世界を語ります。自分はその程度の広さしかない自分の世界で、この世の世界を知り判断しなければなりません。だからこそ、もっと学ぶことも経験することも貪欲にならなければならぬと思いました。それが、今回のセミナーを受けた自分なりの結論です。

最後になりましたが、RYLAセミナーを紹介して下さった森田さん、お世話をして下さった他のロータリアンの方々、またこのRYLAセミナーを創始された今井先生やロータリークラブの先人の方々に心から感謝の意を表したいと思います。

ありがとうございました。

● 由城 真衣

「RYLAセミナーに参加して」

今回、セミナーに参加させて頂き、3泊4日という短い期間でしたが、多くの素晴らしい仲

間と出会い、彼らと思い思いの内容について語り合うことが出来ました。1日目の夜から私たちD班は、「生死について」また「いのち」について、これまでそれぞれが経験してきたことを発言し合いました。私は大学で学んだ「カレン・アン事件」にショックを覚え「何を死とするのか」について考えていると述べました。このような話し合いを踏まえて、3日目のフォーラム「人との関わり方」をテーマに自分たちの意見を凝縮させて発表を行いました。

私はこのセミナーに参加して、考えることの大切さ、出会う喜びを改めて実感しました。自分自身がどれだけ多くのことを学び、考え、得ることが出来たのかは、まだわかりませんが、これから的人生で一生忘れることのない時間であったと感じています。このような大変貴重な経験をさせて頂き、感謝しています。

本当にありがとうございました。

● 河渕 直子

「出会い」

ロータリーの皆様、「感動」を有難うございました。この数日の間に沢山の貴重な出会いをさせてもらったこと、本当に感謝いたします。

その出会いを通じ、様々なことを教えて頂き、考える時間を持てたことは大変意味のあることだと思います。

私たちはこれからこの地球を大切にし、また、より良くしていかなければならぬと心から思いました。火を囲んで皆で手と手をにぎった手は温かいのです。この手と手のつながりが世界までつながれば、「平和になれるのに」。しかし現実は違う。少しでも困っている人を助けるために、何が出来るのか、出来ることがあれば、それを一歩でも前に実行していかなければならぬ責任を痛感しました。

ありがとうございました。頑張ります。

● 花房 洋希

「RYLAセミナーに参加して」

このRYLAセミナーでは、講義、バズセッション、フォーラムを通じて、「いのち」「人との関わり」ということを考えさせられた。その中でも一番印象深かったのは「半分こ」を学ぶということである。人間の本質的な部分は「自己愛」なのかもしれない。その中で見返りを求める「他者への愛」をどれだけ出せるかが、他者と共生していく上で、そして「いのち」のサイクルを続けていく上で大切なだと感じた。

講義で学んだことを基に、バズセッションを行ったが、15人のこれまでの人生経験の豊富さもあり、本当に色々な考え方を聞けた。そしてその15人の意見を聞けたことで、「他者とつながっている」「いのちのサイクル」といったことを実感できた。何より、この15人でいた空間は、本当に居心地がよかったです。

自分は、これから「キャンプ屋さん」として子どもたちやボランティアリーダーと付き合っていくこととなる。このセミナーで学び、実感できた「人」「愛」「いのち」そして「居心地のよさ」といったことをまだ見ぬ彼らに伝えていけたらと思う。

● 森 寛

「出会い」

RYLAでの出会いに「感謝」。その言葉しか出てこない。初めは正直、モチベーションも低く「3泊4日のセミナーなんて長いなあ」と思っていたが、日が経つにつれて、この仲間ともっと一緒に居たいと強く思うようになっていた自分に気付いた。

初めにD班の仲間やカウンセラーのお父さん、お母さんと出会った時、ここまでD班としてかけがえのない一生の仲間になるなんて想像も出来なかった。しかし、寝食を共にし、プログラムを受け、キャビンタイムで熱く語り明

かすることで、たった3泊4日と短い時間であったが、これから一生付き合っていくであろうと自信をもって言えることが出来る15人の仲間と2人のカウンセラーに出会えることが出来た。

この出会いに感謝しながら、地域に帰っても周りに感謝の思いを伝えていきたいと思う。

● 雪村 加世子

「RYLAに参加して」

最初、「RYLAに是非参加を」と言われた時には何のことか分からず、余島に着いてもなお、どのような催しなのか分からないままでした。しかし、全く偶然に選ばれた15人の仲間達とお父さん、お母さんと引き合わせられ、同じロッジで生活することでRYLAの目的である若い世代への「出会い」の提供の意味を実感することが出来ました。特に「いのちとは何か」「自分のことが好きか」といった日常では議論しない大きなテーマを年齢も職業も様々な仲間達と毎夜熱く語りあうのが非常に良い経験になりました。

また、講師の先生方の素晴らしいお話にも刺激され、あらためてこれからの世界のことを考えさせられました。

今後はこのRYLAで学んだことや得た仲間を財産として、自分の所属する地域社会にこれを還元していきたいです。

● 藤井 隆嗣

「RYLAセミナーに参加して」

RYLAセミナーを通じて、自分自身が「変身」できるきっかけを作ることが出来ました。余島に到着した時、大きな不安を抱えていたが、同じキャビン、同じ班の仲間とのふれあい、「いのち」をテーマにした講義を通して、自分自身というものを見つめ直し、新しい自分、なりたい自分を創り上げていくための素地が出来たと思います。

一番印象に残ったのは、三日目のフォーラム

に向け班員全員で発表の原稿を作り上げたことです。バズセッションに始まり、最後まとめ上げる時の皆の表情、集中力は忘れることが出来ません。皆の努力あって、フォーラムではD班は最高の発表、そして全員が発言するという快挙を成し遂げることができました。毎晩のキャビンタイムで体は疲れていたはずなのに、皆が興奮していました。本当に中身の濃いセミナーだったと思います。

今後、地区に帰ってもこのセミナーで得たことを忘れずに、自分の仕事に活かし、また地域に還元していきたいと思います。

D班のみんな、カウンセラーのお父さん、お母さん、スタッフの皆さん、4日間大変お世話になりました。ありがとうございました。D班最高でした！！

● 大住 貴之

「RYLAセミナーで感じたこと」

今回31回目のRYLAセミナーに参加させて頂いて、大変有意義な時間を得ることができました。主に三つあげたいと思います。

一つ目、「色々な考え方」です。様々な職種の方々がこのRYLAセミナーに参加され、議論していく中で、自分とは全く異なる意見や想定外の考え方等を得ることが出来ました。

二つ目、「自信」です。今回のようなセミナーに参加させて頂いたのは初めてでしたが、全体の場での意見発表、キャビンタイムなどを通じて、自分の考えに自信を持つことも出来ました。

最後に、「信頼できる仲間」です。わずか3泊4日という短い時の中で、互いに話し合い、寝食や活動を共にすることで「仲間意識」が芽生えました。実際に心の相談をし、自分自身、同じ班の仲間に救われました。

今回のセミナーでは本当に多くの事を得られました。この場に来られたことを心から嬉しく思っています。ありがとうございました。

また、この場をお借りして今回関わって頂い

た全ての方々に感謝の意を込めたいと思います。本当に心からありがとうございました。そして、これからもよろしくお願ひ申し上げます。

● 白井 達也

「RYLAに参加して」

本当にこのD班でよかった。こんなやりたいことだけをやってきた男の話を皆さんは真剣に聞いてくれました。すごく話のレベルが高くて何を言ってるのか全くわからなかっただけど、自分なりに必死で整理しながら頭をフル回転させて、一つの議題について考えて答えを出してきました。班の中は皆さんが大人でカウンセラーをやっている人、病院で働いている人、保育士の人など、普段生活している中で、職場で起こったことや大変なことなどの話を聞けるはずないのに、それを聞くことが出来て本当に幸せでした。キャビンタイムでも十人十色の意見で色々な意見や考え方がありとても勉強になりました。

出会いというとても大切なことを教えてくれたRYLAに参加して本当に自分が生まれ変わったように感じました。カウンセラーのお父さん、お母さん、その他のRYLAのお世話係さん、ありがとうございました。

● 丹生 富浩

「RYLAを終えて」

RYLAセミナーが始まった時のことと思い出すと、始めは緊張と不安が入り混じった複雑な心境でした。しかし、班分けをして、ウェルカムパーティーの時は少しひらが緊張と不安は拭いていました。夜のキャビンタイムでは、皆が初めて会ったにもかかわらず、非常に内容の濃い議論が出来ました。自分達の意見を出し合い、大変有意義な時間を過ごす事が出来ました。考えてみると、15人という人数でそれぞれ意見が違い、その意見をまとめるというのは学生以来無かったことなので、とても新鮮に思いました。

カウンセラーの方々に時折、適切な言葉を頂き、自分に足りなかつたものを見つけることが出来ました。

今回、このRYLAで学び、吸収したものを作後の社会生活に活かすことRYLAに参加した意義があると思います。最後になりましたが、RYLAに参加させて頂いたロータリアンの方々に感謝致します。

● 安保 育美

「出会いと時間をもらって」

私がこの合宿に推薦して頂くことが決まったとき、私はRYLAもロータリークラブもほとんど知らない状態でした。楽しさよりも不安ばかりだったはずのこの合宿が今、終わりを迎える寂しくて仕方ないのは、D班の仲間達やカウンセラーのお父さん、お母さん、そしてクラブスタッフの方々のお陰だと感じています。

D班は職種や年齢が様々なんぶん、一つの議題にたくさんの意見があり、一人一人が他者の意見を否定せずに、まず耳を傾けてくれる人達でした。少しだけ漏らした思いを正面から受け入れ、一緒に考え、励ましてくれる人達に出会えたこと、忘れられません。

D班の仲間達にとって、自分がそのような存在でいられたか自信はないけれど、次、また皆に会う時、恥ずかしくないような自分でいられるように……と考えています。

D班の皆、お父さん、お母さん、一緒に4日間を過ごせたのが、皆で本当に良かったです。

ありがとうございました。

● 谷田 陽平

「RYLAを終えて」

3泊4日の時間は瞬く間に過ぎ、島に来た時の自分と離れる時の自分が明らかに変わったことを改めて感じる。ただ私は、仲間に本当に恵まれた。ロータリーの根源でもある出会いを通じて、私は多くの知識を得て、人間という人種

など関係なく地球のひとつとして大きく考えることができました。その中でこれから的人生を生きていく中で、自分が他者や社会に対して、何が出来るかを考え、行動しなければいけないと感じました。それはRYLAセミナー参加者として選ばれた者の責任であると考えていますし、種をまいていただいたロータリアンの方々への恩返しだと素直に思います。一人一人が出来ることは小さなことかもしれません、互いに力を合わせれば世界が変わるということを実際に経験されている先生方やカウンセラーの話を聞くと、自分自身が行動を起こすことの大切さをからの自分の心に秘め生きていきたい。

最後にD班のお父さん、お母さんありがとうございます。余島ありがとうございます。この島で最高の宝を見つけたよ。みんな必ずまた会おう。

● 大谷 悠起

「RYLAセミナー」

このRYLAセミナーに参加したうえで、三つのことを得ることができた。一つは、「出会い」、二つ目は「仲間」、そして三つ目は、「自分」

自分が考える出会いとは、偶然ではなく必然であると考えている。自分自身が強く想い、常に意識していれば出会わないわけがない。しかし、その出会いが自分と相手にとって良いのか悪いのかはわからない。だが、今回の出会い、そして二つ目の、「仲間」は最高だ。自分達でテーマについて考え、悩み、ぶつかり互いを高め合い、尊重し、信頼し、そして情熱を得ることが出来た。その上で、自分に足りないもの、良いところを気付くことができた。

長いようで短かった今回のセミナー。この最高の、「出会い」「仲間」を得ることが出来た全ての関わりにありがとうございます。

● 高橋 尚子

「RYLAセミナーに参加して」

初めてRYLAセミナーに参加させていただきました。正直なところ、このRYLAセミナーのことは全くなんのかもわからぬし、行きたくはないなという気持ちでいっぱいでした。セミナーが始まってからもこれから4日間もしんどいなと思っていました。

一日目のキャビンタイムでも、みんながすごく高度な話をしていて、自分は絶対ついていけないしどうしようかと悩みました。

私は自分のことを誰かに伝えたり、表現することがすごく苦手です。今まで、そういう自分を変えるチャンスや機会はたくさんありましたが楽な方へいつも逃げてきました。しかし班のみんなと話をしたり、少しづつ自分のことを話したり聞いてもらったりして、こんな自分でも認めてくれる仲間がいると思えてきて、本気で自分を変えようと思いました。それに気がつけたのはバズセッションの時です。それからフォーラムの時に少しづつ自分なりに発言できるようになりました。その時の気持ちは、すごくうれしくて心が軽くなったような気がしました。本当にうれしかったです。

いろいろな話や講義を聞かせていただきましたが、このセミナーで私は出会いが本当に大切だということを実感しました。お父さん、お母さん、D班のみんなに出会えたこと、そして、ロータリアンの方々や他の班の方々、余島でお世話してくれた方々に出会えてよかったです。ここに参加する機会を与えてくれた方にも感謝しています。

● 室井 礼圭

「RYLAセミナーに参加して」

「よりよく生きる」とはどういうことなのか」「自分とは何なのか」などの日々の生活では深く考えないことを真剣に考え、自分の考えを口にし、話し合えたこと、そんな仲間に出会えた

ことがとても嬉しく、RYLAセミナーに参加するきっかけを与えていただけたことに心から感謝したい。

このセミナーで出会った仲間、カウンセラーのお父さん、お母さん等、全ての方々に「出会えてよかった」「この人に出会えてよかった」「この人と一緒に仕事が出来てよかった」そう思ってもらえる存在に私もなりたい。そしてこの4日間で数えきれないくらいの感動をしたように「感動できる人間」でいたい。



レクリエーション



カウンシルファイヤー

受講生名簿

2670地区

NO.	氏名	推薦RC	性別	班	勤務先・在籍校
1	田坂 明	今治南	男	A	愛媛県立今治工業高等学校
2	黒田 安友美	西条	女		ホテルオレール
3	猪川 秀樹	大洲	男		(有) イカワ電業社
4	林 裕之	さぬき	男		医療法人社団ハロー歯科クリニック
5	山下 枝里子	小豆島	女		社会福祉法人サンシャイン会
6	逸見 信行	高松グリーン	男		(有) 洋装ヘンミ北店
7	石川 竜哉	坂出	男		四国医療専門学校
8	青野 謙吾	今治	男	B	重松建設(株)
9	阿部 泰生	松山南	男		松山大学
10	吉田 奈緒美	徳島プリンス	女		徳島大学
11	日下 大輔	阿南中央	男		香川大学工学部・大学院
12	木村 隆之	高松中央	男		穴吹エンタープライズ(株)
13	紙本 美香	高松グリーン	女		ドコモサービス四国(株)
14	馬場 祐輔	丸亀	男		四国医療専門学校
15	北岡 卓也	高知	男	C	ニッポン高度紙工業(株)
16	清水 大機	松山	男		教育支援センター事務所
17	仁木 久智	徳島北	男		中央自動車(株)
18	町田 あゆみ	徳島プリンス	女		大和證券 徳島支店
19	太田 善貴	小豆島	男		トヨタ神戸自動車大学校
20	松本 祐佳里	高松西	女		高松大学2年
21	尾崎 祐輔	琴平	男		(株)長峰製作所
22	田端 繁樹	高知東	男	D	ベル薬局
23	河渕 直子	高知西	女		
24	藤井 隆嗣	新居浜	男		新居浜市立浮島公民館
25	森 寛	徳島東	男		社会福祉法人常楽園 児童養護施設常楽園
26	高橋 尚子	さぬき	女		医療法人社団ハロー歯科クリニック
27	丹生 富浩	小豆島	男		富丘コンクリート(株)
28	大谷 悠起	観音寺東	男		四国医療専門学校

● カウンセラー

A班 濱田 吉隆

B班 森 廣一

C班 平峯 千春

D班 森田 康子

2680地区

NO.	氏名	推薦RC	性別	班	勤務先・在籍校
1	辻元 輝幸	伊丹	男	A	学生
2	藤本 祐希	篠山	女		関西学院大学 文学部
3	垂井 聖一	三田	男		社会福祉法人三田市社会福祉協議会
4	清水 裕美子	神戸西神	女		滝川第二中・高等学校
5	木和田 杏	高砂	女		会社員
6	阿部 奈津子	洲本	女		介護老人保健施設せんけい苑 栄養士
7	沼田 光一	あわじ中央	男		皇學館大学
8	岡田 英敏	姫路南	男		NPO法人 生涯学習サポート兵庫
9	CHUON RUMREASEY	神戸垂水	女	B	神戸学院大学大学院の留学生（カンボジア）
10	西塙 裕真	神戸中	男		高齢者総合福祉施設オリンピア兵庫
11	新井 佑花	明石北	女		神戸YMCA
12	梶屋 直司	津名	男		淡路市役所
13	清水 昭博	姫路	男		株式会社 旭パック
14	宮里 拓	西宮恵美寿	男		神戸学院大学3回生 ボーイスカウト西宮第22回
15	米田 優里奈	神戸東	女		相愛大学音楽学部・西宮YMCAボランティアリーダー
16	松尾 悠	小野	女		大学生
17	原武 孝	芦屋川	男	C	三田谷治療教育院 芦屋翠ホーム
18	平田 美穂	神戸須磨	女		神戸女子大学
19	池田 亮太郎	高砂	男		NPO法人 高砂キッズ・スペース
20	津守 宏明	洲本	男		柳学園高等学校 教諭
21	田中 覚	姫路中央	男		(株) 平井工業
22	梅澤 美菜子	伊丹	女		相愛大学音楽学部・京都教育大学院連合教職実践研究科
23	出井 美里	西脇	女		北播磨青少年本部
24	白井 達也	伊丹	男	D	白井建材(株)
25	谷田 陽平	篠山	男		岡本病院
26	由城 真衣	神戸	女		大学生
27	雪村 加世子	あわじ中央	女		神戸大学大学院人文学研究科 博士後期課程
28	花房 洋希	赤穂	男		関西福祉大学、HCCC、生涯学習サポート兵庫 緑の森自然キャンプ協会
29	室井 礼圭	加古川	女		東播磨青少年本部、青少年活動コーディネーター
30	大住 貴之	神崎	男		筑波大学第二学群4回生
31	安保 育美	三田南	女		湊川短期大学専攻科生

● カウンセラー

A班 大江 与喜子

B班 吉岡 喜久子

C班 黒田 建一

D班 井本 学明

第31回RYLAセミナー運営委員会

ガバナー 豊田 章二（第2670地区 高松南RC）
宮本 一（第2680地区 芦屋RC）

顧 問 三宅 洋三（第2670地区PG 高松RC）
今井 鎮雄（第2680地区PG 神戸西RC）
深川 純一（第2680地区PG 伊丹RC）

アドバイザー 飯 忠悟（第2670地区PG 今治RC）
橋本 一豊（第2680地区PG 神戸須磨RC）

ディーン 徳梅 明彦（あわじ中央RC）
副ディーン 日野 博夫（高松RC）

●新世代活動委員会（第2670地区）

委員長 吉田 茂（高松南RC）

●新世代委員会（第2680地区）

委員長 安行 英文（三田RC）

副委員長 秋山 紀史（神崎RC）

●RYLA委員会

（第2670地区）

委員長 日野 博夫（高松RC）
委 員 別役 重具（高知東RC）
森田 康子（高知東RC）
田中 雅仁（今治RC）
篠原 成行（北条RC）
猪野恵一郎（松山南RC）
西松 繁夫（松山南RC）
工藤誠一郎（徳島プリンスRC）
森 廣一（美馬RC）
太田 國博（小豆島RC）
白石 正明（高松グリーンRC）

（第2680地区）

委員長 徳梅 明彦（あわじ中央RC）
委 員 加藤 拓（伊丹RC）
黒田 建一（西宮夙川RC）
三木 明（姫路RC）
大江与喜子（西宮恵美寿RC）
大森 英夫（伊丹RC）
滝澤 功治（神戸須磨RC）
安平 和彦（姫路RC）
横山 政夫（神戸RC）

●RYLA学友会（第2680地区）

事務局長 山口 徹（元神戸YMCA総主事）



国際ロータリー第2670地区ガバナー事務所
〒760-0065
高松市朝日町1丁目3-18(株)浜崎ビル 3F
TEL 087-822-1088 FAX 087-822-1089

国際ロータリー第2680地区ガバナー事務所
〒650-0046
神戸市中央区港島中町6-10-1
神戸ポートピアホテル 722号室
TEL 078-304-2680 FAX 078-304-2681